



圖
量地指南後編 全

△ 1
4894
2止



4894
2

量地指南後編

凡例

柳亭りゅうていが象小書ぞうせうしよの規き非全書ひぜんしよ。寛文くわんぶんの年
 亦も信のぶの輿う如じゆ洲しゆ吾邦わがくに小傳せうでん牛うしの和梅わがはな何系なにかのいへの
 著作しやくしゆもこの如ごとし。門人もんじん二三にさんの後ご。其そのを
 作つくりし地ちも其書そのしよに於おて平へいが祖そ父ふ村むら并なら昌ちやう行ぎやうを以もて
 一人ひと有り。徒ただに所ところ以もて以もて其その傳でん極ごく傳でん唯ただ接せつ一
 人の法ほうを以もて其その法ほうを以もて其その法ほうの考かう人ひと昌ちやう行ぎやうが名なに
 以もて其その考かう人ひと考かう之の也なり。其その考かう人ひと考かう之の也なり。其その考かう人ひと
 考かう之の也なり。其その考かう人ひと考かう之の也なり。其その考かう人ひと考かう之の也なり。
 其その考かう人ひと考かう之の也なり。其その考かう人ひと考かう之の也なり。其その考かう人ひと
 考かう之の也なり。其その考かう人ひと考かう之の也なり。其その考かう人ひと考かう之の也なり。

善

国廣圖書

昭和廿二年
十二月六日
購書

量地指南後編卷一

此ども其表の業を以て廣せんことを傷むる響ふ
号也抄南の業を以て進んて又後抄南の
冊を稿して男昌言ふ其言の昌言の昌言を
保つて西後抄南の業を以て進んて

一 術類編の何某が選ずる規矩全書。二この門人
互ふに其意を加へて號号と事して或は規矩元法記と
名け或は鉤股大元集と号し。又地理全書と稱ふ
此ども昔に其術者十有餘を以て改訂せんと其書
國語予家小書なる規矩全書の術目と指す。其
規矩全書之四の規矩大元全書は其用を授るに
男昌言の補ひ録の如くして替言部俚と號ふ。其
録の如く其書抄南の業を以て進んて其書

一 此ども其表の業を以て廣せんことを傷むる響ふ
号也抄南の業を以て進んて又後抄南の
冊を稿して男昌言ふ其言の昌言の昌言を
保つて西後抄南の業を以て進んて

一 凡所見を以て其表の業を以て廣せんことを傷むる響ふ
号也抄南の業を以て進んて又後抄南の
冊を稿して男昌言ふ其言の昌言の昌言を
保つて西後抄南の業を以て進んて

細水く。渾々水に深理を家するはもめて。家例よ
成ざり。算術術の細水なり。ことし遷延の事あり
多。機轉術の之を平部集のす方所で和算の事あり
故に其要より所の量算術算術の之法あり
少。其代の算づりて自其蓋算と名する細水も初算子
其域より算づく。毎術術と名するを憶むる
止むとほや。二術の方術を本と。遊音するを
算術術は名法は。数理を名する。きん。度校
あり。沙羅を車と。む法たり。今規矩術を
算る。是れ云く。都て算術あり。所て人々用り。前より
は。凡そ是れふら。ひ。量法通りある。規矩
術の妙なり。は。た。算術の妙なり。は。た。算術の妙なり。

あひむ。算術の術。三四五の矩と
なり。算術家其の奥理をひ。研るも
其の。是れ算術の根あり。何れの
事。如くは理不決な。況や量法の術。き
近度校高。位浅深一。其の理を基と
す。其の。算術の術。其の理を基と
家又昌利が云。げ。元福の年。京中稿に
み。中西同業と云。算術者あり。偶量法の事あり
選る。算術の算を。其の理を評。規矩
術の。其の。算術の。其の。算術の。
拘りて。方算算。算術の。算術の。

形とあて勿也。是予が術をよめりて邪秘す
るふりしと。之を誤りて。人ほ學を好む
ことを好みてなりと

寶曆四甲戌夏六月

村井蕪道子昌弘識



量地指南後篇稿之總目次

卷之一雜口解 術名二十一條

規矩全書上卷術名

規矩全書中卷術名

規矩全書下卷術名

同流三四書之術名

別卷術名異

一本術術名異

寸尺用捨

算法用捨

現差用捨

凡例定格

分基發法

見盤大成

盤切用法

盤繼用法

不拘器物

寸尺之用

已尺之用

圖寫之用

收器之用

舊器之號

新器之號

卷之二器用解 術名二十六條

磁石切要並見込様

指針塵

隱針塵

順逆振様

量地指南後篇卷一

高下振樣

振分

隱銘

逆磁石

忍磁石

立覽器

小丸之用

中丸之用

大丸之用 並方維圓盤

元器之用

分度之用

渾發之用

方尺之用 並試定木

折紙之用

隨川器之用

虎法器之用

圖寫器之用

間筭之用

間紙之用

卷之三極傳解 術名二十七條

夜中間町

船路之考 四術 並船路器械

遠里之考 並遠里之矩

北極之考

真矩之繩 二術

地形高低 三術

極中不中片極

土手陰知木高 一術

高指何分

向指真矩 二術

自照指真矩

天守櫓知居所

用山表裏

寫山形

賣山形

求山斜登

知山厚

卷之四算勘術 術名二十九條

算勘之辨

器械之制

町見術名

四町見之辨 並平町見 上町見 下町見 向町見

廣遠町見 二術 乱面町見

知遠近

知廣狹遠近 並扇矩

知山廣程 并直立

知物高 並別術

知谷深

量井深 二術

知水深 二術

折竹術 三術

量流物

量行程

量兩高下

卷之五渾發術 術名二十二條

渾發功用

算理渾發 並三四五之矩

圓理 二術

徑矢弦二術

平面遠近

斜面廣狹

極諸高下

地口異

水月

猥獲

坪詰

斜面遠近

摸望之間町

天口

覓先

樣脚

開扇

步詰二術

正面廣狹

知諸高下

地口

覓跡

樣体

方鏡

錐形

天口異

草結

白浪

總計五卷術名百三十五條

量地指南後編稿之總目次終

量地指南後篇卷之一

勢南 處士 村井昌弘編述

雜品解

一規矩全書上卷術名

○空眼

○平町

○不動

○知雙

○術

前傳

○分數

○兩斜進退

○隔沼河

○算

○知山

○度量

○前後進退

○極中不中

○三四五矩

○知谷

○見込

○極中不中

○三四五矩

○知谷

○知



量地指南後篇卷一

七

兩山差註兩山註知谷幅木丈註明山註知地形高下註極

○指望之間註無的註間竿打樣註器註座而地取註暗指

○直之繩張註極註陰之目的註二地註知前面廣註正註面

○夜之見樣註極註磁石振樣註器註磁石見樣註器註城

圖註四知註國圖註極註遠里積註極註北極積註極註船

路積註極註道具之制註雜註品註解註○船

右上卷術名の目錄なり。是を以て大畧量地術尽せり。之
も古來其師範する人謾小秘奥と傳人として悟りて教海
の式小前中後の三等となりて同術と粗精與二回小講習せ
しと見へり。此旨予が取用せざる處なり。しとも姑く古法乃

書面小隨て此小抄出す。覽者此趣を察せしむ

一規矩全書中卷術名後傳別傳

○平町註左註右註前後進退註當開方註左右進退註正註面

不動知間數註規矩註大元方註大真矩註神速註隔沼河開註正註當

○極中不中註一知註雙開方註中不中片極註極註○寸尺用捨註雜註解註

○算法用捨註雜註品註解註三四五矩註渾註知山之高註谷四註

極直註立註進退之山註量高註術方註○面山之差註兩山註○谷底

知地幅註同知方註○指望間町註無的註定間方註○坐而地取註開指

間竿步樣註器註○直之繩張註極註傳解註○蔭之目的註量開方註○知

前回廣註正註面註 前回要用註一註開註方註 夜中見様註極註 摸註

城形註極註 摸國郡註極註 現差用捨註極註 凡例之格註 雜註

品註 目的目積註先註量註 分棊發法註極註 雜註

右中卷術名の目次大畧上卷の標目小同。是教諭の法
小前後精粗の別あり故なり。最も予が取用せざる所あり

といへども暫く古法の目次小隨て前篇小論せざるものと
後篇小述ふ。見る者贅言として訝るこたうと

一規矩全書下卷術名 極傳とと 極要とと

○大丸番付註器註 方維大圓註器註 真磁石註器註 忍磁註

石註器註 圖寫屈伸註器註 不拘器物註器註 收用器註器註 雜註

○舊器号註雜註 圓知平町註山註初註 前回進退註正註面註

真矩繩張註極註 真繩真矩技註極註 前回一開註斜註面註

沿河真矩筋違註正註斜註 沿河筋違重註正註斜註 土手陰知註

木高註極註 向指真矩註極註 同從脇而指之註極註 指高註

何分註極註 山谷一開註山註谷註 真沼河註殘註子註 山上谷註

底知木高註山註谷註 數知方

右下卷術名の標目も又上卷中卷の術名と同じれた物
多し。是も誦習小精粗あり。勿論予が取用せざる
所あり。こゝも。前篇小記するものとは。後篇よのづ
こ。右小云々。

一 同流三四書之術名異

- 用合度知高註極 ○山用表裏註極 ○責山同 ○寫山同
- 形同 ○知山厚同 ○天守櫓知居所同 ○向真中日陰指同
- 聚不盡同 ○求山登垂

右同流三四書の術名異ハ好事の者の所為ありて一向取用所かりと云ふも前小云る意味かるゆへ小是小贅す

一 別卷術名異

- 寸尺之用註雜 ○已尺之用同 ○折紙法註器 ○見盤大
- 成註雜 ○盤切法同 ○盤繼法同

右別卷術名異ハ往々前卷の標目と同一と云ふ其名異なりをりて是小贅す

一 本術術名異

- 圓理渾発註渾 ○算理渾発同 ○歩誥同 ○坪誥同
- 方錐同 ○平錐同 ○山形同 ○菱形同 ○片狹同
- 徑矢弦同 ○渾発之働同 ○遠近平町同 ○遠近筋違同
- 前面廣狹同 ○望之間同 ○高下同 ○極高下同
- 天口同 ○地口同 ○覓先同 ○覓跡同 ○様脚同 ○様
- 体同 ○白浪同 ○水月同 ○草結同 ○猥獲同 ○開扇同

○方鏡上同

右一本術術名異ハ。規矩全書二三の書の目次小隨て是と記す。見者標目の混雜を誣るこなくれ

大凡此六件の條目百三十餘前篇四十六條 後篇八十四條ハ。規矩全書其

外。規矩術同流三四家の書を以て。校量して各均し之の也

有餘とば不芟不足とば補ふ猶三四書小洩るこなく

とは不益の目次といへも捨ずして。此後篇五卷中に論す。是

學者をして他の異目りりても。畢竟無益の説かりことを知ら

り之為なりと察すべし

寸尺用捨

凡町見術おねのて。里町反間を量るハ。皆渾癸の事なり。寸尺小拘るこなく。然とも。寸尺ハ里町反間の基本なり。敢て

捨るは小らひ。故小寸尺用捨と云へ。用捨とは用るふ非ず

捨るふあぶら。謂たり。其理と委く云へ。曲尺を量時

ハ。厘毛以下不尽小出來て眼力に及ぶこなく。渾癸を

量るはハ。蛮算なる故。割餘といふこなく。故渾癸を

以て遠近廣狹高低も小計り知るこなく。町見術の常と云

へ。寸尺長き物を計るふ至てハ渾癸のこなく。又迂遠

をて。曲尺を用て量るの速なるハ。茲と以て此条と掲たり

算法用捨

算法用捨とも又寸尺用捨の理も同。町見の支業に於て算法を用ひずとも害きたる似たり。さしとも算法は數量の根元なり。捨るにあら。因て用るふあぶら。捨るふら。假令ハ渾癸をて。遠程一里の開除を求るハ。其一里

と三十六小割。その一町づつ三十引。残り六町を三百六十
間と知る。此内と十間づつ三十引。又残り六十間あるを二間
づつ三十小割時ハ一里の三十分一ハ一町十二間をうむの
ごとく知る。も渾癸めてハ迂遠なり。算法めてハ三十六町
を一町づつ三十引。残り二百六十間を三十小除る時ハ即
十二間と知る。是に初の一町を加へ一町十二間也。この
ごとく大業速うたる故小至極ハ算法捨るべ

現差用捨

現差用捨と云ふハ此小於て毫厘の違ありてハ彼小至て
丈尺の差とかるものなり。又此小於て丈尺の違ありてと
彼小至て寸分の害とかるもの者。是を用捨と云。尤
止とて得ざる此法なり。其害とかるものハ盤面の墨線渾

癸の量口圖形の模寫等なり。其害とかるものハ里町
及間の増減なり。里町反間ハ假令ハ開餘を求ると此間數
其目印とて十間一尺りつても。又八九間五尺ありても。共
小十間と用て深害なり。況郡国の圖かゝりてハ五十九
間六十一間を俱小一町小用るも其妨なり。然るも止とて
得ざるはとて好ざるは及ぶる也。總て細密
のときは差を用ひ。疎遠のときは差を捨るをいふなり

凡例定格

古法云。凡例定格と云ふハ小差を論ぜざるをいふ也。其の
詳たるは左小記す

尺不論厘毫
寸尺則不論厘毫
亂間數則不論寸分

尺不論厘毫
寸尺則不論厘毫
亂間數則不論寸分

紮町數則不論丈尺 遠則捨丈
 紮里數則不論反間 遠則捨反
 紮大里則不論町里 近則捨間
六里捨里
小里捨町

分基發法

古法云分基發法といふ。今用る間町里の本をとり
 とかり。古よ云。粟以小粒發分分即發寸尺間丈町里
 也云

間 昔ハ六尺五寸
今ハ六尺なり
 町 六十間なり古法三千六百歩を以て田畑の二町の積と反其外面を以て道規の町と反
 里 昔ハ五十町を用ひ今ハ三十六丁を一里とす唐路ハ六丁を一里とす
 地周 九万里但唐路なり和路面二方五千里也
 地徑 是大地塊の一周なり
二方八千里なり但東西の貫也於南北三千里の有延故為鷄卵

地度 昔四十三里余今四十一里半六町なり
各和路なり天地共三百六十度を用ひ
 右地周地徑地度の三條無替の言たりといふも古法より
 存せり故小是小贅す

見盤大成

是他流小秘する所の一名目なり。然ども此法術毎小備ハ
 せり。何ぞ秘訣といふや。量地指南前篇中巻下
 巻毎術を見て考ふる

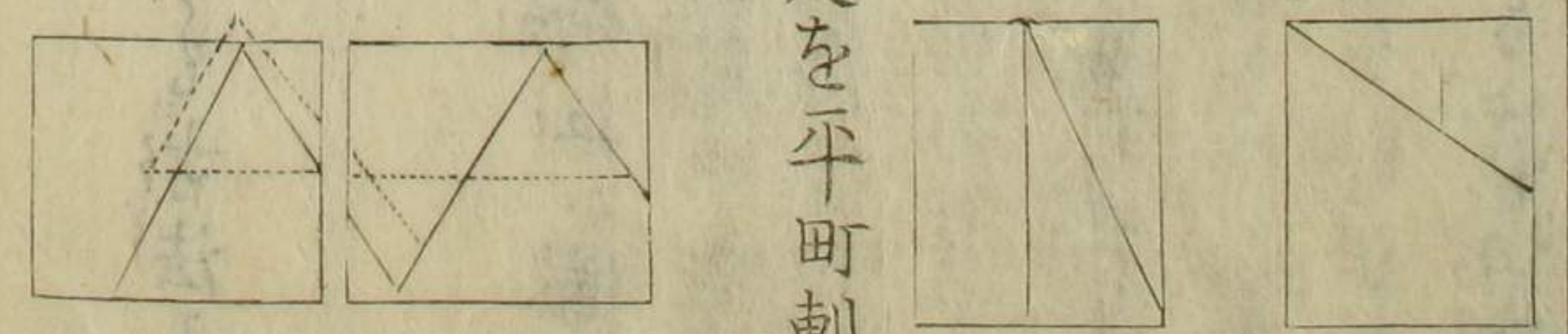
盤切用法

盤切の法割盤法のよりして總て盤面を約やく量る法なり
 古法小山谷割盤平町割盤二方なり。先山谷の術をつとむる
 假令平町を求る丈數百丈小後小見込の五を割付る
 こと。割合せられたるは留るより百丈量る。残る分を切捨

三と量る方ろ。是山谷割盤の法。又平町
 筋違等伐勤ると記開場小至つと見通
 小間るこつらも盤の面の角を見通を
 あも成難し。其時ハ盤の向の端條會
 にならずして向も口出来る故。手前より
 真矩を取て盤を割て條會を作量るべし。是を平町割
 盤といふ

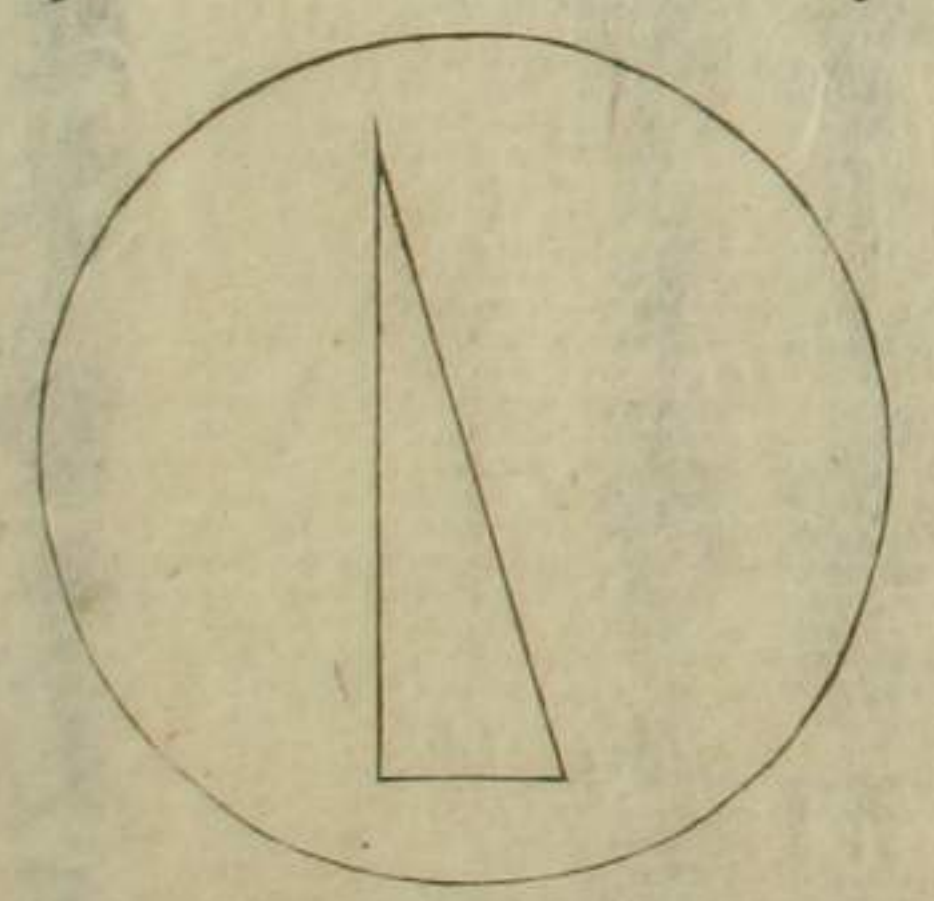
盤繼用法

盤繼といふハ遠境累隔などの業を勤て盤二面ふ
 摸し足ざる時外の盤を併せ繼て用ろをいふより
 前篇より予う所謂併盤といふ是なり。前條より
 述る所の割盤法又此條小云処の併盤法共に



前篇小委く出たもいも爰に別傳の條目小秘訣かりや
 記分故小贅言を述て學者の問を塞ぐ
 不拘器物

器物小不拘といハ町見術の諸器物有合ぶると記ハ。何ふか
 らハ外面平なる物を用て見盤定木のてく。其用を
 かんといつてあり。或ハ定木あつて見盤こいれ時を膳
 盆の類あても用也。但圖のてく。其中あて見込見通を
 えて墨を引とれハ盤面小其形出來する
 かり。或ハ盤あつて定木をこ時ハ糸と
 針とを用也。或ハ忍等を求ると記。器
 物小拘る時ハ萬物障となつて求がじ亦
 器物を放る意ある時ハ其用全かす。その



地ふろしある萬物を即道具に用るの理あり。常ふ工夫す
る。是が爲に收用器あり

寸尺之用

寸尺の用とらふハ大凡寸尺ハ規矩術の拘りざる所とい共
又用る所なり。今茲よりハ寸尺を用ゆることとす也
其故ハ一本術用法云く。二尺と五寸と。種の口と四倍す
といふなり。意ハ二尺を五寸とすむ。方尺二尺を五寸の長と
こ心得しむ。種の口を四倍すとハ渾癸を種を夾むなる
口を四倍ふすとあり。是より方尺も渾癸も俱ふ同寸
分ふなるなり。二尺乃方尺を五寸とせしむ時種を夾む
る口二分あり。是を八分の口よ作る。二尺を計ること。理の當
然なり。但しむるハ傳法也。門弟子として思ふることの

おろし。丸渾癸の口をひろくかくて量むば量むやゆさ故に
かのぞ縮るなり。其終ふ二分の小口めて長と方尺二尺
を量むば厘毛に至て治定の分らざるに依てたる

已尺之用

已尺の用とらむは已尺とハ一已の身体を悉く寸尺とかけし
となり。意ハたぐむ已が三趾ハ一間たぐむ已が腕尺ハ二尺五寸
たぐむ已が指尺ハ五寸たぐむ已が跨尺ハ四尺八寸たぐむ
已が一尋ハ五尺二寸等兼て試置をのみ。其外空眼先知乃
類をいふなり。而後作法のぞく。堅木をなして其業を發行
す。是一本術大要至極の全法なり

圖寫屈伸之用

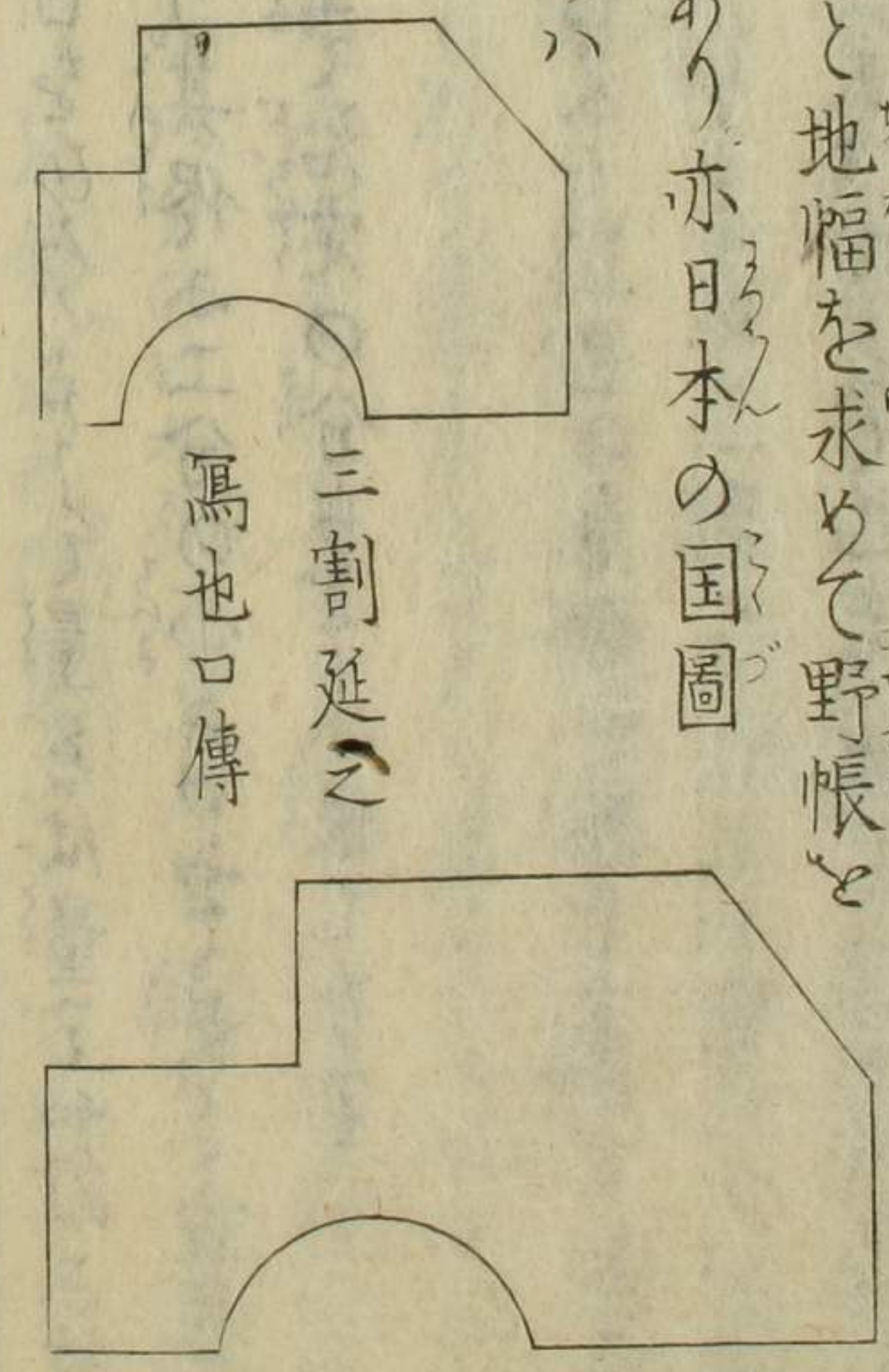
圖寫屈伸の用といふハ古傳云分間の圖を屈伸するといハ寸

尺を用るなり。角寫と意順の矩を用るなり。蓋至極の角寫の秘傳あり。或ハ三分一。或ハ四分一。亦ハ何割等増減ハ寸尺小拘ず。渾癸をとりて寫す。速うかり。但其かたふみで働。時宜小より。口傳云云

又或傳云。国圖城圖等と延縮する。ハ假小紙の方より。分度を以て。方角と地幅を求めて野帳と仕立て寫取る。亦日本の国圖

等の矩小合さる形ハ假小歩割を用

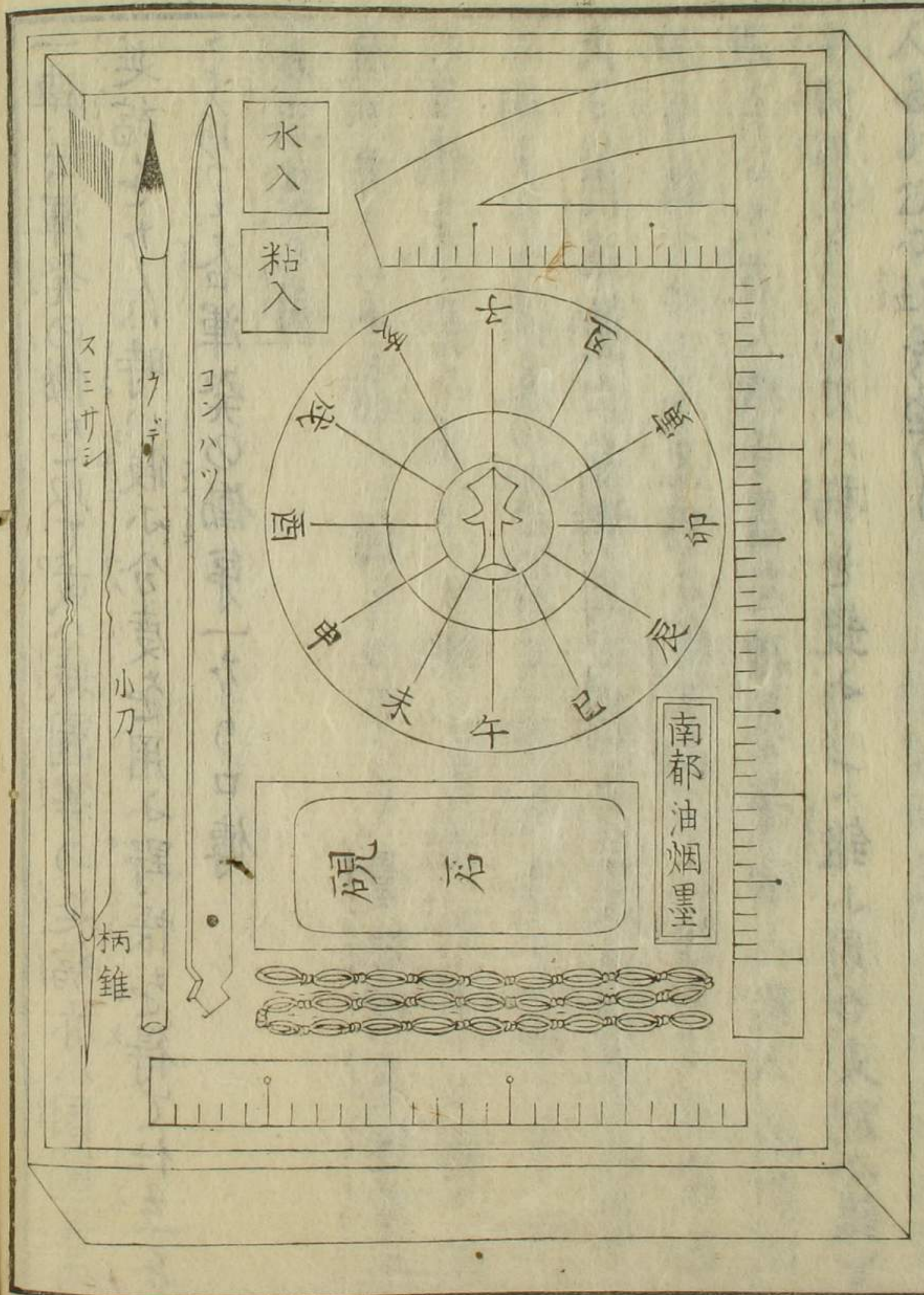
ひてうけし。事あり。口傳あり



一傳云。渾癸の働を以て。或ハ城圖等の延縮亦ハ国圖等の延縮をかり。時ハ假小分度を用。野帳を得て仕立て。各渾癸の働第一なり。口傳

收用器之用

收用器といふ。下に図をさす。量地術急速要目の器械を一箱小收む。其制法云。箱の板を何しても。其人の望小任す。春慶をく。小塗。大さハ内矩。竝六寸。横五寸。蓋を指入。小も。蓋ハ即量盤小。此内小收る品。十二種あり。分度。矩。渾癸。小丸。方尺。横手。墨。硯。硯。墨。筆。水。入。粘。入。紙。裁。の。小。刀。等。なり。小。刀。ハ。柄。を。鋭。め。て。錐。小。用。也。又。別。小。錐。と。入。る。も。心。小。任。と。る。



舊器之號

- 貨度轆輪 十六方位をり模寫の器なりといふ
 - 貨彈覽天 按ずる新制の小丸大丸等の用法も同なり
 - 圓盤 天尺を量る器なりといふ
 - 星刻 同上其用不辨
 - 以寸多羅比 星上圭とも名くといふ
 - 復寫 船中の器用とも其法知れど
 - 羅字坐 模寫の器
 - 漏墨 十六方位の磁針なり
 - 意順矩 新制の墨笥も均しといふ
 - 方圖器 換国の器といふ
 - 星尺 同上
- 天尺を量る器なり

墨地拵南後篇卷一

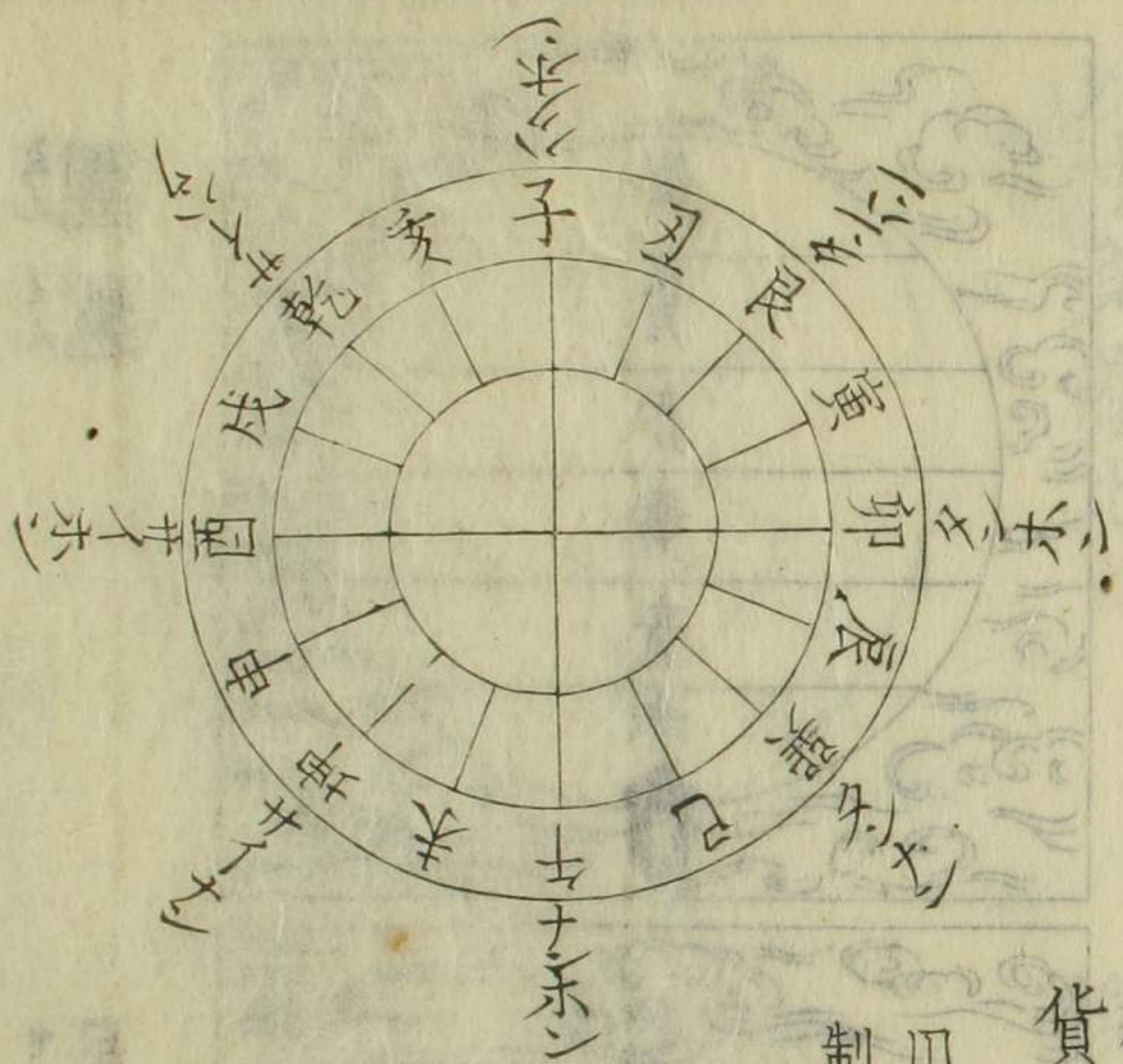
○日刻

日影を量るの器なり

右十二種ハ粗予が見聞する処なり。其の品阿須多羅以
 与加呂士惠牟須加呂士加苗太加路兜渾癸寸天經天緯標
 木など云々の有り。其制法と不辨故に圖せぬ。又羅經方針指北
 方と云。古ハ所謂羅字坐と云。吾邦當時用る処の磁針
 小同なり。抑此術吾邦流布の始粗此旧器物を用ること有と云
 ども異邦の人の其便利と云ふことあり。是は因てあれ
 ば其器物廢して吾邦今の量地者流今に於てハ旧器の号と云
 知者なり。此故に初學の者往々其器名と聞傳て怪と思ふと
 有り。其疑惑と散じ。其用法の失ふことと知てめん為に爰に圖
 を著して當流の學者小示す

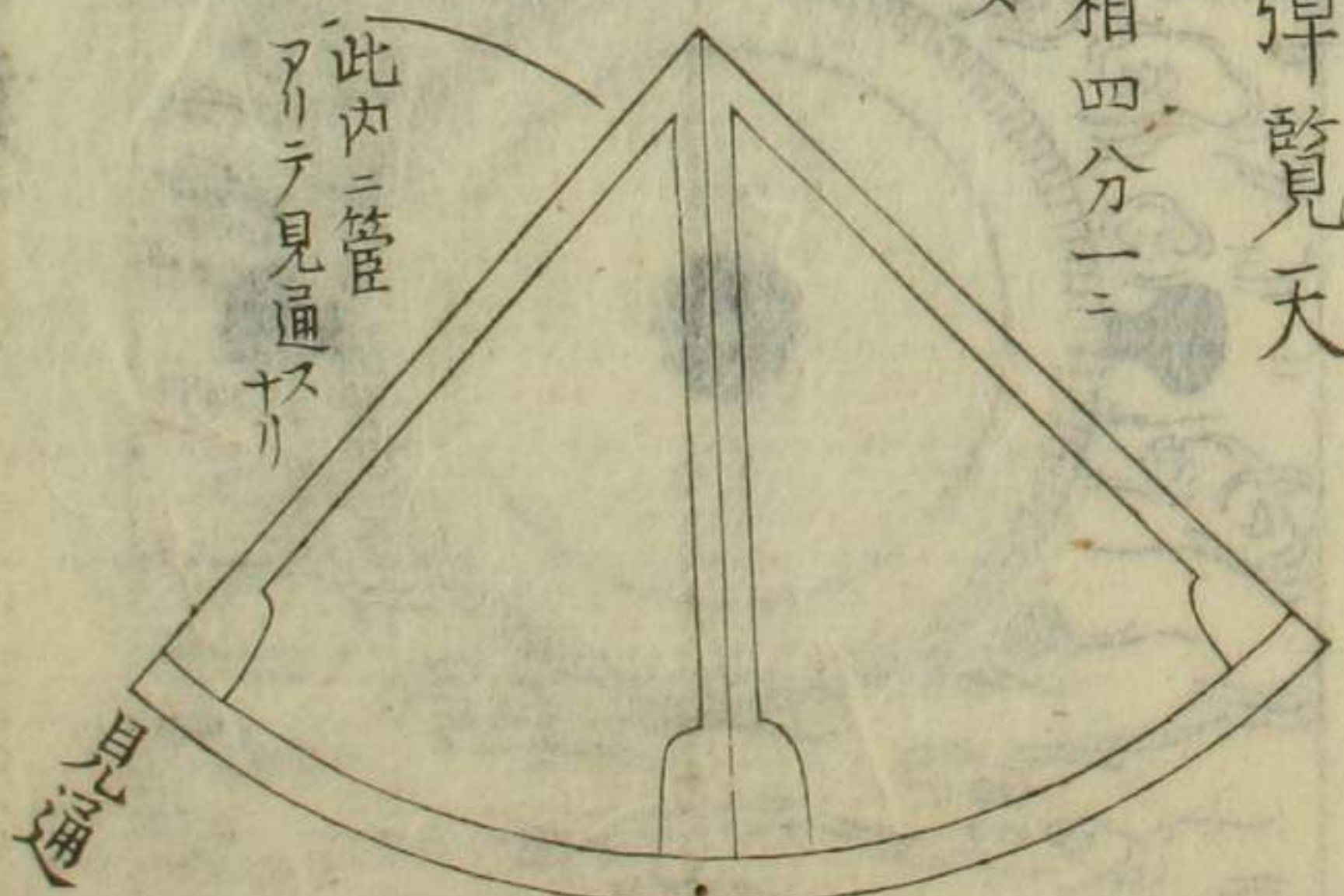
右の器械其名有りといふも。當時これを用ひず

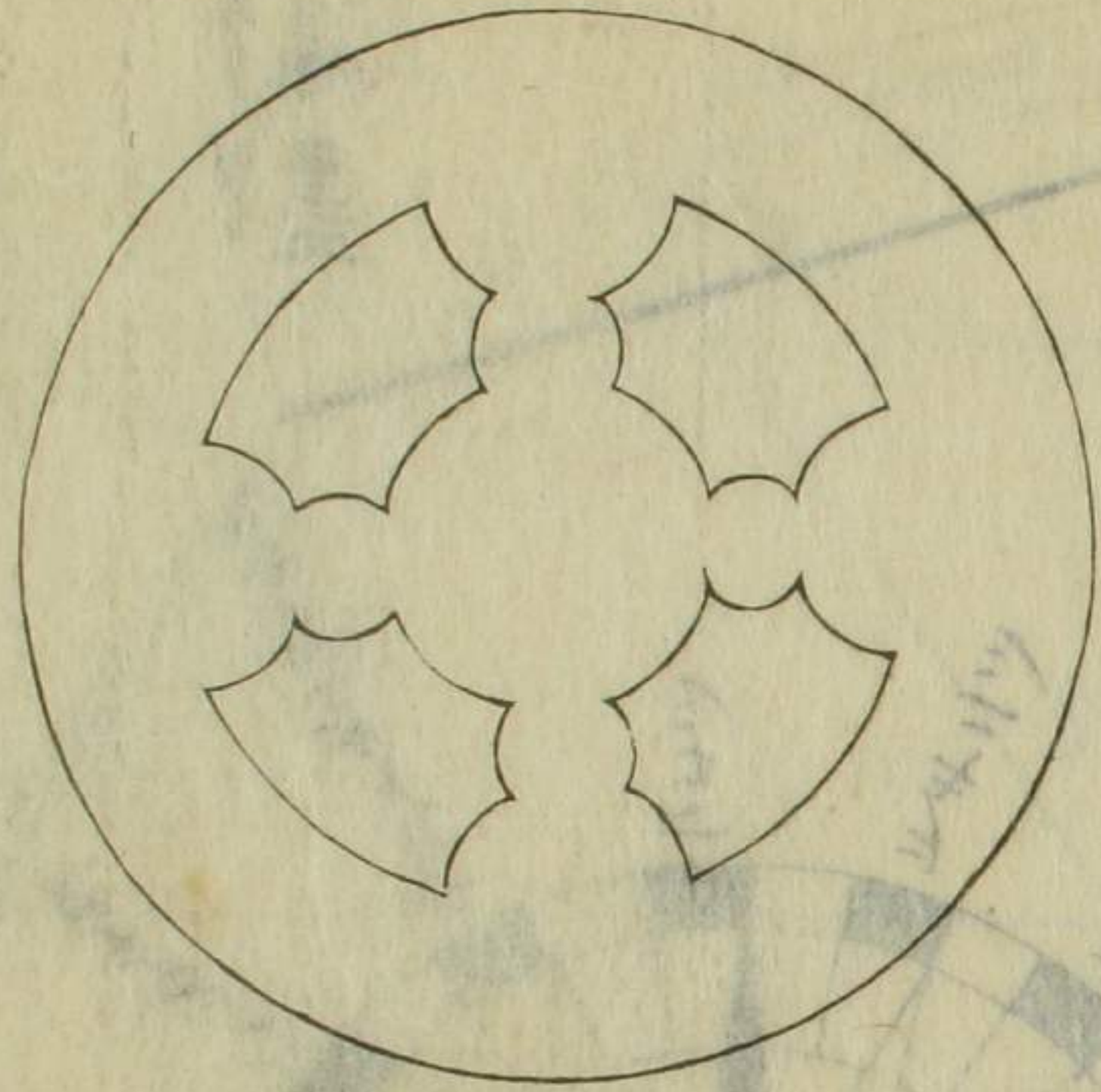
貨度輻輪



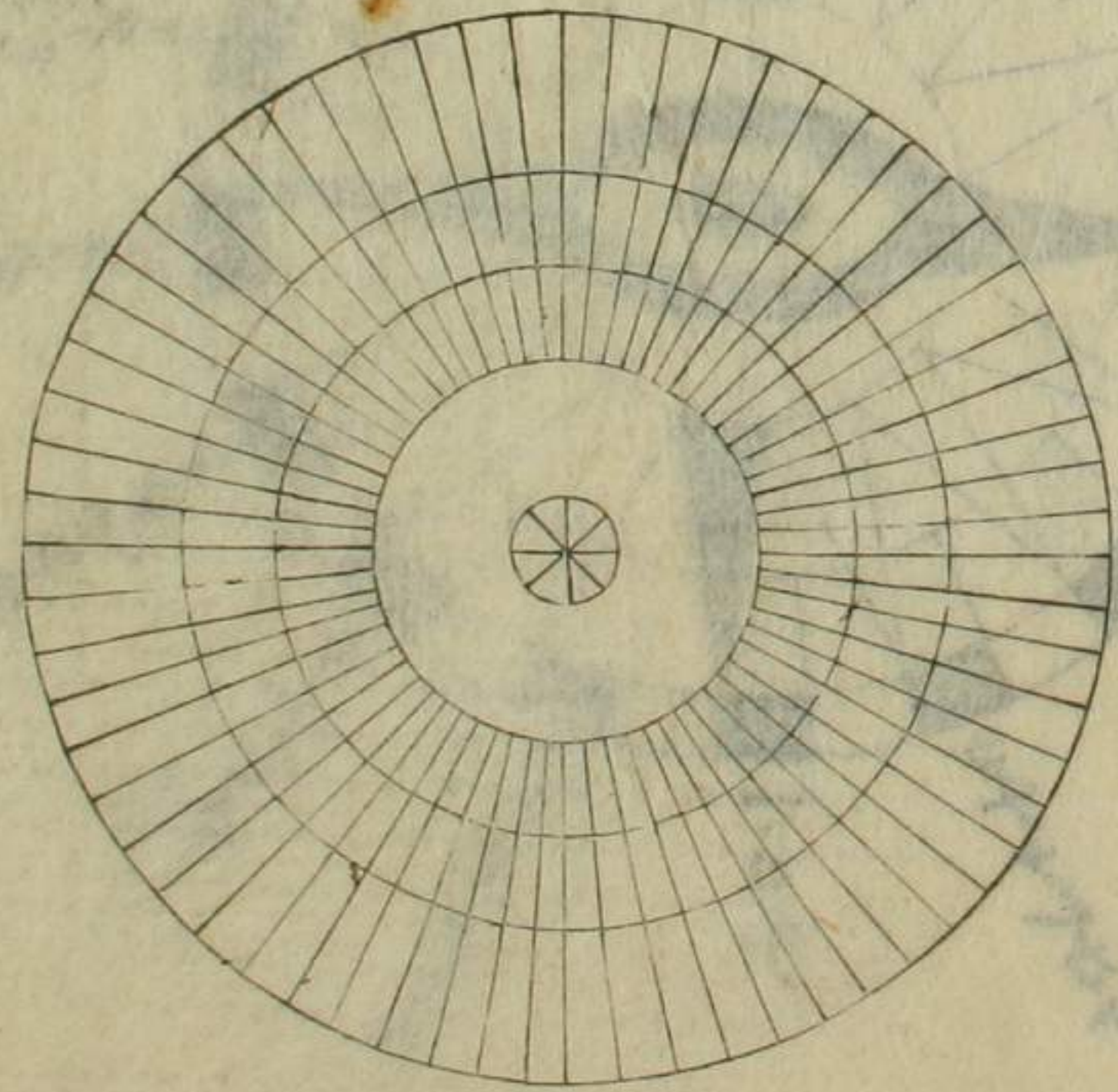
貨彈覽天

田相四分一ニ制ス





以寸多羅比



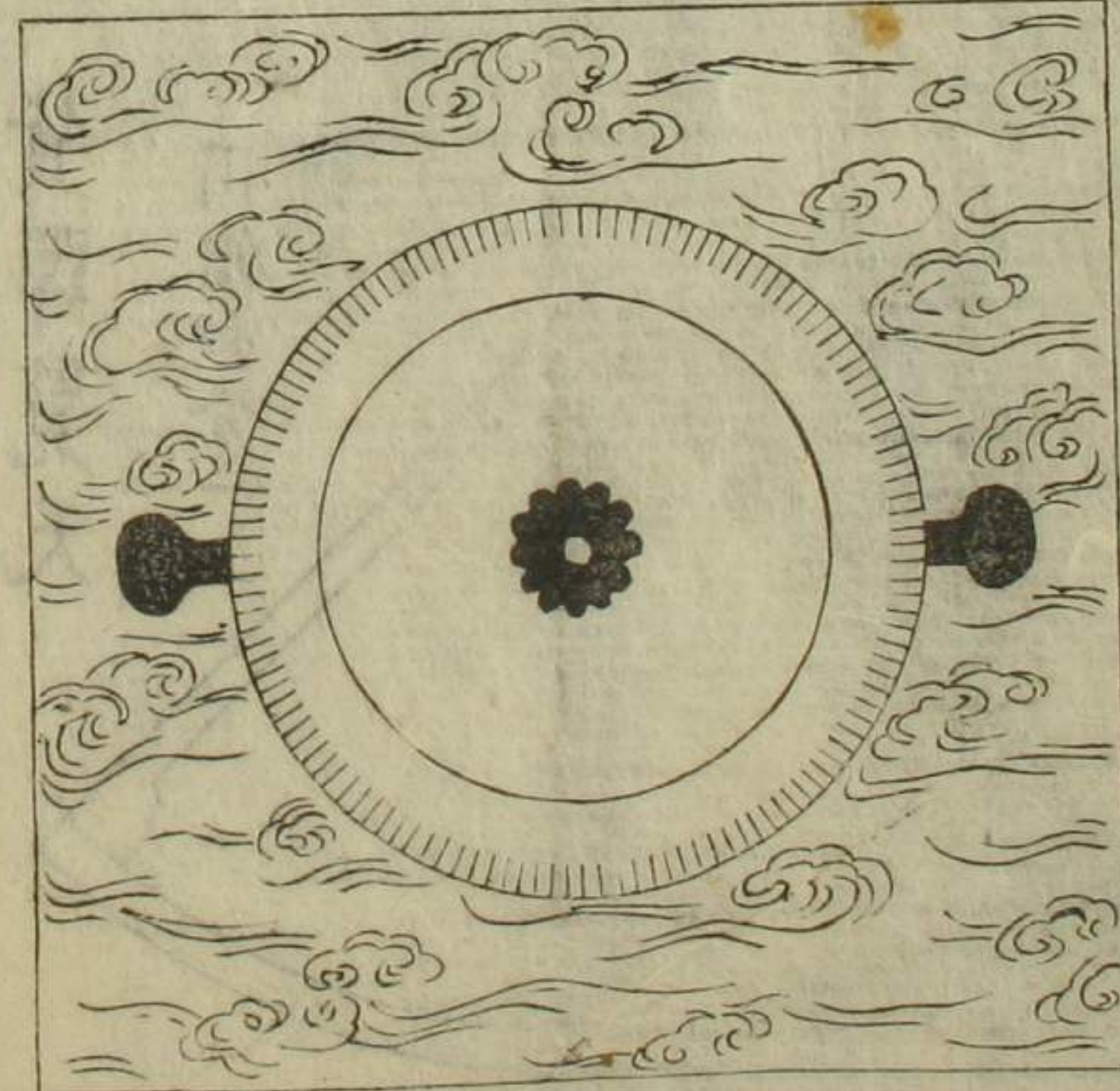
後寫

量也昔有後寫卷一

一七



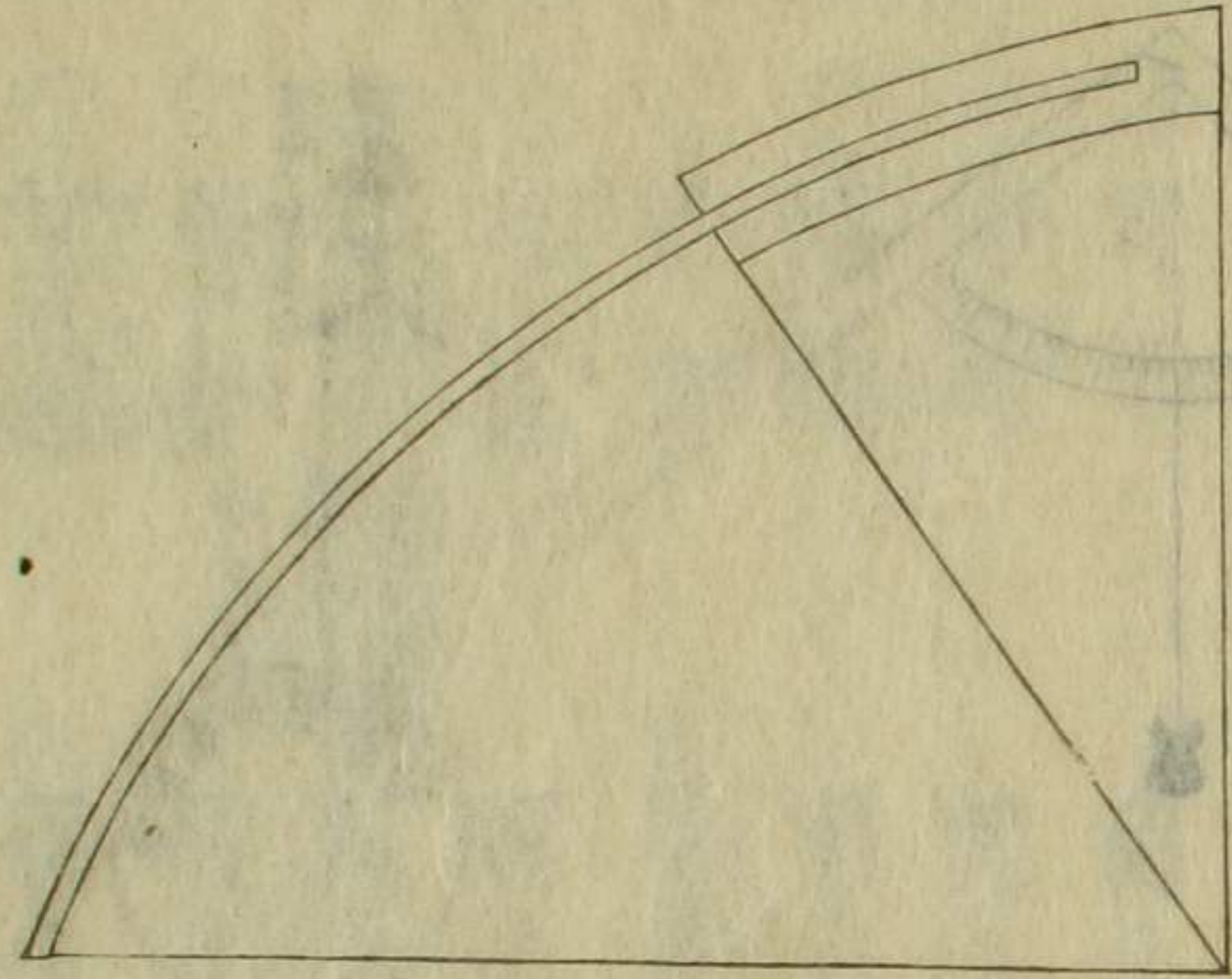
圓盤



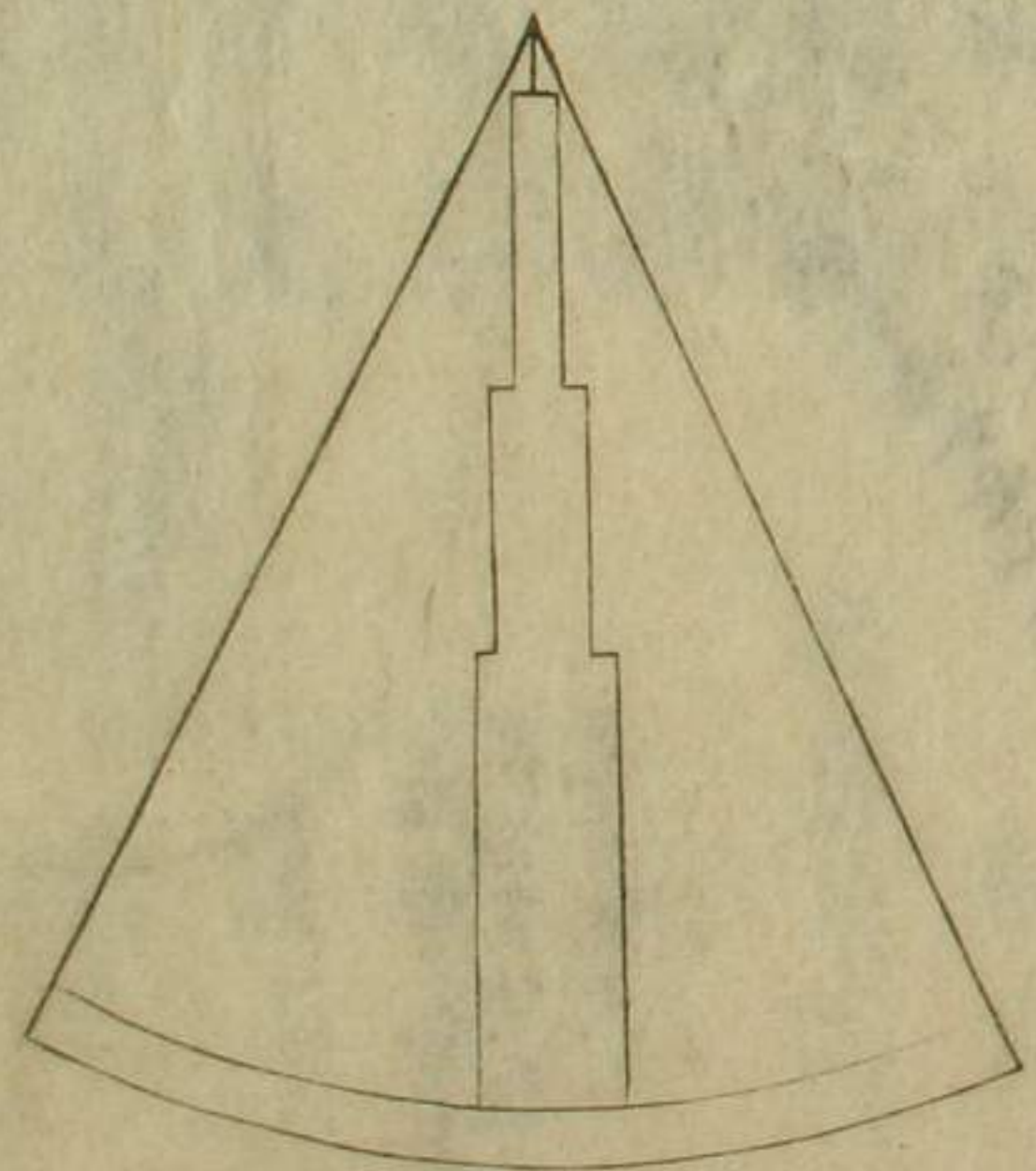
星刻

量也昔有後寫卷一

一七



意順規 いもんき



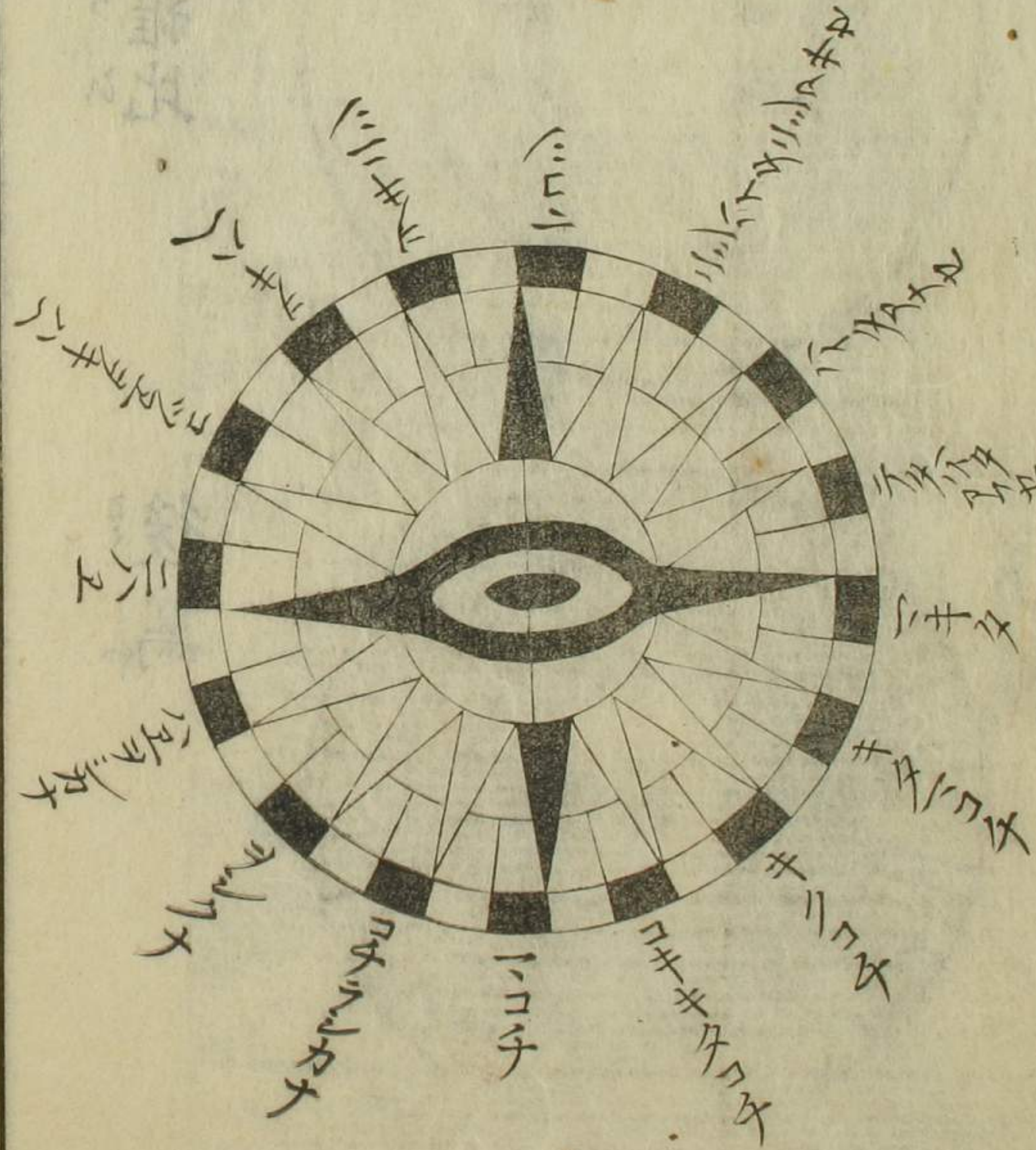
方圖器 かたずき

量也上有南及北字一

二



漏墨 ろうぞく

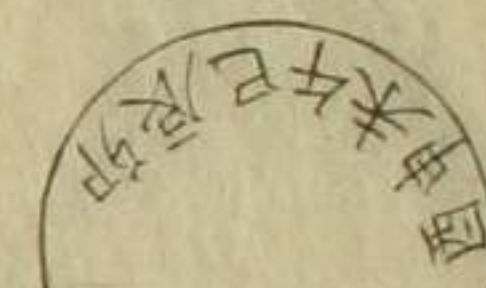
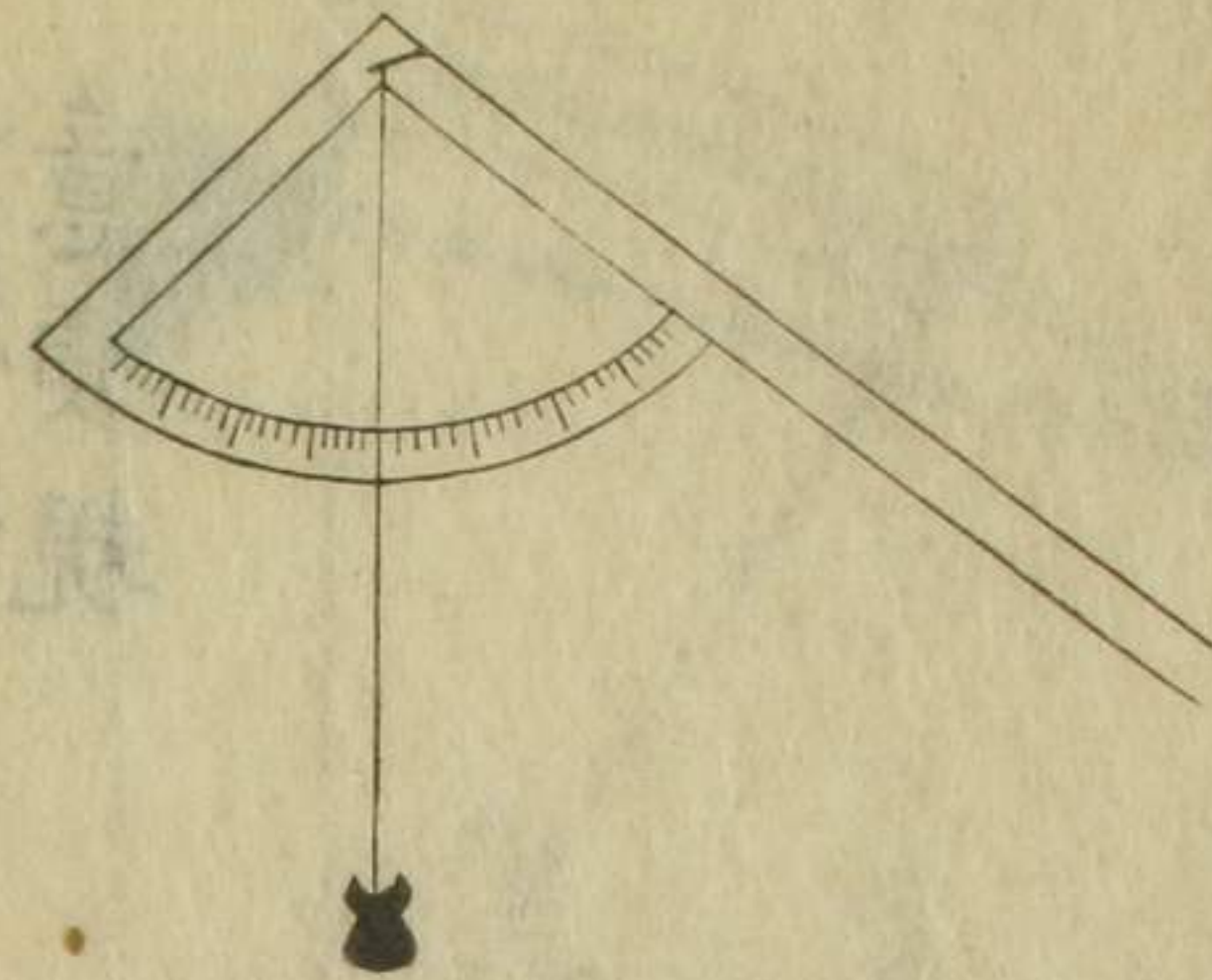


羅宇坐 らうざ

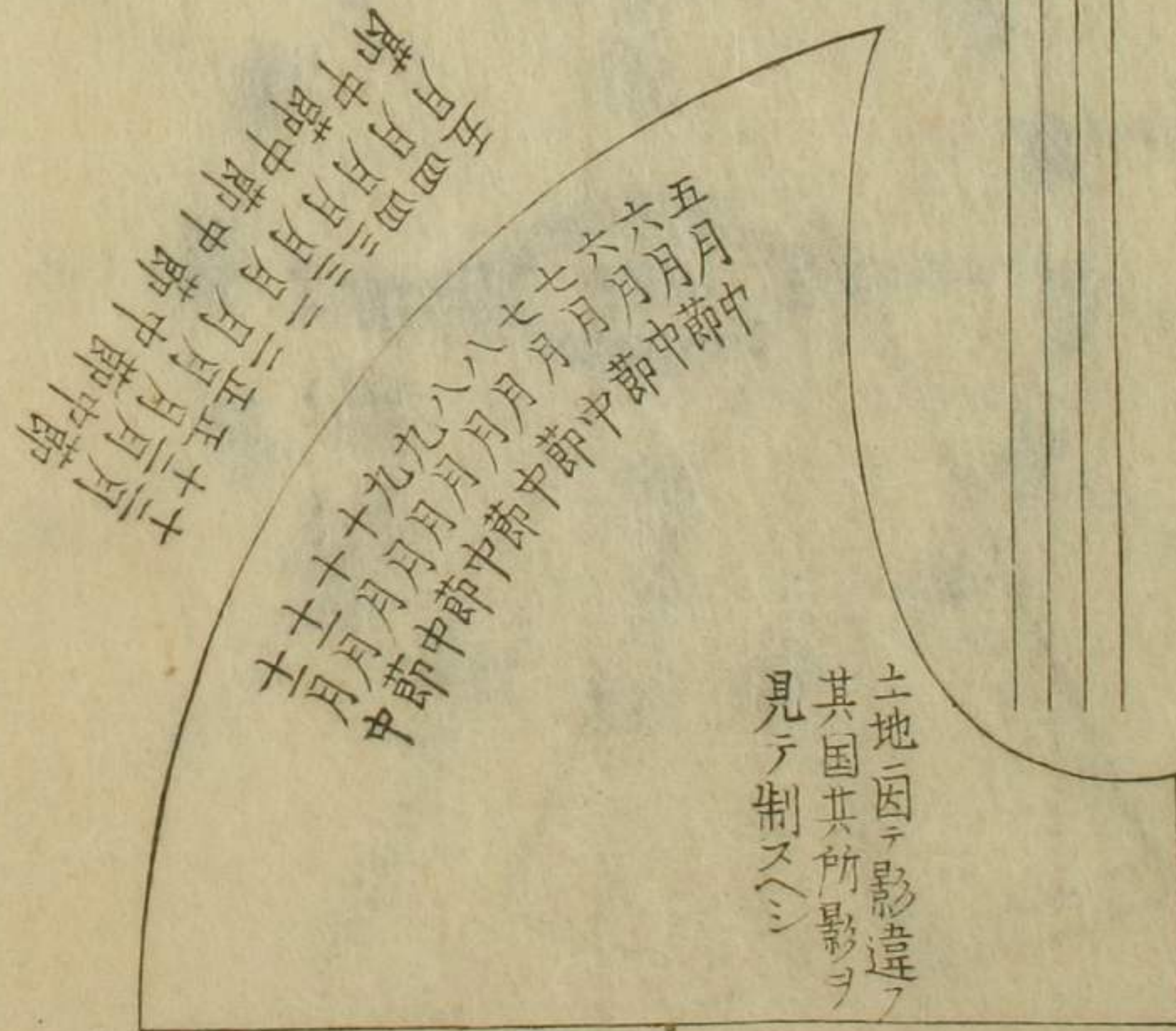
量也上有南及北字一

二

星尺



日刻



土地因テ影違テ其国其所影ヲ見テ制スヘシ

一新器之號

○ 圖寫器	○ 分度矩	○ 臺金	○ 忍磁石	○ 元器	○ 管棹	○ 標檝	○ 錐繩	○ 定木	○ 釣玉	○ 渾發
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
○ 隨川器	○ 虎法器	○ 大丸	○ 小丸	○ 磁石	○ 輪棹	○ 間棹	○ 和久	○ 間繩	○ 垂針	○ 見盤
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上

出前編又器用解

出器用解

出器用解

○方尺 並試定規 同上 ○折紙

○火剋 出極傳解 ○湊渾笮

○度数 同上 ○遠里矩

○收用器 此章出前件 ○水平

水平の制角木を以て長六尺横五

寸小闊木の制表面長四尺

横三寸深と一寸五分の水溝と穿ち

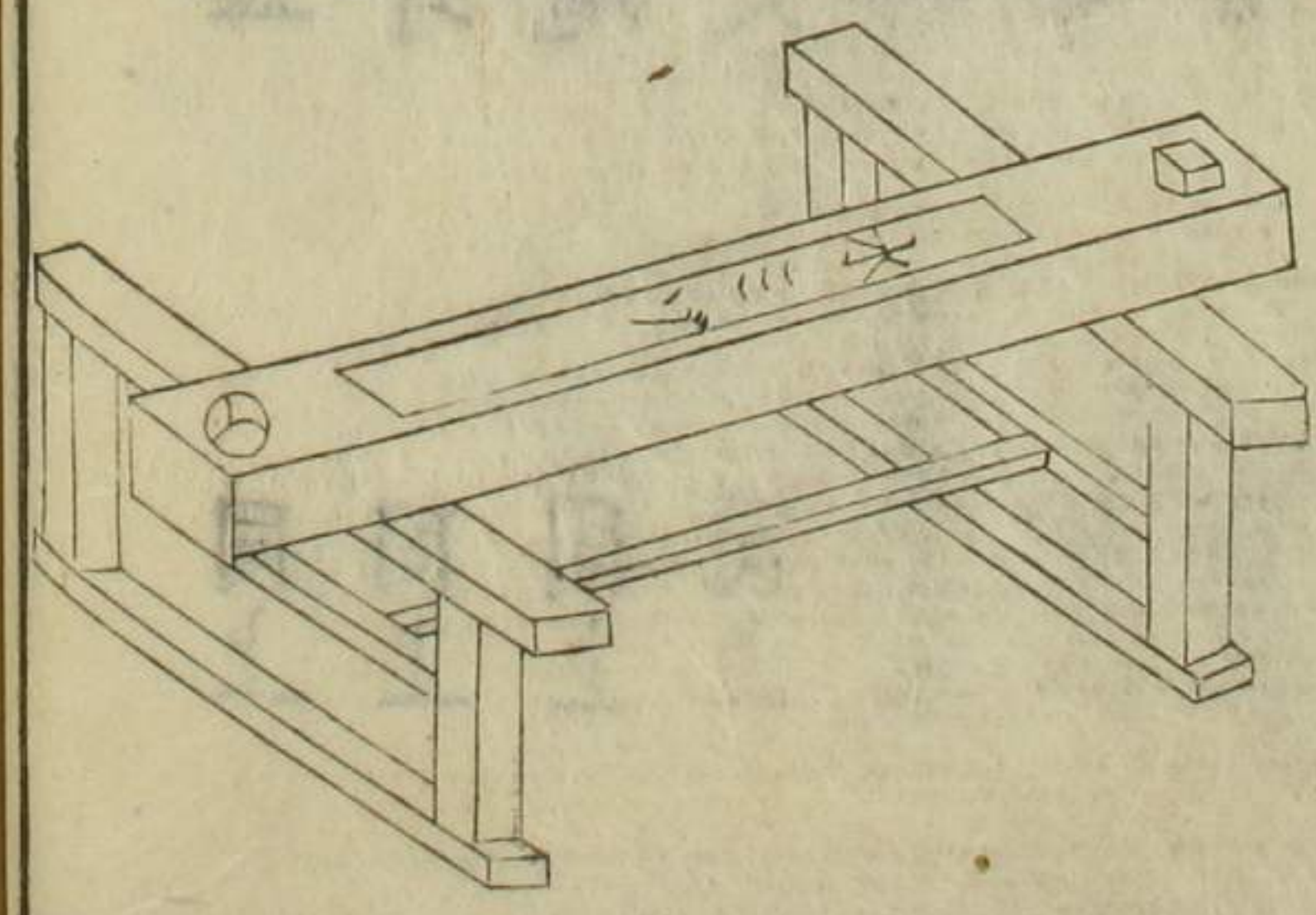
前後小目當り高五寸此水溝

水と盛るなり尤水平木下り臺

と設けて随分不直ならやうに臺小

て上げ下げて方を極ゆるなり臺の

高さ好にすべしといへも大方高さ



同上 出極傳解 同上 出于此章

二尺より二尺五寸を吉と云ふ委ハ圖を見て知るべし

○水準 出于此章 水準の制長四尺横五寸厚と四寸の臺木小高さ二尺

方三寸の標木と立る尤此標木と左右より助木と

施して少し斜邪なりやあし

扱標木に糸系とかけり委ハ圖を見て知ア

○槽 出于此章

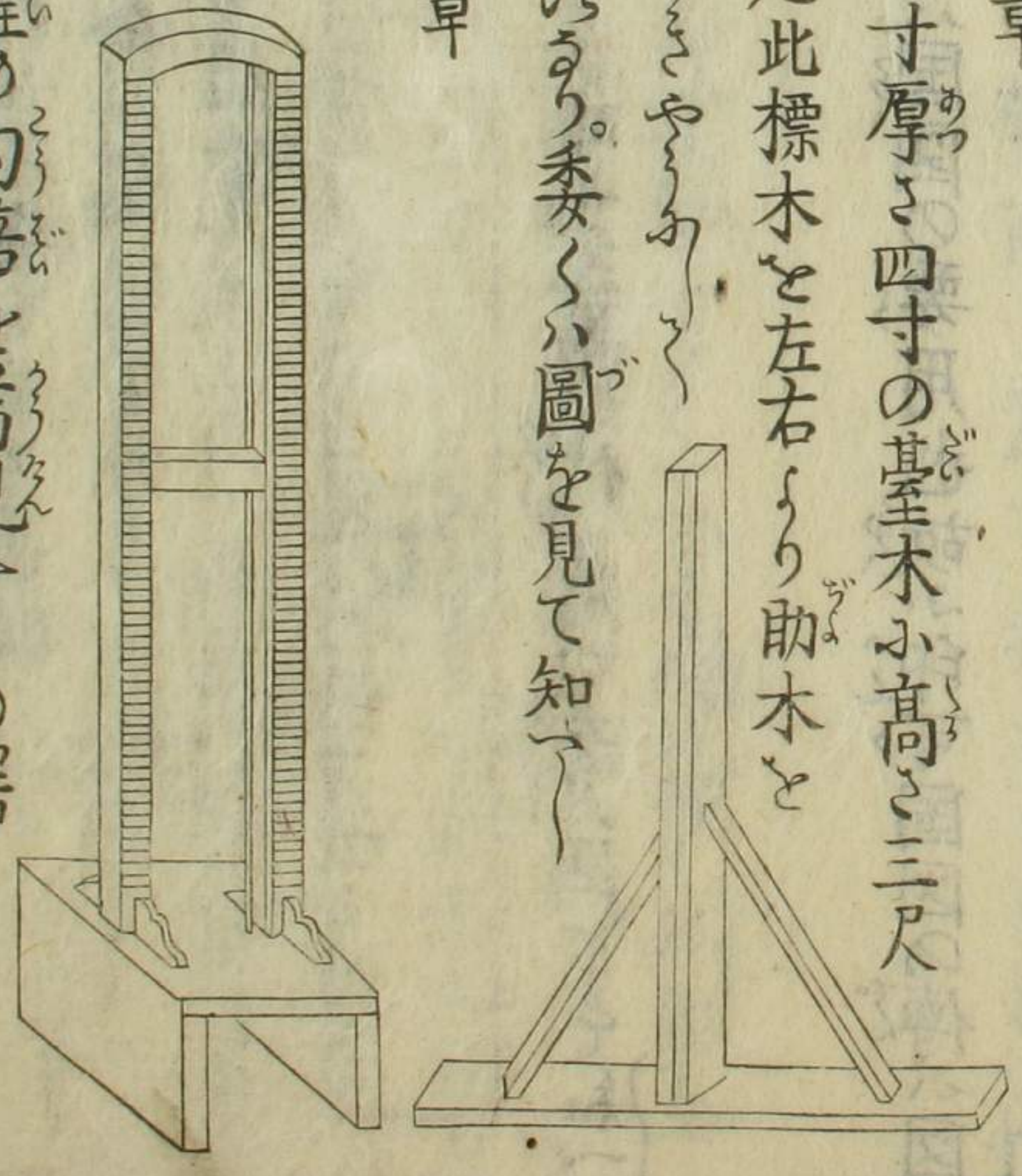
槽の制真鍮を以て

作る左右小曲尺の星

と罰る高さ五寸元

器の桁上小載て高程の勾倍を考見するの器

なり今專にこれを用ひ委ハ圖を按て知ふア

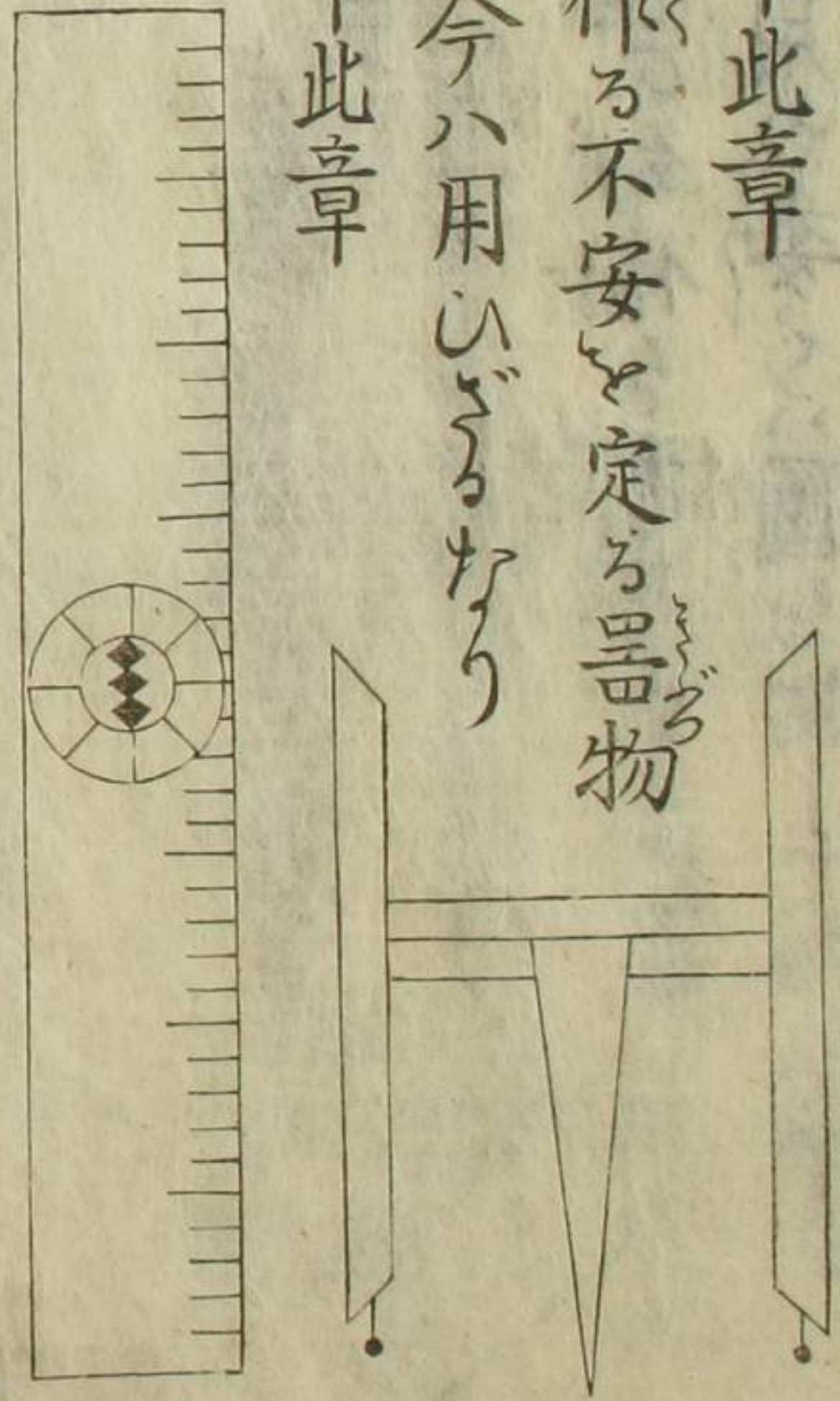


○滕 出干此章

滕の制真鍮を以て作る不安を定る器物
なり。不便利ゆへに今ハ用ひざるなり

○板定木 出干此章

板定木の制長一尺
五寸横二寸真中に



小丸を彫入る。元器かゝる時ハ元器の代ハ用の委ハ図とて知べ

○種等

○相圖懺

右種等相圖懺二器ハ国図の要用也。故ハ印可国図の傳ハ図

量地指南後篇卷之一終

量地指南後篇卷之二

勢南 處士 村井昌弘編述

器用解

磁石切用

大凡磁石を用るの品數種有りといへども。何の時も針頭と子
の方ハ安して方位と定むるハ古今の極法なり

第一小見込様小口傳有り。假令ハ子れ支を求る時通俗大体ハ
午の線より子の線を見込て常なるも。其事悪し。左すれば安
居分明なり。海とのなりも。只小直上よりして見込むる。前後
脇より見る時ハ外見ハ中なるが如しといへども。多分中らざるもの也
眼精散やすれた故なり。是を第一の習とせ
磁石の塵といふことあり。或ハ振様小より。寫の十分も中り。又ハ

支の九分中も中るこつり。是眼目ふ及ぶる処也。是と塵と云
たり。此所少て小差といへども。彼地少て八里町小延る故小大差
となる理なり。心を用ひて塵をばやりにすべし。

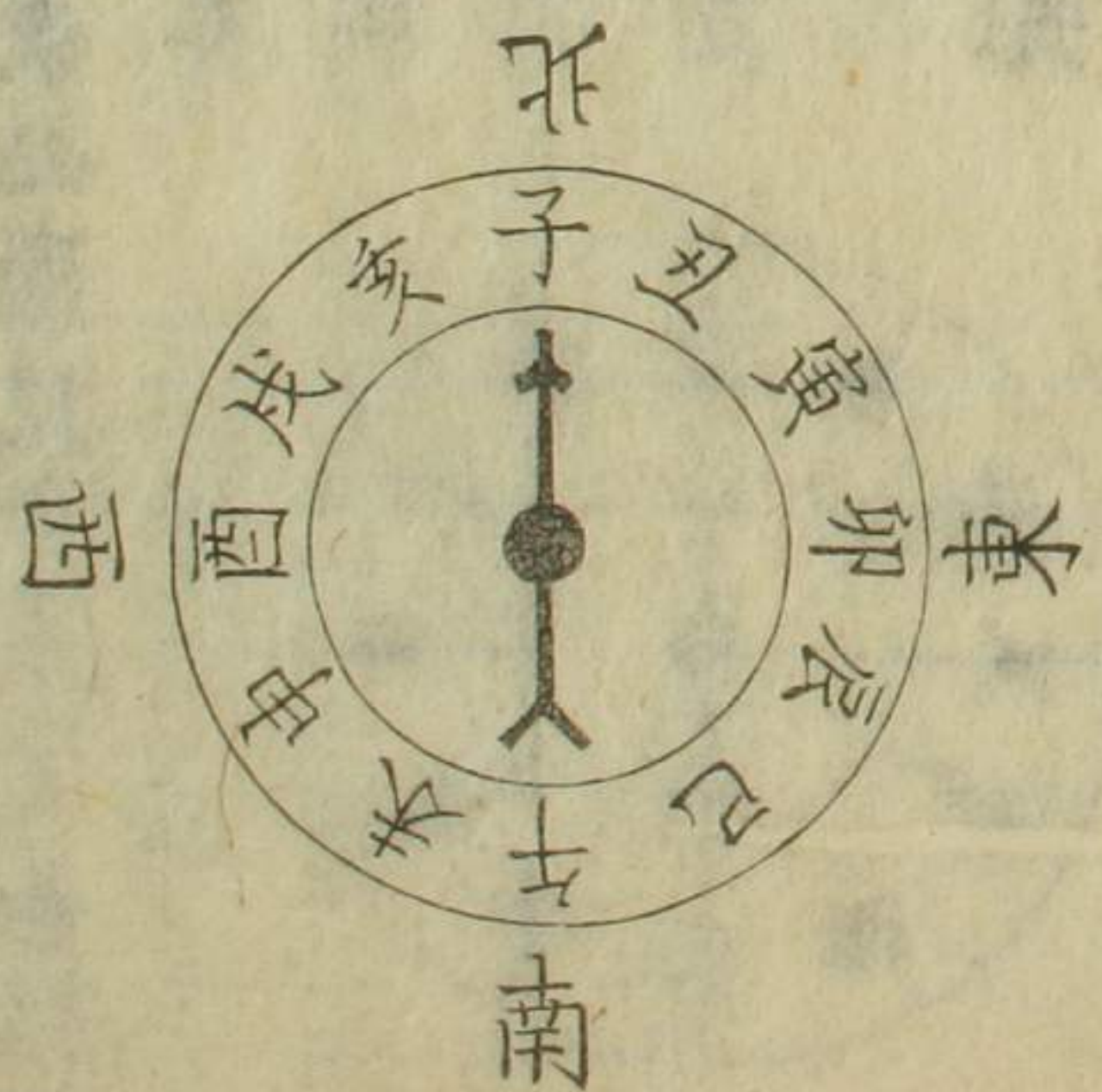
塵を隠すこつり。右小述るこつり。磁石小塵出るこつり
も。大業のこつり。此語と捨て可扱とのなり。故小止と得ずして
必用る也。此器ハ圖形を成小至て分間少て少く心と用る也
遠里遠町を小圖小寫せば。必分間縮るものなり。茲小於て
自然小塵の隠る理もつり

亦順逆の振様といふとあり。假令ハ左方右方と一度も量る
とれハ進と行るに先の當支とば。順小用ひ。跡の當支をば
逆小用るなり。或ハ子を午小用ひ。酉を卯小用るがごとし。是
なり。是逆なるがごとしといへども。實ハ順路を用る意也。此術

業に於て大益あり

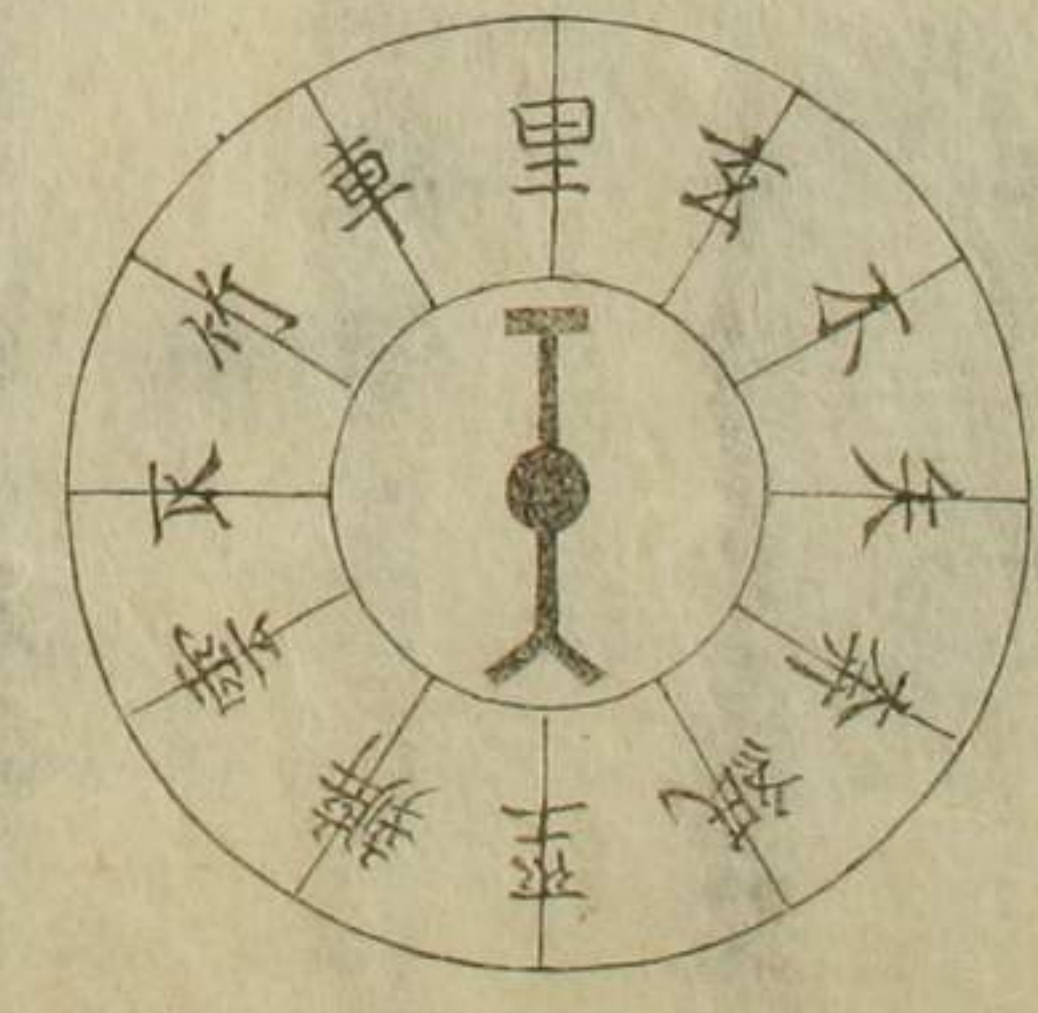
又高下の地小おわてハ振様別あり。凡て磁石ハ少くも傾く
時ハ。先太居物なり。故小山坡をば小於て振ると規矩
元器槽を用ひて。勾倍を寫して。其通を見込也。磁石とハ。少
しも傾るがごとし。安小居て

振るなり。亦振分といふと
つら。小業少て度々磁針と振
時ハ。微塵はりて顯る小依て
是と厭して所小より振出して
塵を一偏小聚めざるがごとし。小



隠銘といふこつり。磁石の東西南北十二支小隠語を以て

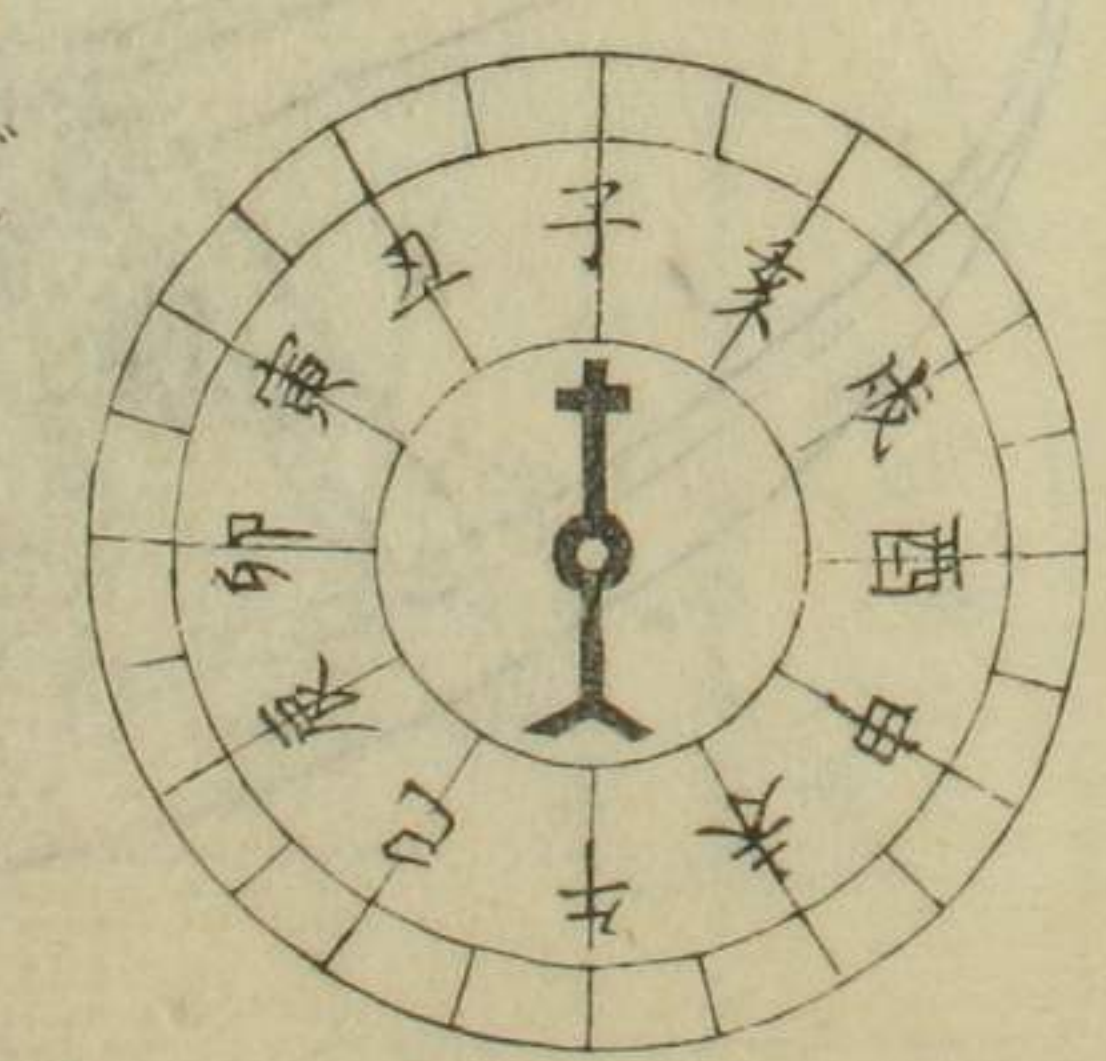
記す。是はいつるも好事の作といふと成る。他を愚ふ所の
作めて。其の益なりとも見へ。其の東西南北といふを。長短輕
重の四字に作る。是即子午卯酉也
是ハ易云。木者長。金者短。火者輕。水
者重。といふ語あり。其基く。外八支ハ
車竹雲辨紙奔不玄の八字に替り。其
字意を考ふる。甚笑ふ堪たり。



逆磁石といふものなり。逆目磁石共
ふ。常ふ反して。十二支を左へ配り
逆小居るものなり。右の隱銘の條小述る所。即是なり。今初
學隱字の解。其を通過曉。安んずる。人爲ふ。正字を以て
記す。此逆支。船路又ハ國圖小用ること多し。往々其用所ハ

便利の用法を記す

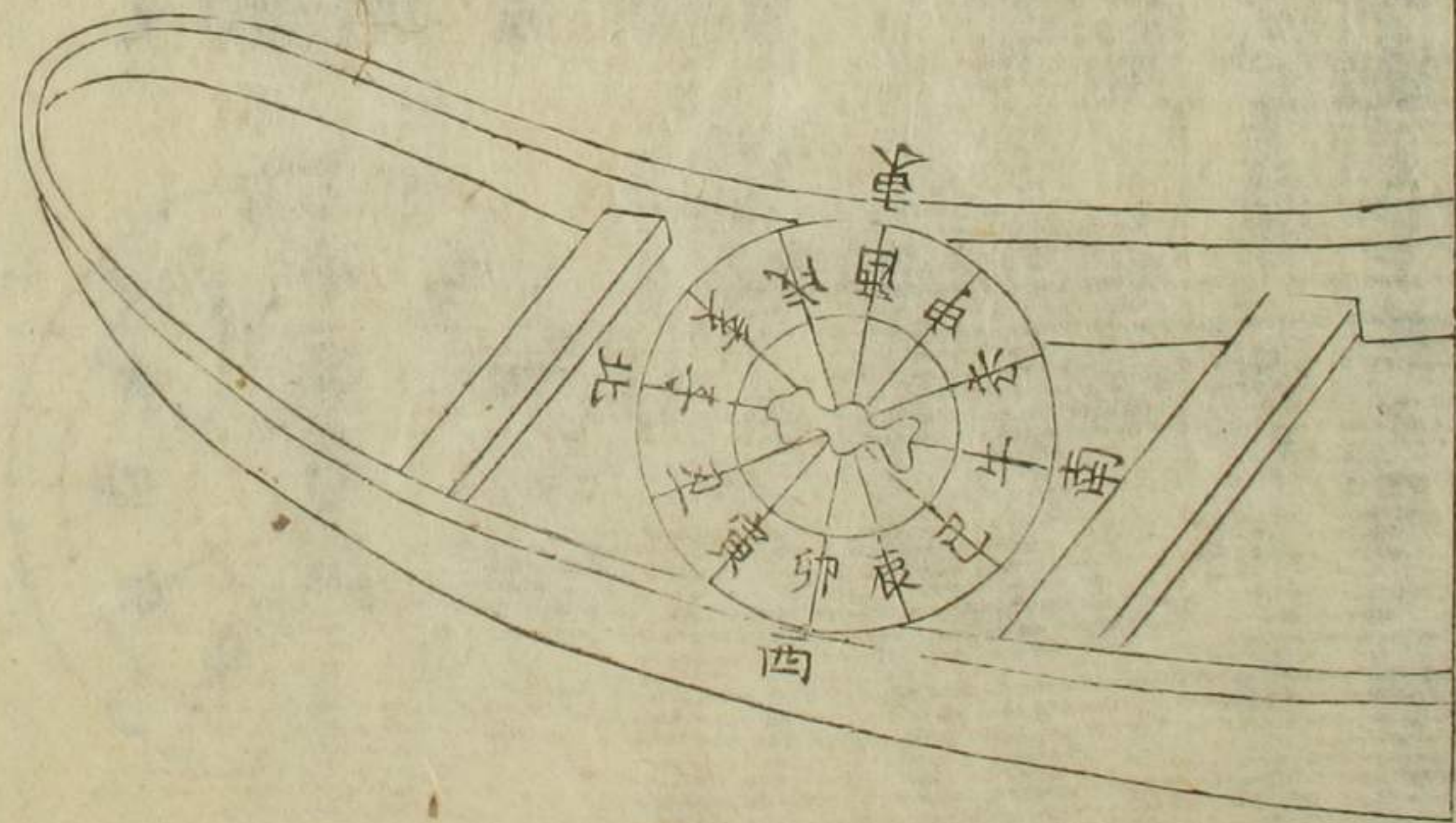
逆磁石といふものなり。左小委く述たるも
其用船小なり。陸地ハ甚益
あり。其制常例。反して左
方へ十二支を配分。方位を見る
か。いかに。扱方用を用る。暇ハ何の



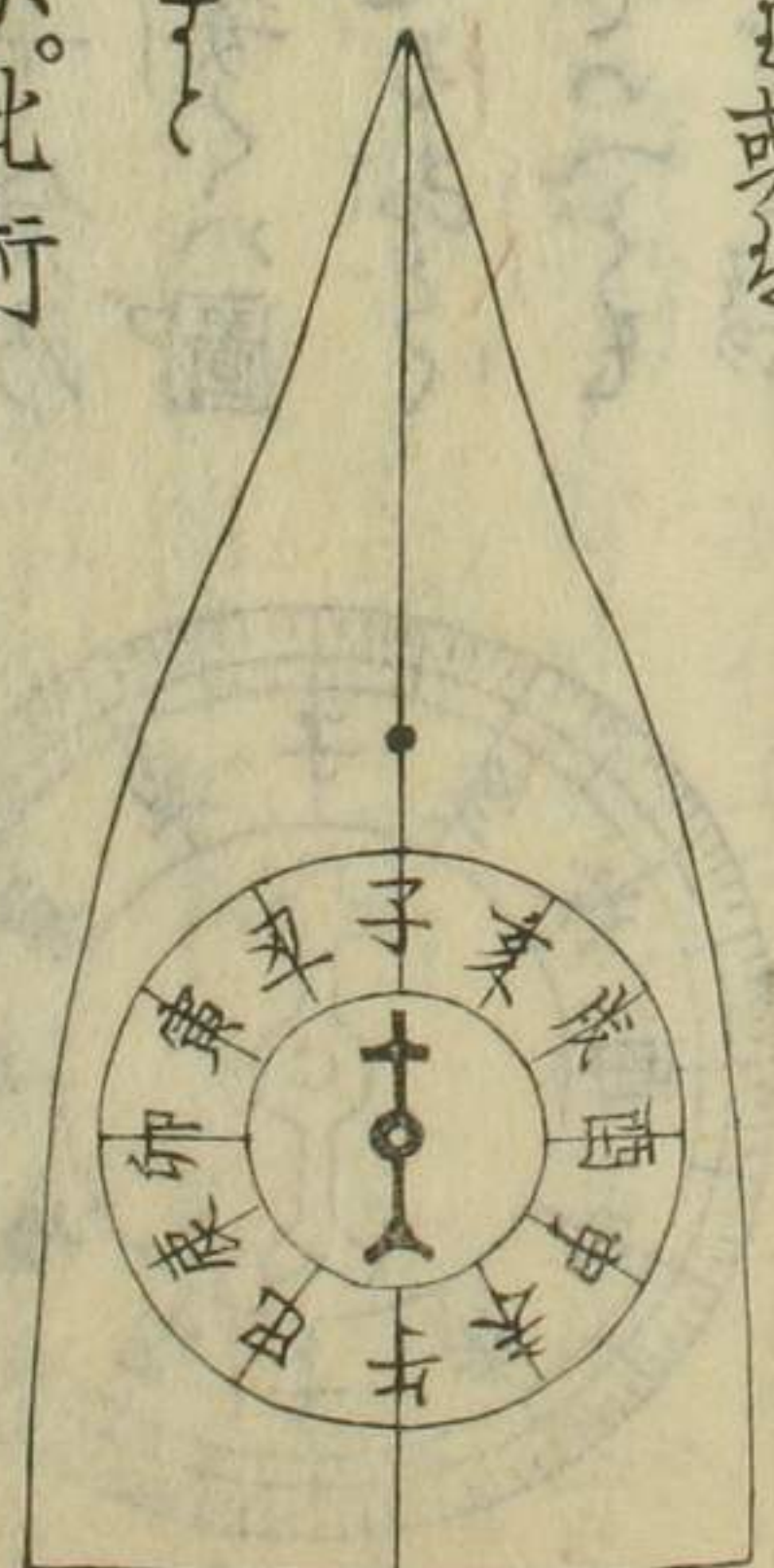
時一先子支と磁針とも。北方小當然して。後磁針と欲
する方小向む。是其用なり。たゞ。南試驗時ハ。子支ハ
南小なり。磁針ハ午に向ふ。又西小向。酉を指。東に向ハ
卯と指す。磁針と四方配分の十二支と交會を論。此
磁針の指と以て。其欲する。方從こ。知るなり。扱船上の用と云
ハ。海中へ船を乗出さんとする。此逆支を紙小寫。磁針と

るも小船を正當の北に向ひて免
船中の平直なる所小張付。壁ハ
南方趣久んと欲せば其時つるを
磁針の鋒の午支小當る。一船と
押廻し漕出すたると。余是小働て
知るを

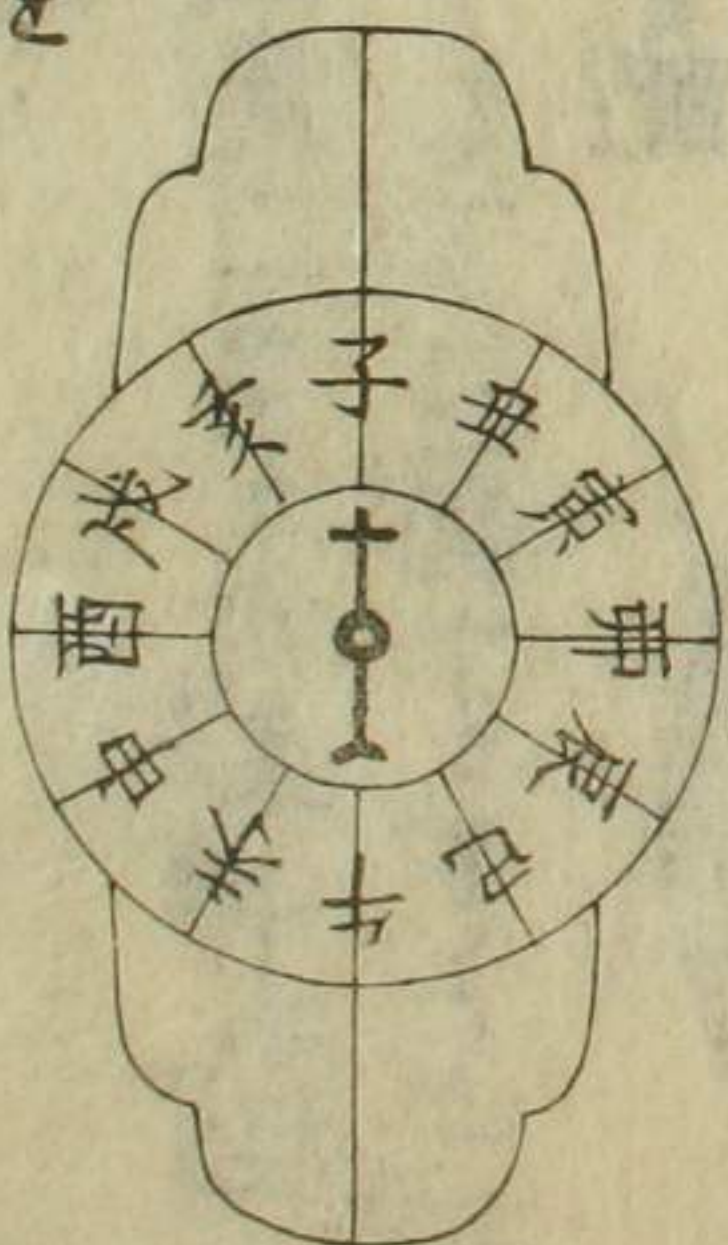
忍磁石といふ器あり。是ハ密り小其
直程又ハ其地理を寫しこころんとす
時他人の見顯すこと厭ひて忍び
やふ事法なれば法なり。或ハ此
器と立覽器ともいふ。小丸を臺小
仕掛て掌の内にて當支を振る



方角と求め。或ハ里町と知り。或ハ
圖形をあつたす此業なり
右用法づれも忍の術也
古傳云凡国郡の形を尽す
いづも方角回町を求るふ。此術
を以て成すといふことあり。尤當



支と求め知ると本といふ間町と
定るといふ歩行をもつて相試
ひすて忍の術ハ能陰藏とを

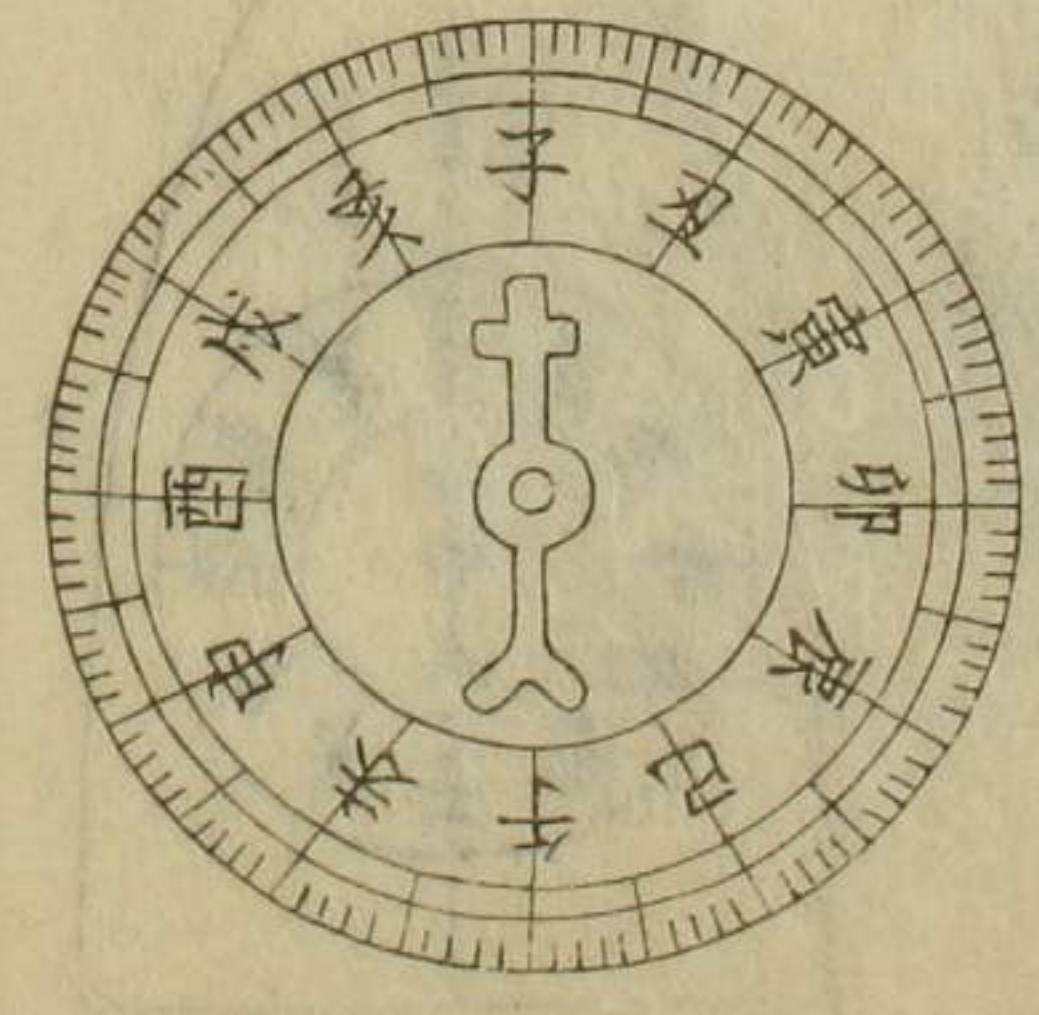


專要といふ其事慎むべし。又地理の量法時宜ふより千變
万化の働さなり。免角一身規矩の術小満とるとればいづれも
得がく。尤筆談小尽すべし。口傳云云

此器ハ胸小膺て用也。又杖の末小載て量る。立覽器と名け
る。立たさるる小覽の意なり。常小用ひ馴て益あり。試
習ふる。

小丸之用

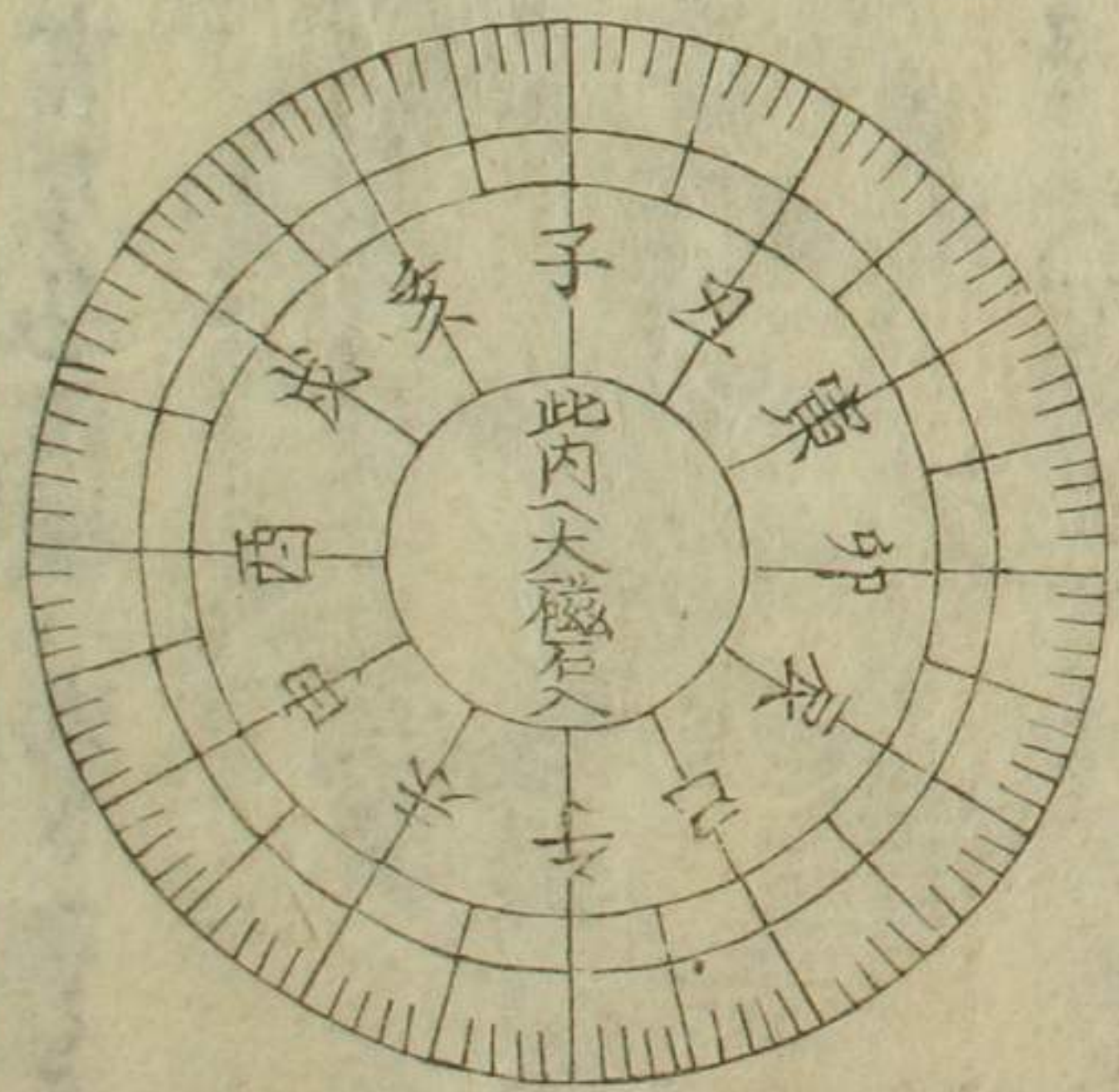
小丸ハ其制真鍮を以て作る。徑度二寸五分。真中小徑一寸
程磁針を藏る凹竅を穿つ。而して下に圖するごとく。二段の
間用を廻し。内の一段ハ十二支と配
當し。外の一段ハ一支毎に十分乃
線を刺し。大略此のごとく。委くハ圖
を見て辨ふる。扱右小述るごとく
全徑二寸五分大略なりといへども
先ハ是を以て定法と知るべし。其



故ハ大丸ハ一尺也。中丸ハ大丸の半減。徑五寸也。然ハ小丸ハ中
丸の半減。一尺徑二寸五分也。是と定法となして然る也。其用品々有。
盤針術元器術ハ全く此器を用ずして扱ふもの也。忍磁石立
覽器隨川器。又ハ一本術等も其術皆此器と主とす。其用法ハ
各元器大丸中丸。忍磁石立覽器隨川器。一本術の用法を以て
考へ知べし。煩くは爰小載す。

中丸之用

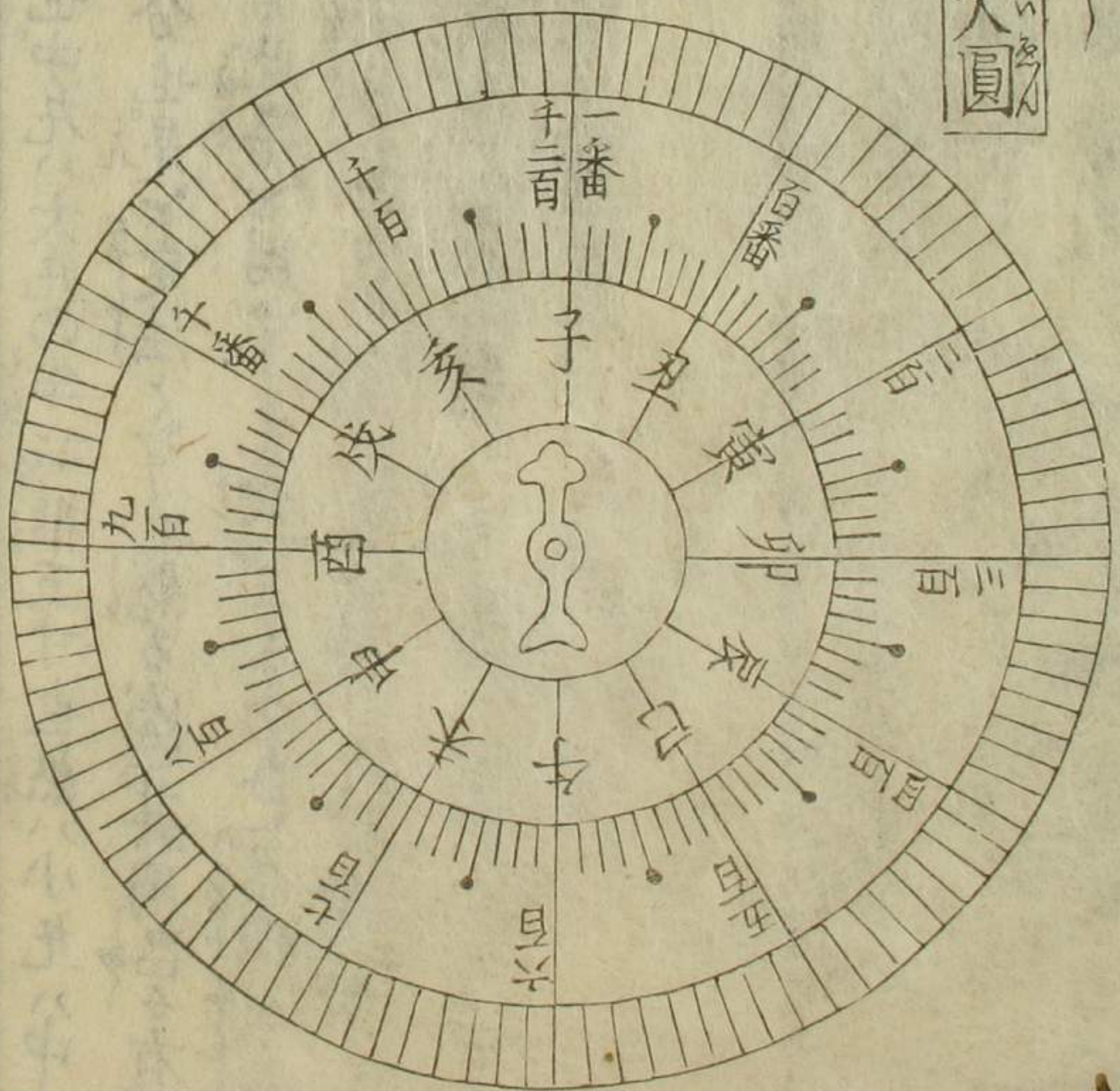
赤銅真中を以て作る。又板目紙
を以て制しもあり。大磁石の下に
敷て大丸角と均らる。但大業ハ
此中丸と小丸の代りに用ひ。大丸
と別小徑一尺二三寸。四五寸。又



其品より。徑二尺も制し。るが吉なり。器械ハ大なるに
あつてもあつて知るべし

大丸之用並方維大圓

板を以て制す。徑一
尺厚さ五六分。まゝ真
鍮赤銅と以て制るも
可。或ハ板目紙と以て
制す。小丸の下に布て
用るも可なりと云り。其
制小丸と大丸制する
意の器なり。大場を
勤るふ分厘毛速うふ

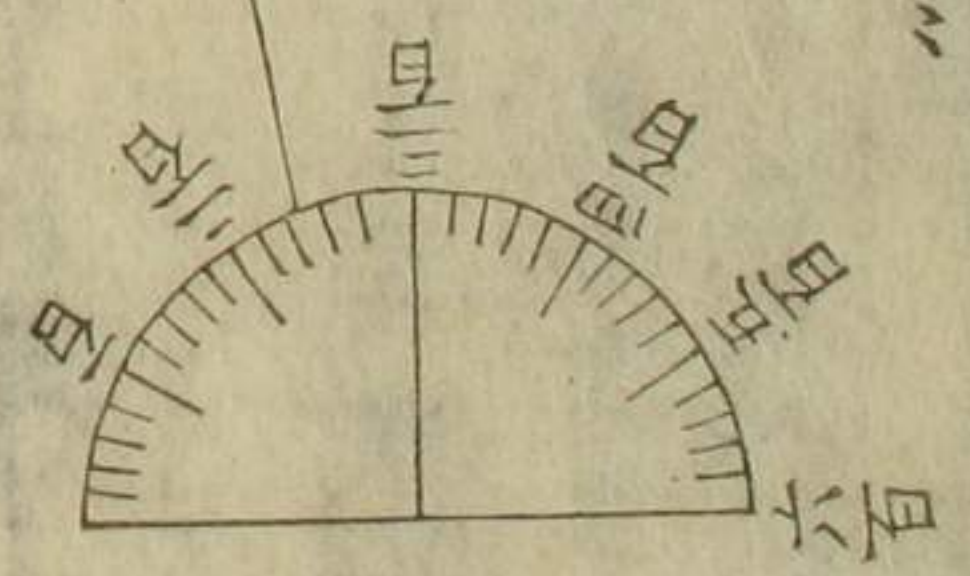


見る小便あり。依て大國の圖を制するも必用也。盤中に
磁石を居るて勿論なり。圖のどく三段小圖を廻し。内小十
二支其次分線。其次ハ厘線なり。元器はどく針糸なり。まゝ
元器のどく横手ありて回轉し安れやうに臺を制す。此
器を其臺に彫入ること。小丸を元器の上に施すべしと
知るべし

又云此大丸を半より折て用る轉法なり。其理徑捷なり
隨ふなり。又世ハ方維太目と云も一物別名なり
大丸の用といふハ先本場にて大丸の一の方と見込ふ當て圖の
どく。番附をなす。扱二目返も一を先みして見通し。開の
間數番附ふ記し。扱本日當見返し圖のどく番附とるなり也
何時なりとも。其術ハ右の通なり。大丸ハ至極小委し。故小磁

石小塵多子時に用して益多しといふ
或傳曰磁石の塵を論ずる時ハ大丸と以て番附と用ゆ形を
求びべし但二目返をも一不定る也口傳云々
其用法半徑全体兩圖を顯す考べ

見返二百五十八番

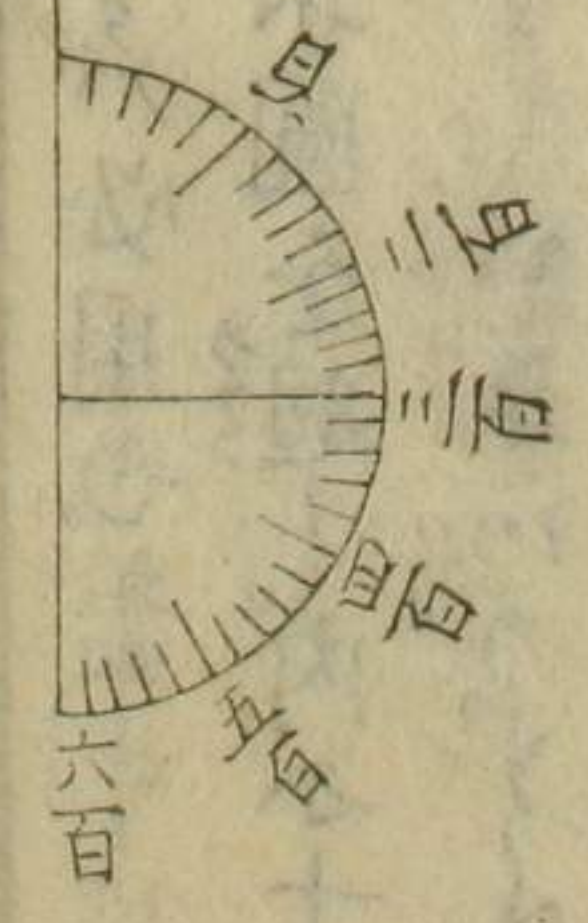


見込一番

三百番
三尺四寸

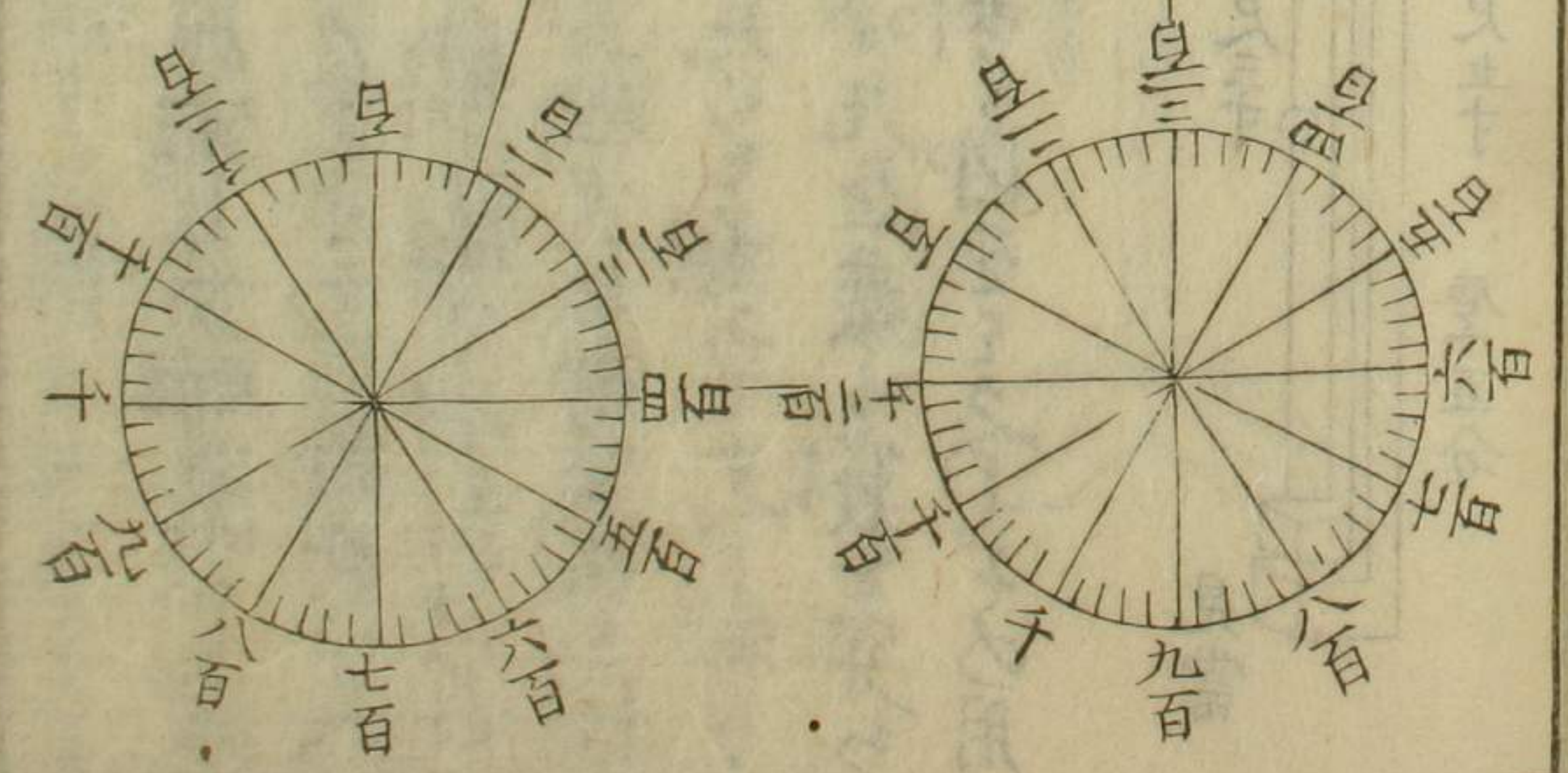
見返二百五十八番

見込一番



量地昔商後篇卷一

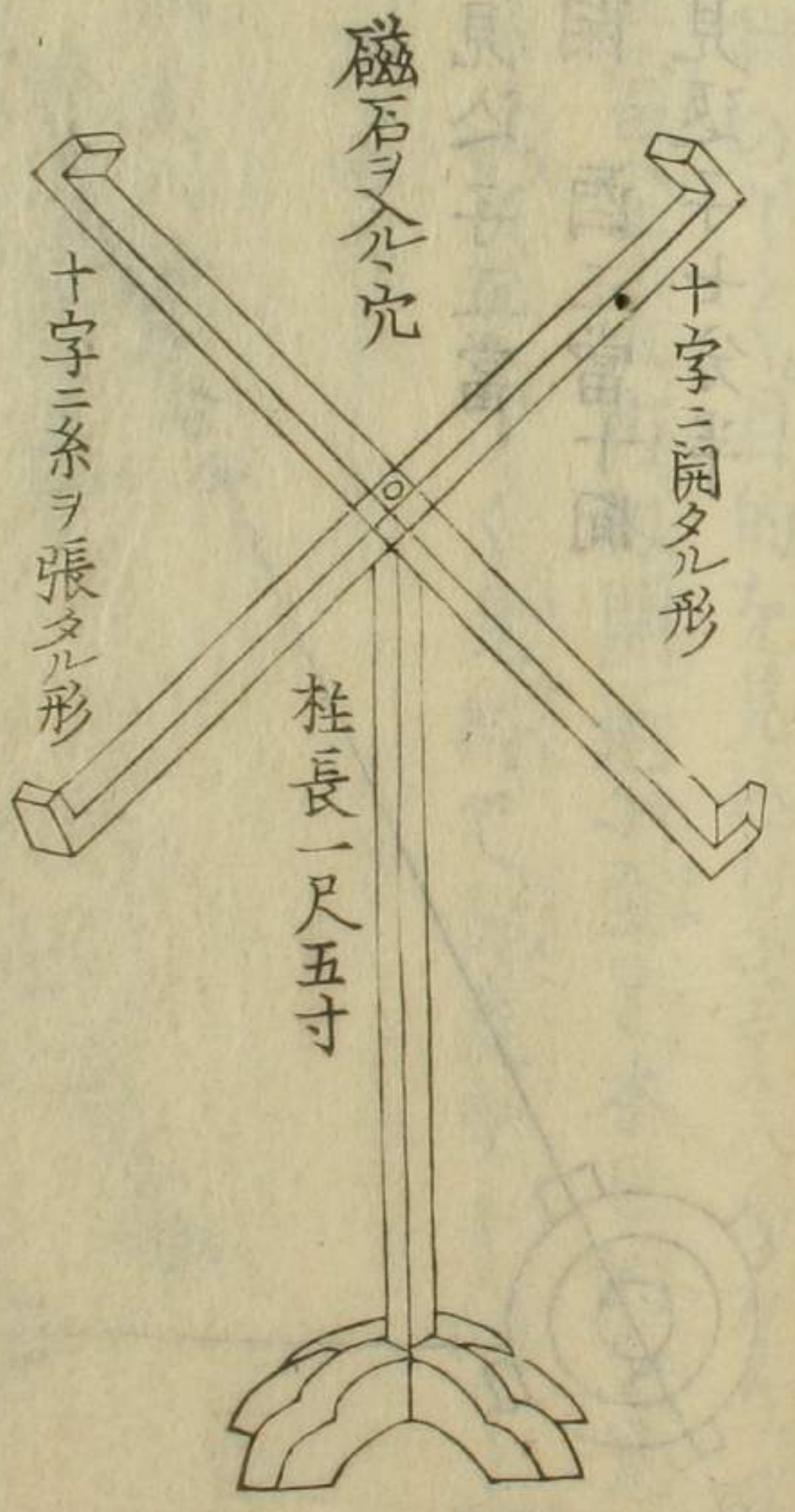
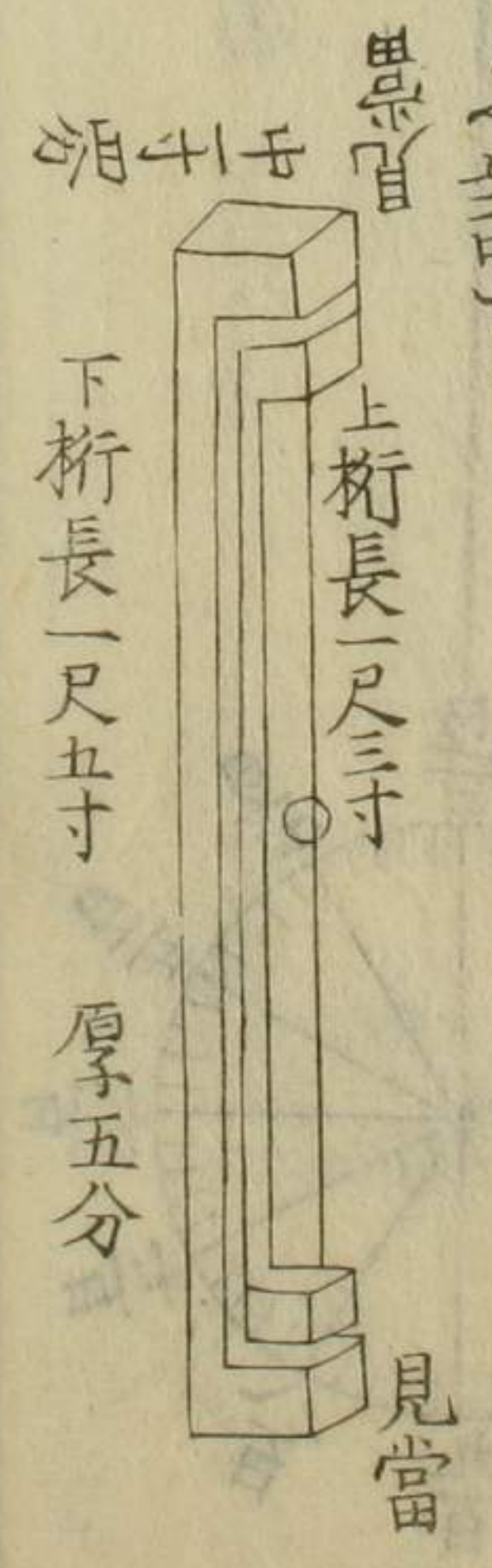
其用半徑二同シ故ニ贅セス



規矩元器之用品

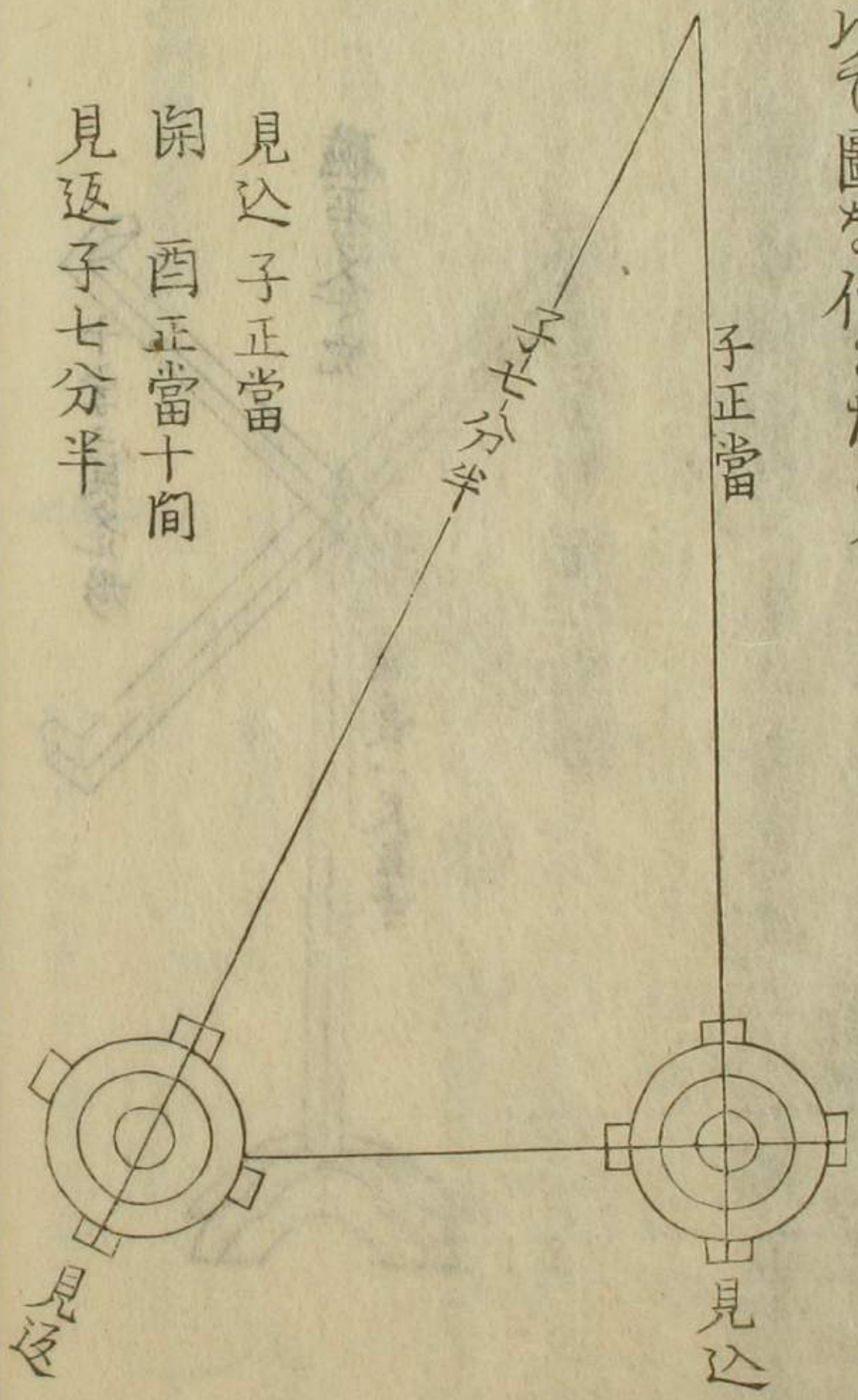
規矩元器ハ新古の二制あり。新制尤宜し。古制用べし。其新制ハ木ハ檜と吉と。下の桁長一尺五寸。上の桁長一尺三寸。上下開圖をなす。制す。桁の幅ハ上下とも三寸。三四分づ。厚さ五六分。其人の好み任す。此桁を載る柱。立柱の長さ一尺五寸。太さ方一寸。丸くも角あり。蜘蛛手。臺あり。恰好に従ふ。扱十字の正中。小丸を藏る竅と穿ち。小丸を入れて。糸の折へ十字に張かり。委く図をえり。その用法の詳あるを。即此下ふ記す。

規矩元器互々形



凡此器ハ国圖城圖其外山海の遠程と量り。山林廣大の境を糾す。凡て大業に用る器なり。大丸皿盤。大丸と小丸。皿盤と小丸。同器。其理一般なり。其用。小丸を十字に上ふ施し。十字。開闔して。糸線を糾し。今誠。左。一二の圖を。以て。初學に示す。先下に圖す。ふ。お。く。

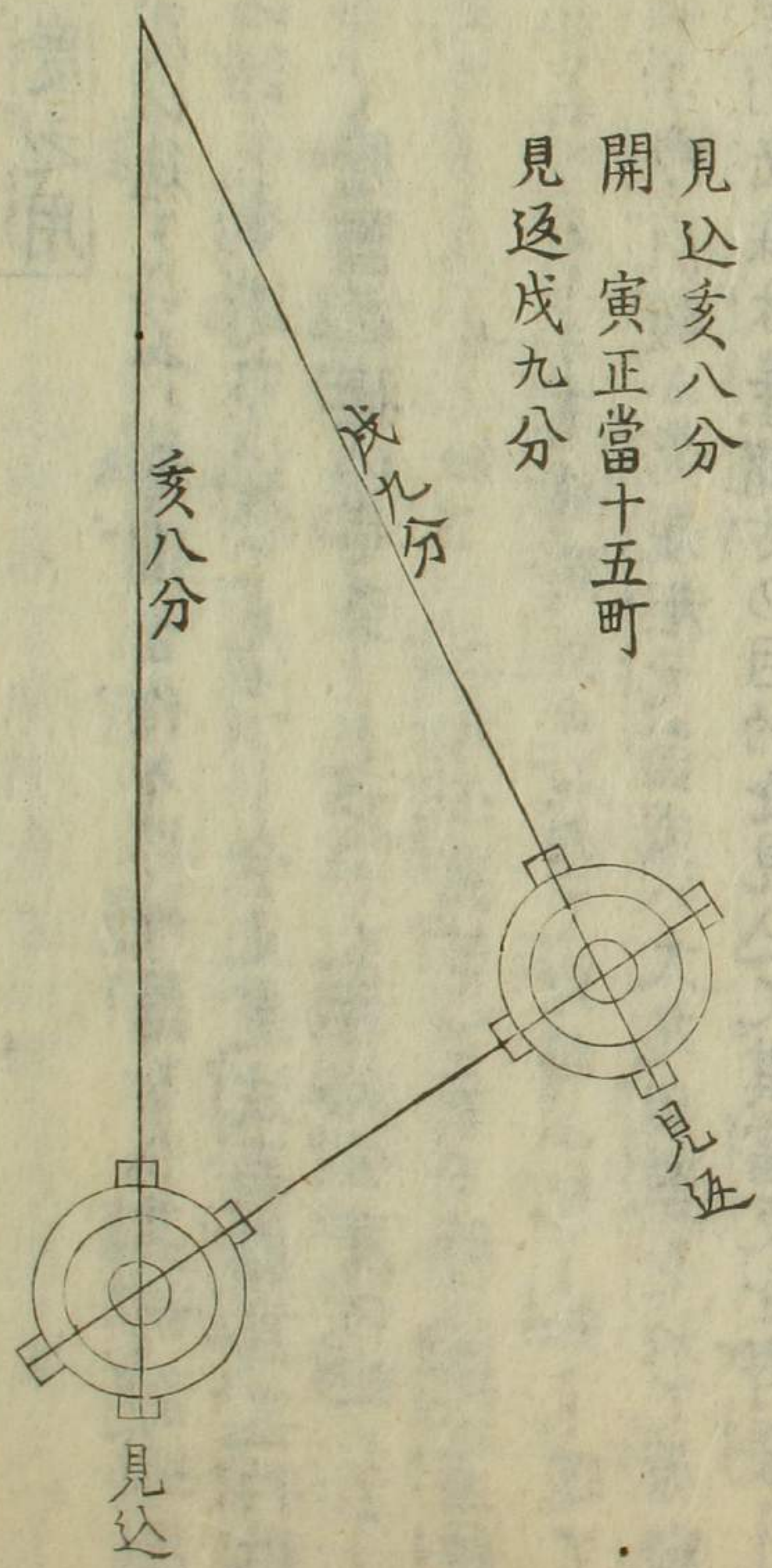
元器の本場小立て望所と見込て目的子の正面なり。よつて
 左の方横直小酉の正當へ開く。十間開場小至り。本目
 的を見返子七分半。かくのごとく見終りて後小圖のごとく分度
 の矩を以て圖を作らる。



見込子正當
 開 酉正當十間
 見返子七分半

又術曰前術のごとく。目的を見込び小。亥八分なり。是より
 開地寅の正當へ十五町。扱開地小至り。本目的を見返すに
 戌の九分なり。かくのごとく見終りて分度を以て繪圖を
 作る。前術のごとく。

見込亥八分
 開 寅正當十五町
 見返戌九分

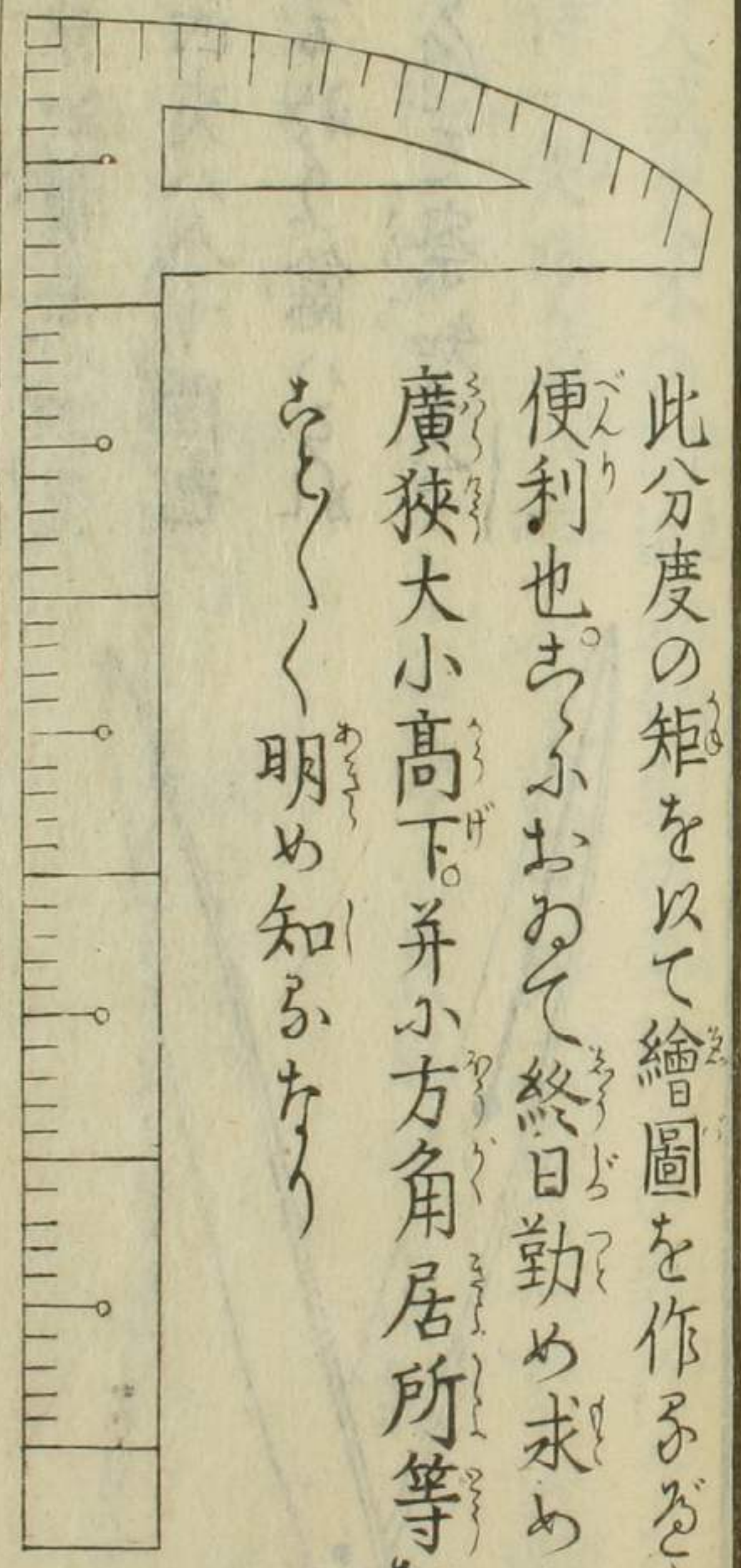


量也昔百段高卷二

分度之用

分度の矩と云ふ。繪圖を作るに神器なり。其制前編器
 械の部小委述たり。往て見るべし。今又虎法器圖寫器折紙
 方など繪圖徑捷の器多しと云ふも。皆此分度の矩より
 工せしもの也と知べし。大凡國圖等と求る時、遠近廣狹
 大小高下も亦其場野外におおて即時ふれし知し。還て
 便利ふあり。故ふ先規矩元器或ハ大丸四盤を以て原野
 村里山岳森林等諸方の目的を見込て。其當支を野帳
 記し置と。又開場幾所なりとも。其場どに當支と間町とも
 同く記し置と。見返の當支をも見込開場のどくく野帳ふ
 記し置と。扱そむると段々先々の場ふつる也。かくのどく
 終日幾度も求め知て而して後小其日止宿の所におおて

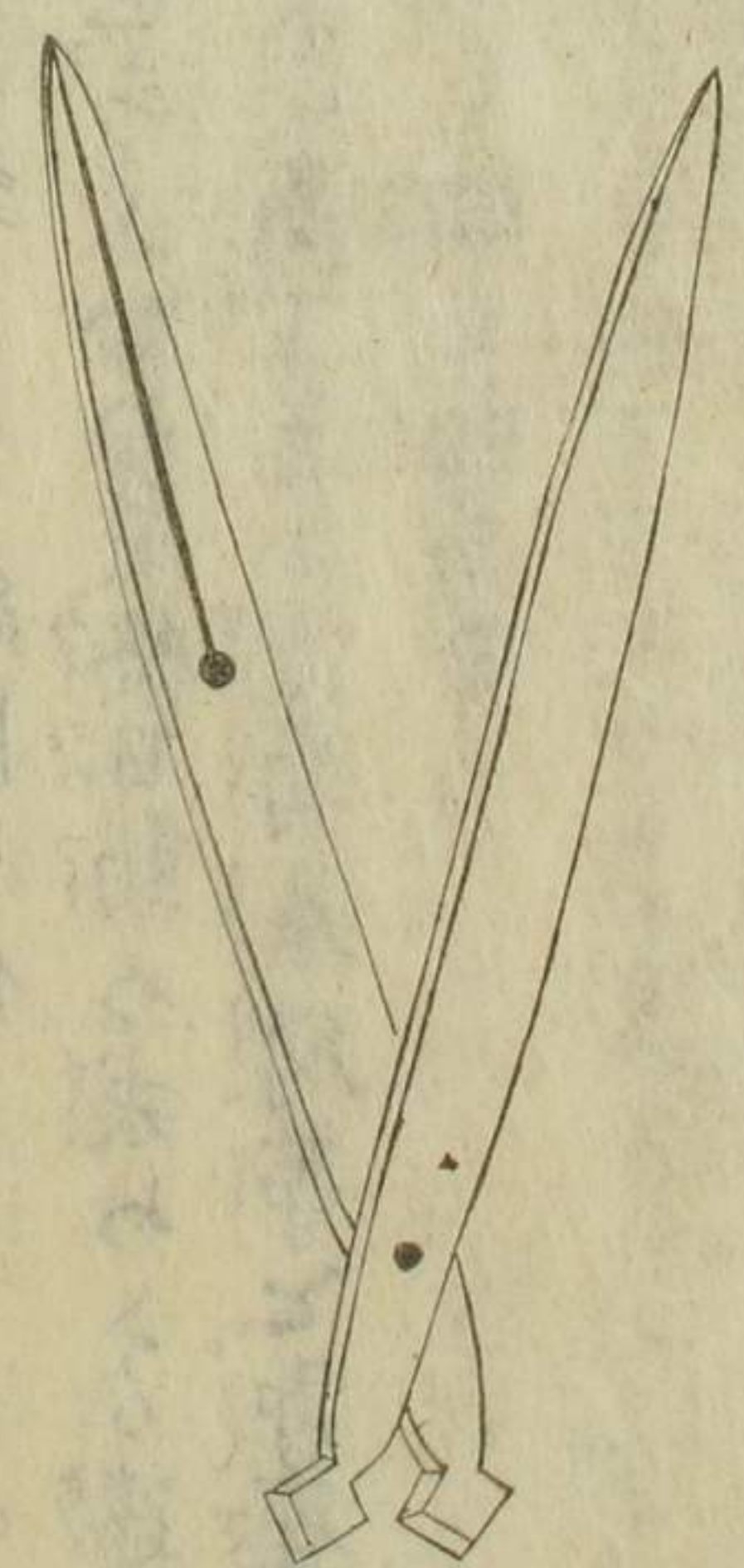
此分度の矩を以て繪圖を作らるゝ。その理
 便利也。あふおわて終日勤め求めたる遠近
 廣狹大小高下。并小方角居所等と即座ふ
 らしく明め知らたり



渾発之用并類尺誠定木之用

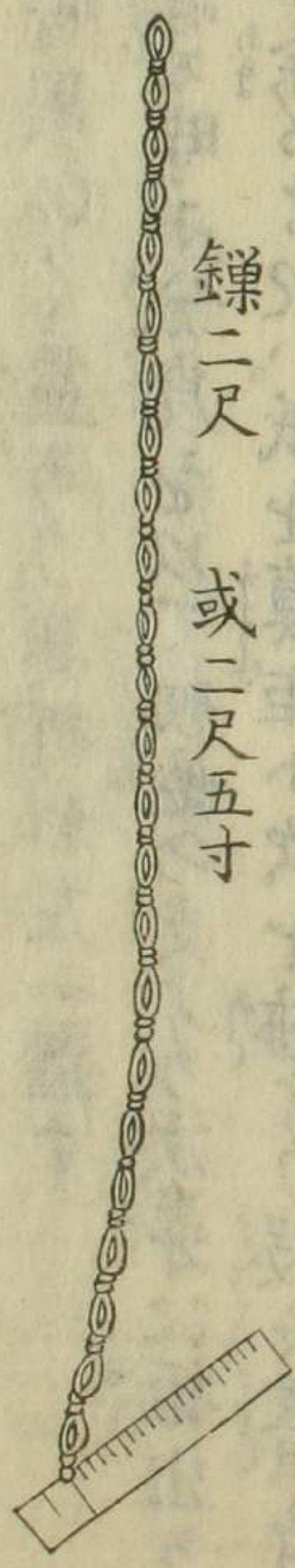
渾発の用と云ふ。此より彼遠程と求めんと欲する時。假令む。向
 方ある。一間の種と夾し見るふ。方尺二尺の先なる。渾発の開口
 二分のむ。向まを此遠程百間なり。又五尺二寸を種として夾し
 見るふ。方尺二尺の先なる。渾発の開口二分あり。向ふまの遠程
 八十間あり。遠近高下廣狹淺深同理なり。宜く考ふべし

又向面小種となすべし。間尺の知るる物なれば時ハ先何やとも
 目的を定め是を渾発の口やと夾と前へなりとも。後へなり共。或ハ
 進と。或ハ退と。其開場や。又以前の種と夾とて。其差口を以て
 方尺を量て遠程を知るか。假令ハ初小夾とたる開口二寸は
 後小進で夾とる開口二寸五分は。其差口五分を以て。進たる
 間数二十間あはば。五分の口を二十間と定め。此口を以て初
 の口二寸と量とハ。四夾
 かり。四夾ハ八十間也
 と知るぬり。餘ハこれ
 としめて察知す。

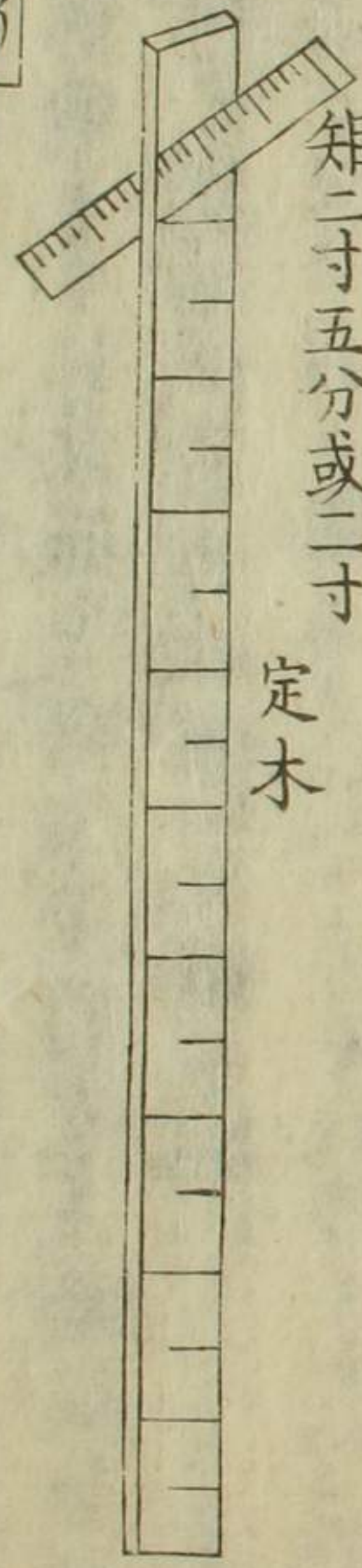


頼尺試定木の制近來好事の者種々の新作をなすといふ
 一得一失有り。拘泥すべし。今其二品の一を以て圖して勘
 考小備ふ。余ハ準じく知る。其用往々小記す故ふみに
 贅セズ

鎌二尺 或二尺五寸



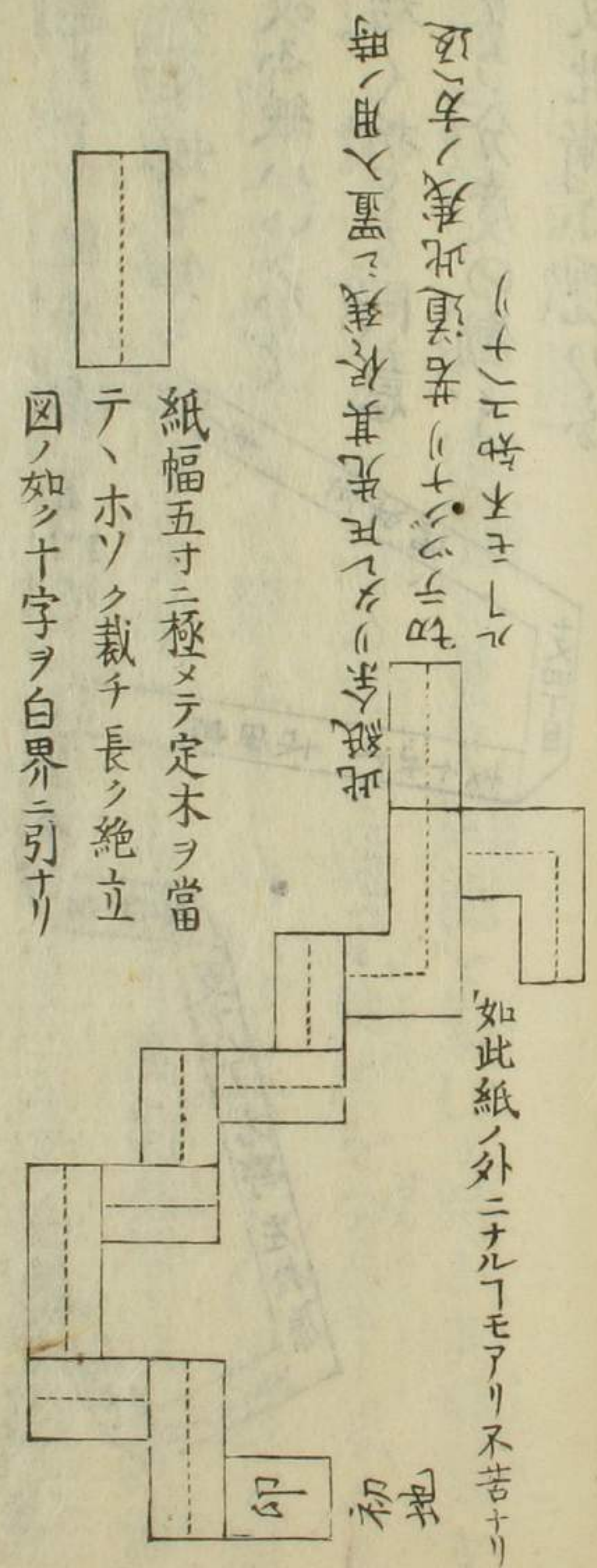
矩二寸五分或二寸 定木



折紙之用

折紙といふ。紙を長く繼立て歩行なから。立覽器を以て方位
 と定め。是を折て。其道程の曲直遠近を知術なり。其用法ハ

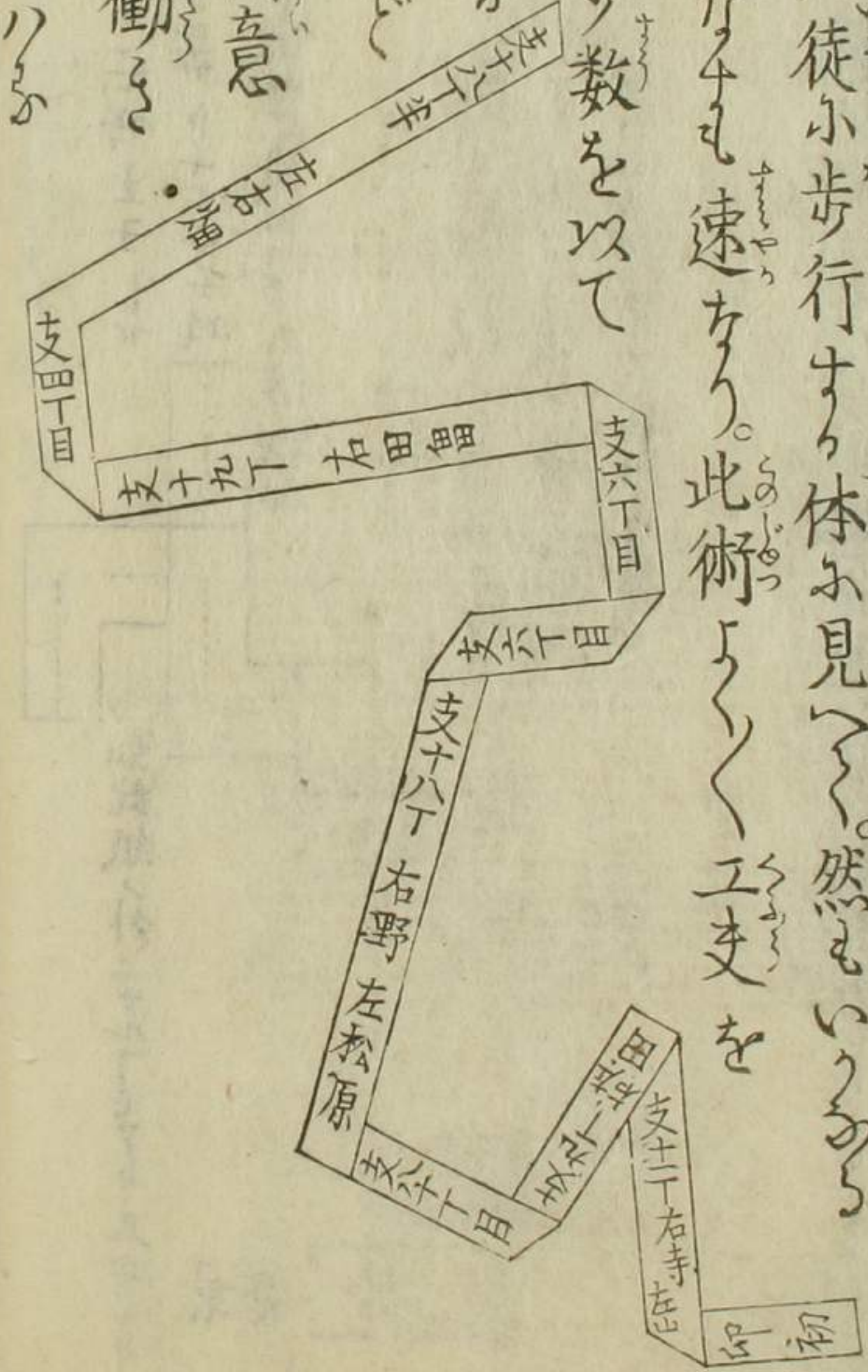
先程村西内等の厚紙を裁て豎の正中に白界と引く。我が
 向ひたる初小磁石を以て方位を定め。夫より行歩不隨ひて
 或ハ左右へ廻轉し。或ハ斜正に進行する。道路の曲直
 應ト其形のどくに此紙を折て歩行なぐ。路敷を以て其
 町間と識し。道路の屈曲地理の大概を知ることなる。是他の
 見聞を忍とれたの用。小備やことども。それのよら遠境
 国圖の時。用ひく益あり。其折形左の圖す
 扱圖を認る時。小分度を以て。初地の支より次第に振出る曲
 して紙小余るとれたハ。紙を真矩小次を跡より段々置たり
 四方にたまるや。小次てたり。然して圖出來する時。其大さ
 に紙を繼此折紙を其上小重て斜をこま。小針を立。其
 上より篋やく道筋を引たり。



異傳云此術ハ忍の時小用の出盤元器等の器物なくして野町
 の圖を得る術たり。其法程村紙西之内紙等の厚を裁幅一寸
 程小裁て三四尺小繼立懐中して。假令バ何方よりなりとも。圖
 と仕立んと思ふ場より。曲目毎小其行路の形。小准して折ア
 かのどく。圖す。地を画して。後小右の折紙を草圖の紙上小

載折目毎の真中と地心と定めて針を以て突て形を寫す
る。方角ハ初の地卯へ向う寅へ向う其格ハ應じて考へ
間町ハ足数少て記すべし。二人云合せて一人ハ立覽器と携へ
忍磁石ともいふ方位を定め一人ハ折紙を勤ながら歩数を記さ
一物別名なり。外面よりハ徒歩行する体見へ。然もいふ
大場の圖をなすも速なり。此術よりく工支を

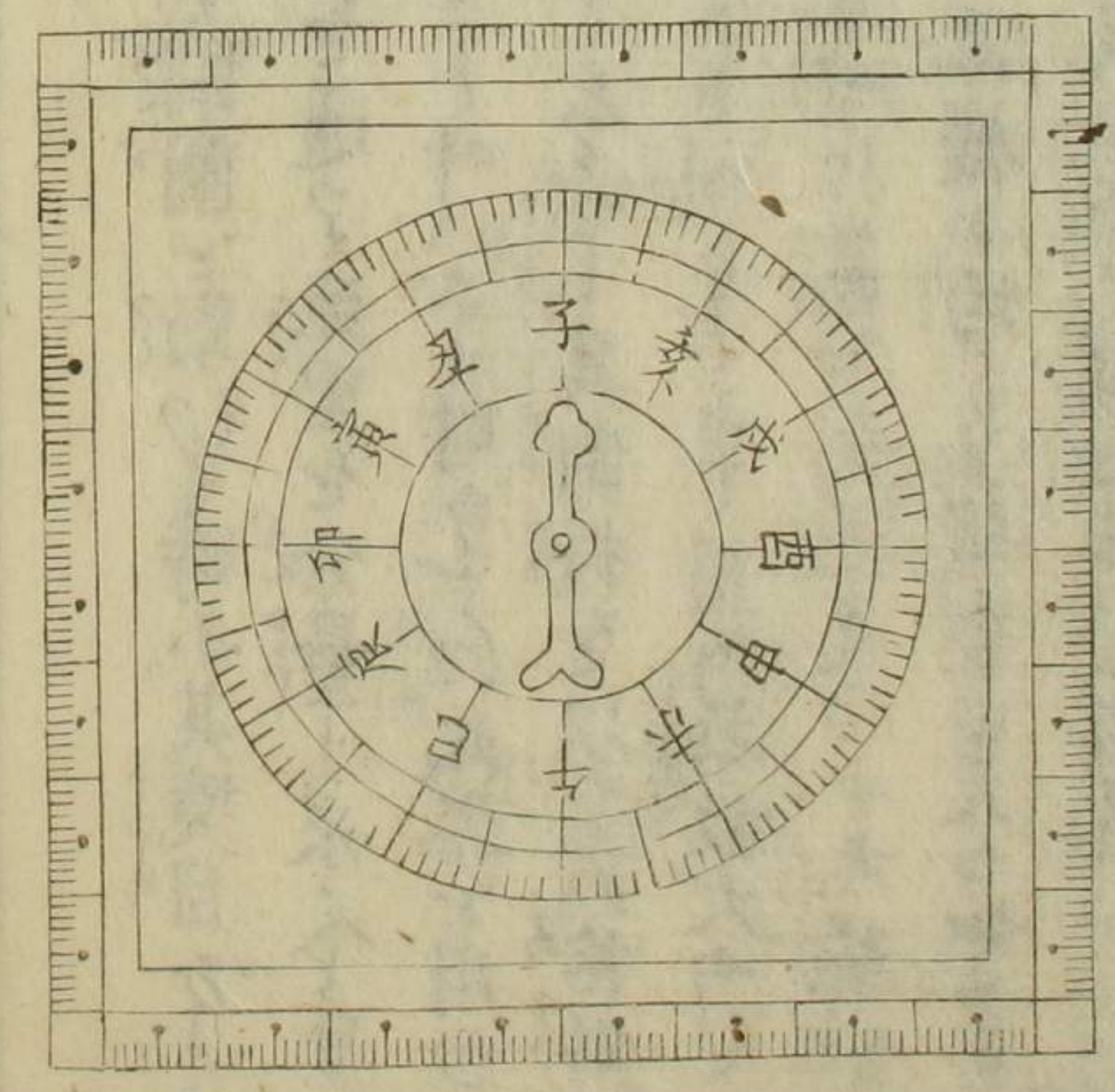
運す。但歩数を以て
其長短を知る
故紙ハいふ
短く折とも同意
なり。分度の働
又此術ハ現ハ



隨川器之用

隨川器といふハ遠境と量る。國圖と勤し時ハ其境目な
して大河ありて其河の岸を通る地里を分量し求んとす
まば山岳俊険あり攀上るこ叶はざる時ハ此器と用の
船路を量ると同意なりとあるべし。其制板を以てハ恰好
大畧方一尺厚一寸許烈々川を以て用る器故大なり
重き吉といふ。図のどく正中に筋と引逆支の小丸磁針
と彫入を両方に樋を穿ち此樋小均しく線香を入る如くす
是ハ両香を見合せり。恙なくんし弦知るためなり
其此器を用る法ハ先陸ありて平町を勤りてなり。又
又ハ間町を量つてなりとも近辺の木ありて岩ありて目
と物を船路の術ハ湊の種のどく根発の口ハ合せ置板

船小なりとも筏小なりとも乗て。右の隨川器と船筏の真中へ居へ。扱乗出して目的へ種の渾発の口の合時幾干間過ると知て水上幾町小線香幾分炷と香の炷程を定む。扱方角と直見して何の幾分へ幾町何の幾分へ幾町と野帳と認むらう。若渾発の種と扱がた時、捨糸の法と用むらう。船路の度数と元來同時みして方角と付け。間町を其方角乃違毎に記すまでの異別あり。總じて河ハ屈曲多きもの

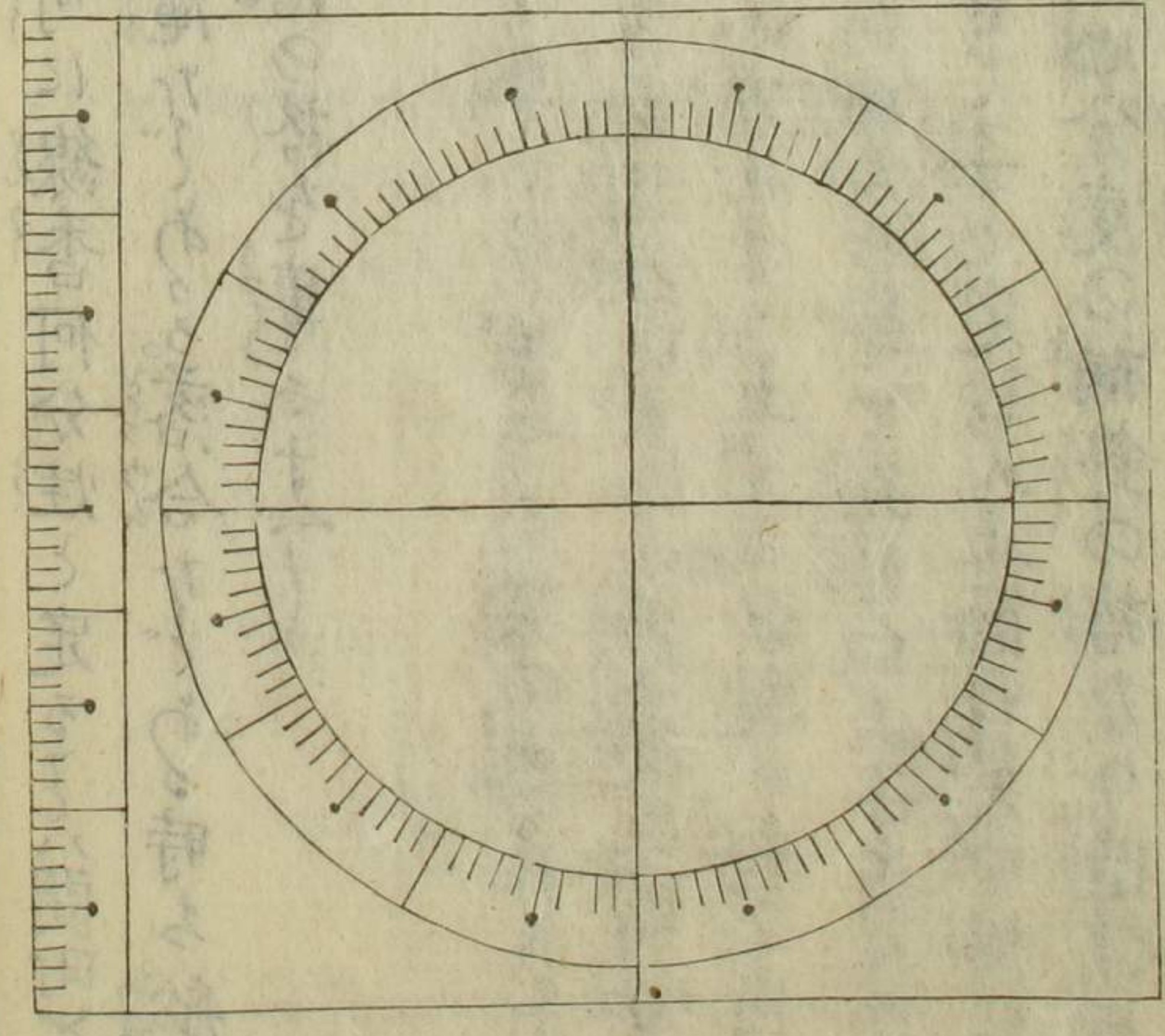


かりゆなると。初水上幾町に線香何分炷と定ると間町と短くして量ること可なり。滝などあつる落合などある時ち船足速うなり。其とたハ用捨の格を專ふすべし。

虎法器之用

虎法器といふハ分度の理を移したる器ありて業の速うなること分度小益す。其制作も云方面山徑の大小ハ好む従ひ隨分板を選ひ厚さ四分程小方五寸。五寸五分程小削り。内の山周と鎬落小削り。常の曲尺の罫と盛付向ふ子と定め遣ふ故小圖のくく星を付て子と定む。又正面の真中横に針を糸を引糸の辻地心分度の柄針の格なり。造様ハ圖をかりし時紙を虎法器の方面小合せて何十枚も切紙毎に十字と折糸毎小星を付て向ふ子らう。野帳と以て

假令卯の五分へ十町とあり右の帛一枚を取って虎法器の下に置に向ふ子と合せ。子丑寅卯と順支小繰り卯の五分小針を立。虎法器と取直して曲尺の方で十町を量つて知ること。分度の。又次の分付へ至る時右の帛尽るとは外外の紙を方角と町と合やうに尤向子と外さるや小繰合せて又前のごとく順支小繰て分と合せ取直して町と引分度より

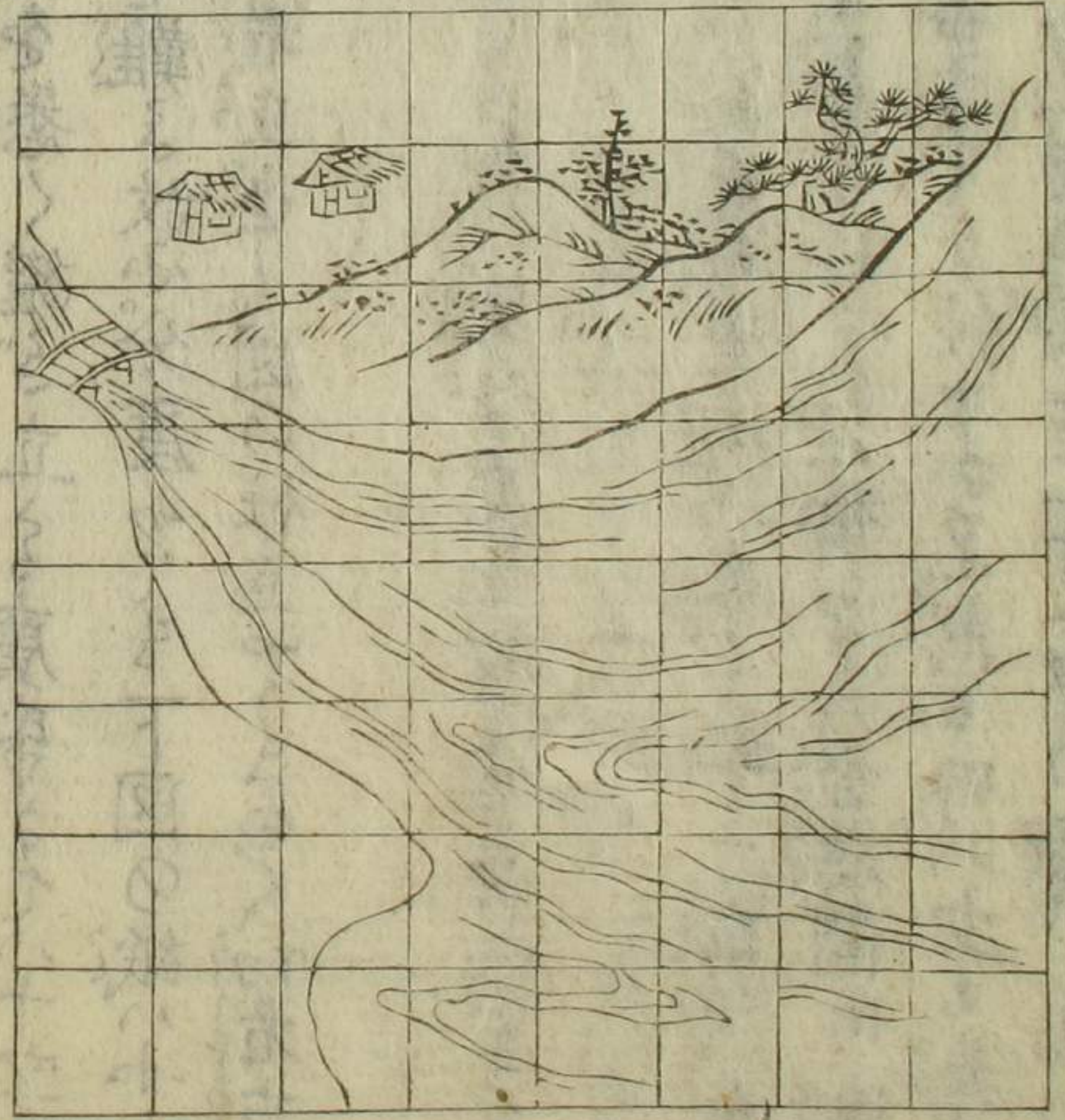


も事速う也。紙を小さく切る。ハ十字細して地心糸合せ。丸丸為かり。其上下圖を悉く纏立たる廣帛をハ十字も差しわり。方角甚合せ難。故小分度あても下図の紙ハ小可也。紙の盡る度々小繰立る。図の仕立やうなる。切者右

圖寫器之用

圖寫器といふハ左小圖するが如し。先分度を以て分付の。町里と白引して次小墨と入る也。其用といふハ野帳ふらある。圖風景を以て形を圖し。道筋村里山川委く記し。草圖成就する時小是を清圖小寫さしむ。小目積めてハ分厘間町違し。此故小圖寫器さうは。然る時ハ少も差あり。其上半假令五寸一里の図を二寸一里の積りあり。紙をちびり等速うなり。

二分三十分四方を削
 ころ木と四角を削一間を
 一寸づつ五分づつとも定め
 て糸をまわり草図の上置
 扱清図紙の上も同すの方
 と置く上よりいくつもの何
 処小山峯又川左より幾
 目小家橋など右の術の目
 とりて見あつせ又清図と
 揃へ其格小段々うつし術を
 除きて形色をまらゆへ
 大を小まらゆへ小を大
 のまらゆへと桁目をまらゆへ
 考ふなり



間竿之用

其制極木を方二寸許り又八二寸五分三

寸小制るもわり尤角削る長九尺小定む但
 三尺づの所小胴金を入此制前編小委

打様ハ圖のどく半間の所を組合せて通を定め
 ねと竿と打を但一本を用る也或ハ数町と打行と
 づも曲ることなく一文字と得たるも然る時ハ平町の
 地幅を求るが如し亦五間とも目立らる坂かくと打
 時ハ先高を求りて是と鉤小用い扱堅小打て是を
 絃小用いて別傳を以て股と求むべきなり即地幅を
 求め知るなり
 又或傳小登竿箱竿といふことわり登竿ハ地形不直成
 所して用の高所へ步行堅竿の継なりなり



平地ハ繼竿也。棹ハ一間カバ七尺。二間カバ一丈三尺。品より棹用ること。規矩の法なり。差をれを本とする也。繼竿ハ一本として少く

べし。箱竿ハ品より。三本も持てるべし。方に削るも木棹より。寸尺を盛付るべし。石壇なども打て。登竿箱竿と堅て。知まハ三四五とも量るべし。

或人云此登竿箱竿ハ竿の制ハあはれ。おやりのことなり。上ハ所謂と混ぶるべし。又或傳小箱竿といふハ三尺づの所まで

二本繼合するべし。制ハるべし。なり。輪竿といふ物なり。是器ハ九折なる山坂道ハ竿

あてし繩少くも邪斜ありて。間丈齟齬出來る者也。この輪

棹を用るとはハ少くも間尺違ふなり。其制幅三寸輪六尺也。曲物。竹輪少くも作る。譬ハ其形木綿糸線繰出す車の如

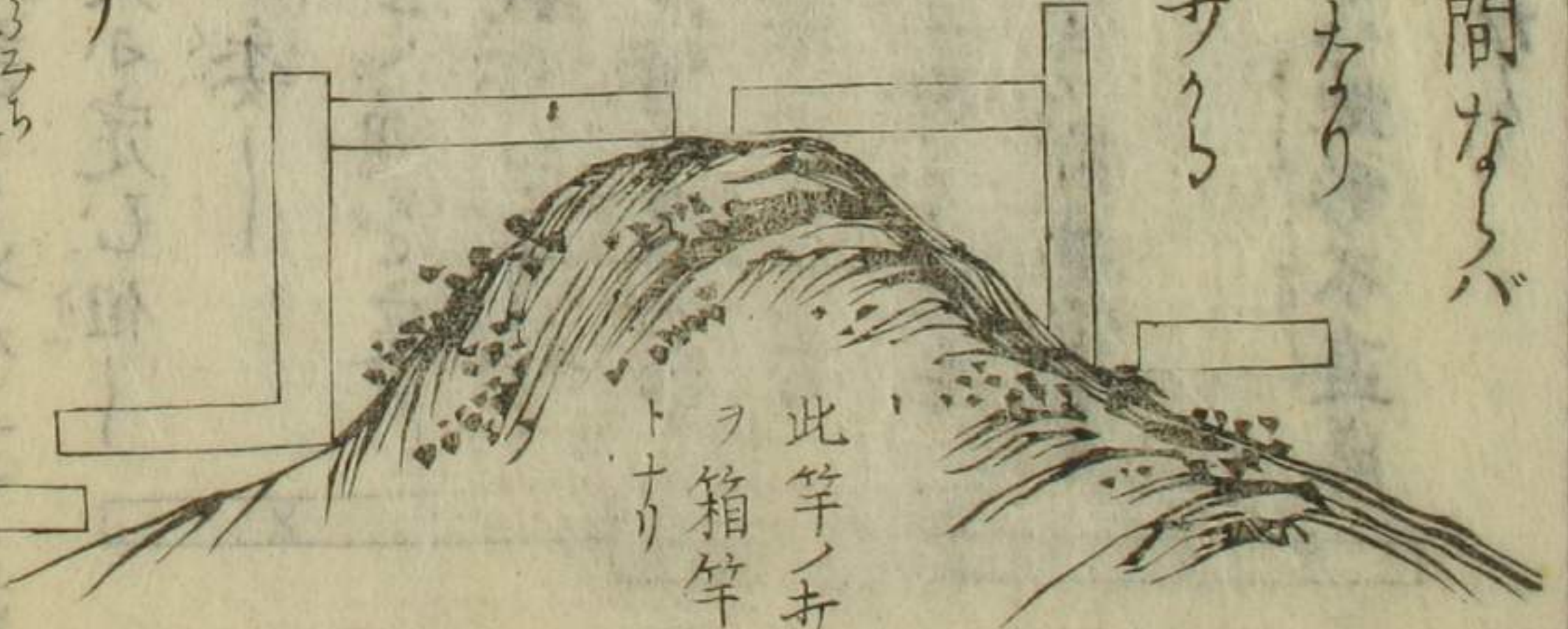
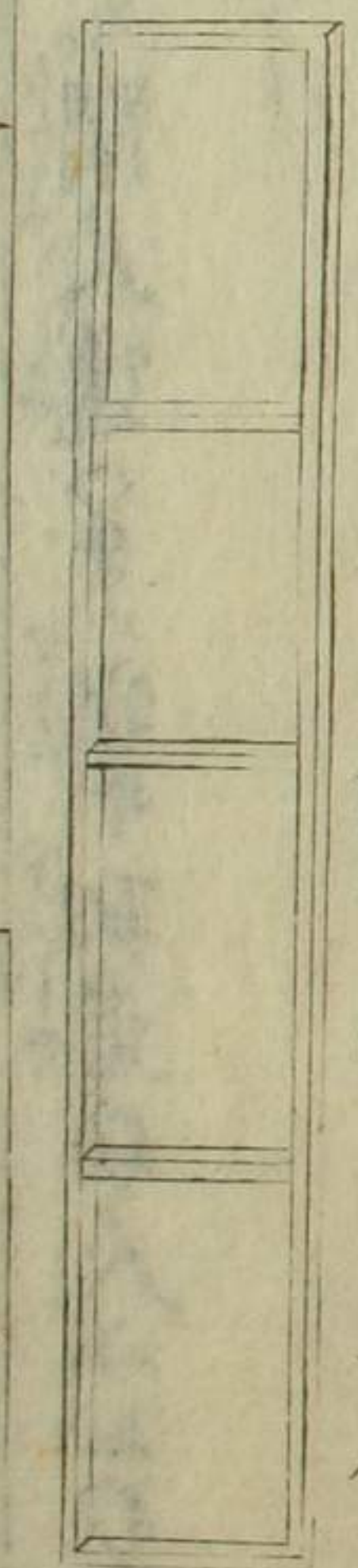
かり。扱榎の木を心木小施し。左右より二人あて轉ずるなり。一周一間と定む。尤

輪小印をかりて。其所もて周とれら。一間と知る。山坂道の用なり。薬研乃

鐸のびく齒を薄くするハ悪し。箱竿といふものなり。此器ハ長一間横一尺。高三寸檜乃小

割をとつて作る。此竿と二つも三つも設て小口を突合を

間を打ちる。此箱竿



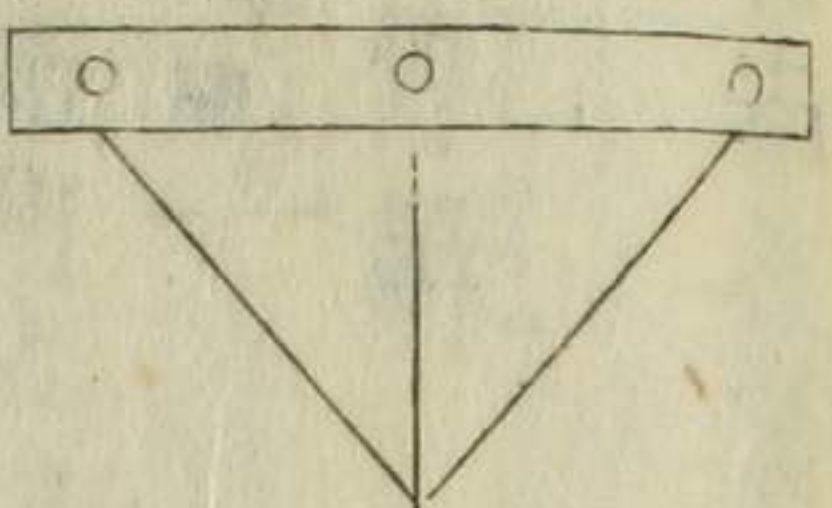
此竿ハキヤクヲ箱竿ト云トナリ

假令不切者とのりも。間尺違ひず。況や切者の人ふおのそ
とや所おとり用ゆべし

間繩之用

間繩ハ極上金引の真葶と用也。其例組様前編器械の部ハ
述べ随分堅く捻て。澁う蠟う塗て。湿氣の徹るごとく制
すべし。繩の張るハ撓るごとくすべし。撓めば間尺違ひ
必せり。左一階毎に白紙を以て浅結付て。印と眈合す。下
大方ハ一町せめて。其より以上ハ又總て前の通り
張るべし

又錐繩といふものあり。左ハ圖を以て。形を平錐の
一間の竿の両端と正中ハ間繩を三筋付て。此三筋の六
尺下あり。一緒ハ結び合せ。両端の二筋とは。餘りごとく捨て捨



正中の一節と長くして。間繩ハ用也。是を以て正中の真
物ハ押當て繩を引とれば。少しも斜なく。直にたる也。尤兩
端の繩何とみても。亦も撓るもの直くたること勿論也

量地指南後編卷之二終

量地指南後篇卷之二

勢南 處士 村井昌弘編述

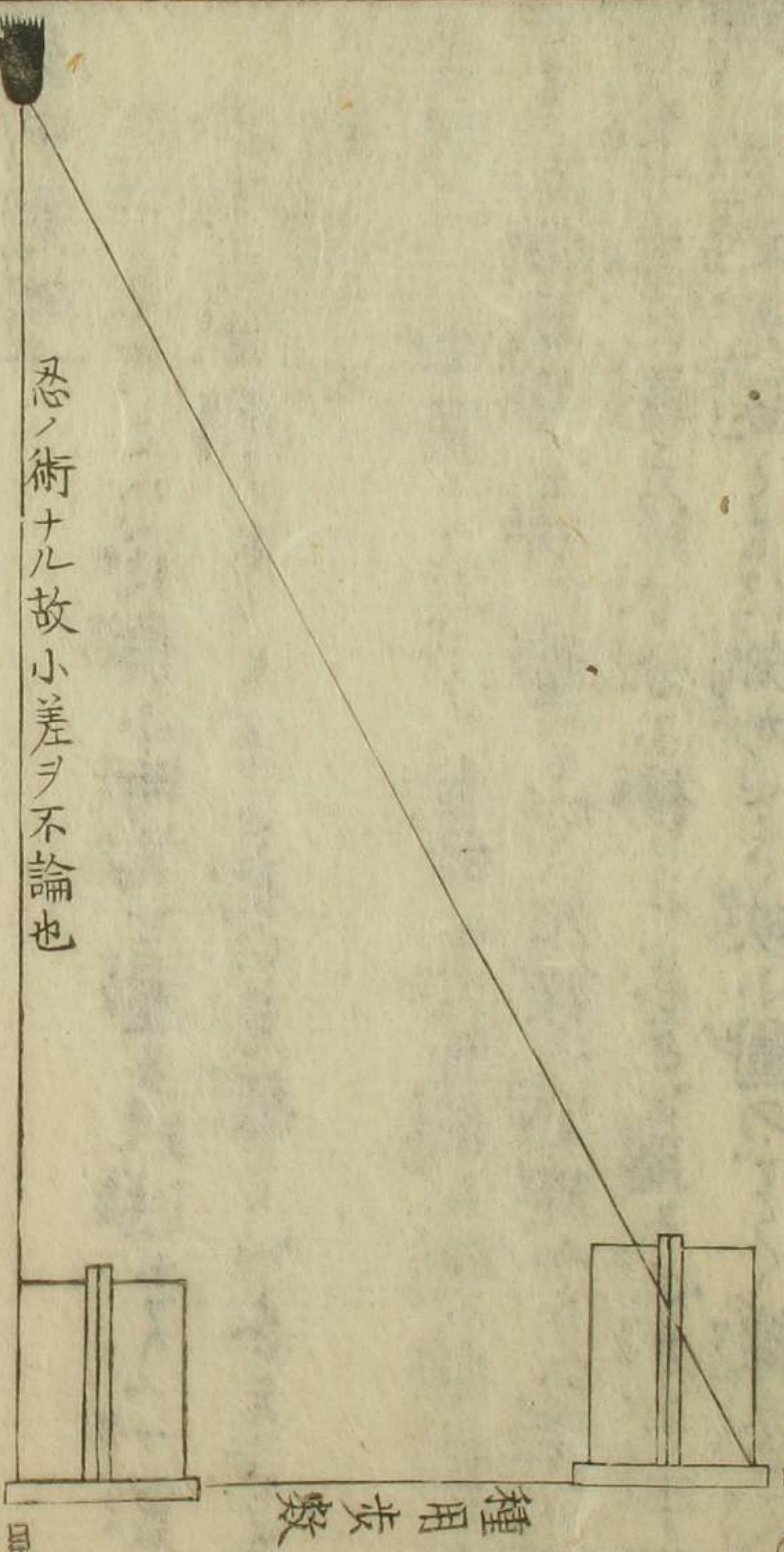
極傳解

夜中見町

夜中見町とは。夜陰小町見と量る此法なり。一書に
夜陰の目的とあるも。まことに夜の見様とらふと。そも不
同術なり。

古傳よ云闇夜といふも。目的小火を用る時ハ白昼不異
なるに。但渾発を以て量るが故小定規やりの器小割
を付て常に遠く線寸分小摸してあまを用る也。且手本闇
時ハ見込見返とも。知かこま故小圖のごとく。線香又を
火繩等めてを短く切て火を付け。是を目的小とらひて

見込をい。さういふといふは昼小同くと云云



恐ノ術ナル故小差ヲ不論也

又云右小火を用る時は見盤もて求め知る術あり然る時は
ハ渾丸を以て計るても自由なり或ハ十間開て一の割

船路之積

古傳曰海上を涉て曲節直径の船路を量知の術
たり是ハ船路の要といふも同術なり

術曰先陸地ふ於て湊口の両端の廣幅を求め是を海上
の種と爲。板船中より度数を仕掛置磁針を以て方位を
極め然して出船す。度数とハ線香土圭詠歌傳聲捨糸
等。何れでも里数を試むれば品物をつまなり。勿論洋中
變風あることハ捨糸なり。何れも其船の走の様を懇
改むる。昼夜右の如く怠屈すべからず。曲徑路一次の方
位の町里を亂すと。嚴重なるべし。然る遠路の船路曲道

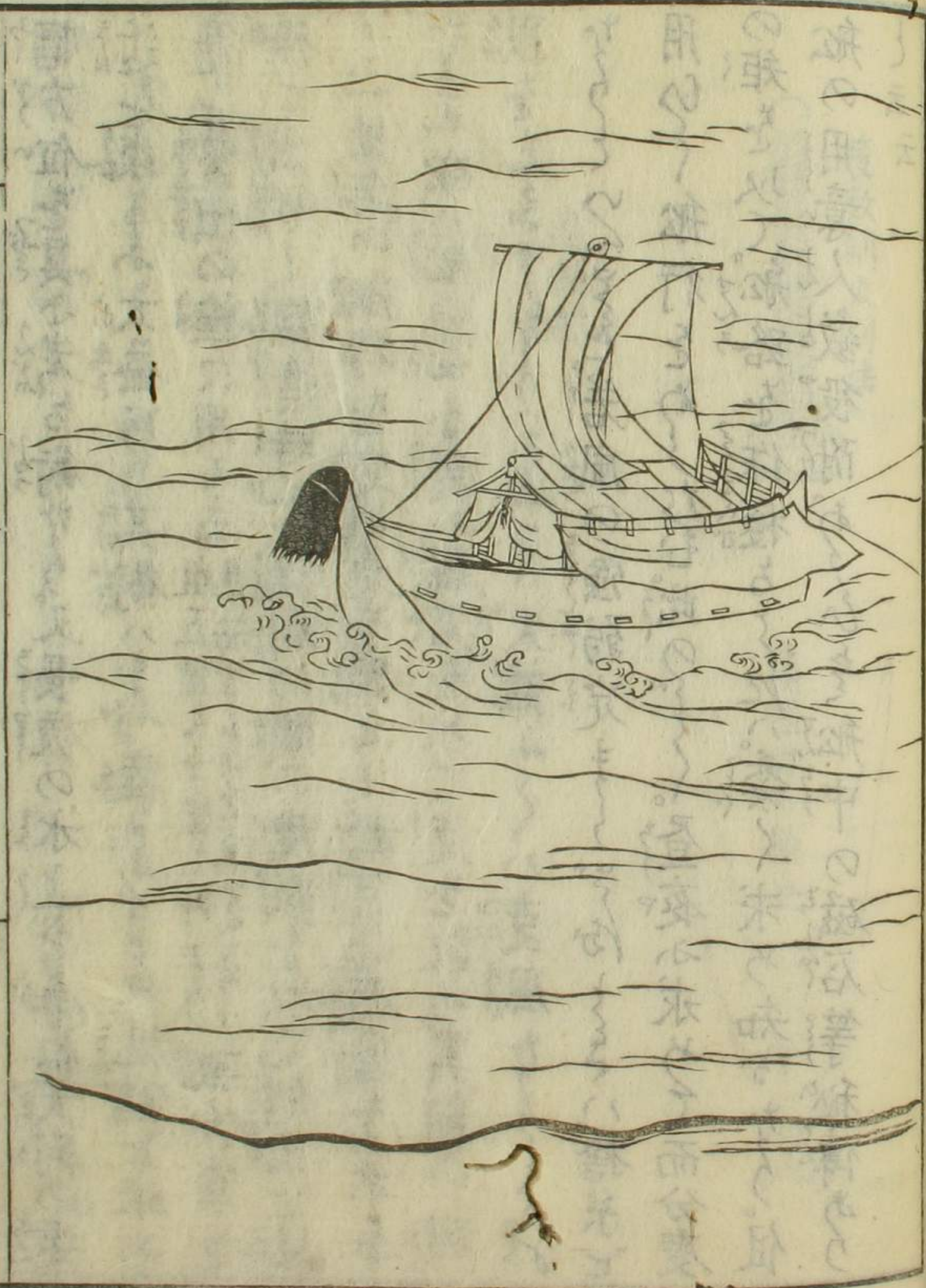
直路掌杖指がどくくなくんと云云

或傳曰湊より船出ざる以前近邊の山へ上り。湊までれ町見を勤め。何十町と知り。其種の口を違ひて。扱長と二三尺許の竹を渾発のどくく拵へ湊の口は合せ要と能くして置。湊より船を漕出すとれよ。舳ふ立。右の竹を以て。湊の口とる。竹の開口湊の口合の時。寂前陸まで町見を求る所の道程と均く舟走ると知るべし。是を湊の種といふ。度数の制。度数といふ何れをもと以て。船の走り候知るべし。圖のどくく。竹筒を拵へ寸分を盛付け。内小線香と立置。右に湊の種をとりて量つる。何十町分燃とて。是とえりて。一分小何町走ると。一寸小何里走ると定置。線香の寸分を以て。海上の道程を知る。是を刻といふ。又湊まで町見

量つるか。湊の種を取がたると。捨糸の法を用ひ。其法繩何十町なりとも。兼て積り認め置。是を船の舳に拵け。陸の岸小杖を立。船を出さるる前に。右の繩と杖と結。付置出船して繩の尽る時。度数の制の線香を見て。線香何分小何十町走るといふ。候定る。是を捨糸といふ。又洋中に。順風逆風をど変あること。捨糸も線香も始の試とは違ふ。能く心得るべし。

又或傳云。量船路有益之地。名曰湊。岩石押滄波而必有干。両端其両端之求幅。而是用出船之種也。得順風而洋中趨。船少無止如陸地也。蓋曲折而求知之。乃船路之術也。云云。是又前条亦同じと語たり。漢文のごとく記するゆゑのこと也。一傳云。船路の積といふ。行舟の常道。屈曲の徑程。凡て地

置也昔有後篇卷三



四

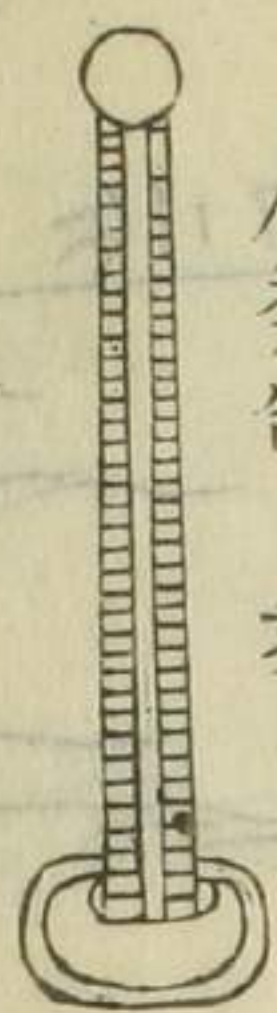
置也昔有後篇卷三



一

幅方位を具ふ考る術なり。又長流の水上を尋ね大河の遠近を求るふ太益有り。其術はまづ陸にありて地幅を求め是を繫出の種に用る也。但五里も十里も沖より扱方角を得て出船し線香時計漏刻の類の度数を以て刻限を定め一里毎の航行を定め是を種し始終の行道を求るなり。或ハ船の曲を則ハ磁石を以て支を改め其間の刻限を定むすなり。若風の大灘やハ変風なり。捨糸となりしと云

度数制火刻法



湊渾発五種也



度数制



天風法或風席片云

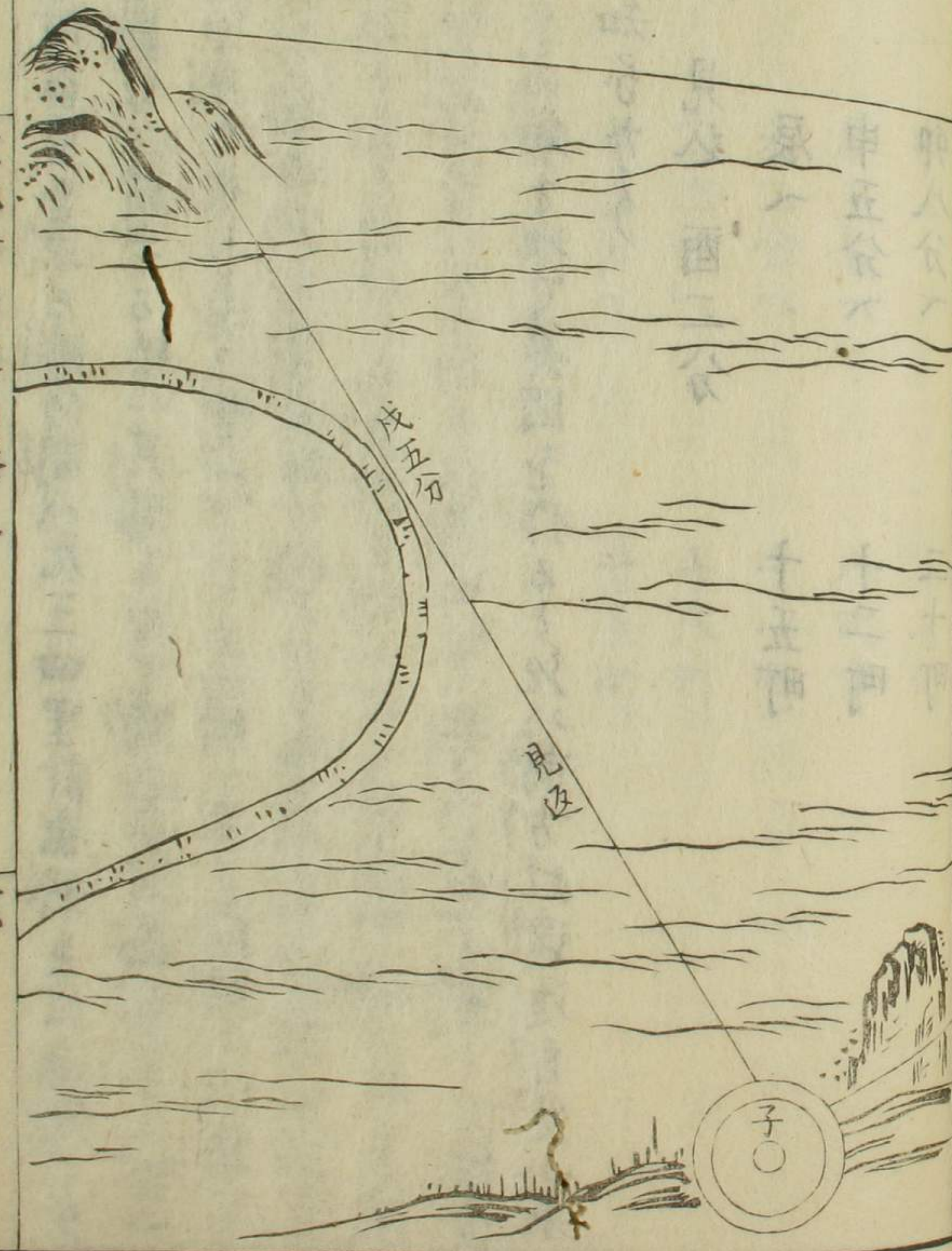
或云此船中度数旧制也依無益今無此器云云予未見之

積遠里

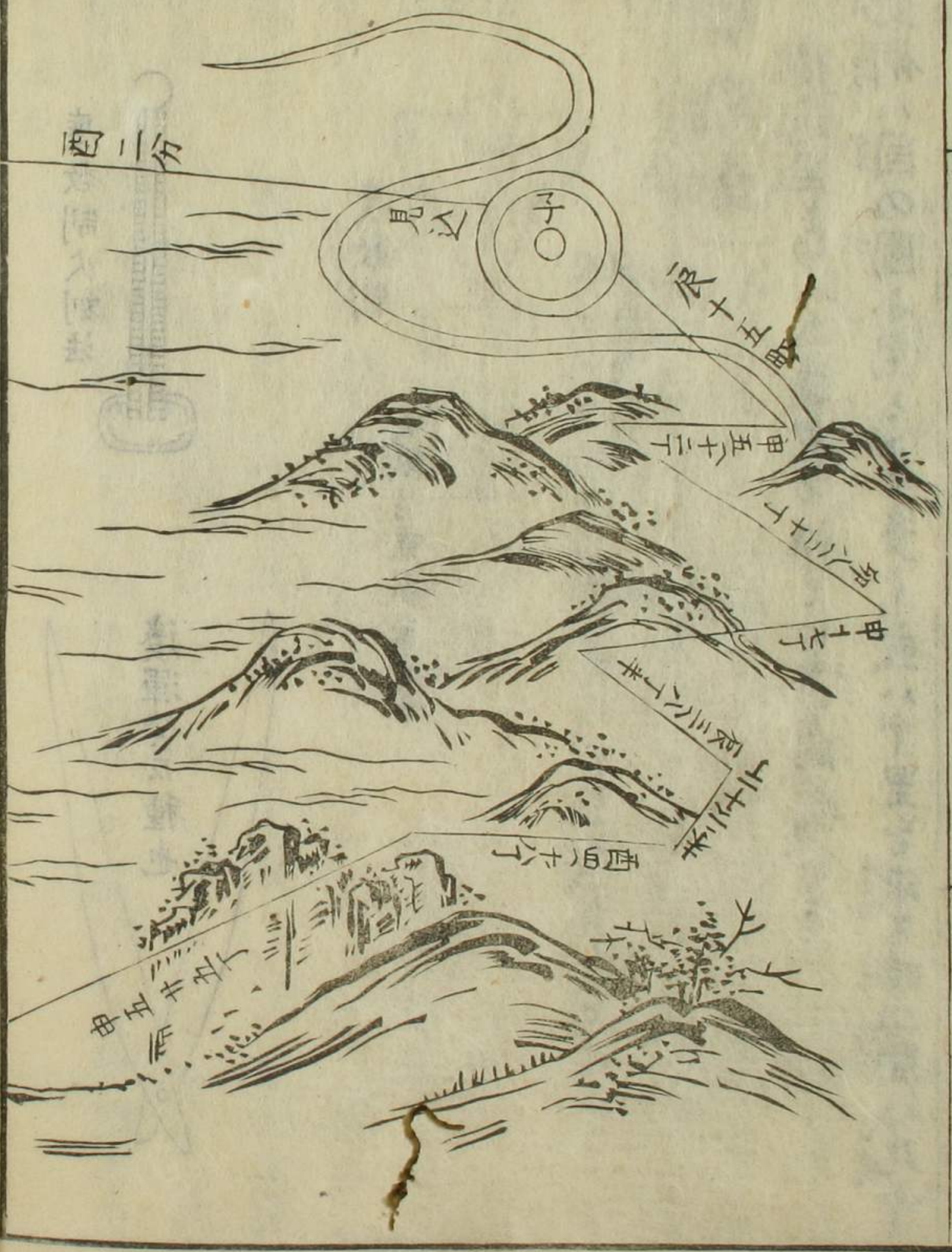
積遠里の法と云も同術なり

此術八国の圖小用る多し或ハ十里を求る時の関ハ九十

量地者南後編卷之二



圖二分



量地者南後編卷之三

余町百里を求る時の間ハ九三四里計也然もは海岸より遠駕なと伐求る時ハ其場は於て開る所の畷地なり故に開を重て求るあり。かくれくする時ハ其間に限る諸方りの遠近方角自未知の術とかり也。まづ見込の支を記し。叔開の支と間町とを幾開も段々にこれを記し。何の所より限らば見當の見ゆる所より見返して其支を記し。然してのら分度の矩を以て其図を作るとれハ諸方ハ遠近自然も求め知るかり。

見込 酉二分

辰へ 十五町

申五分へ 十二町

卯八分へ 二十町

申へ 十七町

辰三分へ 八町半

未二分へ 十一町

酉四分へ 十八町

申五分へ 廿五町

見返 戌五分

遠里矩とのかものり。国図の要法とて遠目的のとれ條會慥なるるこれハ此術を用ひ。目的の見込至て遠さこれハ線會決うづらること。間多と者なり。此術を以て勤る時ハ數百里といふも求よ差なるなり。図のどくく條線の會快るる時ハ針を糸を付て元の墨に隨て西方へ引合せ糸のく合て會はかるまで。何尺も引べし。定規を以て隨て墨

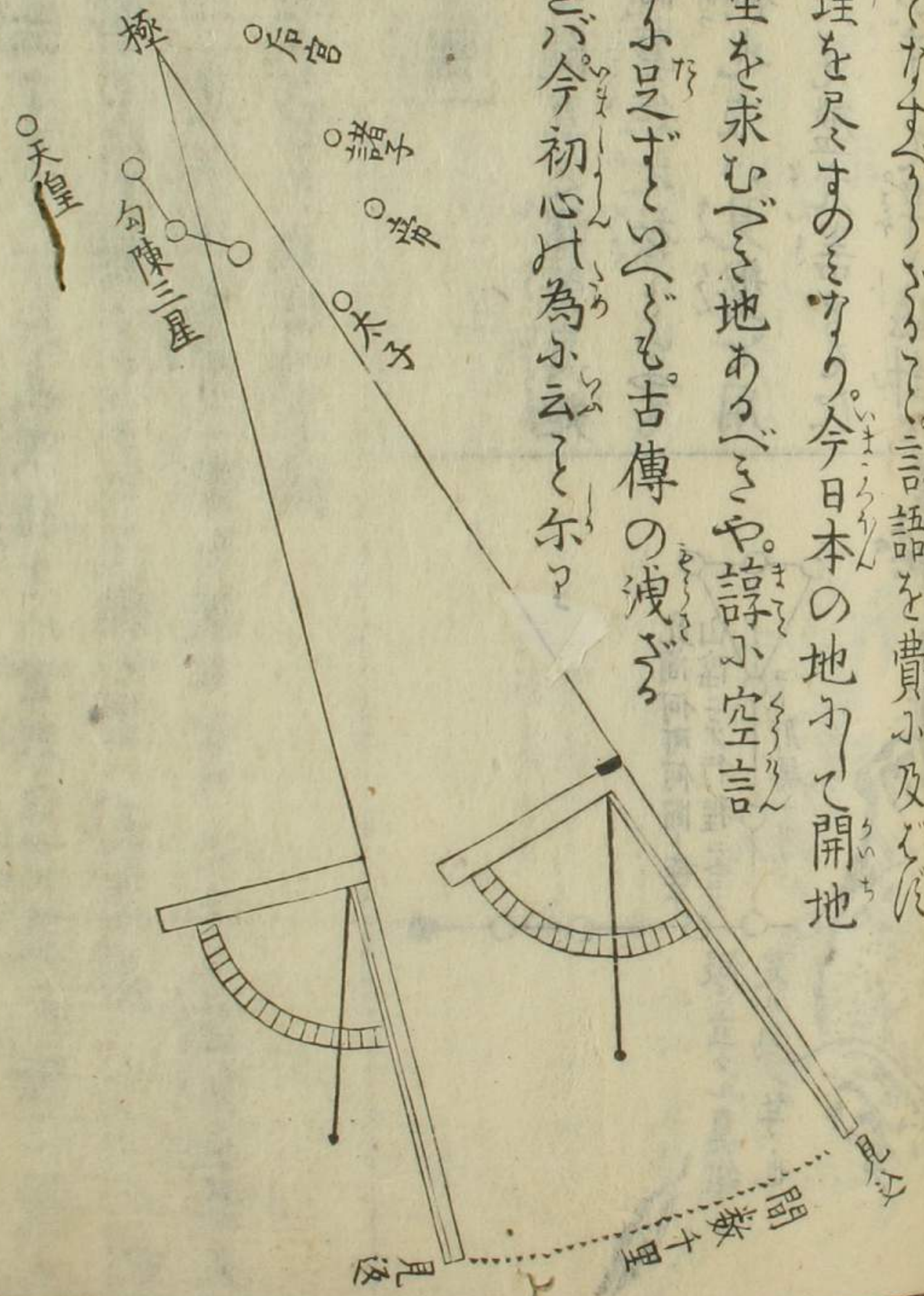
と引てハ。毛髮の差あるなり

試北極

古傳云天の高さを量る術なり。北極の積といふも同術也
 量天尺を以て北辰を見込て下系の當る所を記し。數千里と
 趨。又北辰を見込といハ。必下系の當る所を差出來す。其
 差の口を數千里小用ひて。下系の全長を計るといハ。天の高
 と知るなり。平町を上下に用る理なり。其術明なり。其
 いども。小里に於てハ。求めたるべきの理なり。謂ハ分数なり。叶
 ざる。因てなり。と云

昌弘日町見の數書名此術を載て洩すとなし。空理あり

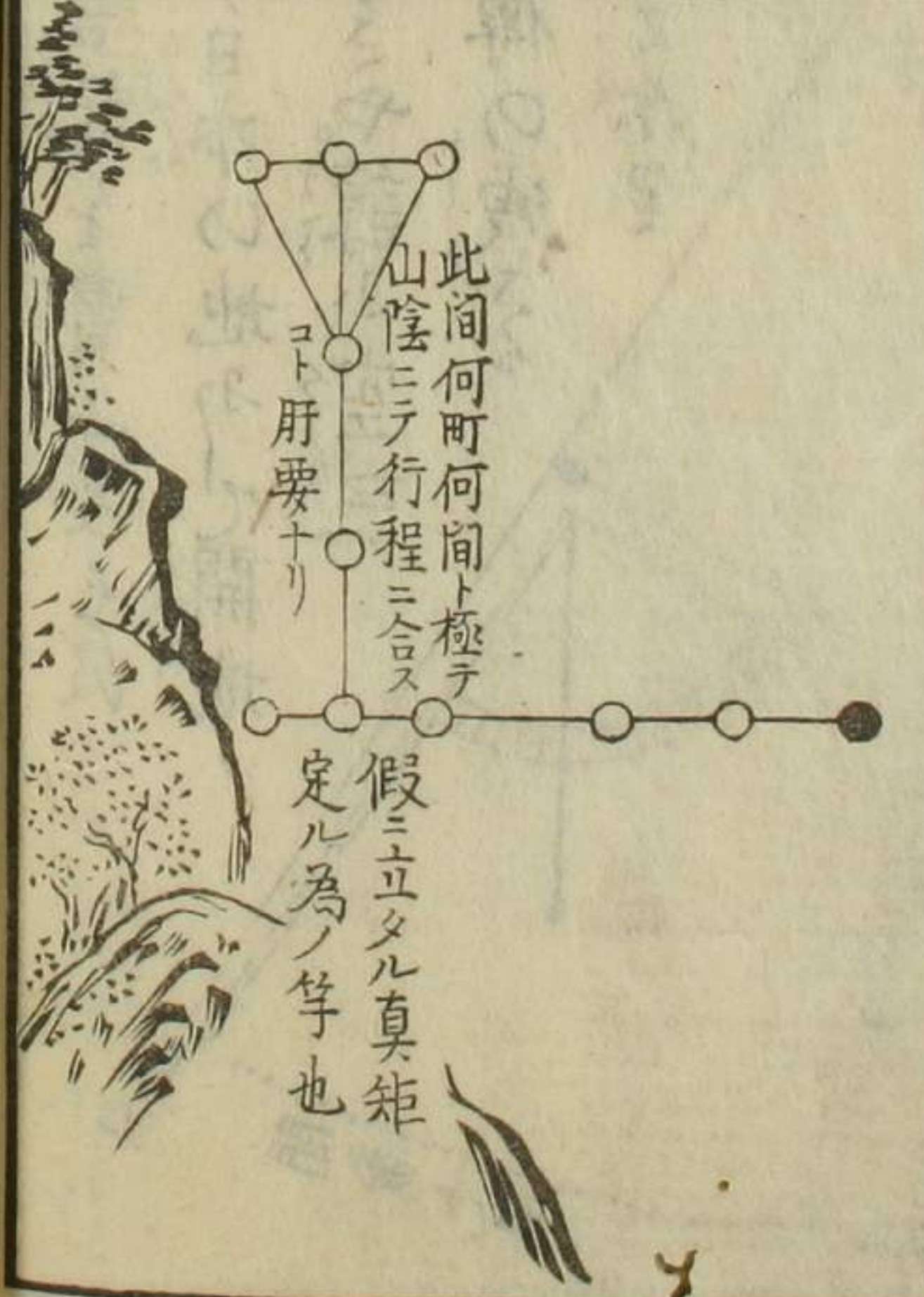
定測となす。言語を費ふ及ぶ。唯其理を尽すのみなり。今日日本の地。開地
 數千里を求む。地あるべし。或言。空言
 論ず。不足といふも。古傳の洩る
 所。今初心。為ふ云。と云



舊傳云天の高とハ極の坐すをふと云なり。無星の天ハ天文も論ずることなれ也。蓋極ハ世界の貫氣也。故に繞る所ハ星を以て極と定るなり。極の坐ハ天皇星よりして相公。三度半。但天度の積を用るなりと云云。昌弘云是又無誓の言なり用ゆべし

真矩繩

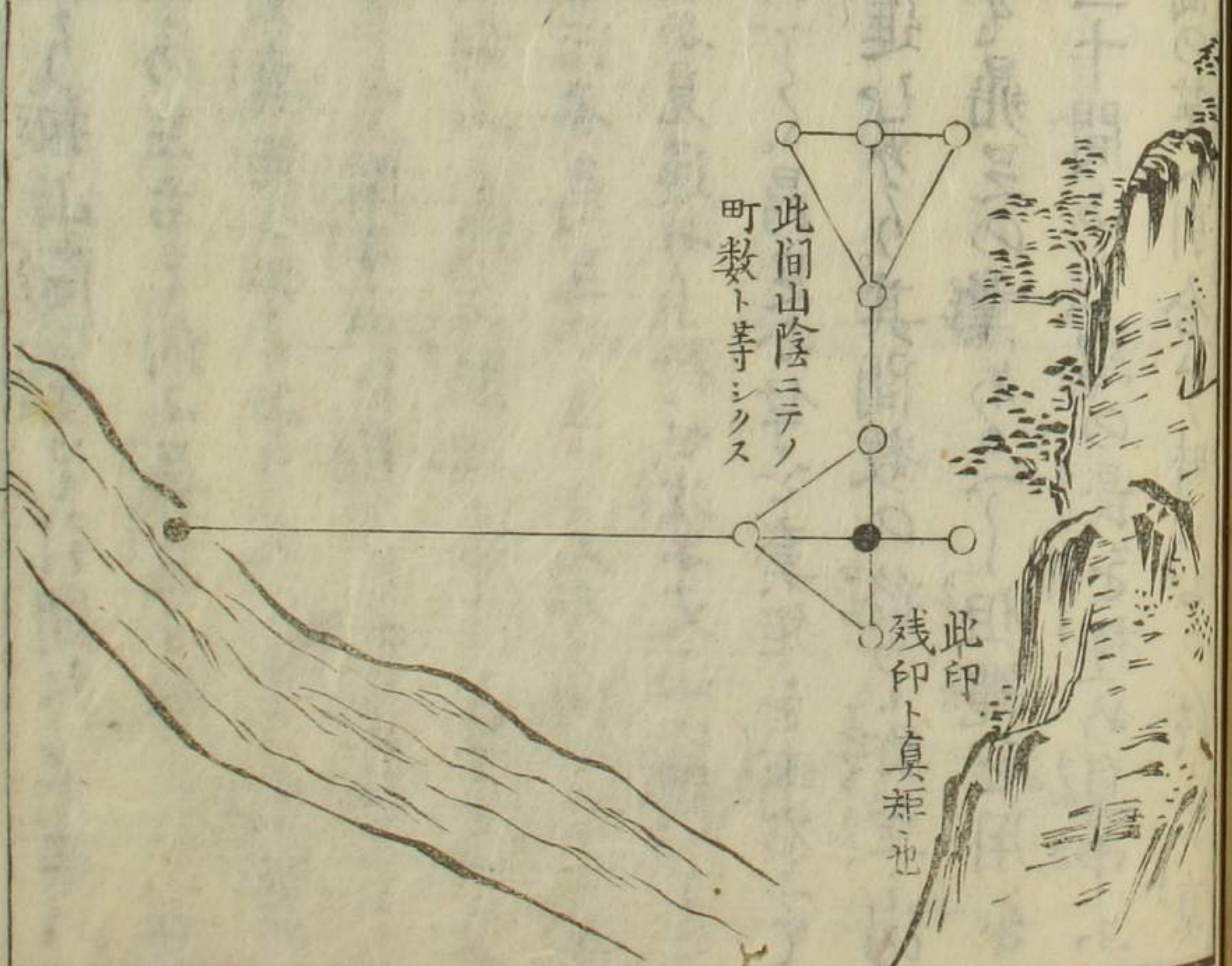
真之繩。真之繩張真矩之繩。真矩之技と云も同術也。或ハ見盤と用ひ。又ハ見盤元器ともて用ひず。て竿と磁針と



以て量るることも有り。俱小其理ハ同ト

此術ハ屈曲する道路と直小作。或ハ町屋割屋敷割ふ用也。又ハ田地の用水を取。高山と穿ち。山陰の水引。るも有り。かやうの類。小第一

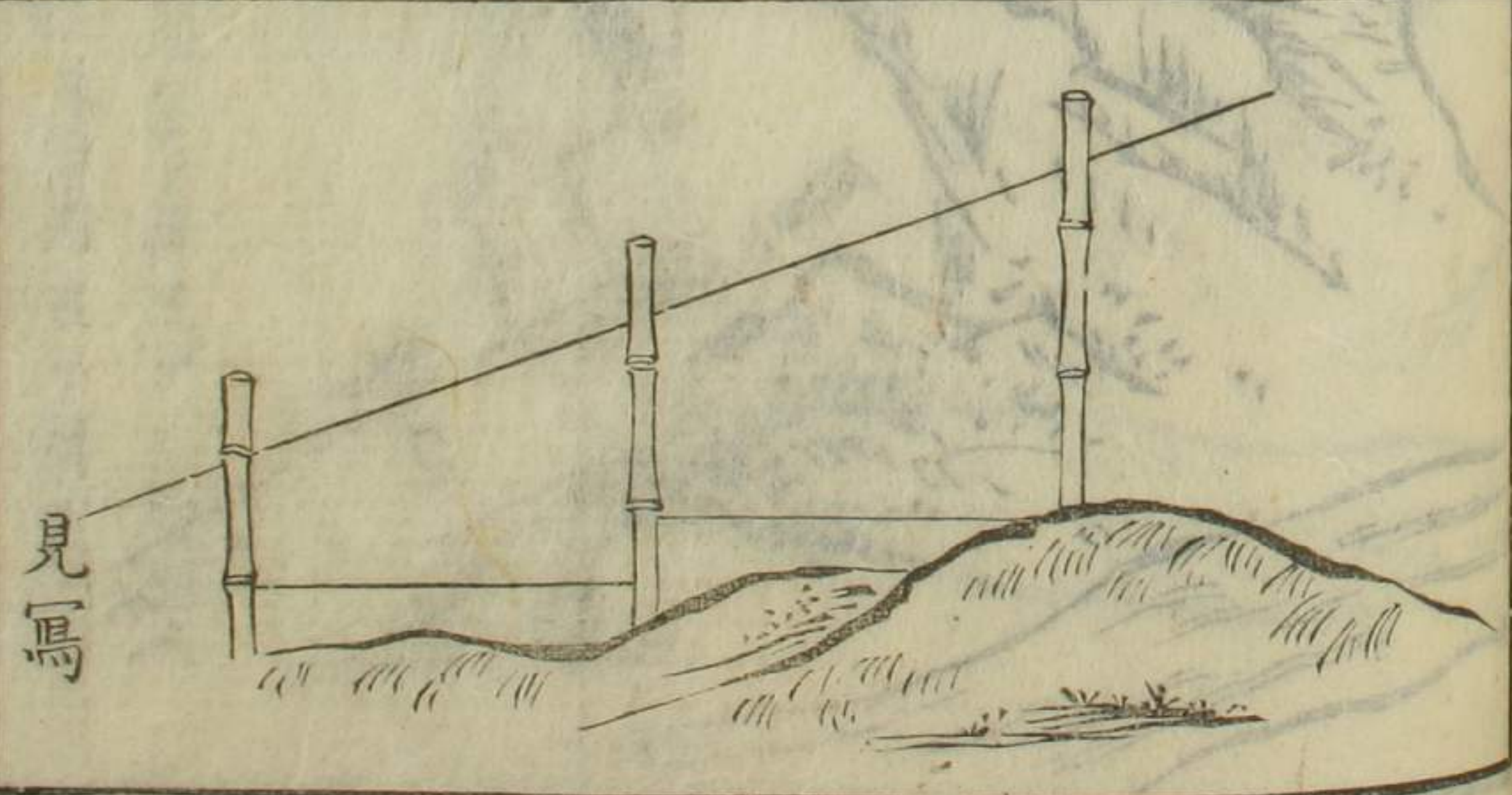
術曰望の場所。小竿として。竹をたて。立。より直。矩。小竿。二本を以て。段々小

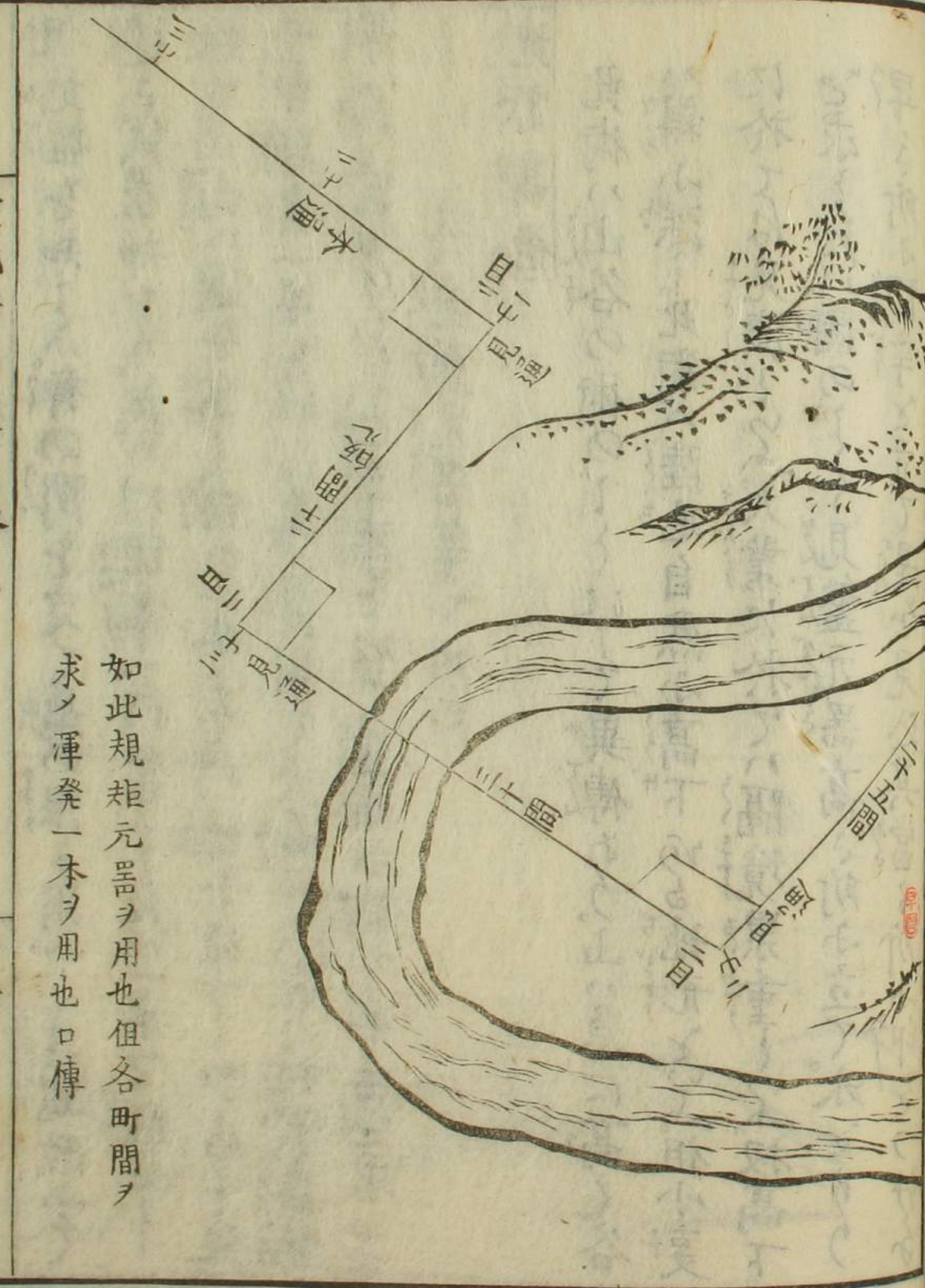


立替々々先へ見通し行なり。扱山際に至り引間たり。竝に一本立て残す即ち。其竿の左右と向ふ。鼎足小竿を二本立て見合す。向の竿も真矩ふなりあり。又夫より最前の段々小竿と立替送りて。閑る山を離るまで見通し行なり。扱閑る山を離て横へ向ふと云。又最初の段々。竿と一本残り其竿の左右向へ竿と二本鼎足小立て。見合向の竿と真矩ふとりて段々初の段々。小見通し行せ。次小又山の閑る所に至て目的の方へ最初の段々。鼎足小竿と真矩を取右めて山陰を勤る程間敷を進むなり。其間敷の終り即望の場所と真矩なり。此所も鼎足の業あるべし。但繩を用ふし肝要なり。十間も二十間少と。繩の長を極め真中へ印を付て。先の竿へ打掛面の竿へ引合す時のおのほく真

矩小なる明り

又曰此術ハ此方より遠く見ても目的まで一文字の通を差すて求む術なり。或ハ直道等と求むれば此術を用るなり。古傳より掉二本と以て求む行といへも。若目的を見隠す時。道と失ふ故小くを改む。掉三本と以て求む行なり。圖のごとく望所小。掉一本と立。目的を寫して。又二本と立を。而後より目的を用るふ及びず。蹟の一本を先へ送て段々小立替々々行なとあり。即一文字の通を極る也。





如此規矩元器ヲ用也但各町間ヲ
求ノ渾糞一木ヲ用也口傳

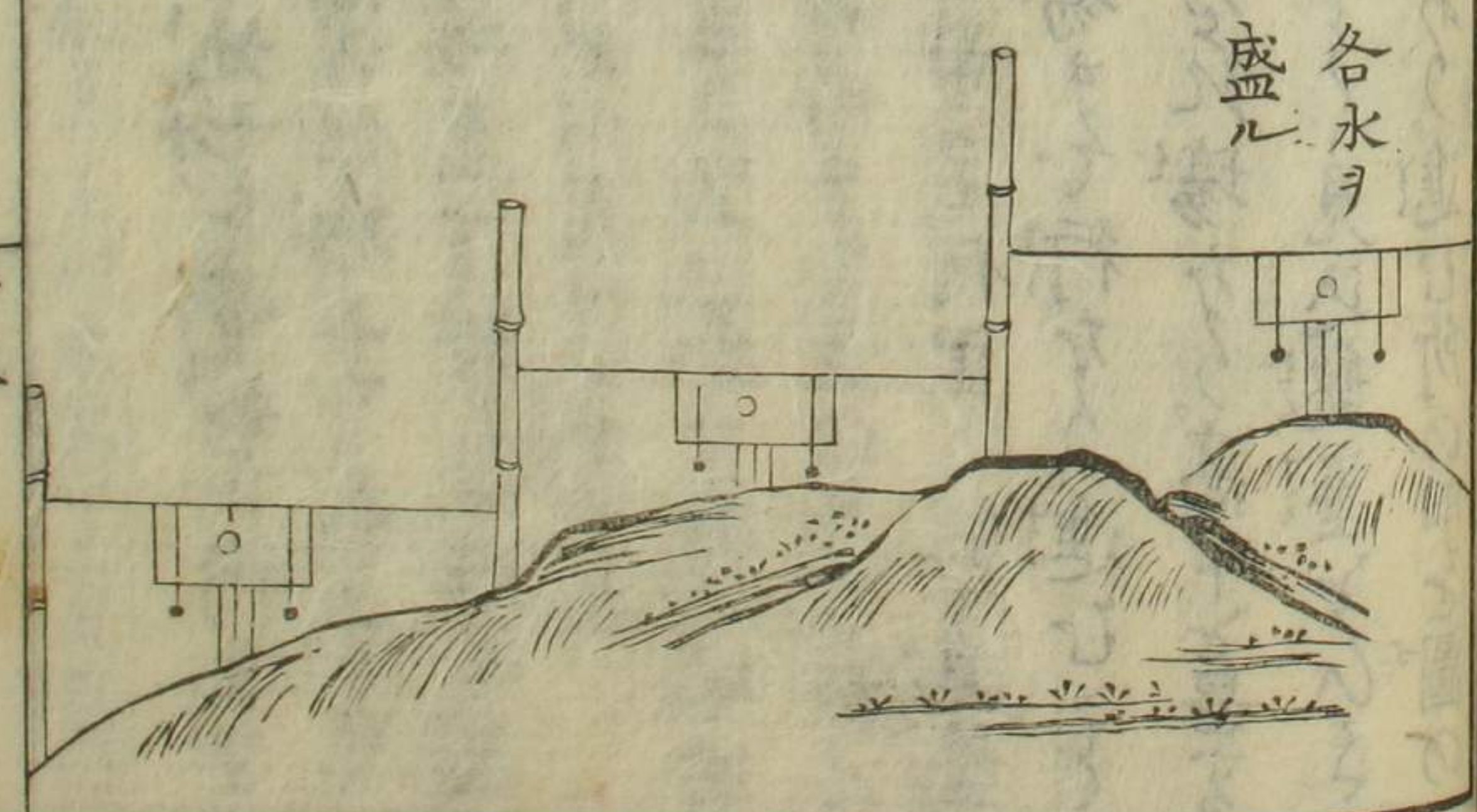
但地幅を知し、棹の間を定て繩の限を用べし。其繩数めて遠さば求知なり。或ハ川泥等へ行當るれば一本づ段々越て川向へ通を寫し、跡の一本を以て川幅を求べし。かの節渾癸一本を以て遠さば求て大益なり。或ハ村里ホ林等へ行當るれば二目返を以て直矩小按て本通を求し。

地形高低

此術ハ山谷の術の如く異傳あり。山ハ急に高く谷ハ斜小深し。此術ハ陸地自然小高下りる地形なり。但小変に於ては見渡し、大業に於てハ隔境累重し。扱高下と求れば、圖の如く見盤元器高く所小立て。水とあり早き所小間竿を立て是を見込其當る所小印をつけ

これハ高下の差あり。如くの時ハ段々小送つて差とある時ハ始終の高下各あり。或ハ類書の術目小地形高下小事見渡累隔累倍なり。同術也傳曰小変見渡しハ用水田畑の高下。又ハ屋敷等乃高下。軽と業也然ながら若干の大業も勉べし。其法盤を豎じて平直を極め盤の上端小定規を置見當りて高下は量る。所へ棹を立て見渡す。其印と盤尺と棹小印を付て。其印の上と下りめて

各水ヲ盛ル



其地の高下と云ふなり

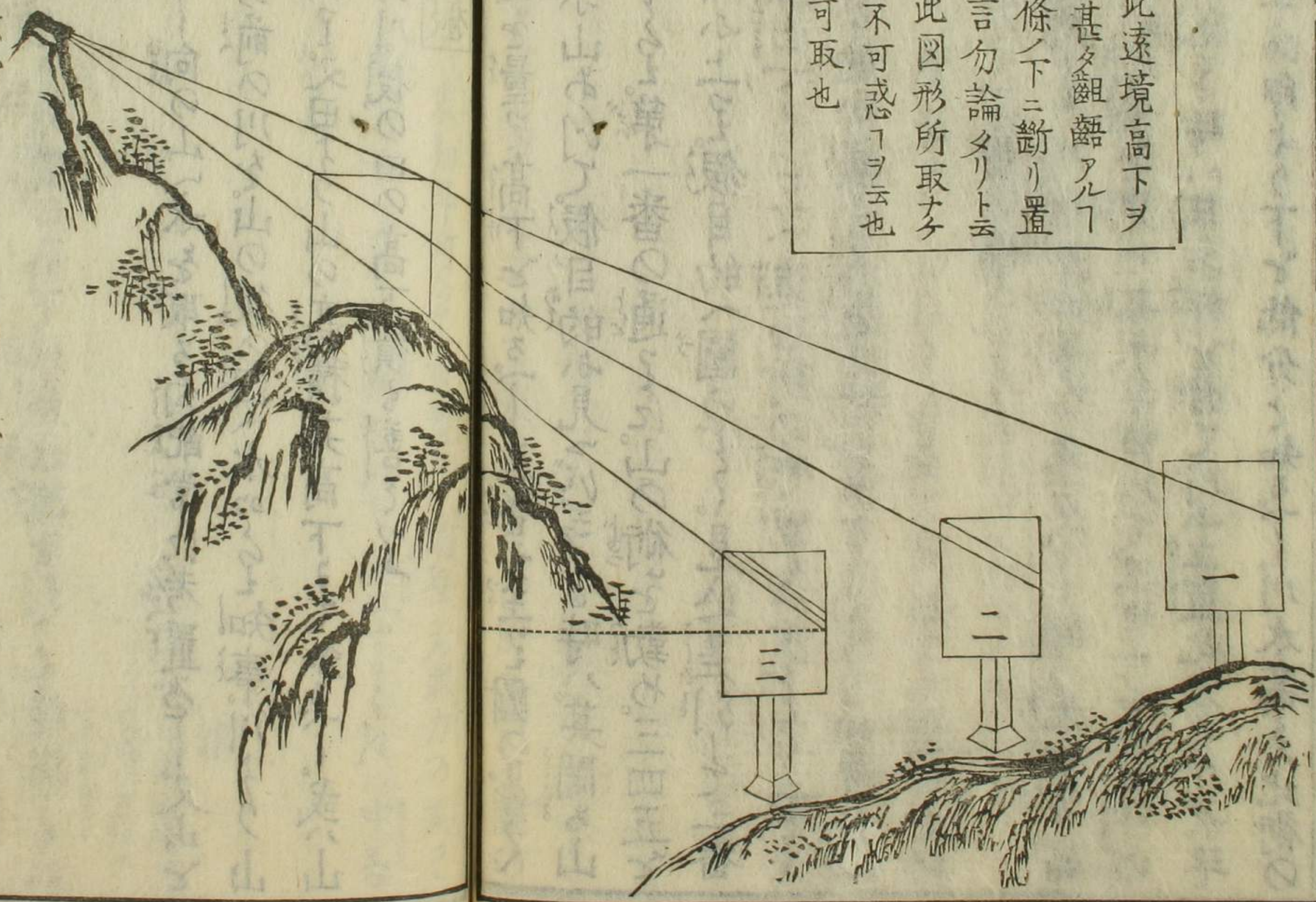
又曰隔境累重といふ隣國の高下地形を量知る術なり
尤大業なり。故に盤水と盛る体の仕形ありてあるといふ
も。假令ハ江府より常州総州の高下地形を量る時を築
波山を目的めて山の高下を其所の高下と考る也

右は所謂隣國の高下地形を計るなり。第一番の場所
ありて向上の平町を勉め。假目當の山まで五の矩を極め
山の術を勤め。三の矩を極め。四を量り。何里と記し見盤
小悉く盛つけ。次の盤を立てる場所まで行なり。進むこと
何里と町里と打て知り盤を立てる場所なり。高下と量る
るは地なり。一番に至り。又圖のごく見込盤墨といふ
其地の高下。又目的の遠近ありて差あり。進む所の四を圖の

ごとく切て。二を量り。高下と知るべし。三番に至り。圖のごく
見込む。向ふ山ありて。假目的見へば。進む時ハ其開る山
と又目的のより。第一番の通る山。山の術を勤め。三四五と
知て。扱其山の上。假目的へ圖のごく見込。差引して三番
の地を知る。尤二より三へ進む所の町里も二のごく右
断る開る目的の假見通の材磨を立てる。四番に至
りて圖のごく見込。三よ云のごく。高下は知べし。進む處の
町里を知る。二番の場のごく

或傳ふ云。遠所より川水池水等を此方へる時ハ先水平器
を以て。此方ハ地安を定め。扱水平弦以て。五町も十町も印の
川水を見て。低る時ハ竿小印と付て川小立置此方より。水平
ありて。竿の印より下と低分と知るべし。川水高とハ此術の

昌弘日此遠境高下ヲ
量ルノ凶甚多齟齬アル
改ルニ先條ノ下ニ斷リ置
タレハ贅言勿論タリト云
ヘ尼聊モ此凶形所取ナク
レハ猶又不可惑ト云也
努々不可取也



還源を用い。水平と五六尺も高く臺を上げ。夫より川水
と見るるを

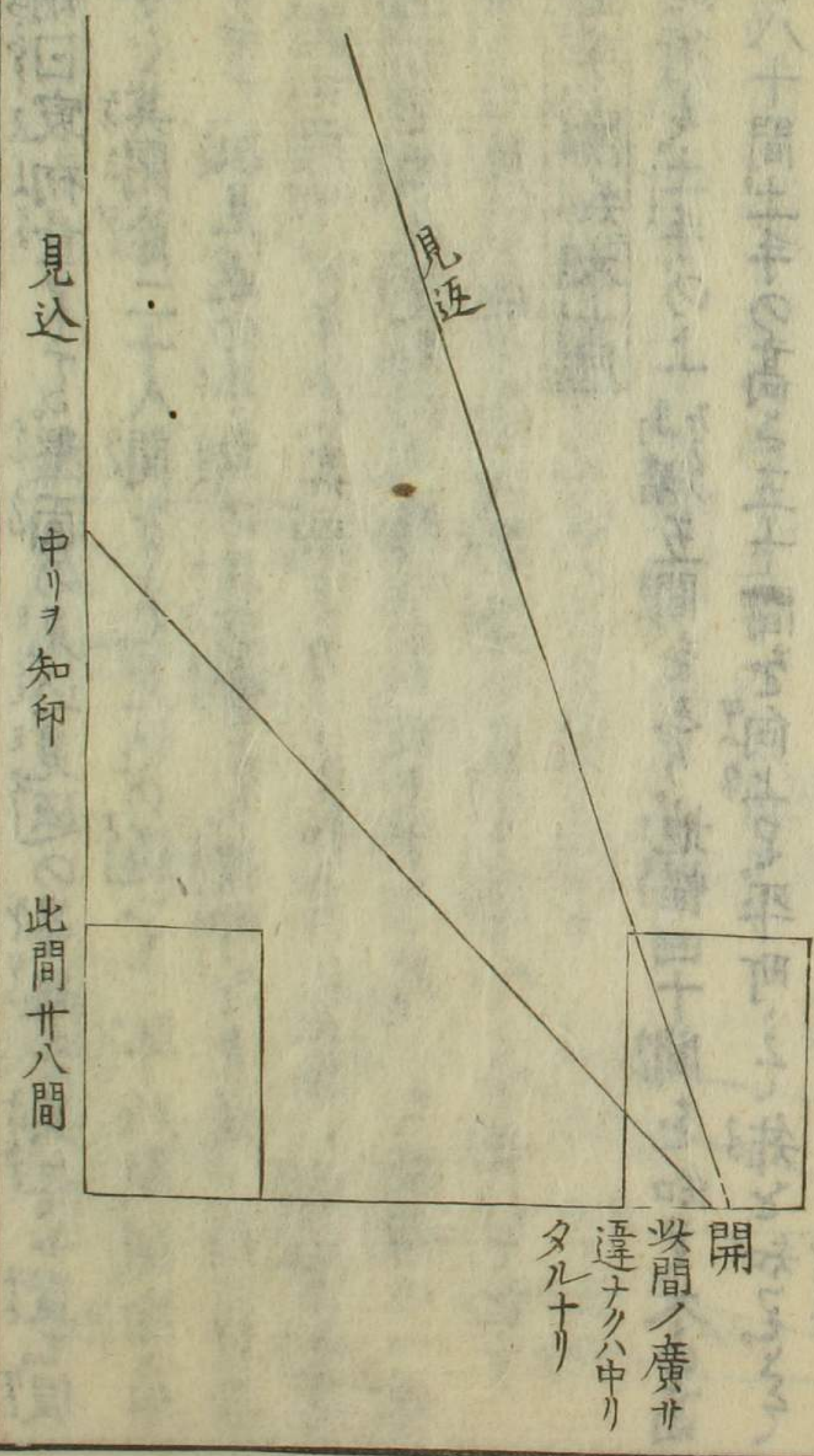
又云彼方と此方と同直の地あり。水上と水落と同尺あり。水
樋の水よりおとくに上より押うけ水おる理なきとも。勾配ぬ
るは洪水のとれ悪し。水の流も程あり。其所の高さふかく

らびハ用お立たず。右十町も先まして。目的見定めあちつて。五町目と六町目に印おしりの材ざいを立夫たてと見通みとおす。又五町目より向と見通みとおす。遣違ちがへ間と打心うちことして。中次ちゆうじの理りなり。又十町先まして横よこへなりとも。斜かたふなりとも。折曲まが。又十町も先の勾配こうはいと見時みときハ曲途まがとして。三角さんかくの矩かねと耽合とんごせ。其後そのち右のどくに見通みとおす。高下たかひと知る。或ハ家作やつかうの節せつ礎いしの高下たかひ。水盛みづも水繩みづなを引ひく。遠近とんとも。同理どうりなり。

又云谷やを廻めぐり向むかひの山やまへ水みづを取とる。勾配こうはい常に考置かんがを。又山と海うみりぬき。山の前まへの川かわを。山の後うしろの田いりへ水みづつらと知事ちじ。川より山の高たかさ積つり。又田より山の高たか積つり。其高下たかひとして知るべし。或ハ山の上うへより。前の川かわ。後の田いりの高下たかひ積つりも善よといふ。

中不中片極

此術ハ假令たとハ。最初平町へいとして。量置りかする。遠程とん程ちゆう。若眼力わがの誤あやり。なごあるくと疑うたり。とたふ。此術このを以もて。改正くわする。とたハ中否ちゆう立所たてふ。あつらふ。



開
以間ノ廣サ
違ナクハ中リ
タルナリ

見込

中リヲ知印

此間廿八間

量也昔再後篇卷三

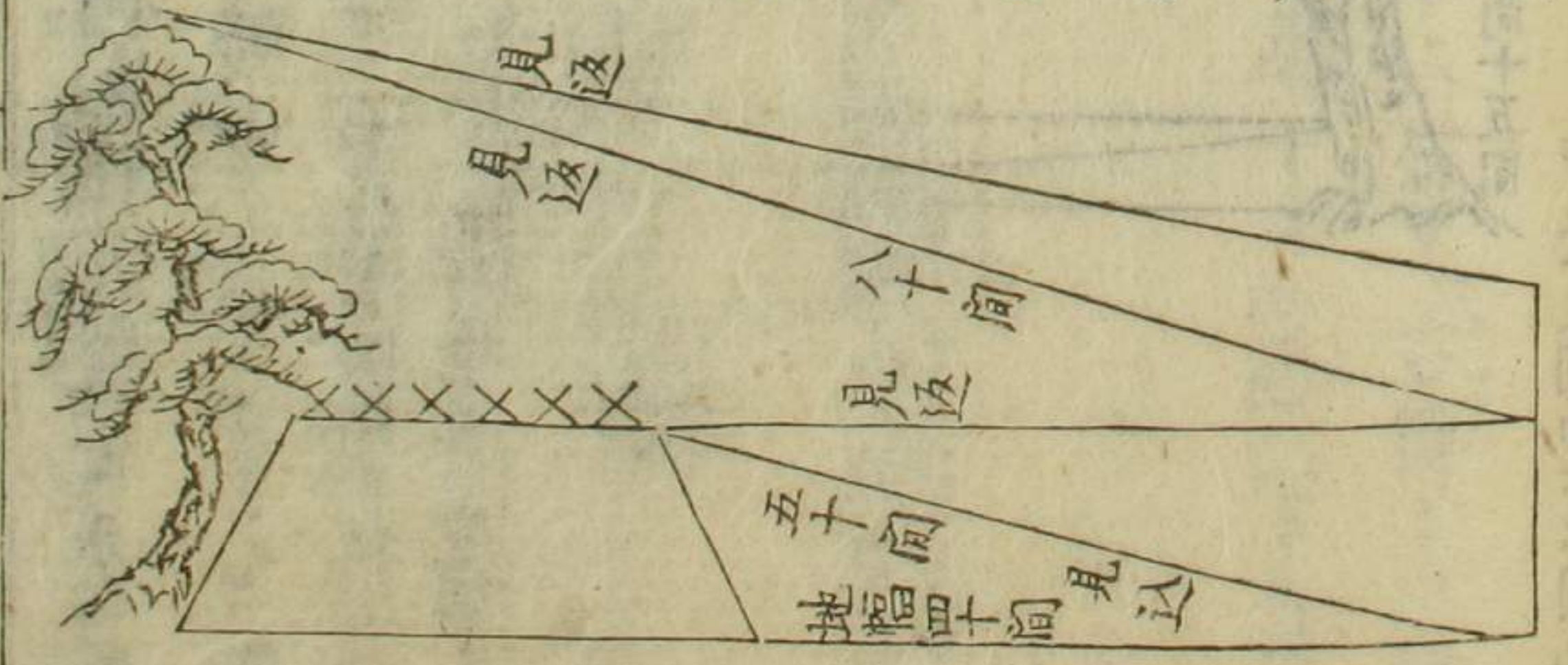
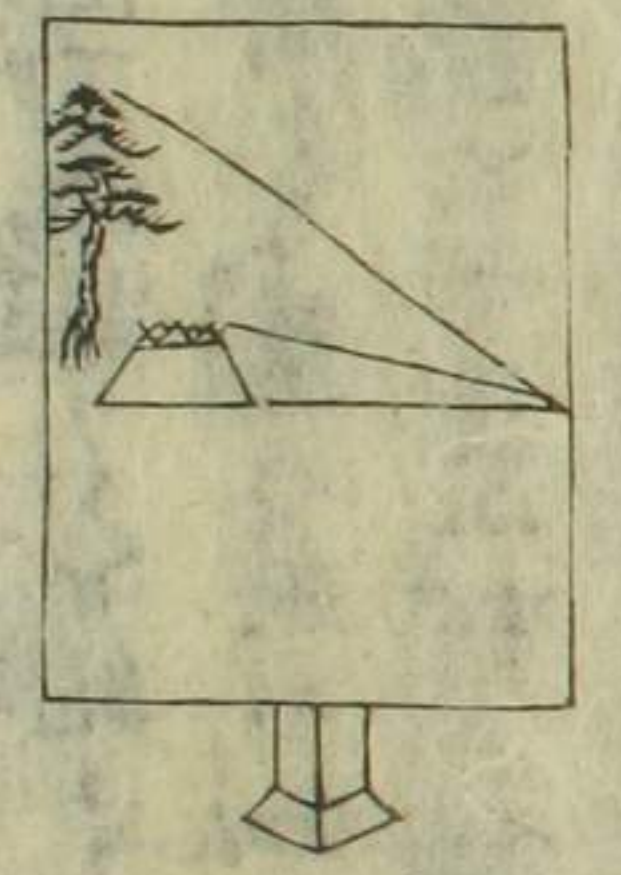
一五

術曰家初量^して。盤^{ばん}面^{めん}の見^み込^こ見^み返^への墨^{ぼく}線^{せん}を其^{その}終^{はつ}に置^おて。假^{かり}令^しむ其^{その}開^{ひら}除^け二^に十^{じゅう}八^{はち}間^{かん}を^をしむ。見^み込^この通^{とほ}りも二^に十^{じゅう}八^{はち}間^{かん}。開^{ひら}除^けの印^{いん}と付^つて。扱^あ見^み返^への手^て前^{まへ}の墨^{ぼく}の會^あひ。彼^{かの}印^{いん}を見^み通^{とほ}り。両^{りやう}の開^{ひら}除^けの縮^{ちぢ}口^{くち}同^{おな}寸^{すん}分^{ぶん}を^をしむ。其^{その}誤^{あや}り^{まち}を^をしむ。知^しら^ず。此^{この}術^{じゆつ}ハ前^{ぜん}編^{へん}の知^ち雙^{じやう}開^{ひら}方^{かた}と均^{ひと}き^く度^どあ^らむ。辨^わず^から^ず。及^{およ}び^び不^ふ^ずと^とを^をしむ。極^{ごく}傳^{でん}の一條^{いちじょう}として用^{もち}ひ^が。師^しの^の言^{ごん}を^をしむ。學者^{がくしや}の惑^{まど}を^を生^なぜ^んと^とを^を畏^{おそ}ひ^て記^きす

土手陰知木高

此^{この}術^{じゆつ}ハ土^ど手^ての上^{のうへ}馬^ば踏^た五^ご間^{かん}を^をしむ。地^ち幅^{はく}四^し十^{じゅう}間^{かん}を^を知^しる。木^きの高^{たか}さ八十^{はちじゅう}間^{かん}。土^ど手^ての高^{たか}さ五^ご十^{じゅう}間^{かん}を^を向^{むか}へ^る。平^{へい}町^{ちやう}を^を知^しる。木^きの高^{たか}さを^を知^しる。盤^{ばん}を^を立^たて^る。木^きの高^{たか}さ土^ど手^ての高^{たか}さ見^み込^こ見^み返^への墨^{ぼく}と^とい^ふ。各^{おの}々^{おの}矩^{こま}や^や計^{はか}す。其^{その}盤^{ばん}ハ土^ど手^ての形^{かたち}を^をしむ。右^{みぎ}の分^{ぶん}見^み込^こ。木^きの高^{たか}さを^を知^しる。尤^{なほ}土^ど手^ての兩^{りやう}垂^た斜^{しゃ}同^{おな}く^く。時^{とき}ハ知^しら^ず。也^{なり}

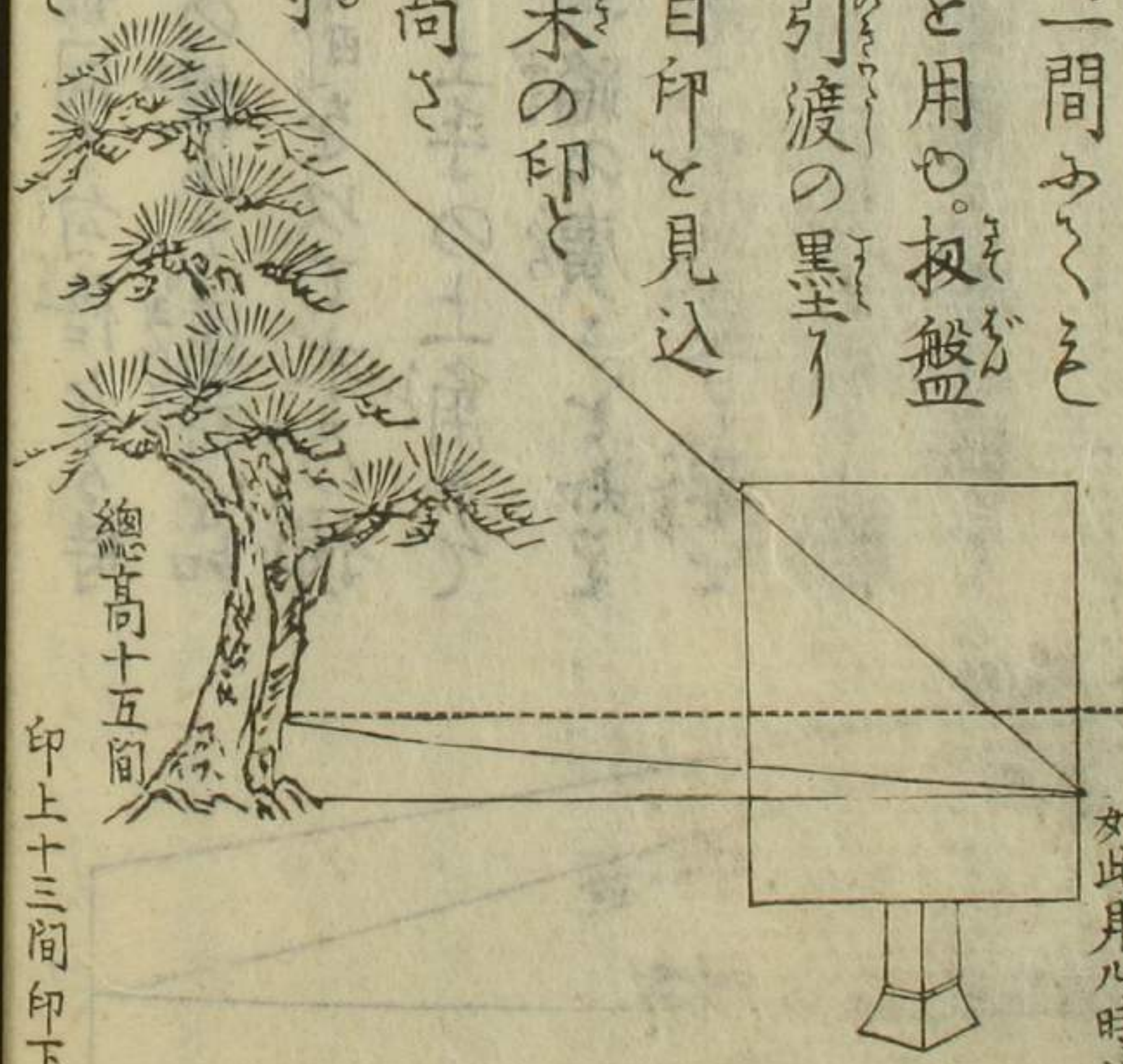
又^{また}云^いハ此^{この}術^{じゆつ}ハ土^ど手^ての前^{ぜん}後^ご同^{おな}く^く。勾^{こう}倍^{ばい}を^をしむ。時^{とき}小^{せう}求^{もと}む^る。理^りを^をしむ。先^{まづ}土^ど手^ての根^ねを^をしむ。遠^{とほ}程^{ぢやう}を^を知^しる。扱^あ同^{おな}所^{ところ}より。向^{むか}へ^る。平^{へい}町^{ちやう}を^を以^もつて。木^き乃^の梢^{すさぎ}まで。空^{そら}の規^きを^を求^{もと}む。同^{おな}く土^ど手^ての上^{のうへ}角^{かく}まで。空^{そら}の規^きを^を求^{もと}む。土^ど手^ての馬^ば踏^たの廣^{ひろ}さを^を知^しる。扱^あ右^{みぎ}の所^{ところ}小^{せう}盤^{ばん}を^を立^たて^る。水^{みづ}浅^あ盛^もつ。要^{よう}と用^{もち}ひ^が。見^み込^こ。各^{おの}々^{おの}墨^{ぼく}線^{せん}を^を引^ひく。分^{ぶん}間^{かん}を^を知^しる。削^け盤^{ばん}を^を用^{もち}ひ^が。形^{かたち}を^を極^{ごく}る。也^{なり}。古^{ふる}傳^{でん}の終^{はつ}に記^きす



量地并南後編卷三

指高何分

此術ハ高下の誤つとを糺す術也但見盤をりらも
 假令ハ木の高と十五間とも豫め求め知し時中々中々を糺
 らんとせし先其盤面の口と十五小割て墨と
 引渡し扱其木の根より一間あつと
 二間あつても立木小目印と用の扱盤
 と立て水とより般盤面の引渡の墨と
 定木と當木小つけと目印と見込
 ぎ其盤面の墨と立木の印と
 的當するは即木の高と
 相違なりと知べ或ハ天守
 櫓の重々と糺し又三分一
 五分一等はと指す



印上十三間印下二間也

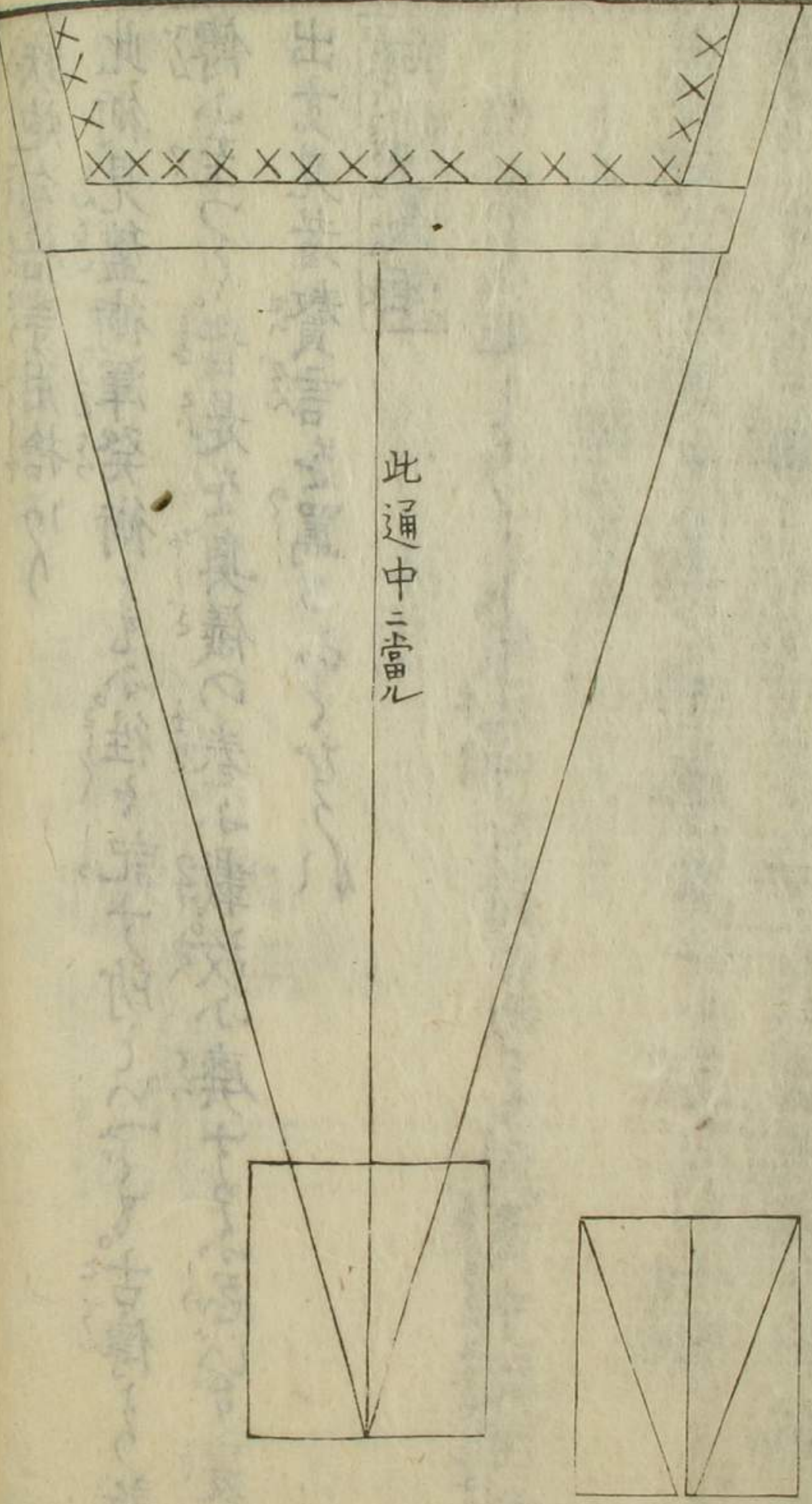
鉄炮勾倍等用捨り

此術見盤術渾癸術とも小往々記す所といへども古傳より新
 傳小至つて皆是を奥儀の巻ふ載故小廢すふ忍びず爰に
 出す見者贅言を罵るあつたり

向指真矩

向指真矩といふも向正中と指とあるも向真中從陰指
 とあるも同術なりと
 術云向の両の真中と望と先初小真中小墨を引其場小至つて
 真中と思ふ所は盤を居左を見込墨を引其尾頭を右へ寫し
 是小定木と當て見込當る処迄よりて當るなり扱各當るは
 得て中の墨小當る所向の中なり
 又云盤の真中と割て墨を引大圖向の中程空眼を以てるを

求む。盤を居定木をとめて。或ハ左の端を見込で墨をひき
其口と右の方へ横ひき。墨を引是ハ定木を當て右の方を見



此通中ニ當ル

込也。其通ふ中る時ハ其所即向の真中なり。差あるとんハ空
眼を以て板を動して定むるなり

從脇指真矩

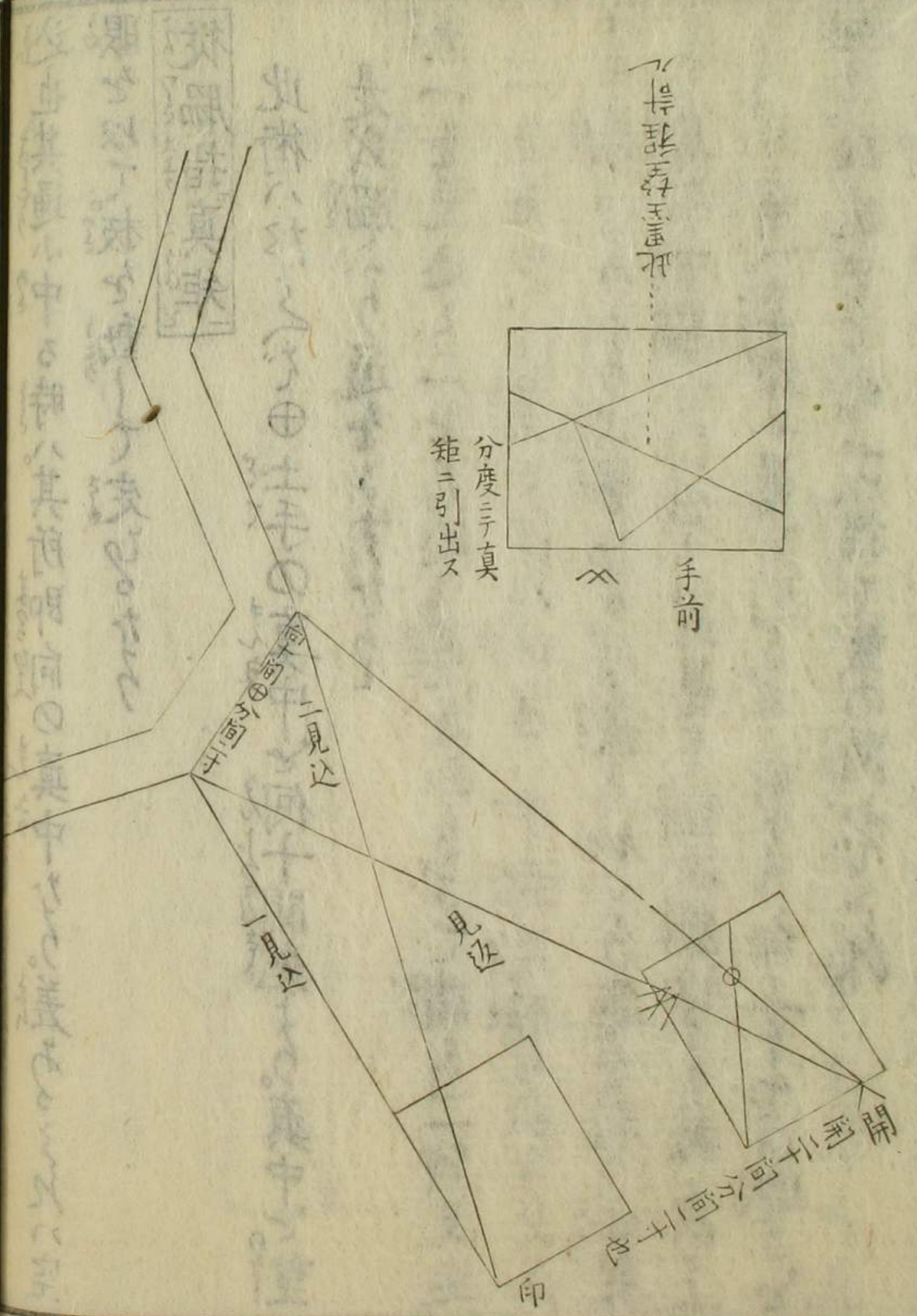
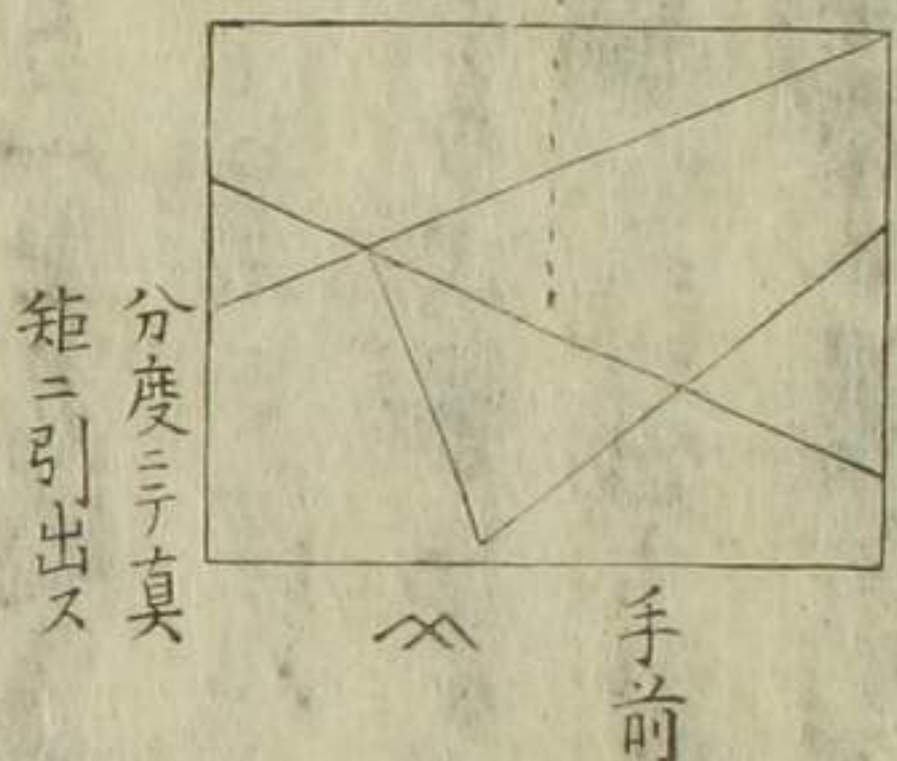
此術ハたゞむ[⊕]土手の真中と何十間先より。真中と望
是淺脇より通をさすなり

先一を見込も。二を見込も。墨をひき。さて開き二浅見返
一を見つゝ。墨をひき。地墨ハ手前尾頭をかき込ふ
し。向つゝ。次第なり。◎絞とみより墨を引。分度
まで。真矩中墨を引出し。此墨を望次第けり。扱この上
より。手前へ真矩ふ墨を引。手前より向ふまでの遠さを
知る。扱通まで向ふへ指て望の間あて

量地指南後篇卷三

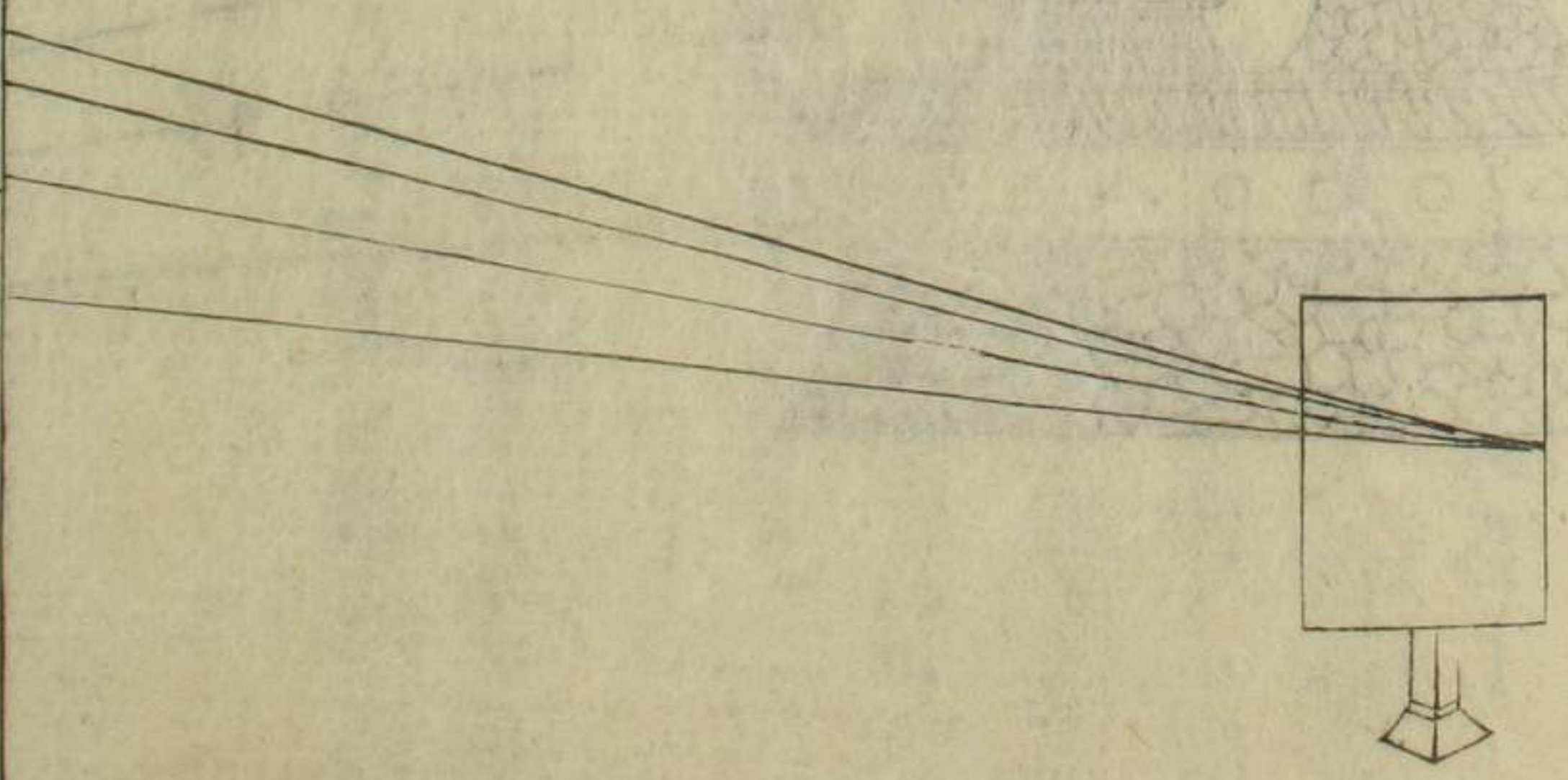
一八

一得此法者...



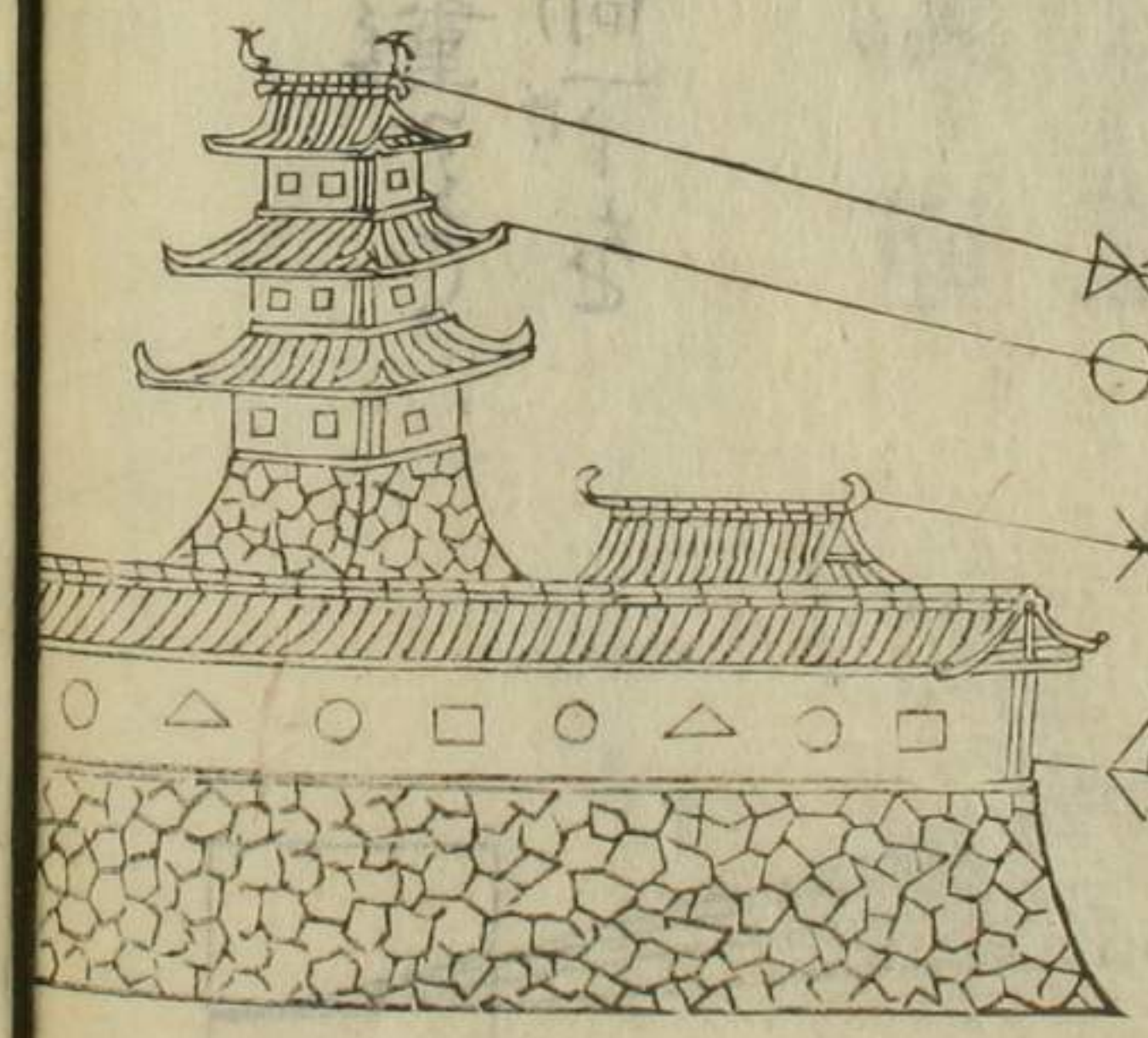
天守櫓知居所

一傳小此術ハ同通小重クモ
見ゆる物の其地幅と高下を
量知の術也云云
昌弘云此術全体前編より所
謂山高を知の術と同意也
といへども他流秘奥より條目
に掲ぐる故小學者の惑ひを
曉さんがたあふ一圖をなして
是を示すと下の如し



- △ 天守棟上の高
- 上より三重目屋上の高
- × 矢倉棟上の高
- △ 土居上場の高

此圖天守なるは
五重なりてさななは
煩しき故に法を
て三重と云



山用表裏

古傳云山の表裏と用るといふ山は裏表ありてを知るべしと云
解して云山の表裏は人の座するごとし人座する時ハ前緩に
て後急なり故に急なる方表裏より緩なる方と前と後又
東西南北より分る陰陽に配分する理もわづらひとも緩急を
以て定るもあつたれども其國小居てハ其國の四方の山と向ふ
所皆表といふこと宜し何ははけても其理あることなり

横山形

山の形を寫すといふハ無益のケ條なり何時に業と勤るも
山の術ハ山の形を寫すといふことなり但山景を圖画する
ことハ是ハ輿地術のあづかる所小あはれ
山を畫る

山を責るるといふは国の圖をなす。大山を小く画けど空虚なりて如何なり。又大く圖すれば國郡も蔓々として外面の妨あり。因て大山ハ分間よりハ小く高く圖するなり。先山の裏と画くもつひ又雪を顯すともなり。

求山之斜登

山の斜登を求るといふ目あり。是亦無益の條なり。但し遠里の高山かといふ量るハ各別のこと。其外通例山と量るハ斜垂と知しとせざるはなりといふ。其法ハ條々山谷の術有り見ゆ。

知山厚

山の厚さといふハ山の根置地幅のこと。小支見渡直之繩真形の抜くといふ術を以て考べ。故ハ筆舌を費さず。

本傳云 ○山岳進退 ○知山高 ○進退知高 ○知谷深 ○

知両山之差 ○知谷幅木丈

極傳云 ○山谷一開 ○知向山前山之差 ○山上谷底知

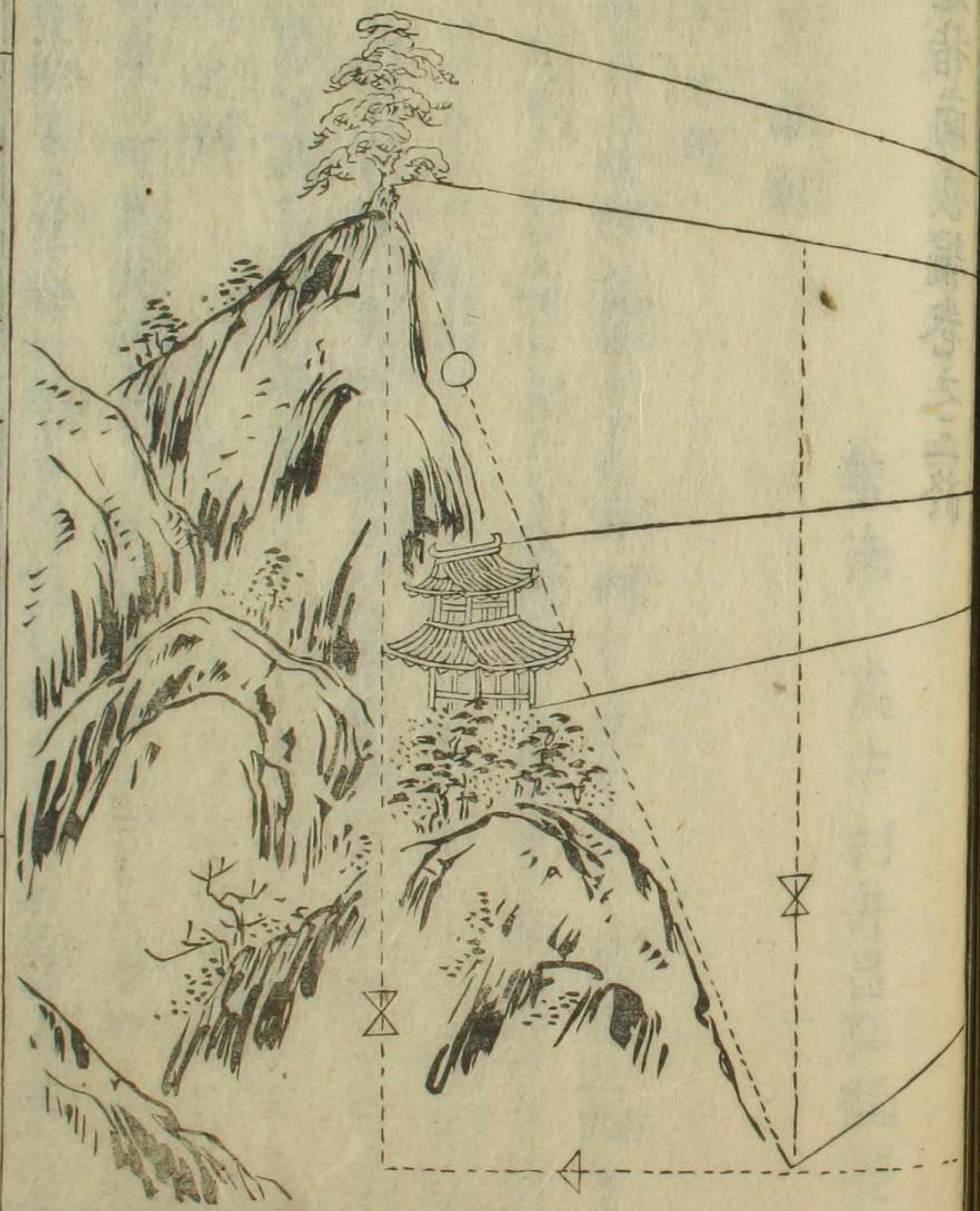
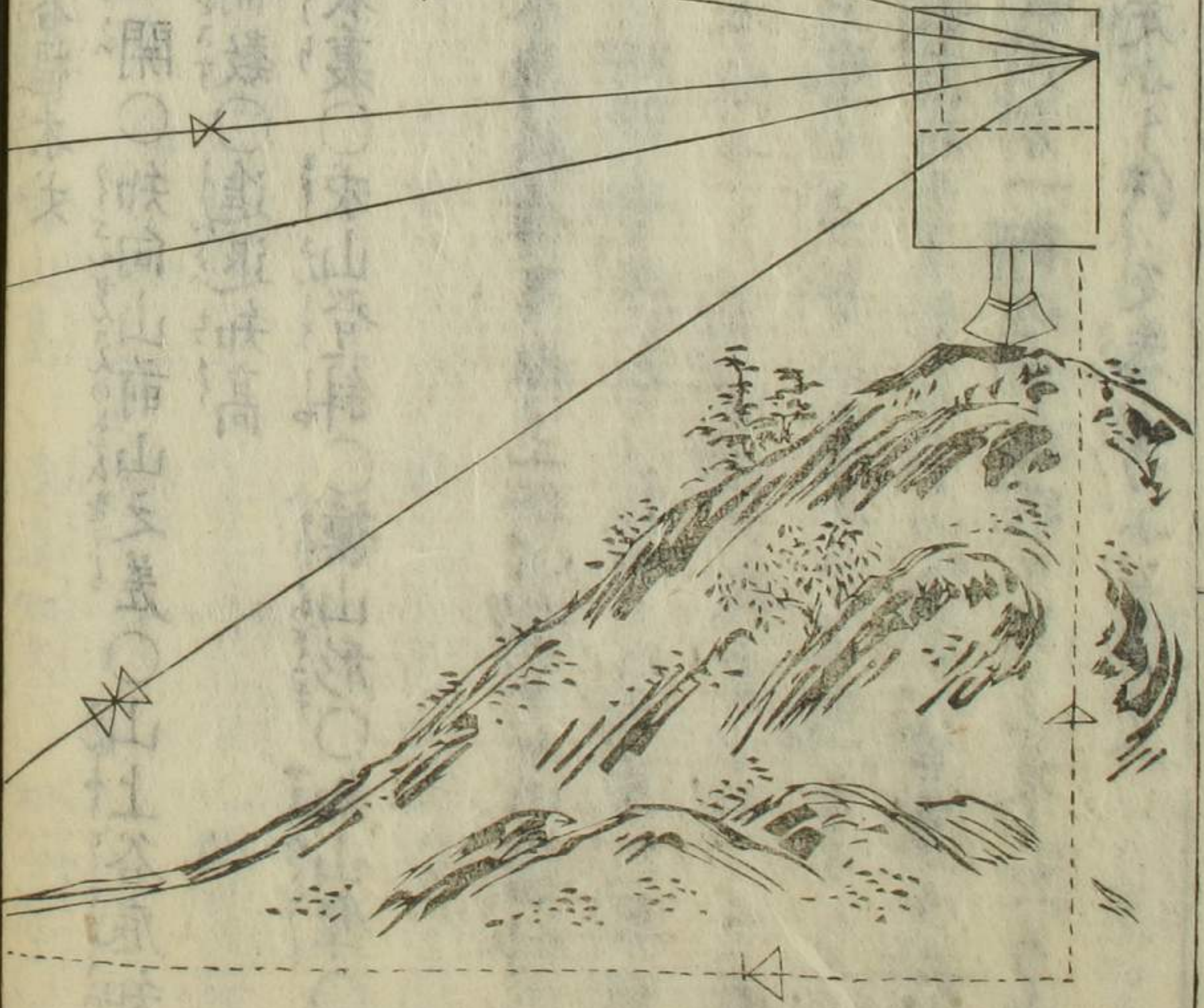
木高 ○谷深所指間數 ○進退知高

異傳云 ○用山表裏 ○求山登斜 ○換山形 ○知山厚 ○

天守櫓知居所

右山谷の數術を以て本傳極傳異傳三術に分るもの如何と察す。都て山谷の術ハ初學會得たれよりて再往教諭せんがためなり。但又本傳よりハ其量法の微意を隠して極傳におおき。始て之を曉し。子弟に高ぶらんが為なり。甚しう。右山谷の術數方あるがごとく。皆予が前編小述る所の山谷數知方一術の中に明なり。是がたり。前編の圖をみれば是れは是れ法で参考小をなす。

○ハ山頂へ空徑也
 △ハ山麓へ空徑也
 二法ハ種ニシテ假借也
 △ハ山頂ノ樹丈也
 ×ハ彼山ノ直立也
 △ハ此山ノ直立也
 ○ハ彼山ノ登斜也
 ×ハ中谷ノ直立也
 △ハ半腹ノ堂丈也
 △ハ此山ノ地徑也
 ×ハ此山ノ登斜也
 以上九種凡三種子
 間敷ヲ因シ渾然ヲ
 以テ量リ知ルナリ



量地指南後編卷之三

廿二

量地指南後編卷之三終

量地指南後編卷之四

勢南 處士 村井昌弘編述

算勘術

算勘之辨

算數家の地理と量ること。序例も述るがごとく。嚴密巨細ある
あつた尤宜しといふべし。去ども迂遠ありて急速の要用甚なれば。
器物繁多ありて勞煩たるは是に因て輿地家の取ざる処勿論
かりといへども。數ハ萬物の根元。又吾量地の不捨術をば。今
其大畧と述て左ふ記す

器械之制

算術家の町見其術少くとも。小器械の品も又多かり。其
理ハ量地家の器物に拘りといへども。其其大畧異なり。故ハ量

量地指南後編卷之四

廿一

地者流といへども其制作と辨知すべあるべし。茲とて其大畧と左小摸して参考小使つる

地板の制長サ二尺五寸。厚サ一寸。幅一尺二寸以上小制る。板乃西端の手前より釘穴と一ツ宛明せあり。是ハ釘とさし。水繩を

界引板の制檜の節なり。柱目の板より。板悪くれば界引狂て引くたをり。板の長サ四尺。厚サ五分。幅一尺より四方とさし。矩を合せて直よ劑つて用るなり

間竿の制長サ六尺ありて檜あて制る。一尺づの所ふ墨を以て印とさる。方一才二三分と節とほ表木の制ハ木にてし竹をくも正直ありて少し斜曲さる用也。長九尺づ二本。五尺づ二本なり。木を造らむ太サ方一寸二分

計る。竹は方寸。三寸四五分廻り。浅土吉とほ水繩の制ハ苧系を三ツ斜よ合せて制するなり。又ハ大鷹の繳と用ゆべし。長さハ二十間許り。又一尺五寸づの繩四筋は

楯定規の制木ハ朴木とてす。輕とほほ。長サ六尺一本。長サ二尺五寸一本。大小二本あり。楯の深サ一寸二三分。幅一分計ふ

常定規の制木ハ檜檜うけ用也。長サ六尺一本。三尺一本。大小二本あり。尺寸は盛付るも勿論なり

短矩 三寸 矩なり。加路土とも云。の制真鍮。又ハ鯨鬚を以て制る。曲尺の二寸なるものあり。是を渾癸ふ代て用也。長三寸と一町とさし。五分と十間とほ。是にけ界引の線を量るなり。渾癸の理に

違ちがふこゝなり
右器械大畧量地家の器物に準じて知る煩わづらひしむ
其圖を省く。猶此外渾癸磁石小道具等あまゝと通例
なるハ記さば

町見術名

平町見と云ハ 平陸と量る方也遠近同術也
上町見と云ハ 山岳と量る方也高低同術也
下町見と云ハ 豁谷と量る方也淺深同術也
向町見と云ハ 彼面と量る方也廣狹同術也

右四件と四町見と云 待まちて又また一ひと又また一ひと又また一ひと又また一ひと
高と知ると云ハ 高低と知る方也
繪圖町見と云ハ 城圖を作る方也

乱面町見と云ハ 混雜の品と量る方也
物陰町見と云ハ 物と隔て量る方也
地形高下と云ハ 地形の高低と知る方也

四町見辨

算數家の町見術。平町見。上町見。下町見。向町見。といふこと
あり。是を算家あてハ。町見の父母と云いふ。尤故あるも。量地家と
いふとも。其揆一あり。然ども算家の術ハ。迂遠うゑんにして急速きゅうそく小
用。或は量地家の術ハ。徑捷きんけつにして。即席の要と相成あひなむ。
其得失同日の談。非たがむ。其外町見の名ある名目多し。或
いふとも。時小臨て術名とかなとものなきを。一定の法あり。
故小四町見の外。あまゝ記さず。都て量地家おのゝ數者
の術を用ひむといふも。定むると。今初學者。勘考の爲に

姑く唯四町見の法を茲に記す

平町見といふは遠近を志すの法なり。業をいらくつり
とて其術作法を皆同じ。まづ地板を居て随分直を
極多々々地板乃両端の穴より針をさし。此針は水繩
をまじはけて。地板より五分上げ。水繩を張る。右
左方まで釘一寸計り隔て水繩に印を付け。此印より
右の方ハ三尺隔て又印を付るなり。水繩ハ六尺より一丈
みもとりて若くは三尺も。みより針が手廻りあり。
上り町見といふは高低を知るの法なり。業ハ品々つり
て。其術作法ハいづれも同断なり。平町見の作法小
同。但し高サ一尺より一丈に臺とす。其上は地板を
置かる。

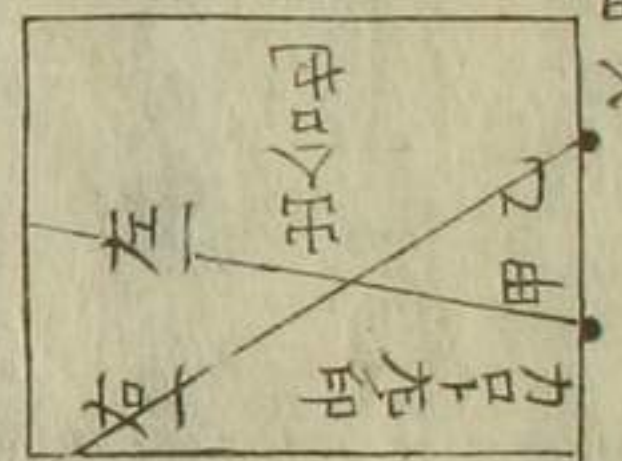
下り町見といふは浅深を知るの法なり。業ハ色々に
て。其術作法ハいづれも同断なり。平町見の作法のご
とくして。地板を先下りに居るなり。水繩の張様。右同
断なり。板下りも。さしあは。留れ釘をさすべし。
向町見といふハ廣狭を知るの法なり。是も業ハ多々れ
ども。其術作法ハ平町見。上町見。下町見。同断と知るに
右に迷る。此外の術名をあまり。さしあは。といふと
何も。此四術の理を。押究む。ふふ。な。ハ。辨
む。に。お。よ。ぶ。但し。聊。通。曉。と。す。此。の。一。二。術。と。後
小。掲。ぐ。見。る。を。

量其井南後篇卷四

平町見之圖

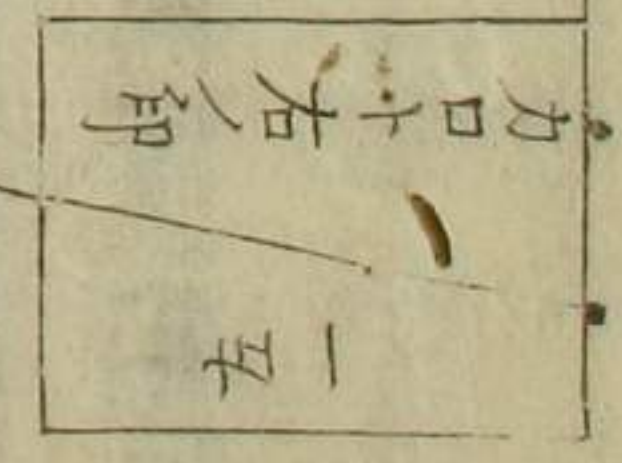
遠近術也

短矩左ノ印ヨリ出合迄ト甲ノ
通り等ノ計ル此遠サハ水繩ノ
左ノ印ヨリ向ノ目アテマテノ
遠サナリ
短矩右ノ印ヨリ出合迄ト乙ノ
通り等ノ分ル此遠サハ水繩ノ
右ノ印ヨリ向ノ目アテマテノ
遠サナリ



水繩印ヨリ印迄六十間

水繩印ヨリ印迄六十間

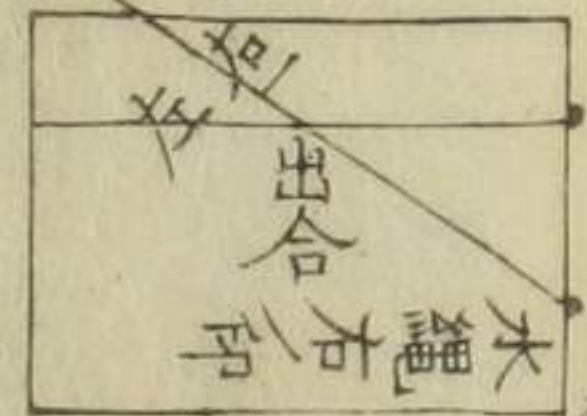


向目當

上町見之圖

高低術也

水繩一尺五寸計ヲ地ヨリ高ク
張ニヨツテ水繩ヨリ地迄ノ見
通弦ノ如クニ何尺ト知テ此寸ヲ
出合ヘ加ヘテ則地ヨリ峠迄ノ
遠サトシルナリ急ナル上リヲ
見ルモ同斷ナリ



印ヨリ印迄三十間

水繩左ノ印

○山峠

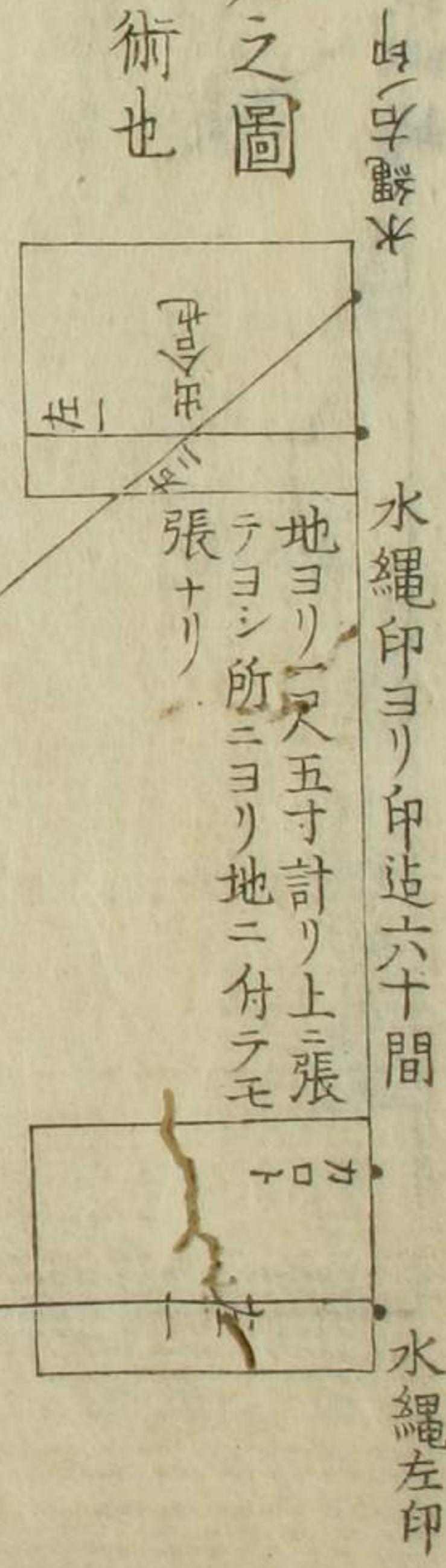
量也昔南後篇卷四

五

量地占首南後高卷口

下町見之圖

淺深術也



水繩印ヨリ印迄六十間

地ヨリ一尺五寸計リ上ニ張テヨシ所ニヨリ地ニ付ラモ張ナリ

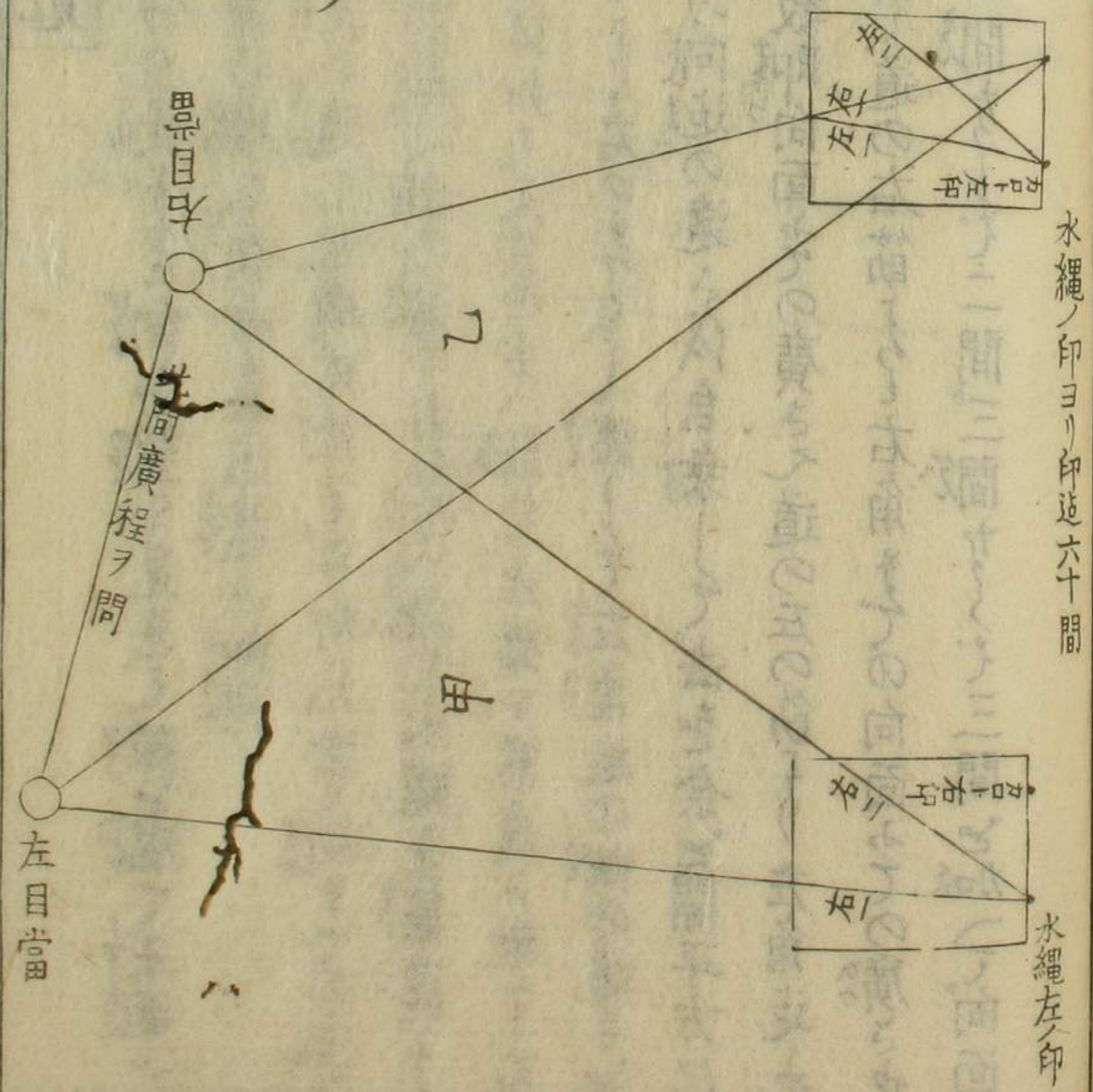
水繩左印

水繩ヲ高く張テ地迄ノ寸尺ハ
不入ナリ出合迄ノ長サ則チ谷底
ヘノ遠サナリ
急ナル下リヲ見ルモ同断ナリ

谷底

向町見之圖

廣狹術也



水繩ノ印ヨリ印迄六十間

水繩左印

甲ノ通り向ニテノ
間ヲシルナリ

右目

同廣程ヲ問

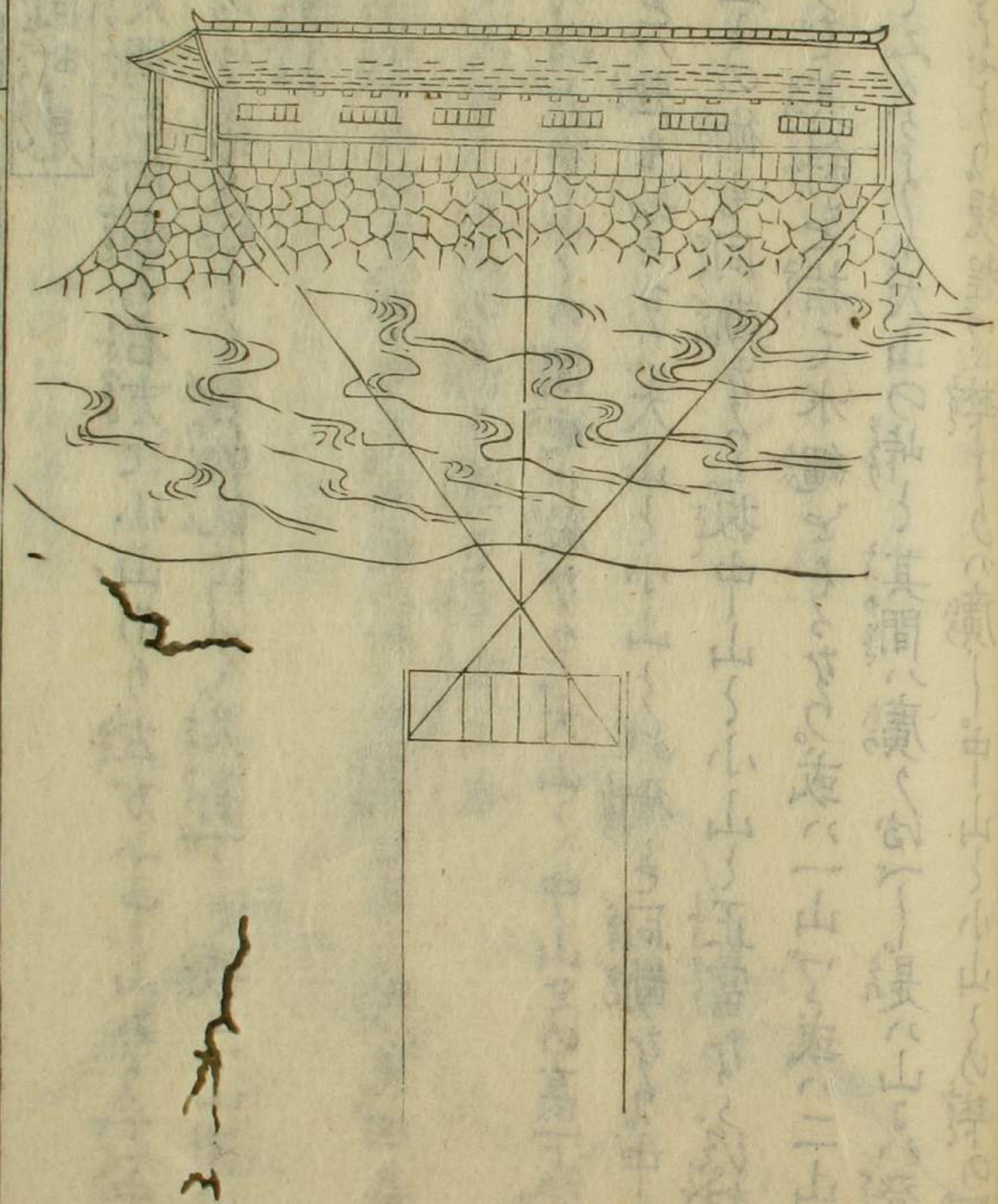
左目

量地占首南後高卷口

六

廣遠二術町見

或人問曰細道何是。是より向を望み見せし。堀と隔て正面小長屋あり。其長屋の廣さ。長屋までの遠さ如何。術曰先狭き間尺を隨て水繩を張り。平町見めて向までの遠さと知れ。扱細道の先へ出て道の右の方へ添て水繩を筋違り張つ。左迫の遠さ知る。又左の方へ添て水繩と筋違り張つ。右角迫遠さ知る。右のびら。然して左角迫の弦の遠さを自乗して其内の向迫の遠さを自乗して去を余と開平方に開き。倍之して此数即向面あての廣さ。道の左の筋より左角迫也。右方も同術あり。道の右筋より右角までの向面あての廣さ也。是に細道の幅二間たり。三間たり。三間を加へて向面の廣さなり。



乱回町見

或人問曰向面むかひ。右方みぎに小山あり。左方ひだりに中山あり。正中せいちゆうに大山あり。かくれごとく目的めてき乱らんにして其高下たかねと彼あつと山間の経けい地幾ちい于や

術曰先上ひつり町見。平町見。向面の町見。高たかねとさる町見。四色しやくを以て。大中小三山の高たかねと遠とほと各知おの之也

扱大山と中山との間地ハ股またなり。大山と中山との高下ハ勾かま也。然しかもバ弦つるも知るなり。大山と小山と此術この術と同断どうだんなり。中山と小山との術この術も同断どうだんなり。扱中山と小山と正當せいとうなり。此斜この斜曲まがわらむ其斜この斜を指さて水繩みづづなとさるなり。或ハ一山ひとづ或ハ二山ふたづ分わかてみるなり。大山の峰たかねと其間ハ廣ひろくおべし。是ハ山やまハ登のぼり斜この斜ありふより。規程きていづ棊このよりハ廣ひろく。中山と小山との棊このの間ハ

狭せまきとのちり。小山の棊このにて山の西方せいほうと向面町見あり。見る時ハ棊このれ指渡さしの徑みち知るなり。棊このの幅ひろ廣ひろくも。棊このの真中まんなかと棊このの外端ぐわいと此間このを知しるなり。別の山このも同断どうだん然しかもハ山々の下徑このと知して半このして勾かまう股またうふ用もちて。其山の高たかねと此勾このう股またうふ用もちて。弦つるハ知るなり。弦つるとつひハ山の登のぼり斜この斜規きのこつと。小山中山この棊このあての廣ひろさハ。甲このと名付なく。中山の下の半徑このと。小山の下の半徑このと

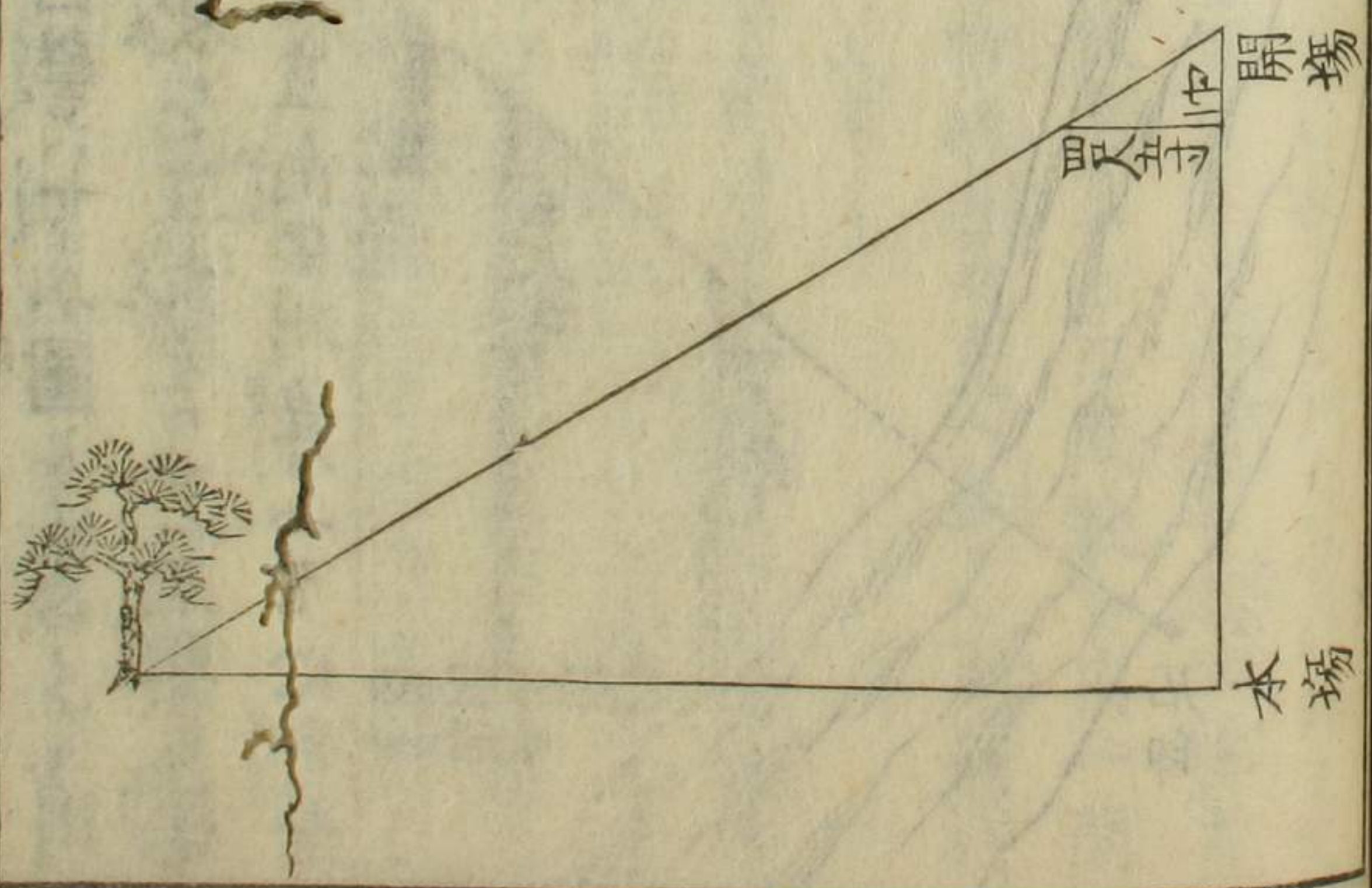


和して是へ甲と加へるの數ハ小山中山峠と峠との廣さ也
別の山も同斷然ととも小山中山同ト高されとれと。右の
と。中山假令ハ小山より五十間も高くても此五十間際
迄の廣さく知るなり。但上までの廣さなり。此廣さ自乗と五十間自
乗と和して開平方を開て。此數則中山の峠より小山の峠
迄の弦にその廣さあり。別の山あても同意なりと

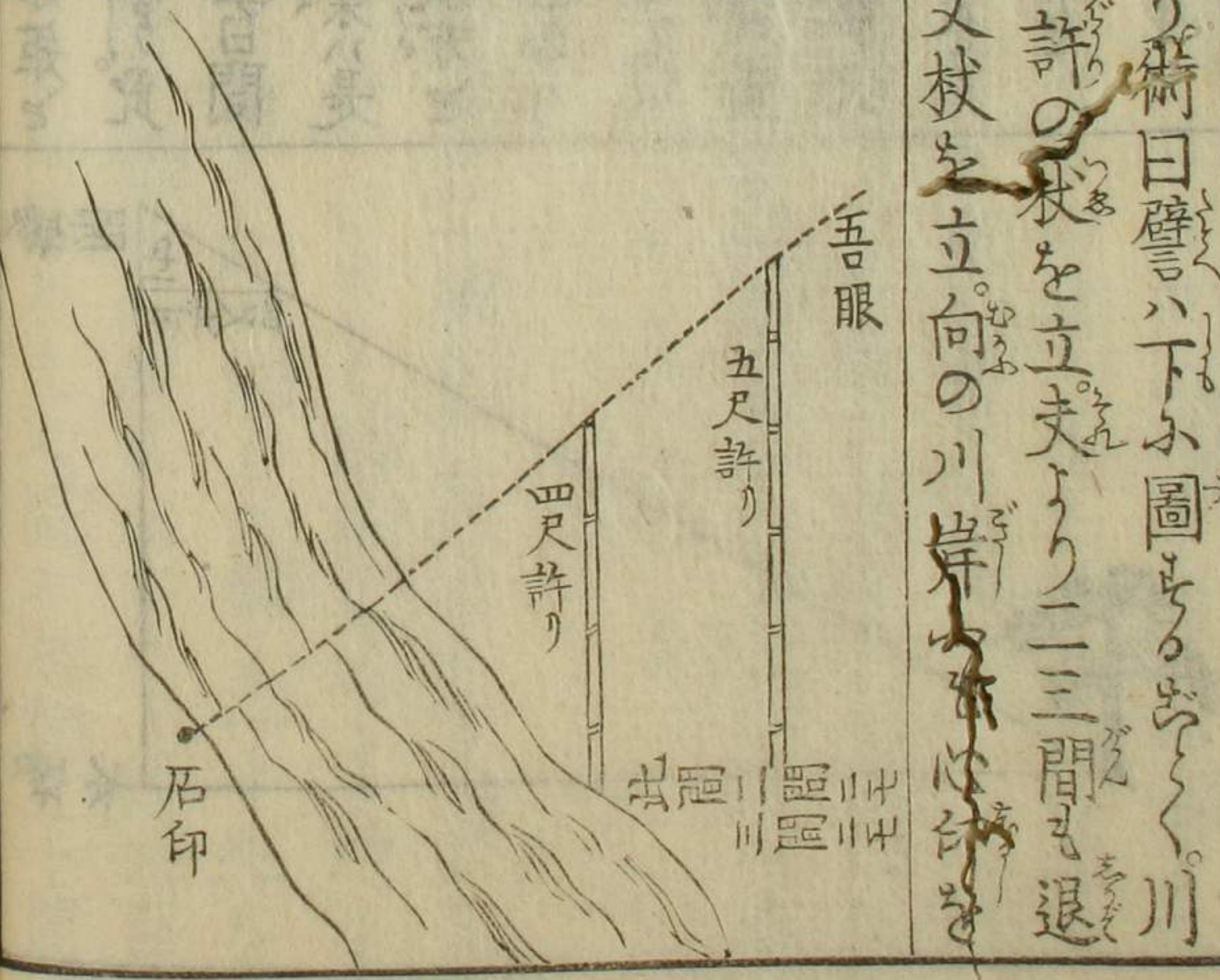
知遠近

術曰先正面の目的を見込。右へ成とも左へなりとも。開さ
て。又其所よりを目的と見こむなりと。扱始見込る所よ
り。十間照へ開きたる角より横一丈一尺を
差出し。其矩めて豎の竹筋を量るに。四尺五寸ありば。四百
五十間なり。五尺ありば五百間なり。又開の間數二十間

なりば。二寸の所まで横一尺を
出し。其端より豎一尺筋を引。此
條を量る。九尺ありば。九百間
又一丈ありば。千間なり。余ハ是
とつて考へ。何時も彼方と
此方へ引さつて見る心あり。
横を開くこと成るれとらへ。
豎に進退して見るべし。其理規
矩術と違ふことなり。遠近廣狹
高低淺深をけらるる。是又
同然なり。故は是を贅せざと



又遠近是移しつゝも、何れも、曰、譬、ハ下、小、圖、も、さ、さ、く、川、幅、を、見、る、小、川、の、前、小、四、尺、許、の、杖、を、立、夫、より、二、三、間、も、退、き、吾、目、より、少、し、下、め、も、又、杖、を、立、向、の、川、岸、に、杖、を、立、て、二、杖、の、杖、と、心、印、と、三、所、小、見、て、極、免、若、見、通、不、揃、む、手、前、の、杖、杖、目、下、進、退、し、て、三、所、眺、合、処、小、立、扱、杖、と、杖、と、の、間、三、間、何、れ、も、先、の、杖、を、左、へ、あり、と、右、へ、あり、も、其、身、ハ、動、ら、ば、し、て、杖、を、し、り、と、立、つ、又、杖、と、杖、と、の、間、三、間、



あ、して、試、合、所、の、川、原、小、印、と、付、先、の、杖、より、川、向、の、心、印、を、間、數、程、川、の、廣、と、知、る、杖、を、立、替、見、る、と、ハ、回、規、を、廻、す、理、あり、但、川、端、より、一、間、や、ど、前、小、先、の、杖、を、立、と、ば、間、數、と、内、一、間、引、幾、も、川、の、廣、さ、と、合、ふ、杖、の、抄、眺、合、せ、見、へ、兼、む、末、に、横、竹、と、結、び、付、其、竹、の、上、より、見、通、し、て、よ、う、又、術、曰、杖、を、中、眺、小、鉄、炮、打、の、手、前、の、お、と、く、持、て、其、杖、の、抄、を、向、の、川、端、へ、見、通、し、杖、の、抄、上、げ、下、げ、し、て、向、の、川、端、の、目、付、所、を、眺、合、す、充、杖、を、持、つ、る、手、前、動、ら、ぬ、や、う、に、我、身、と、回、規、し、て、眼、へ、開、き、此、方、の、川、原、へ、見、後、し、其、杖、の、抄、の、目、的、ま、ま、く、間、數、を、ど、川、乃、廣、さ、と、知、る、又、術、曰、遠、程、を、隔、て、其、場、小、障、を、紙、を、疊、て、勾、股、弦、の、形、と、制、し、是、を、以、て、杖、よ、持、添、知、り、合、す、則、弦、を、正、面、の、水、の、上、

岸へ見通し。其杖と紙とを少しも離さずして。左右へかり
こも。後へかりこも見移し。其杖の尽る所まで。陸地よりして
歩數をもちつて間尺を極め。假令六百五寸跬あつたば三跬
を一間の積にして五十間なり。是即向正面求る所までの
遠程なり。

又遠程を量るに。此方より彼方を見るべし。假令ハ吾前
に六尺の棹を立。丈より又一丈進んで五尺九寸の棹を立
向の目的と。二本の棹と三所一致小脱合するなり。然して
一分を一尺の割ゆ。前の棹六尺先の五尺九寸を算し
て遠さ六十丈と知るか。或ハ先の棹二寸短くして脱
合ふべし。遠さ三十丈あり。或ハ三寸短くして脱合は
時ハ遠さ二十丈あり。又三寸短くして脱合ふ時ハ遠さ二

丈なり。是皆此方より彼方へ求る所の遠程と知るか。其理
顯然なるが故なり。其図を省畧するなり。

又術ハ曰吾前ハ六尺の竿を立。丈より二尺先まで四尺の
竿を立て。是と脱合は時ハ遠さ六尺と知るべし。又一丈先
にて四尺の竿を立て。是と脱合は時ハ遠さ三丈あり。又一丈
五尺先まで四尺の竿と脱合は時ハ遠さ四丈五尺と知る
なり。元て三倍よ見る。此心めて五倍よなりとも。十倍よ
なりとも。乃至百倍よなりとも。竿の長さと畠地の宜さと極め

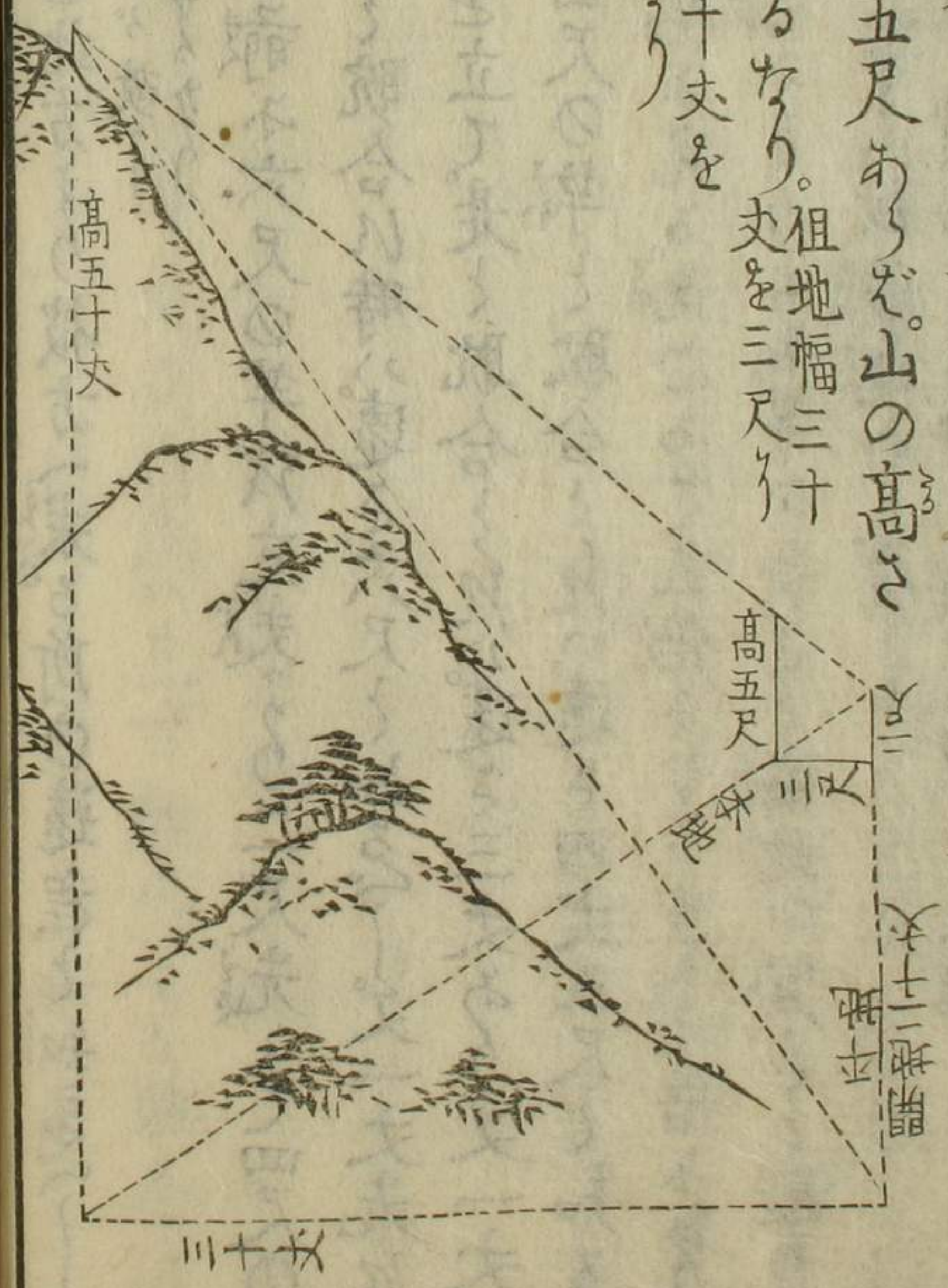
次第に。間數丈數遠近あるを。或問山の遠程と直立と。二品を一同に量ること如何。

術曰本場は於て彼方の山を此方より曲尺ふ合せ。三角に
見通し。三角小見通すこと。則術次は述より。其見通する形の動するやうに假

令ハ右の方横へ真矩に二十丈開きて見通し。又始の如く其所にて二尺の曲尺を出し。是も矩の手小合せ見るふ下まゝく三尺あり。地幅の遠さ二十丈と知る。又其所めて豎りて五尺あり。山の高さ

但地幅三十丈を三尺り

約先直立五十丈を五尺縮る理なり

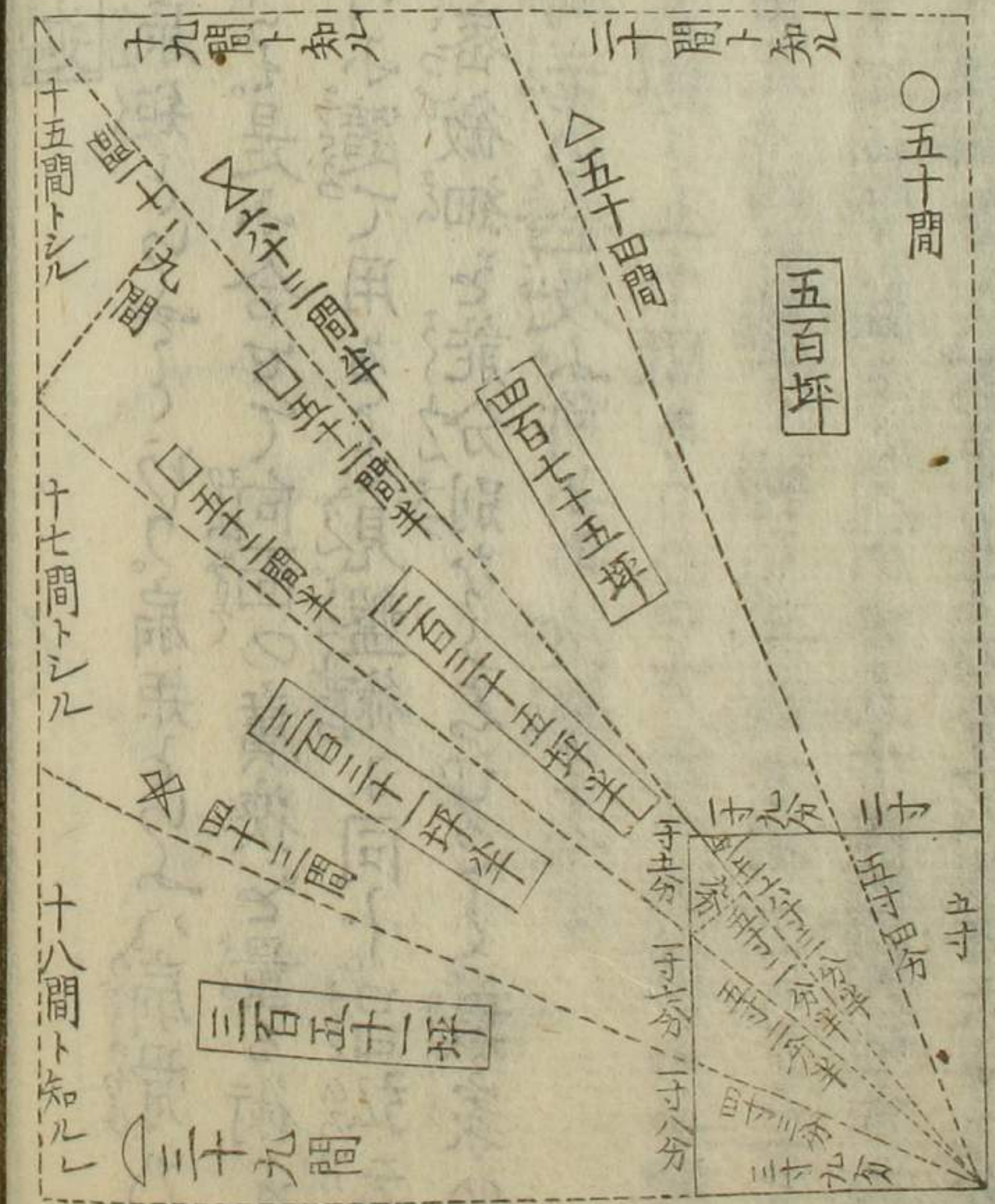


知廣狹並遠近

廣狹を知るふ扇矩といふ。扇矩といふハ扇骨のぶくた圖を作す。是小合せて向面の廣狹を量る術也。尤彼方の正斜小隨て用る。見盤術も同。昌弘云。ゆのてくに織密微細を能分別を志むること。數家の常はて規矩術者の企及ふ所あり。察すべし。

其法ふ曰○の方遠さ五十間あり△の方五十四間ある時圖面にて○の方五寸四分を削て其両方相去ること二寸あり。向の廣さ二十間と知る。又△の方五十四間△の方六十三間半ある時。圖面めて△の方五寸四分△の方六寸三分半を削て其両方手前を相去ること一寸九分あり。向の廣さ十九間と知る。又□の方両方ともに遠さ五十二間半づ

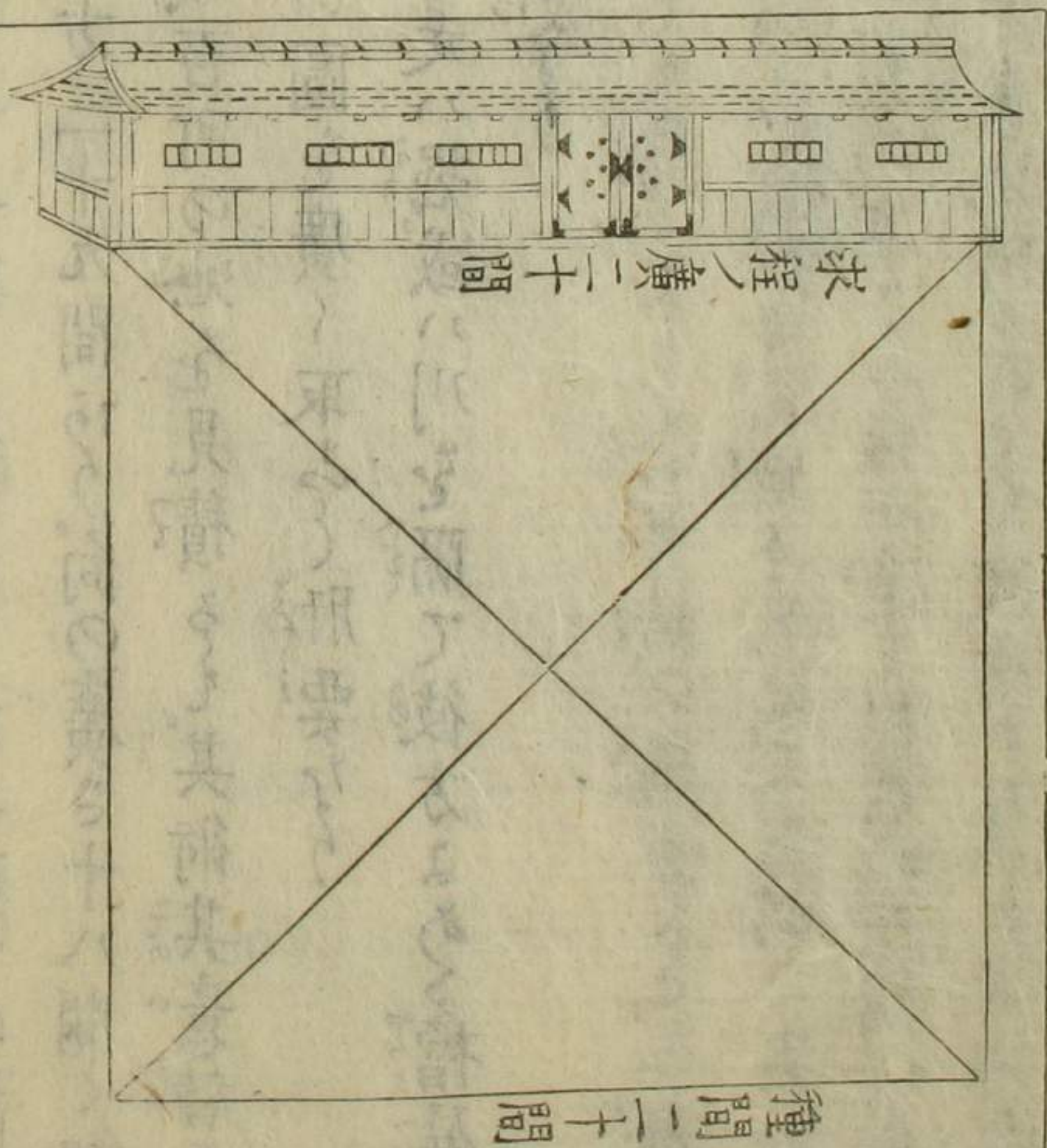
あり。圖面より右のどくく五廿二分半宛量る朝う。其両方相去ると九分あり。向の廣さ九間と知る。又夫より向めて三角の場あり。是も圖面小横し。左一寸一分。右一寸五分。廣さ九分あり。古法の如く。一分一間の積り。左方十一間。右方十五間。徑廣さ九間と知る。又□の方五十二間半の方



四十三間あり。向の廣さ十七間と知る。是又前方の如し。又△の方四十三間。○の方三十九間。向の廣さ十八間と知る。同前なり。幾十町。幾百町の地を見積るも。其術其意替る。あてなり。遠所程手前の圖を廣く取ると肝要なり。又廣狹を量る法あり。是ハ堀或ハ川を隔て彼方よある櫓屏土手石垣等を量る術なり。術曰其場小臨と杖にて扇して。又ハ鼻紙の類して。三角形を用ひ。先目的の右の方の端を正直に見込。又目的の左の端見通し。扱其より。左の方へ正面向進。目的の左端の正當小至ると。右方にて見込たる。どくく彼所より。目的の左右を三角小見渡す。如此して此方の左右の間數十五間あれど。目的の廣さも十五間なり。二十間あれど。目的

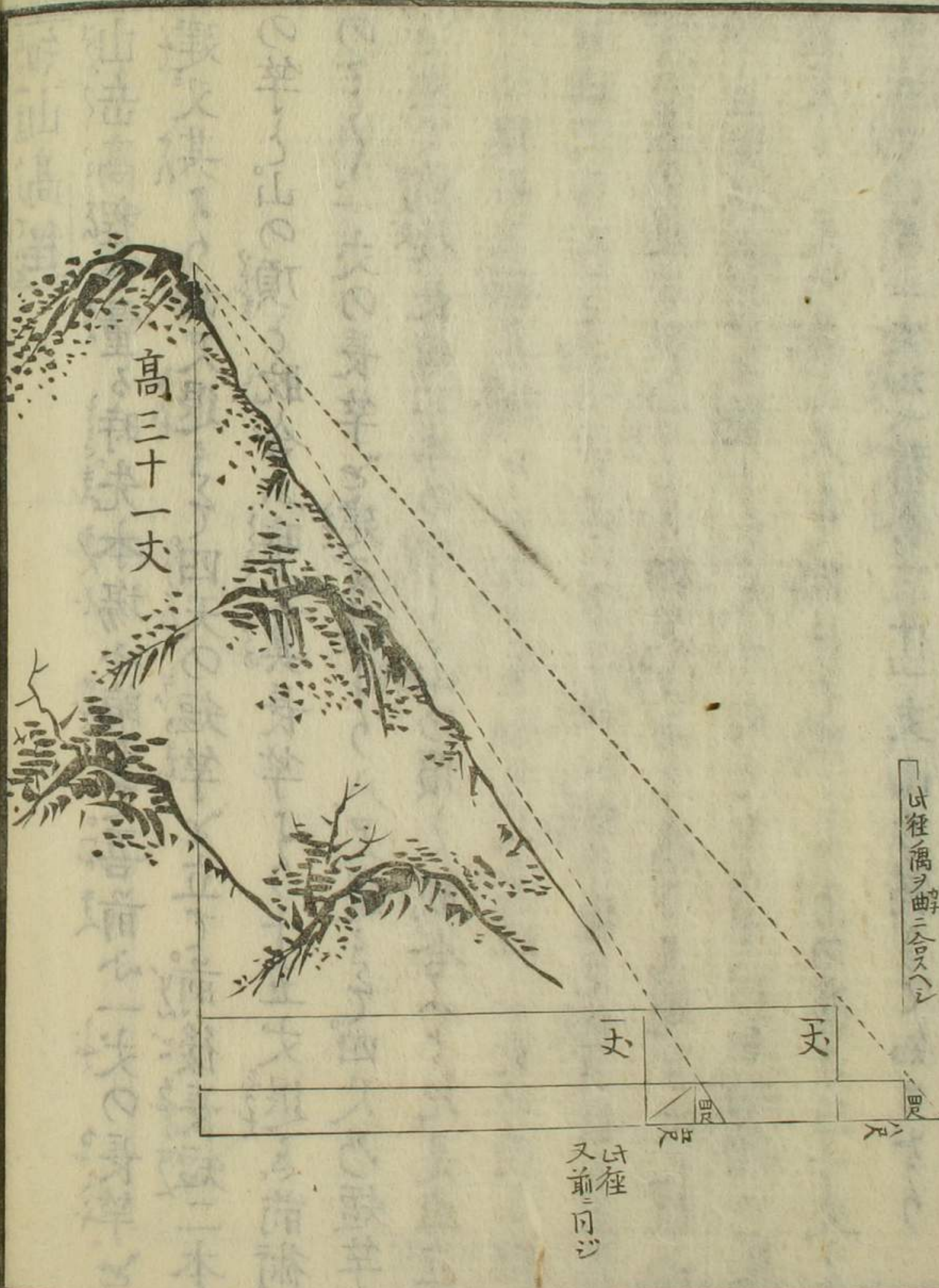
の廣さも二十間なり圖を見て詳ふとべし

私に云筭勘術は廣
狹を量る法如何かと
と書記たれども畢
竟同理同術なるは
もつゝ煩わしきを
省て載せ

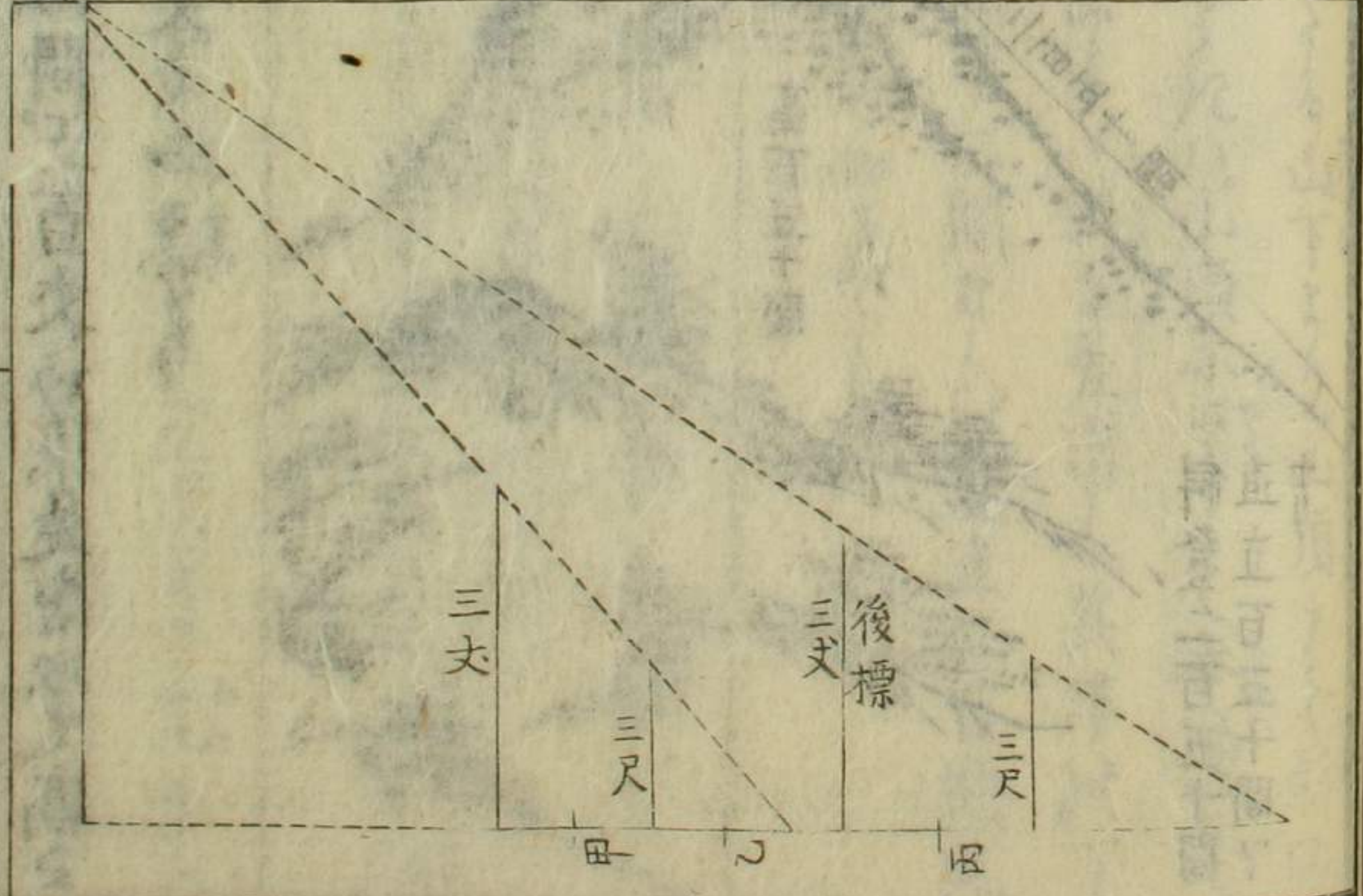


知山高程

山岳高程と量る時先本場小臨とて吾前ふ一丈の長竿と
建又其より四尺退とて四天の短竿と立て前後長短二本
の竿と山の頂と脱合ふ時又其長竿より十五丈退と前術
のどく一丈の長竿と建又其より八尺退とて四尺乃短竿
と立て前後長短二本の竿と山の頂と脱合ふとた是直立
の高程あり扱其詳なるを知らず長竿一丈の内は短
竿四尺を引と去り六尺となり扱又始の退と後の退と五尺
と八尺の退とゆへ下より四尺上より高さ見通す心之故ふ
十五丈ふ六尺を乗とて九十丈となるを初後の退
五尺と八尺の差三尺とて除けぬ竿より上の高と三十三丈と
かる是に竿一丈加へ都合三十一丈山の高さと知るなり



又術曰。長さ三丈の標木と。長さ三尺の標木と。二本宛と以て。計るなり。圖のどろく長竿の内短竿と去て。二丈七尺を丁と。圖のひと相乗して實と。圖の内甲と去て。余二丈と法と。以て實を除て前の竿の長と加へく高さなり。別甲乙相乗と法をゆめく除て遠さなり。假令ハ前小竿ヲ立て。短竿と退れ去る。六十丈。甲と。後小竿ヲ立て。短竿と退ると去る。六十二



丈丙といふ。前の短標と後標との間五百丈なり。是を以て高さ六百七十八丈遠と。一萬五千丈と知るなり。

又山岳の直立と知る術を問

答曰山上より平地迄

斜の間敷を別術を

以て兼て量りて知る也

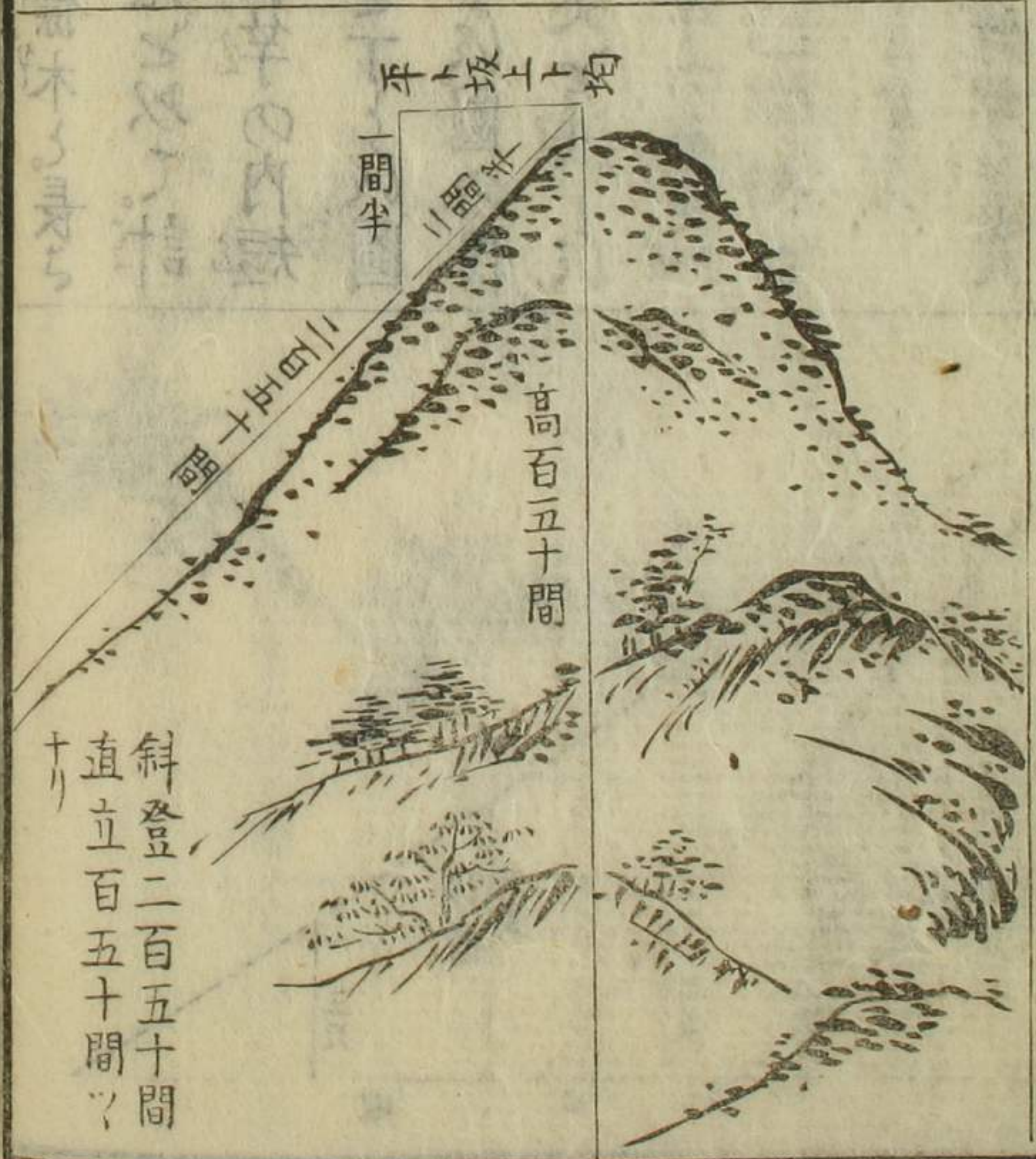
さて後直立を知る也

平陸より山頂までの

斜登の間敷を量りて

知る術も前件に詳

かりと曰ふなり



術曰豫め別術を以て量りて知る山下より山頂までの斜の間敷たゞむ二百五十間あるなり。山頂に至りて本場と定め。それより二間半の竿を設け、斜に差出し、其竿は下端より又別み直立の竿と立させ。此竿二間なり。直立二百間。此竿一間半なり。直立百五十間と知るべし。

知物高

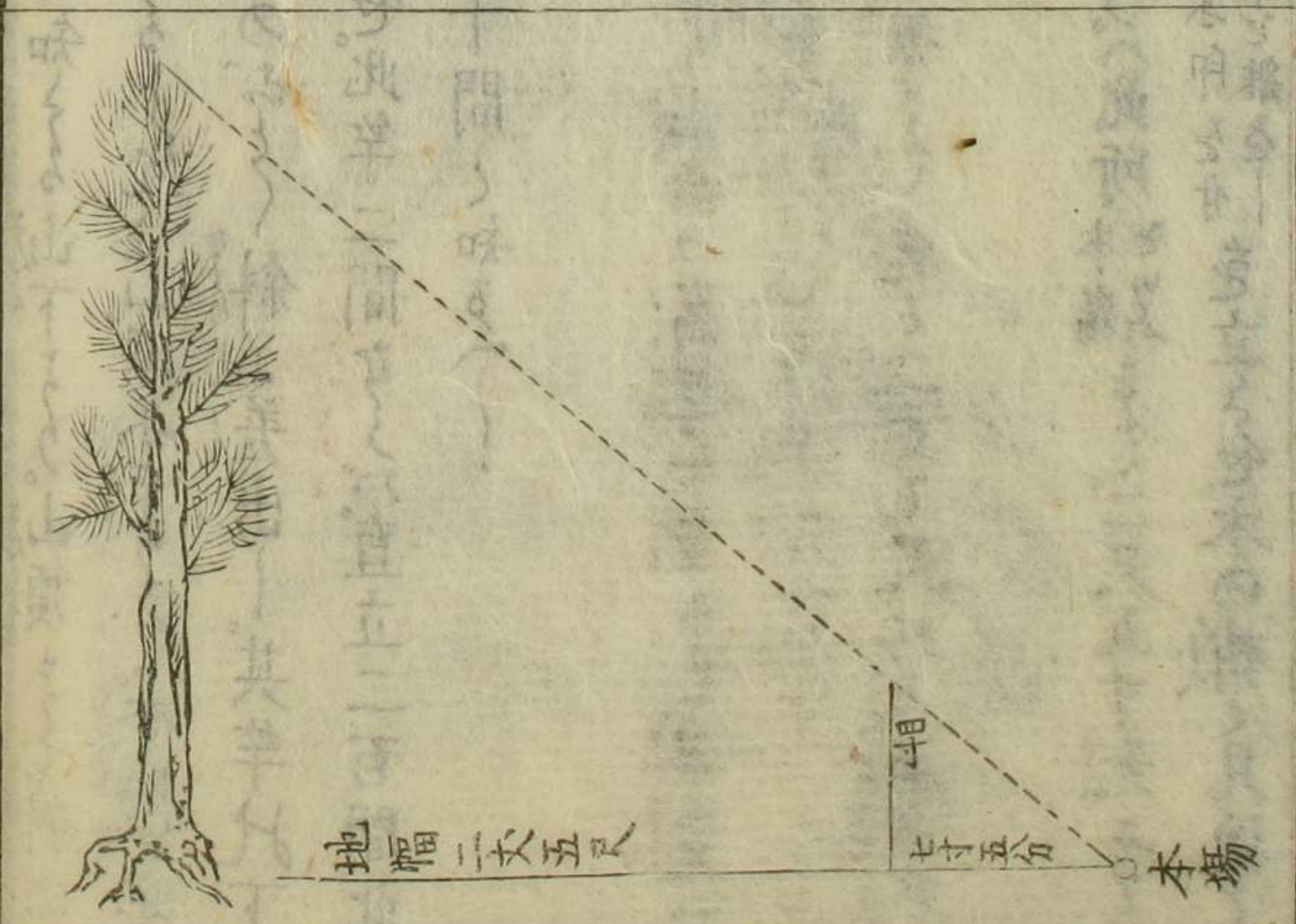
知物高といひ知木高といひも。山岳の高程を量るも。畢竟ハ一術なり。其術名を別たれば爰に其終ふ記す

或問曰今此所より向方木の根まで遠と二丈五尺なり。彼立木の高さ幾を知るの術如何

答曰術曰地幅二丈五尺あり。此所本場より二尺五寸先あり。五六尺の竿を長く見通の所印を付て立させ。木の梢と見通と

三所一平小見渡す。此竿即木の高さなり。但二尺五寸の所まで竿五尺ありて木の高五丈と知る。又二尺五寸の所にて五尺五寸ありて木の高五丈五尺と知る。

又云木の根まで二丈五尺あり。時其所小一丈の竿を立て又五尺退る。竿の端と木の抄と三所駢合せ。地より四尺上目とあてて見通す。積より竿の高を六尺として相去る二丈五尺を



乗して後小退く。五尺を除けむ。竿より上の高さ三丈と知る。竿一丈加へ木の高さ四丈と知るなり。

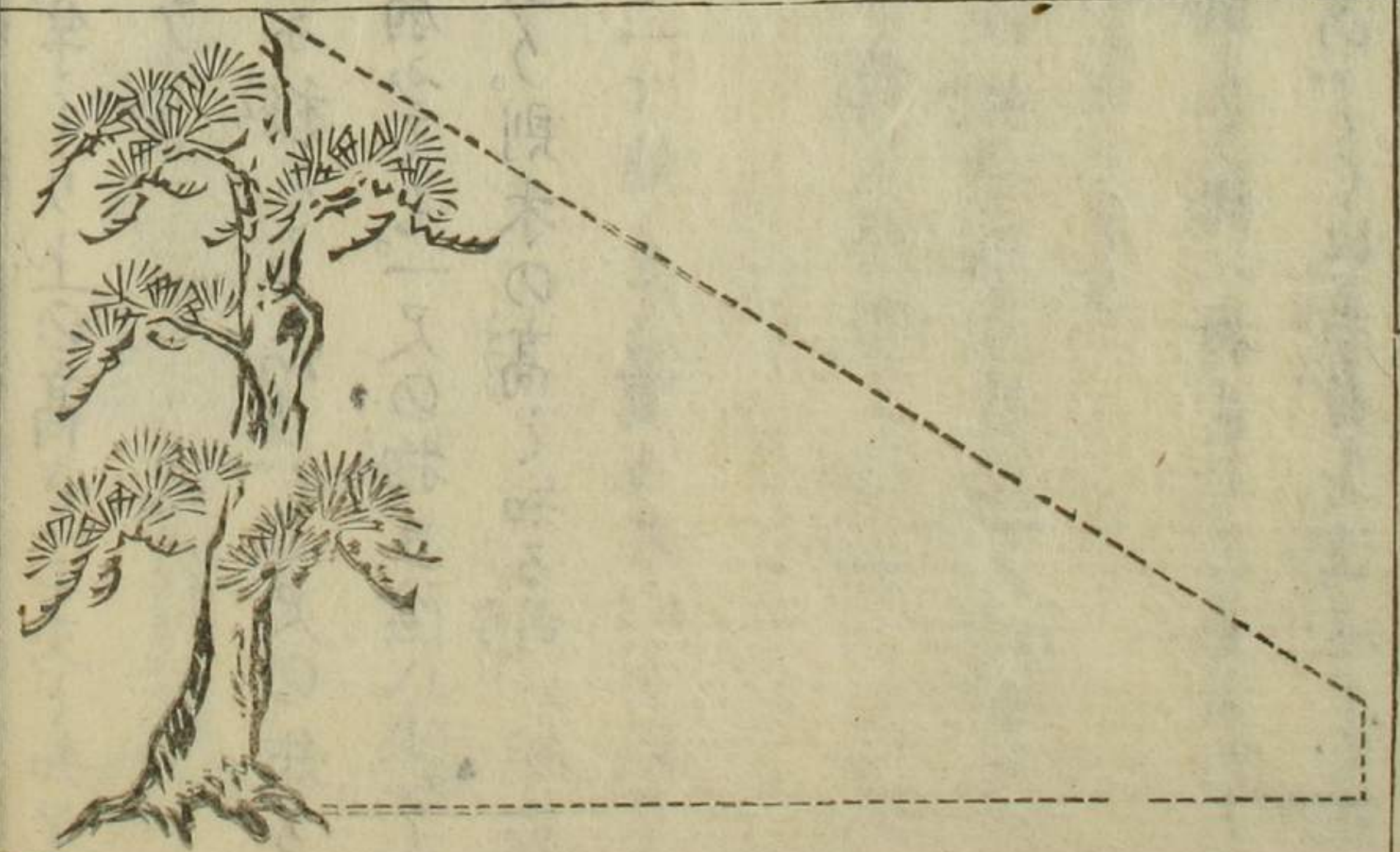
又別術云。晴天の時木の日影地ふ移るごとく一尺の矩り扇う。是を以て量る。其矩少くも扇少くも一尺の物。日陰八寸あり。八寸の矩少くも量るとハ二丈五尺あり。則木の高と知る。或ハ矩扇一尺の物の影一尺二寸ありて一尺二寸矩りて量る。此心を以て竿あても知らるる。

又別術云。吾目通ふ杖を向上より手持て木抄と吾拳と杖端と三所一平小見渡す。扱其杖を木の根の通るまで横へ打かへ。杖端よりある所まで間敷を度。木の高さなり。又別術云。紙を四角に折て。又其隅より隅へ折む。三角の物となる。是を我手よ持て。木抄と腕金のどくに吾身を進退して能

合所ふ止る。此所より木の根まで
即木の高さより。四方にわけて見ると
心なり。勿論又是小居長三尺と加
へて木の高と知る

或問曰向正面より堀を隔て櫓より
此方より彼方の櫓の下まで。平町
見を以て量るふ。遠さ五町あり。此櫓
の窓までの高さ如何

術云前表と後表と。右の堀の手
前より陸地小立て。右の櫓の窓と弦
より見通して。則二表の間の地径の尺
と以て。前表の尺の長を除て得数と



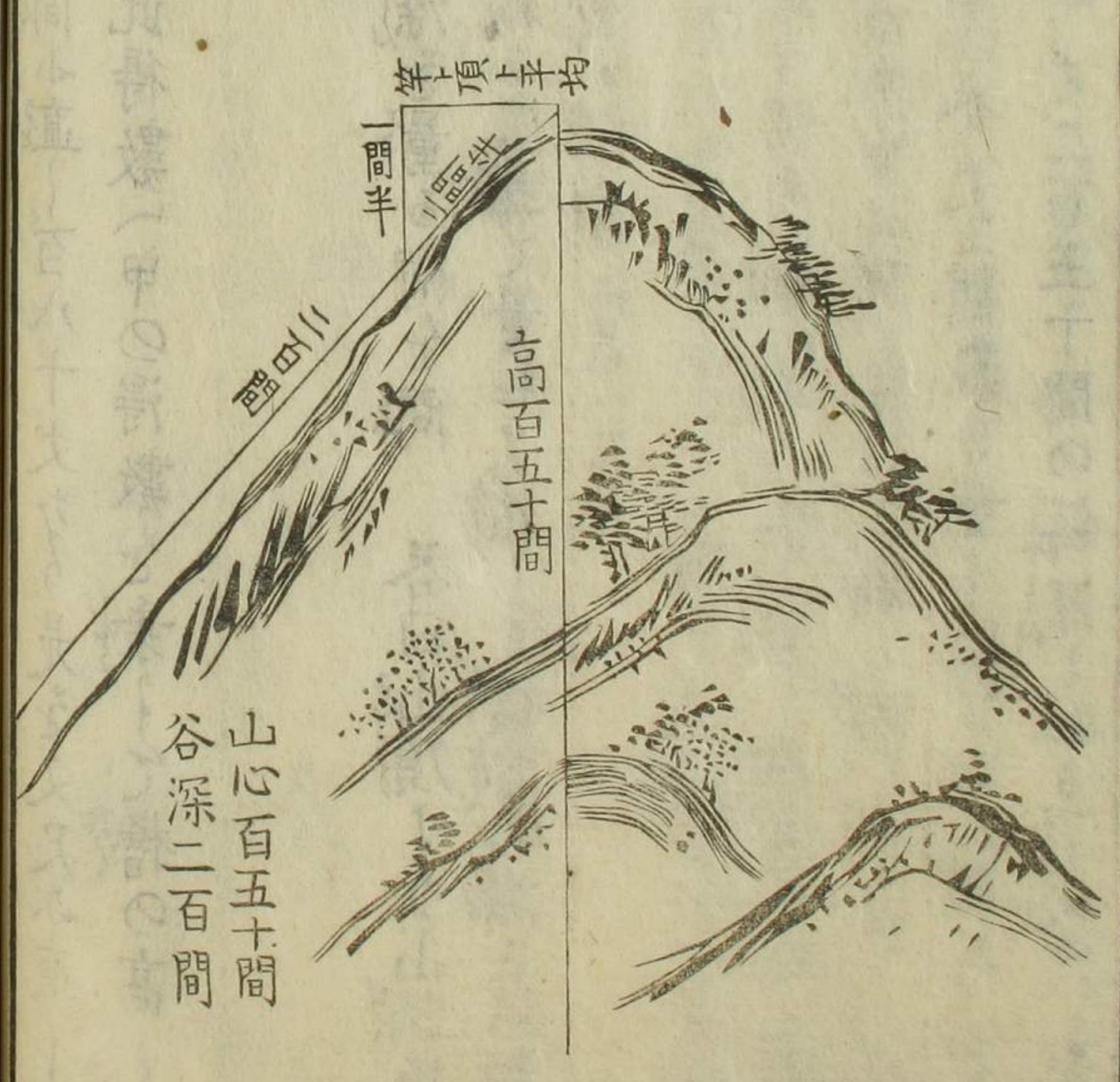
甲より五町を間ふ直し。百八十丈なり。是を又尺ふ直し
千八百尺なり。此得数へ甲の得数を乗して櫓の高と
知るなり

知谷深

或人谿谷の斜深を量る術を問。答曰山頂より山軸迄
直立の間数。別術より兼て量知。然して後谷の深さ知
なり。別術の作法を前章小見へたり

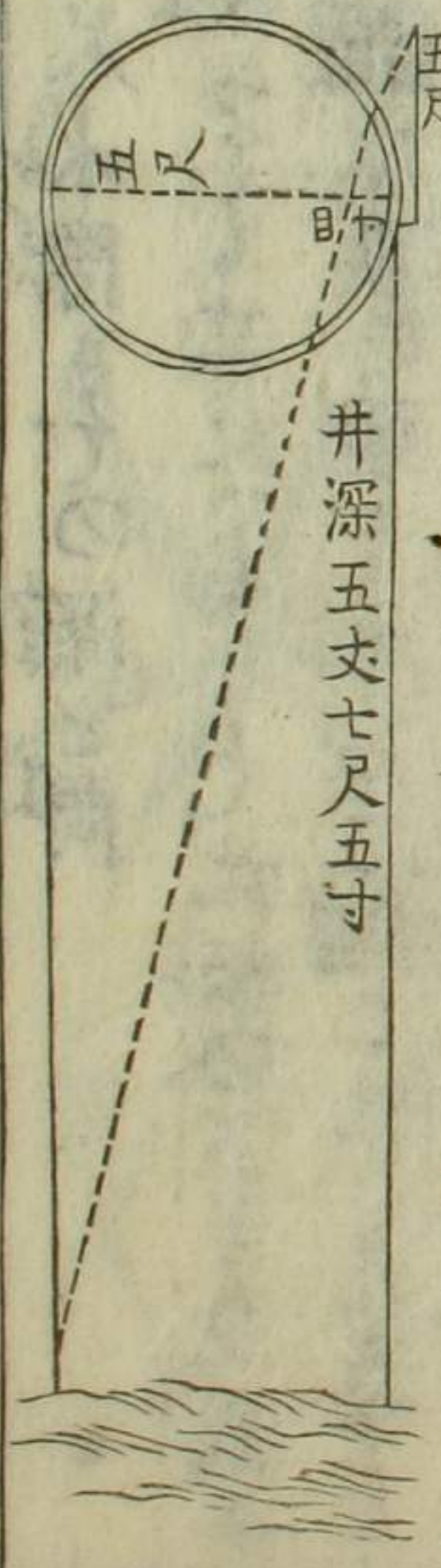
術曰兼て別術を以て量ると知る。山頂より山軸まで。直立の
間数。たとへば百五十間ある時。先山頂に至り。本場を極め。扱
其所より一間半の竿と山頂と竿の上端と均くなる所より。直
立に立させ。其竿の木まで間数を量るに。たとへば二間あり。と
二百間。二間半あり。と。二百五十間の斜深と知るべし。余はさ

これよ効よ
私よ云等勘術
に谷の深さと知
法如何程も書
記したことも畢
竟同理同術な
るを以て煩々
々ハ省て載す
覽者術のすく
なれを訝るふ
あしかりきと
りよ



量井深

或問曰茲よ水井あり。口径五尺。深底とまらば。今其水面迄の深底幾なり。答曰深さ五丈七尺五寸なり。術曰新小井幹よ添て棹めても杖めても正直よ立て。其末より。又假よ六七尺の弦ふなるづきものを差出。此頭を杖の頭と水面の向と弦ふ見通。其立たる股の本五尺の本よて。弦四寸開く此四寸の勾口を以て井の徑惣勾の五尺と量せば。十二半なり。十二半ハ六丈二尺五寸なり。此内假小立たる五尺の棹を引む。機五丈七尺五寸なり。棹杖ハ四也。股也井徑ハ三也。勾也假物ハ五也。弦也。



又問曰水井徑四尺。水際までの深と問
 術曰井戸がいは杖あても竿にても立て。此板の下より。假小
 勾弦出し。此勾の頭と杖の頭と水崖の向と弦は見通し
 則杖の長さ弦以て。勾の長さ弦除ると勾配なり。是をりつて
 井の徑を除きて深さ弦知るなり

知水深

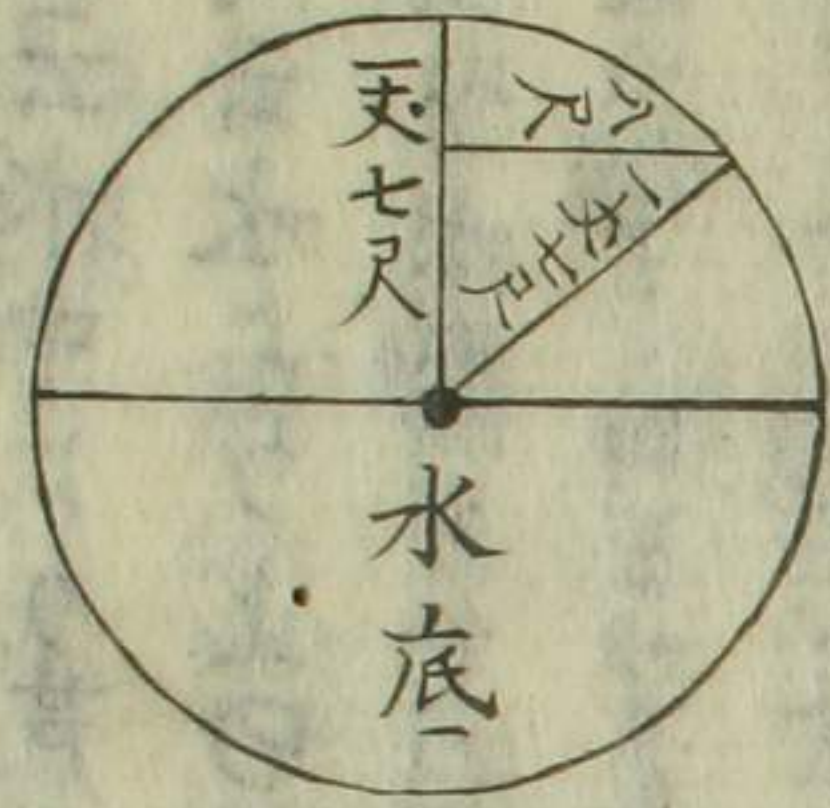
或問曰池中葭二本根を連結並じて生なり。水底の深
 さハ知をくらむ。水面より出くる所二尺あり。水底までの深
 さ幾乎

答曰水面より池底まで一丈五尺葭の長さ一丈七尺あり
 術曰葭二本の内一本の稍を斜に引撓りて水面と除ると
 初直立の所を除くと隔るとハ八尺あり。叔圖の如く。二尺

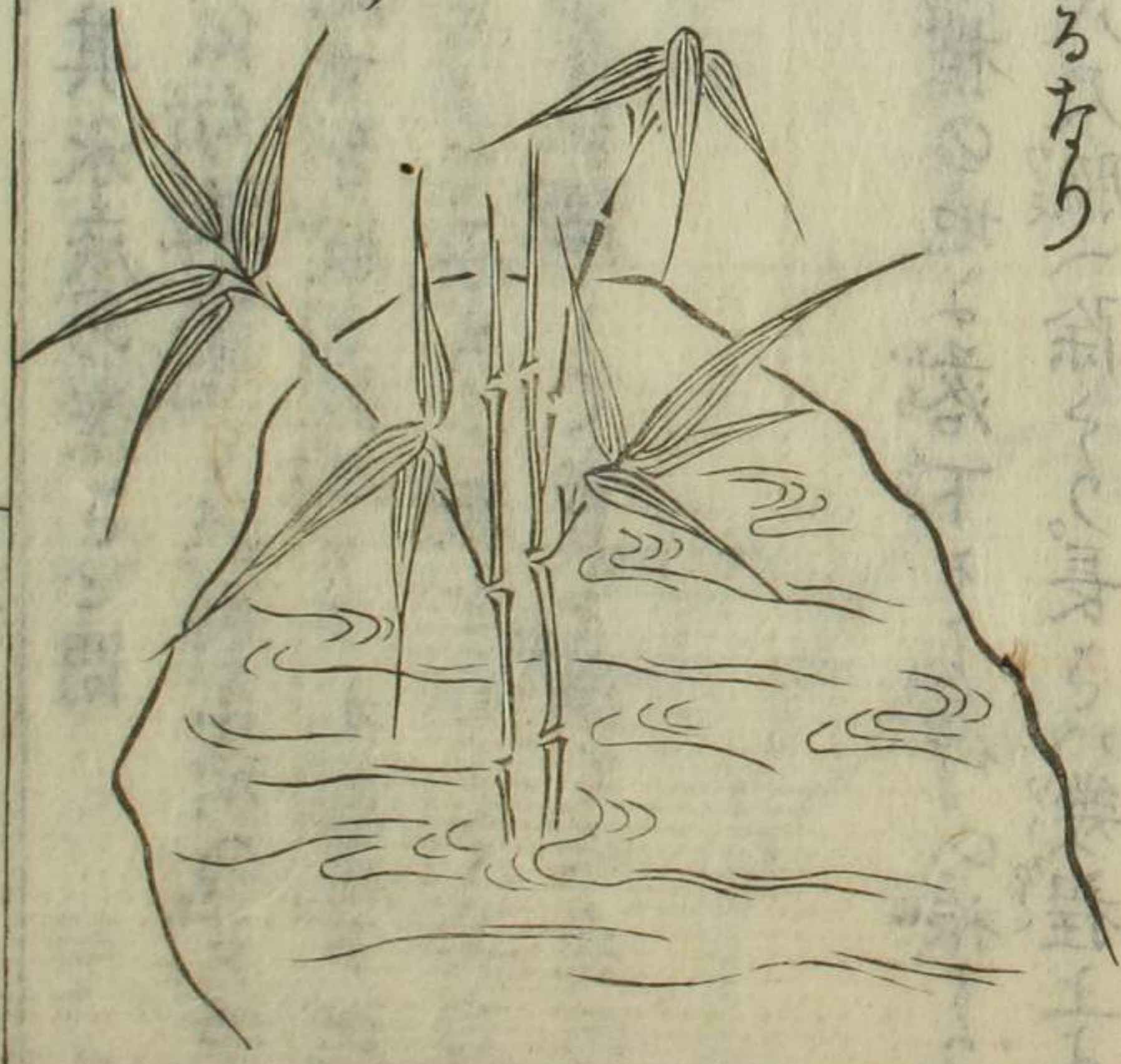
と八尺とと。二寸と八寸小縮めて圖し。是を渾堯をもつて
 規圓して量るとハ其水面より池底まで一丈五尺也
 葭の長さ一丈七尺と速ふ知るなり。是ハ機轉の術とも
 なる。算術も其法を述るなり

水深一丈五尺
 葭長一丈七尺

葭二莖



此圖ヲ按シテ
 知ルヘシ



量地指帶後篇卷四

又云水中より芦生ト出る其水底の深さと問
 術云水より上の芦の長さハ勾弦の差と比。則出所の芦の
 頭を水際まで引撓り。此寸を股と比。土より水際迄芦の
 長ハ勾と知るなり。則差と自して子より股を自して其内
 比子と去て余を實と比。差を陪して實を除て水底の
 深さと知るなり。

折竹術

或問云爰小雪折竹あり。梢の地より落下ること。竹の根より
 上二尺の所まで。圖のどくくハ尺股へ除り。長さハ幾程上よ
 り折む。全竹の長さハ幾程と問

答曰根より折目まで一丈七尺也。折目より梢も一丈七尺也
 術ハ池中葭の法と同ト

又問右ハ所謂竹の折目半なる積
 なり。折目若梢の方。短き時ハ如何

答曰折目梢短き時ハ竹の根へ引
 付らる心持して。假令ハ根より一尺
 上ふあつて。一尺上より前術の如く
 して後ハ一尺加へ知るなり

又問折目梢の方。長き時ハ如何
 答曰折目梢の方。長き時ハ下ハ圖
 するごとく。折目より下の豎を股とし

四と比。折目より梢の地より下る所を弦とす。五と比。根より梢
 のあたる所の間地を釣とす。三と比。圖のどくく。釣六尺ある時
 ハ其隅の六寸の所まで。矩よ合せ。刺盤の法のどくく切て



ととむると。小股八寸と。弦九寸八分なり。是を十双倍して。股八尺弦九尺八寸。鈎六尺と知るなり。委ハ圖を考ふる。

量流物

或人問云爰小長流水あり。水上小流木葉あつて流る。一眨の道程何程流ると。答曰三千三百七十五間。術小曰流る木の葉呼吸一息は三間つゝ流る積めて呼吸昼夜一萬三千五百息なり。是は三間を乗ずれば。四万令五百間とある。是を十二眨よ除すれば。一時三千三百七十五間とある。

量行程

今旅行の人あり。大畧一日の行程何程と問

答曰一呼吸の間は三間。歩むれば九里十三町半なり。

術曰呼吸一日一夜一萬三千五百息と云。是を昼夜よ折半して。一日六眨の呼吸六千七百五十息なり。是は三間を乗して。二万零二百五十間とある。是を二町六十間を以て除けば。三百三十七町半とある。是を一里の町三十六町を以て除て。九里十三町半と知るなり。

量雨高下

今左右雨所小火見櫓あり。其高下を量る術如何と云。術曰手前の敷居上より向の敷居上と先上り。先下り。と疾と先見極るなり。極定木の上と塞ぎ。定木と横めて。樋の内より見て。先上り。高し。知る也。上り



町見多く則向の高と低知呈。平町見よて向の遠とを
 分れをり。先下りるほど。下町見よて見通の弦を知て甲
 と向の敷居より上に目付として。平町見よて遠とを知
 て。股をりひとね甲乙をとりて鉤ハ知るなり。此鉤少く
 則手前より向ハ低とらふと低知るなり。

量地指南後篇卷之四終

量地指南後篇卷之五

勢南 處士 村井昌弘編述

渾發術

渾發切要

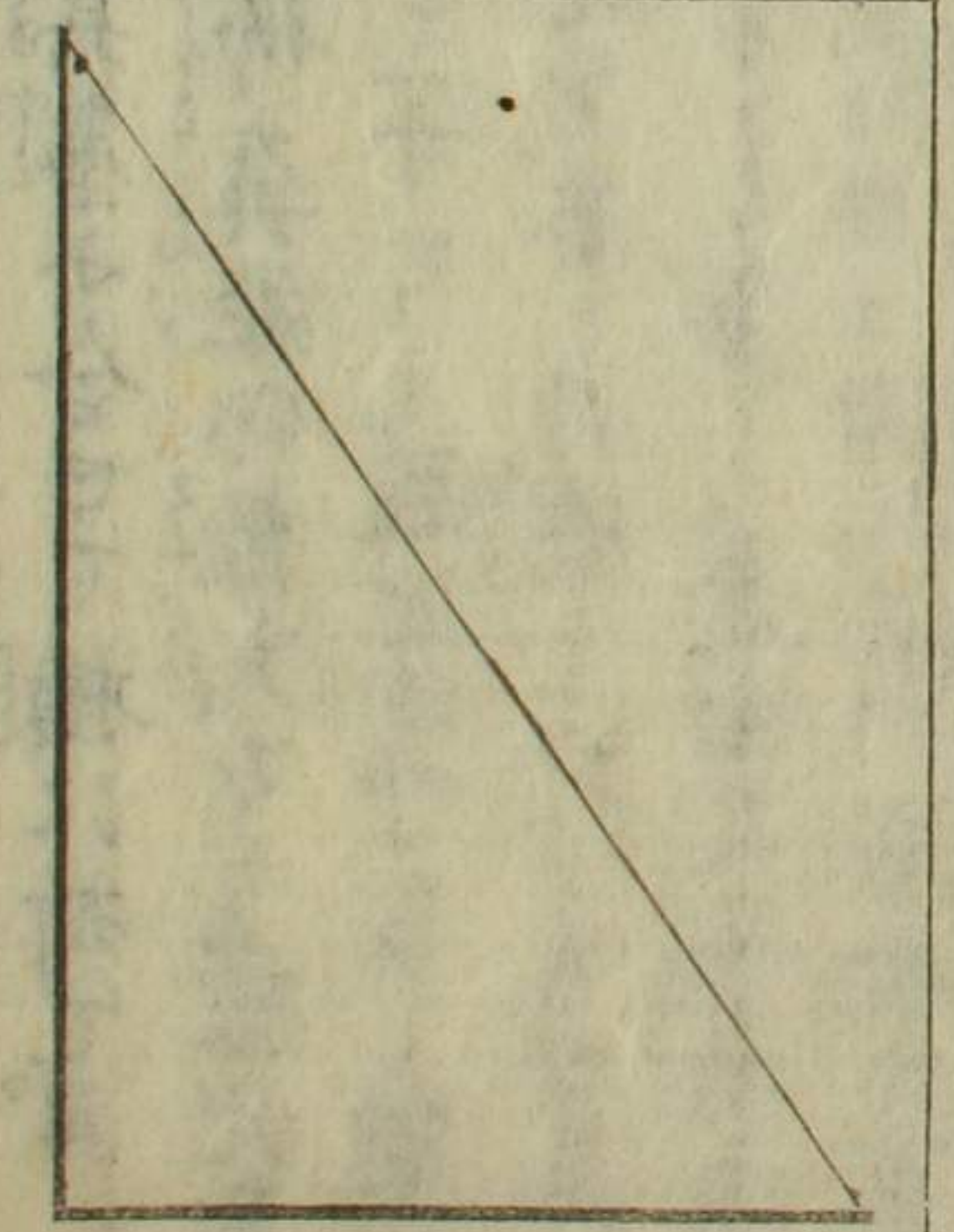
量地術小器械と用て。廣狹遠近高低深淺を量る。初
 中終の二段より學習すること。亦是小隨ふ。其初ハ見盤
 と用て一切の形と盤面小摸。其中ハ元器を用て。大小の
 事業を十字に顯し。其終ハ渾發と推考て無量の妙術を
 一本に盡す。蓋見盤の業ハ此地の種を以て彼所の形を
 知。諸の地勢と摸し取術をり。元器の業ハ當支の順逆
 と野帳道作ふ記し。分度の矩を以て方角を糾し。圖画に
 顯す術をり。扱渾發の業ハ見盤元器の両術を。此一本に畧

ちて遠近廣狹高下淺深洩す所を。詳し摸す妙術あり
 故不俗小本術ともいふ。其此渾癸を用ひ修練の切要八箇
 り。一曰堅体之法。二曰射形の習。三曰頰尺之定法。四曰物
 見之次第。五曰摸手之定寸。六曰右手頰尺。七曰左手揮
 癸。八曰縦横之習。以上是なり。最其切要と審ふすべし。柳
 又渾癸の妙用たるや。鈎股弦三四五の形。法。萬象と立
 所ふ摸し出す此神器なり。此器元來量地術一用の爲り
 制す非ずといふも。諳ふ量地の法。叶て微妙なるや
 夫三四五の矩ハ陰陽合和の數ありて。量地術の根本なり。方
 山曲直より。千形萬品此理ふ洩るることあり。因て其自在妙
 用の一二を左小記して學者を曉す。見るるべし。

算理渾癸發

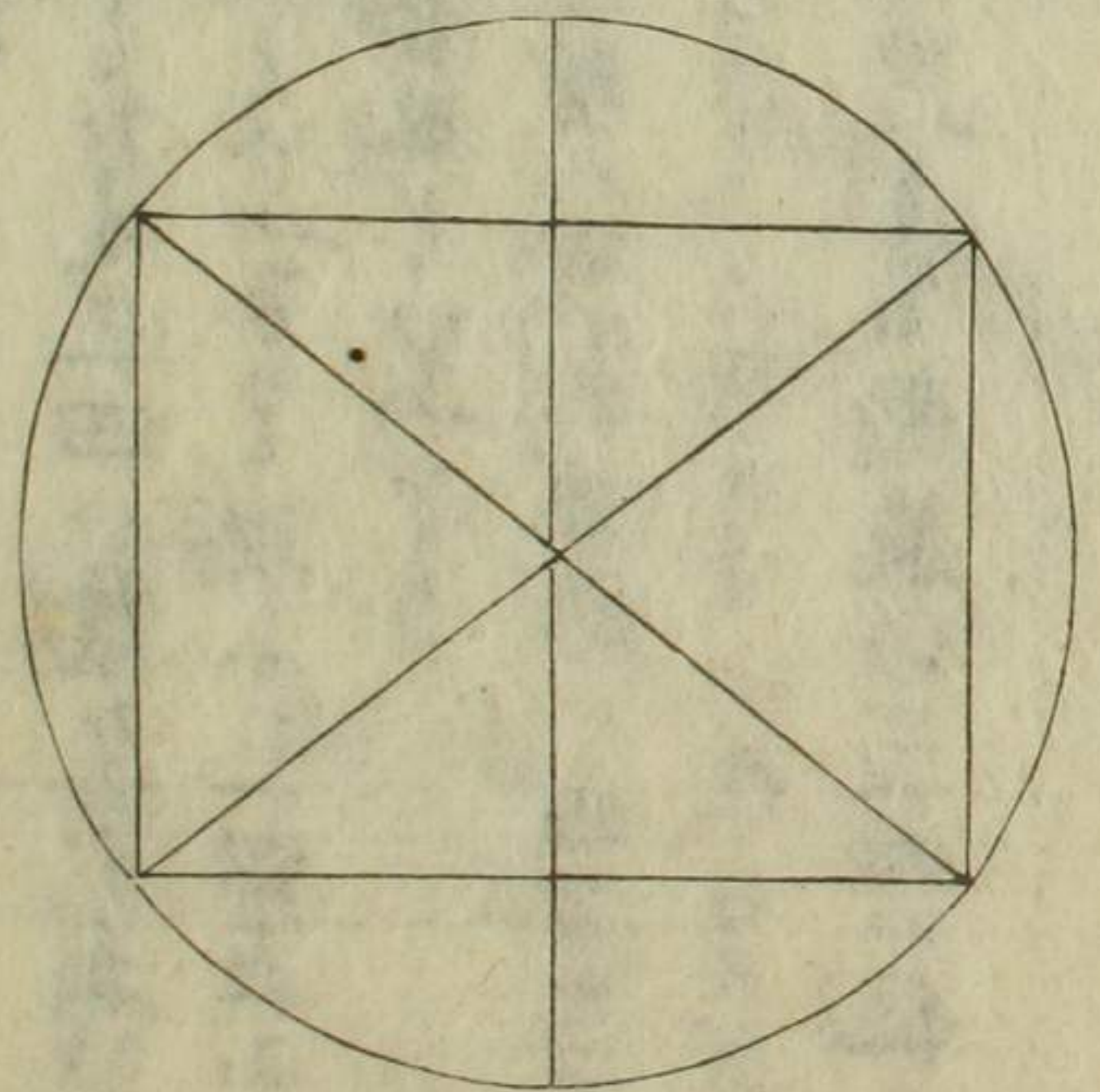
三四五矩

傳云算理渾癸といふ三四五の矩ハ本は。此ハ器物ありて
 真矩の癸見規矩古傳ハ量地術を根元也。易傳序云數也
 易也。其理一といふ。即此理。算法ハ此矩を鈎股弦といふ
 凡規矩の術ハ三四五といふ。縦ありて直る物ハ垂繩なり。是
 を三といひ。鈎といひ。又横ありて直る物ハ水平なり。是を四
 といひ。股といひ。其縦横合して斜直なる物を五といひ。弦也
 といふ。是を總て真矩といふ。蓋是
 ハ其理といふ。實ハ真矩尺と寫
 す器ハ即曲尺是なり。然といふ
 とも。其制廉ありて真矩ハ叶
 曲尺あること希なり。故ハ量地
 術ハ於て其矩を求め極むる



法ハ紙を縦小折て墨と引る。其墨小合せて横に折て墨と引けむ。乃十字形となる。是併真矩の根元なり。扱此真矩を得る。圖のごく。釣を三寸。股と四寸。留て弦を引渡す時ハ五寸。是を本と。然と。寸尺と用ると。ハ。三四五其寸小合。多。是曲尺の誤ある所なり。三四五寸に合。則ハ天地の理。小背。ナリ。渾堯の理。昌弘曰此言古傳の云。処。ナリ。姑。ナリ。隨て記す。渾堯の理。寸尺間町小拘ら。是を開て寸尺間町に名。妙用其中。小。今渾口を開て釣と三。計。又股と四。計り。而。弦を引渡す時ハ。の。此弦寸彼渾口。五。毫髪も差。故小寸尺間町に拘ら。唯三四五乃矩。と。意味深。猶口傳云云。

さて。陽小用也。即此理也。天文ハ陽。地ハ陰。方なり。故小股釣と陰。即矩なり。見込なり。弦と陽。即規なり。見返なり。故小首尾形。編口と首尾の形。と。規矩合体。といふなり。古傳云。或問曰。鈎股と真矩十字の本。陰の理明け。弦。於て。陽の形なり。此理如何。答曰。天圓の中に地方の縦横を取て。四徑と引渡す時ハ。圖のごく。八段の尾首形と得。或ハ天徑一



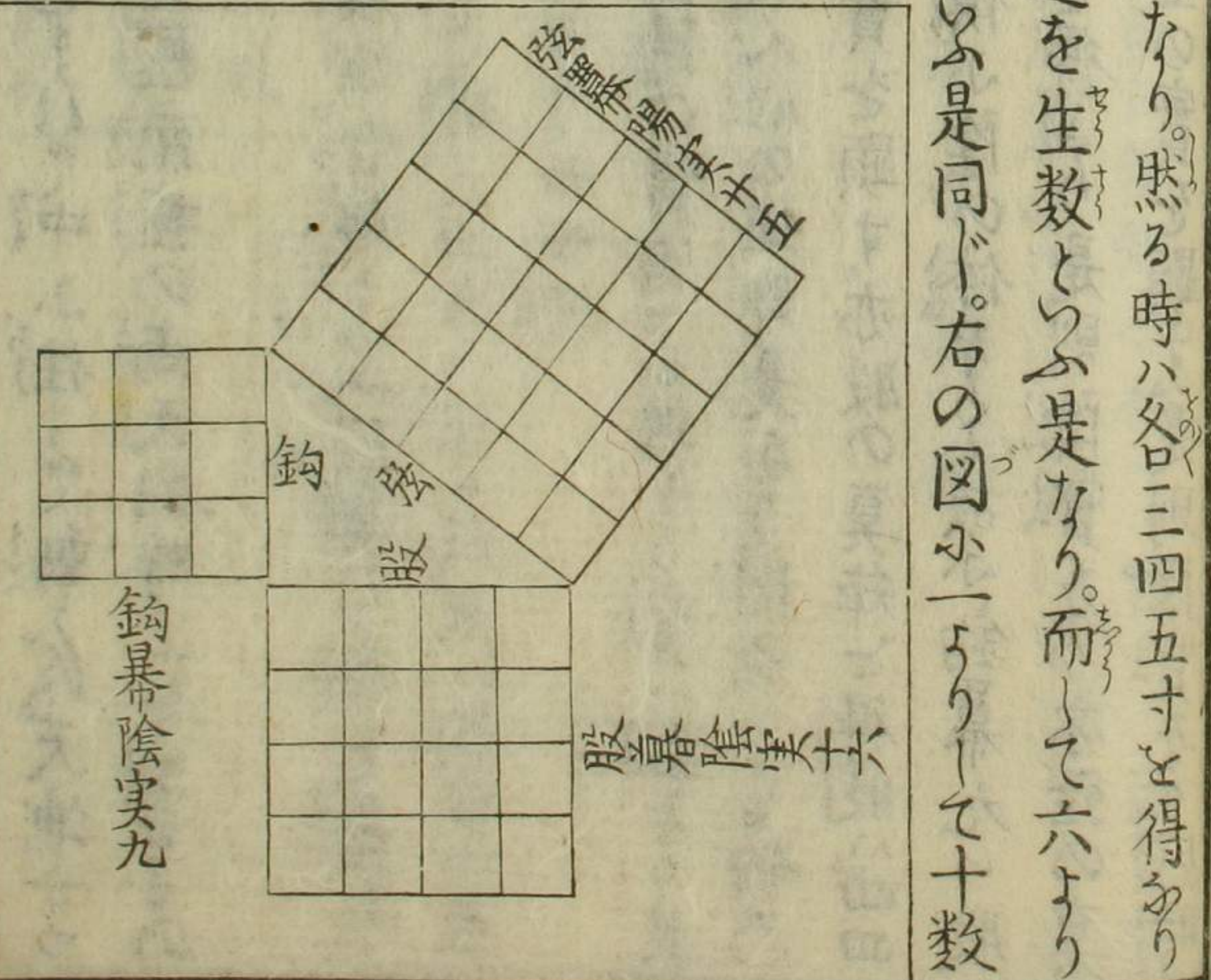
鈎三股
四弦五
則天地
方圓規
矩之理
也

尺は結る。六寸八寸の縦横なり。正中より十字の徑とひれ
つゝはとれハ各三四五寸となる。三四ハ陰なり。五ハ陽なり。即
圓徑なり。故小見返を規とふなり。次ハ三四五寸満る理是
なり。故小尾首形の規矩合体とふなり。

又問曰天徑一尺小鈎股の理ハ可也。地形ハ四方なるべし。縦横
取て而も六寸八寸小極るべし。三四五寸小作るがごとし。若四角
小取ハ則弦ハ五小叶ゆゑのども。鈎股の三四ハ乱るを。此
理如何

答曰六八は作る物小非す。自ら六八小満るの理なり。謂ハ
天一を生ずるの理形を以て是をいふ。又十分の一と下す
べし。然もば上下小一寸づつ生じて中と八寸自定る而して
其八寸小木を山て満る所の真矩を求むば。横の六寸自

出來す。是天地自然の理なり。然る時ハ各三四五寸を得あり
故小一よりして。二三四五迄を生数といふ是なり。而して六より
まで七八九十迄と成数といふ是同じ。右の図小一よりして十数
迄是らり。並小四方らり。八
極あり。北極南極の氣徑
らり。黄道の徑あり。天地
合体理即是あり。天文易
道の理小同じ。猶口傳
問曰上下小一を生ずる此
理如何



方あるがどし。地ハ陽小包まりて中住して動く。天地分つ時ハ世界一同なり。故小北極南極の両天同時二を生むるの理有り口傳深しといふ

古傳云問曰尾首形を規矩合体といふ。理委く尽く。蓋平町の始より尾首を得ること。必三四五小限らば。或ハ鈎股小長短あるも。陰陽小合す理ありや如何

答曰此理至極なり。即陰陽の實通する理なり。實ハ誠なり其實を顯す者ハ真矩なり。人心の矩即是あり。図のどし。鈎乃真矩を得時ハ三三九の實を顯す。亦股の真矩と得時ハ四四十六の實を顯す。鈎股俱小陰の体なり。故小鈎幕九つ股幕十六俱小併て二十五を得たり。是則陰實なり亦弦の真矩を得ればハ五五二十五の實を顯す。是則陽實なり。然時

ハ陰陽等數を得たり。故に規矩合体する理なり。或ハ鈎股小長短ありといふと。弦幕の等なり更に甲乙なり。真矩小背ぶるとを以て本とをるなり。猶口傳

圓理 二術

渾象術を以て圓の周と知の術を問答左のどし

術曰丸器益孟の類の中徑

小墨と引る。又別小板みくも

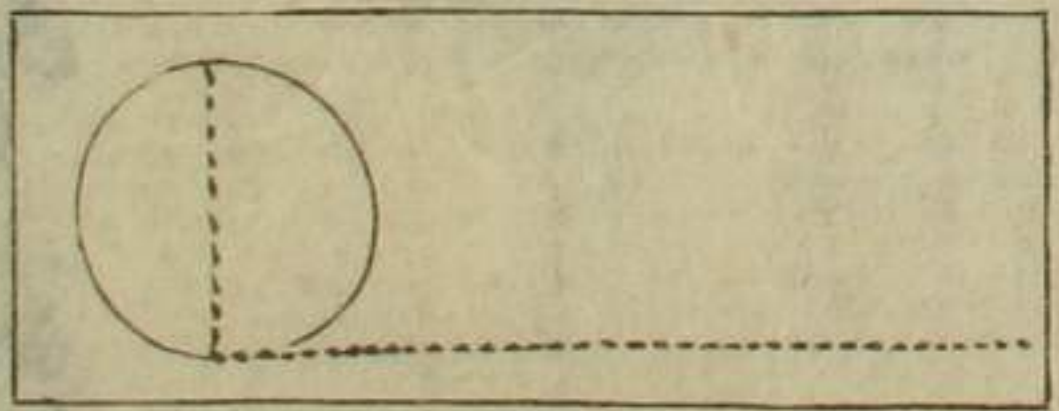
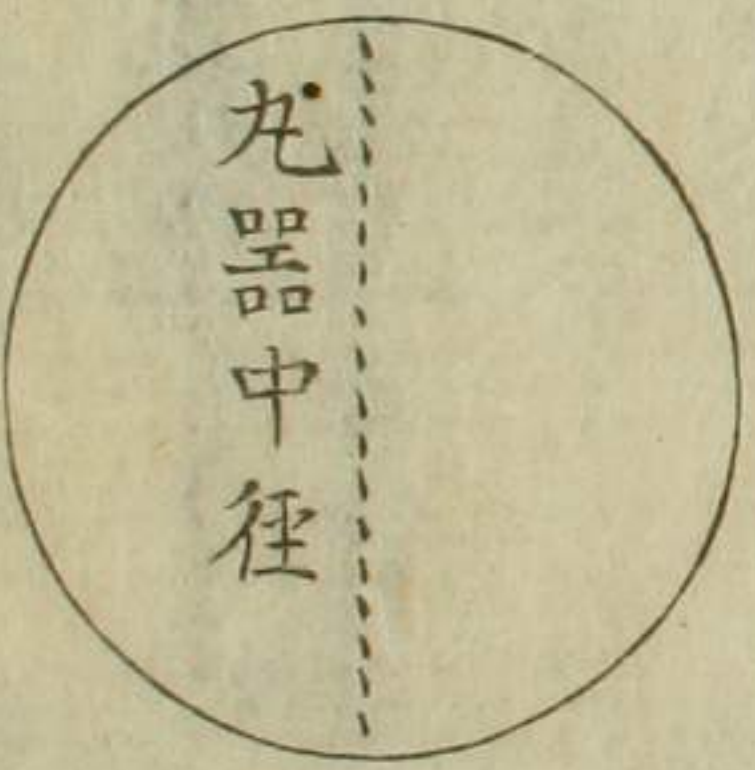
紙みくもでも。図のどし。真矩小

墨を引。板下の直なる所

置。此墨條の留小丸器中徑

の墨を能合せ而して半周を

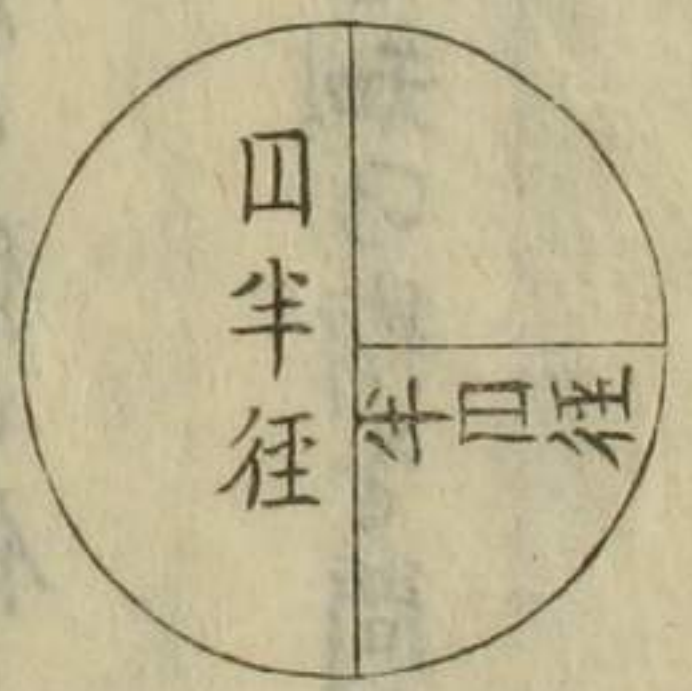
擗みくもし。中徑墨と又能合



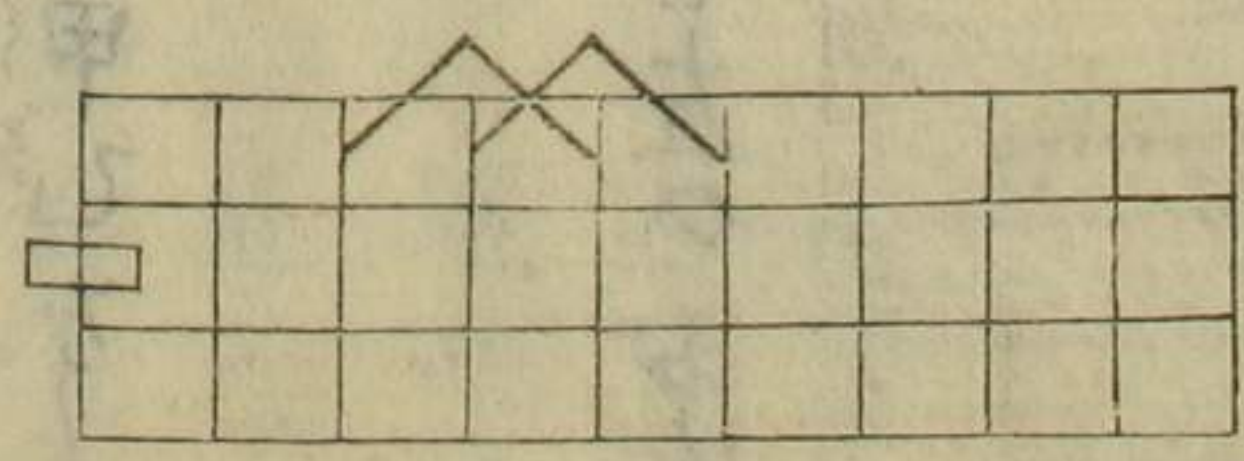
すきむ乃大成す。此半周を倍して圓周なり。あふ於て問ふあふふ。

圓の歩を知る術を問 答左の如し

術曰圓の半徑小圓の如く墨と付け。是を前術のごとくして紙上小轉し半圓周して墨をつけ。是則長さなり。又圓の中より半徑を横ろし。是と幅とに。墨の長さハ圓の半周也。右轉じたる墨なり。扱圓を得て歩数と知る。此墨の長さハ中より半徑なり。後小得たり墨なり。茲小



古法 徑六寸 周十八寸

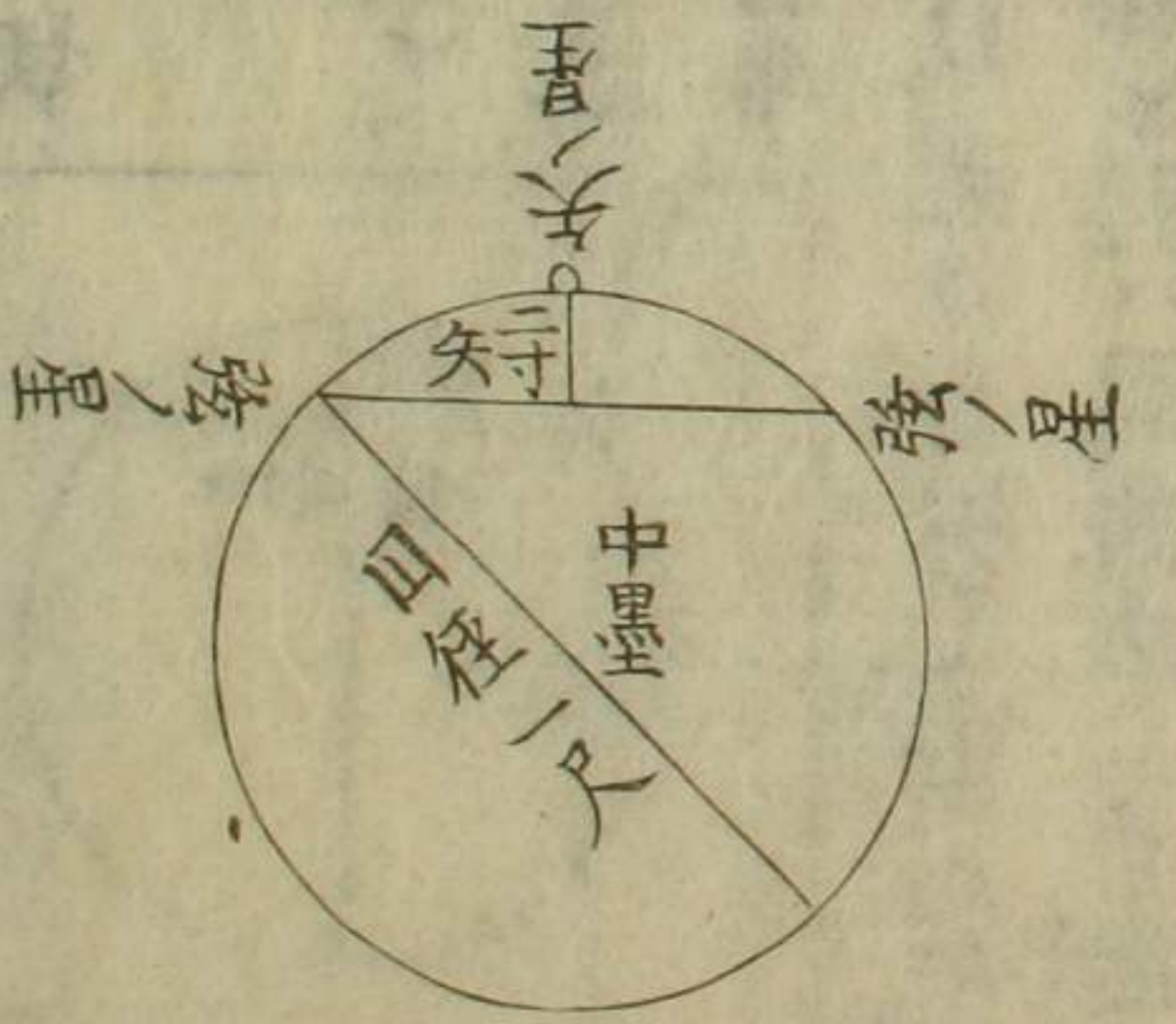


徑矢弦

二術

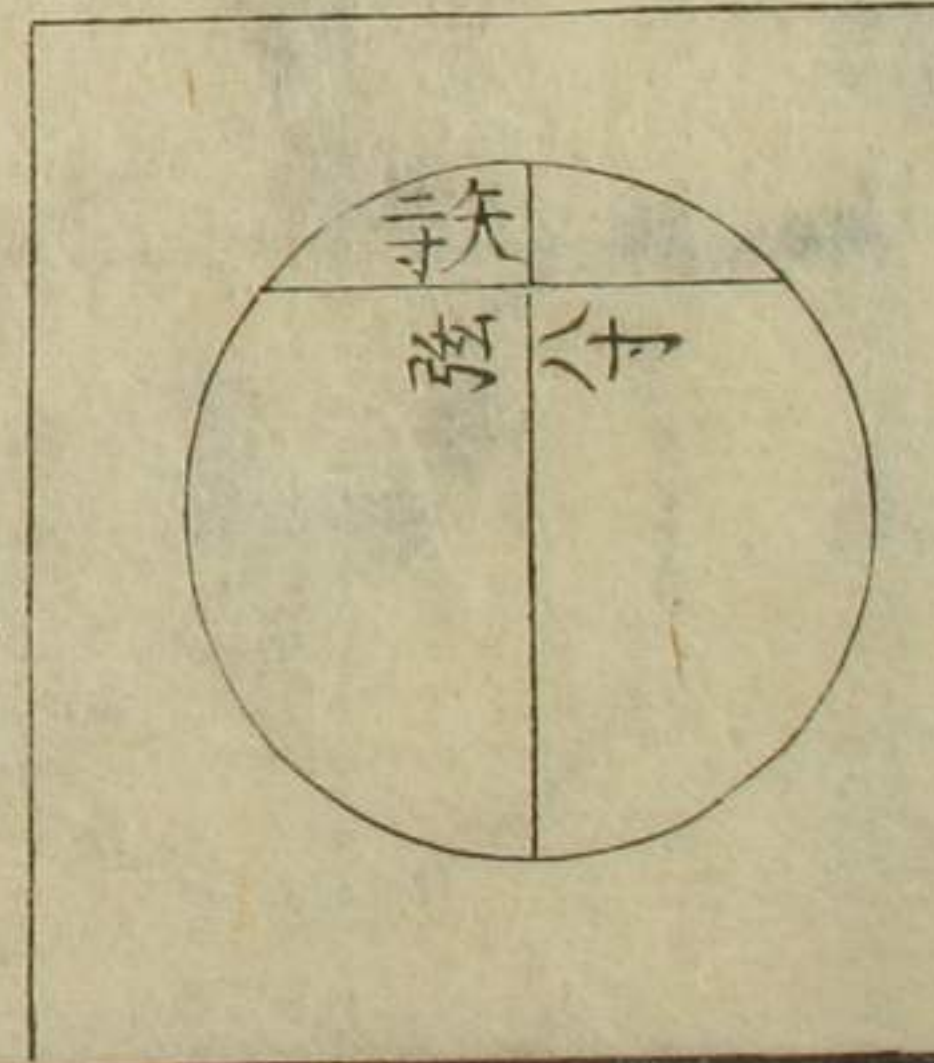
徑矢あつて弦の寸と問。或ハ徑弦あつて矢の寸と問。或ハ矢弦あつて徑の寸と問。二術俱小渾発と用ること同意なり。今問平圓の闕矢二寸。弦八寸あり。徑幾乎。答曰一尺。

術曰真矩と設て渾発の口一寸あり。真矩の正中より。左右へ四つ計て星と突。八寸の弦を引。又中墨より上へ二つ計て弦。一寸の矢と成。然して。別小渾発を開き。中墨の條と。矢の首。星と弦の首の星と。合所より。平圓と廻し。實の圓徑一尺と得て問ふ。答



今問假令八口徑一尺以て弦八寸小切て。矢寸幾干 答曰二寸

術曰真矩真矩といふ曲尺曲尺なりを以て渾発渾発を開て一吋と。此口を以て中條より。五口量り其五口を一口小合せく。平山を廻せば。一尺の平

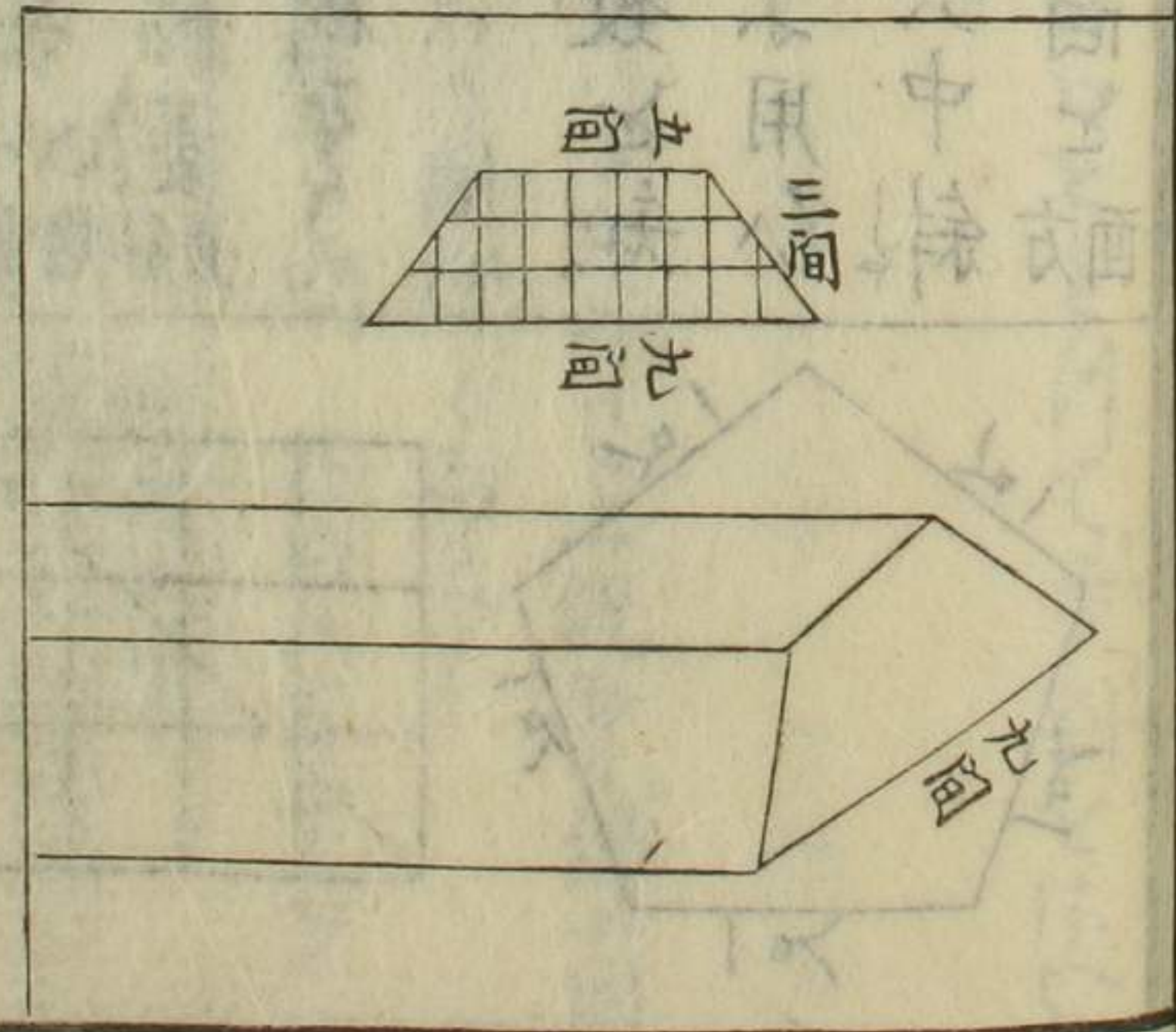


所乃八寸の弦なり。是より真矩小矢の條と引八問所の二寸顯る坪誥

坪誥といふハ。或ハ錐形錐形。或ハ菱形菱形。或ハ狭等狭等。土岸石垣土岸石垣。堀壕築山等の坪と積ると云。但平歩と誥ると云とハ少く異なり。大小同ト

今問土岸あり馬踏五間敷九間。高三間。長十五間あり。此坪幾干 答曰二百十五坪

術曰渾発と開き。二間の口と定め馬踏五間敷九間と計りて俱小合まらん。十四を得る。此十四段折半とせれば七となる。此七つと豎く。右の高三間と横く。坪小誥まバ。即小口平面乃坪廿一坪あり。是を長く引と延ぶるとハ廿一間なり。即是と豎小りらむ。扱土岸の總長十五間を横く。量まバ坪敷三百十五坪となる也。図を見て辨る。餘とまこと。是小準とる。



歩誥角形二術

今問曰三角形歩誥 四角縦横の歩 鈎三間股四間あり。其

歩幾干 答曰積歩六歩也

術曰渾癸を開く。間尺真矩の尺なり但今の一間なり

用て股四間鈎三間計つ。縦横小形と極

る時ハ積歩十二歩あり。是を偶より偶へ斜

小半減して歩積六歩と得て問小答一倍の教

を得る故小図のこゝ半減して歩数を知らず或ハ平錐山形菱形

斤狡等の歩積と知るこゝも各同術なり

又問五角形の歩積如何

術曰或ハ一面一尺づの五角の歩数と知

し。五角の形と極め。其一面と一尺ふ用ひ

十小割て寸の口を定むる。扱其中斜

と得て。是を五つ計て長らして。半面と面方

一尺の横半ありして右の十小割る寸の口とを以て。歩割とば

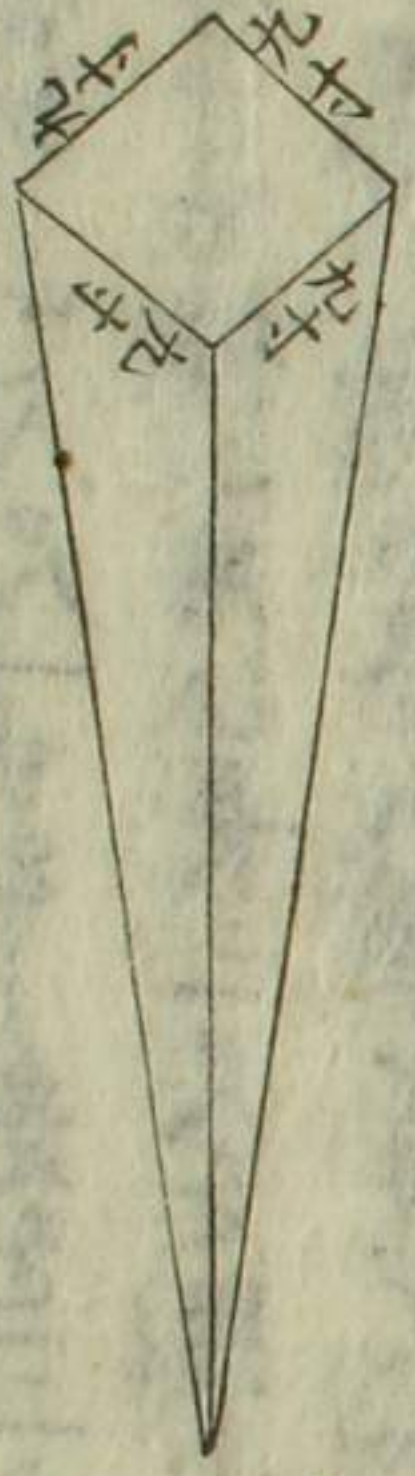
錐形

錐形といふハ或ハ上方めて下鋭小。或ハ下方めて上鋭る俱小同

理なり。四方錐あり。三角錐あり。楔形あり同術とさる

今方錐あり。四面九寸。長三尺也。其積幾干と問 答曰八百十歩

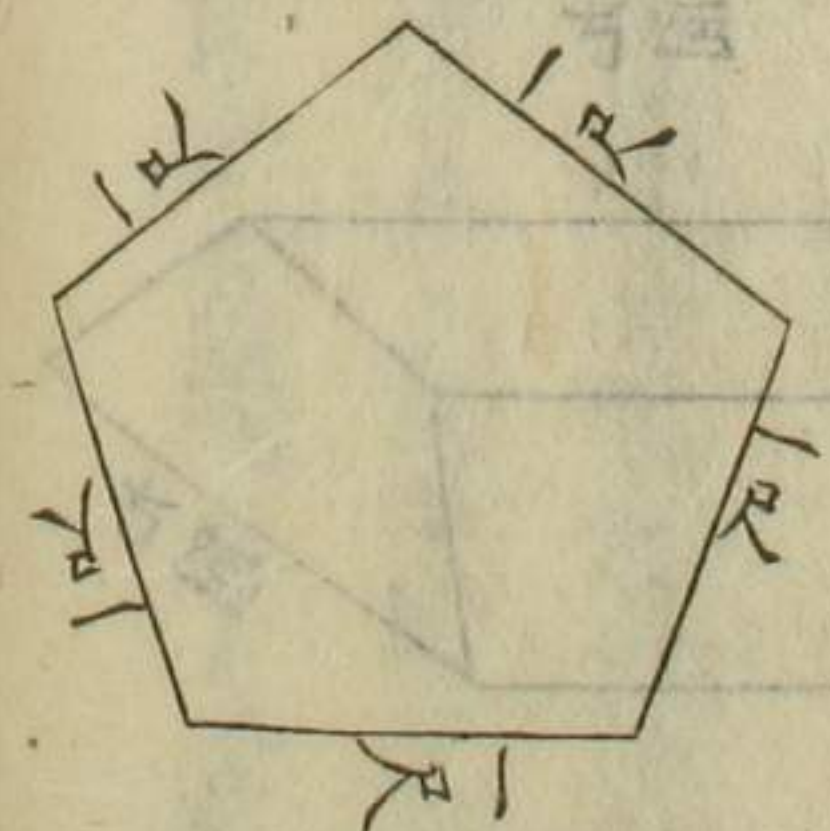
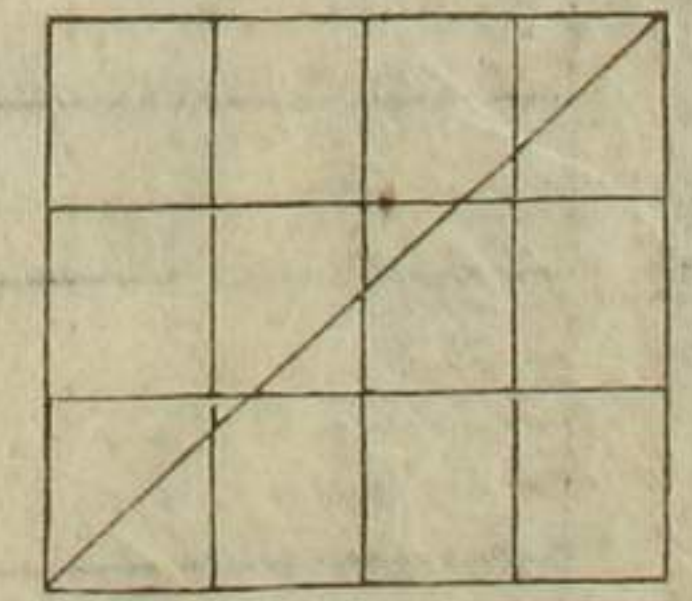
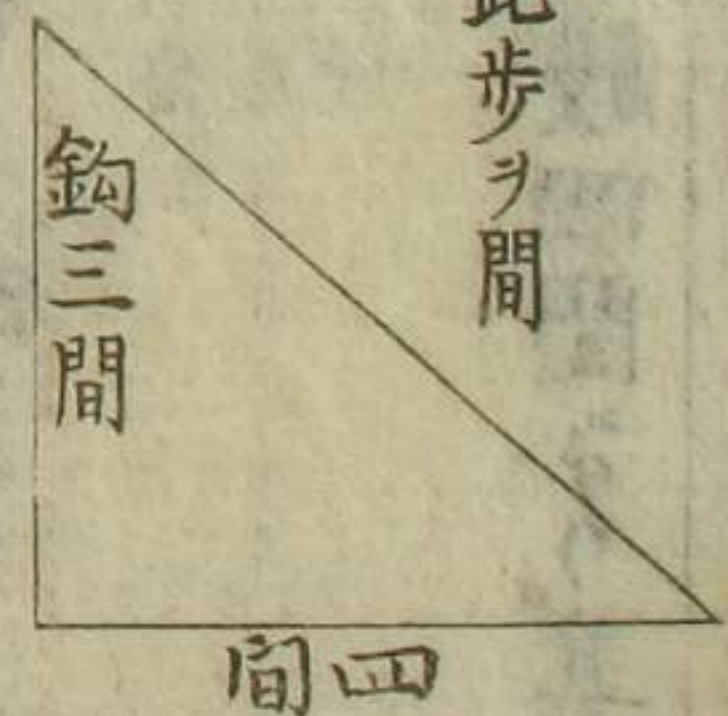
四面方錐



積每九歩

Grid diagram for area calculation, consisting of a 10x10 grid with a shaded 5x5 area in the top-left corner.

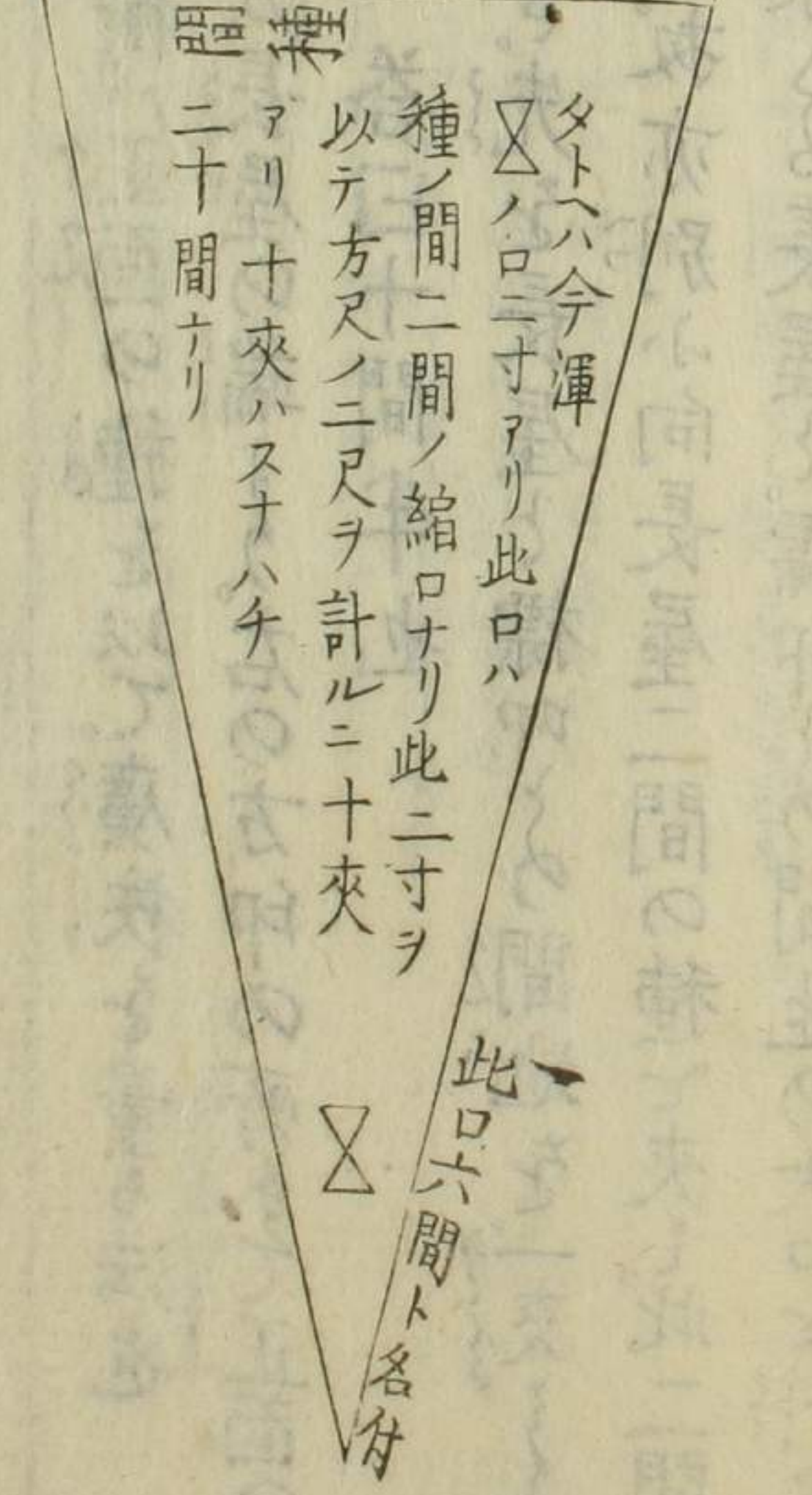
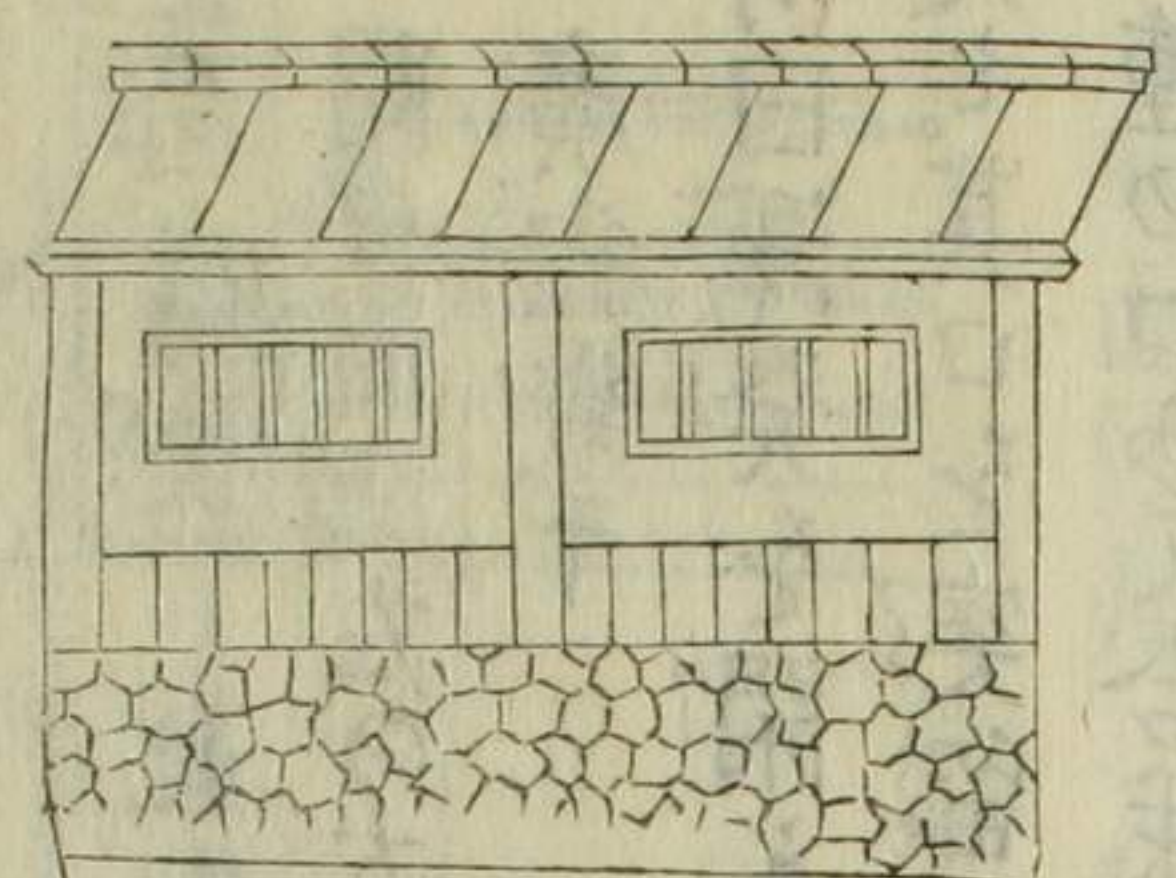
此歩ヲ間



術曰渾癸を開き一寸れ口と定め是を方面九寸に延し又方面九寸と合和して八尺一寸なり是を三小除すは二尺七寸となる即二尺七寸と横小用ひ長三尺を堅小用ひて墨線を引くは八百十歩と得て問ふ答ふ圖を見て知る

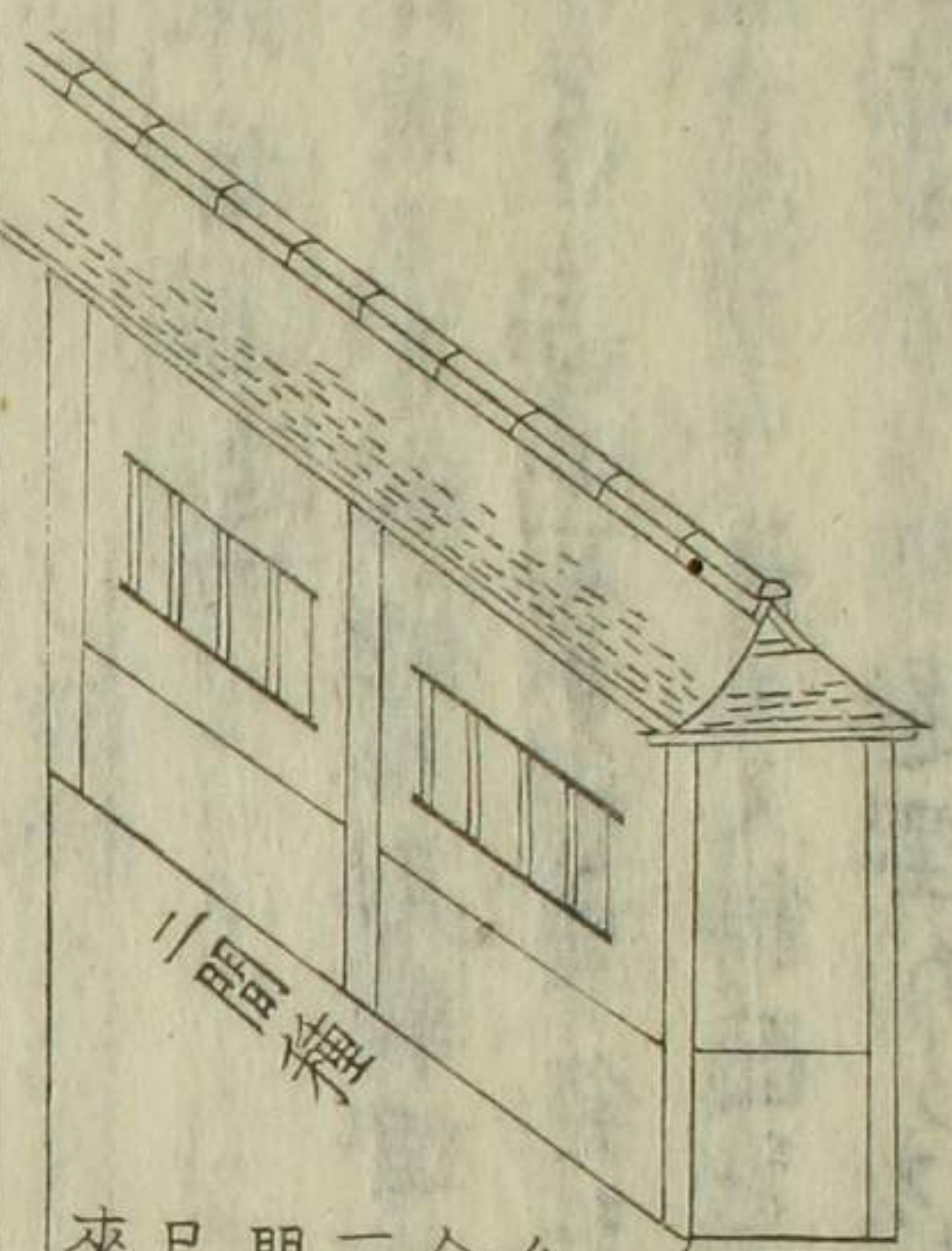
平面遠近

此術ハ向面の種を以て遠近を量の法なり術云向の種間二間の左右と本座より渾癸の両鋒を以て夾く其渾口を種間二間とらるげこを以て頬尺二尺と量て遠程を知たり



斜面遠近

此術も亦前術と其事理一致なり只向の種間二間斜面なるのこ前小反す尤渾癸を斜ふかりて向の斜面を合如働すはかり是も又斜面を夾くは口と以て頬尺の二尺と計るなり即遠程あり



タトハ
今此渾ノロ
一寸アリ此ロハ種
間二間ノ縮ロナリ此一寸ノ
ロヲ以テ方尺ノ二尺ヲ量レハ二十
夾ナリ二十夾ハスナハ千四十間ナリ

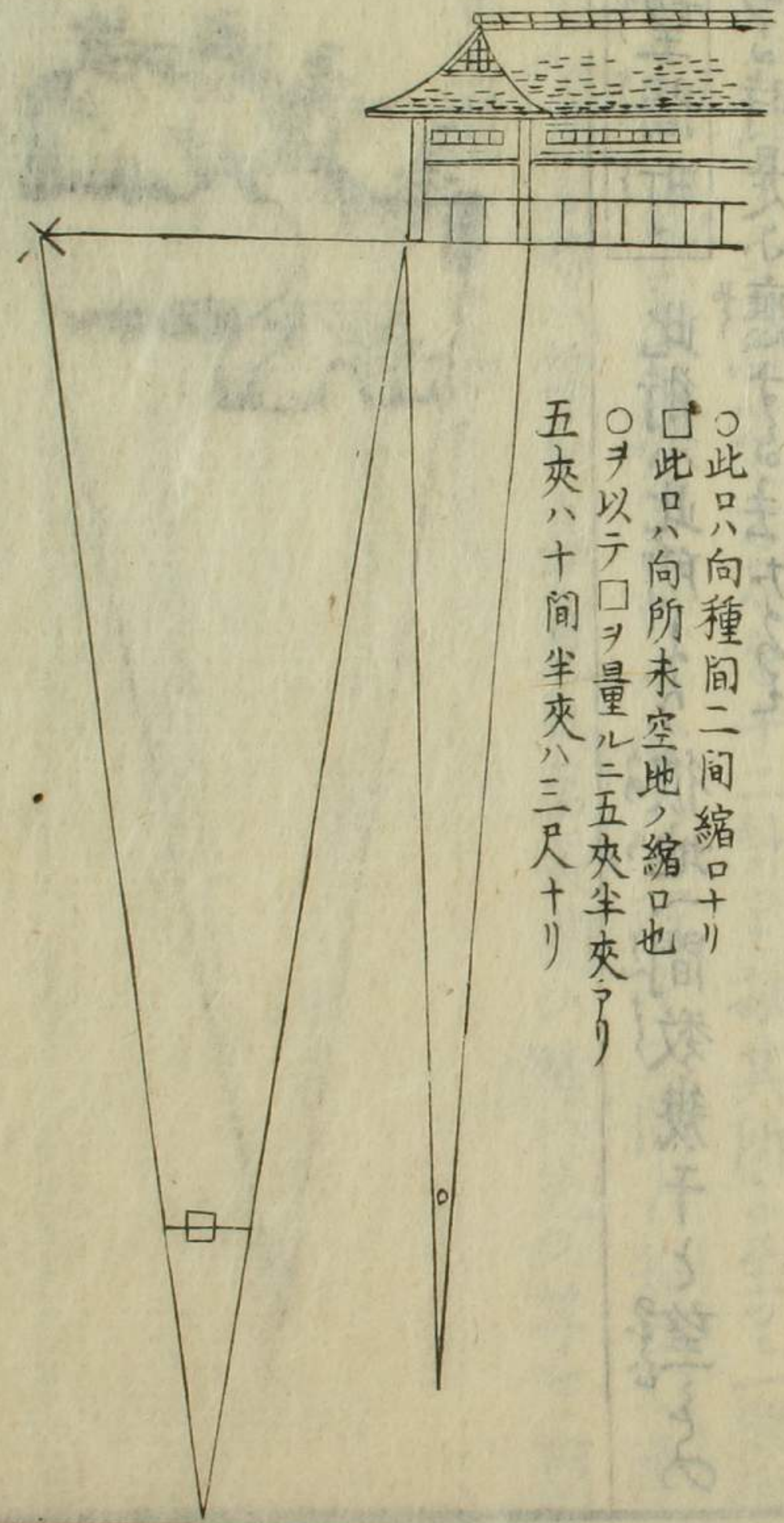
正面廣狹

此術ハ正面ノ種を以て廣狹を量る法也

問云向面左の方長屋の端より右の方印の所まで正面の
廣程幾干 答曰十間半也

術曰渾癸を開き先を長屋と標印との間地を一夾とふ
夾と其口を突留扱亦別小向長屋二間の種と夾と此二間
の種の口めて合求くる長屋と標印との間地の大口と計
て前面の廣と幾十間半と知ふなり

○此ロハ向種間二間縮ロナリ
□此ロハ向所未空地ノ縮ロ也
○ヲ以テ□ヲ量ルニ五夾半夾アリ
五夾ハ十間半夾ハ三尺ナリ



斜面廣狹

此術も亦上ノ所謂正面廣狹の法小同ト。因て其巨細と贅

す。其術大成の理ハ前件ハ所謂正百廣狹の術。又斜面遠
近の法を照し考ふべし

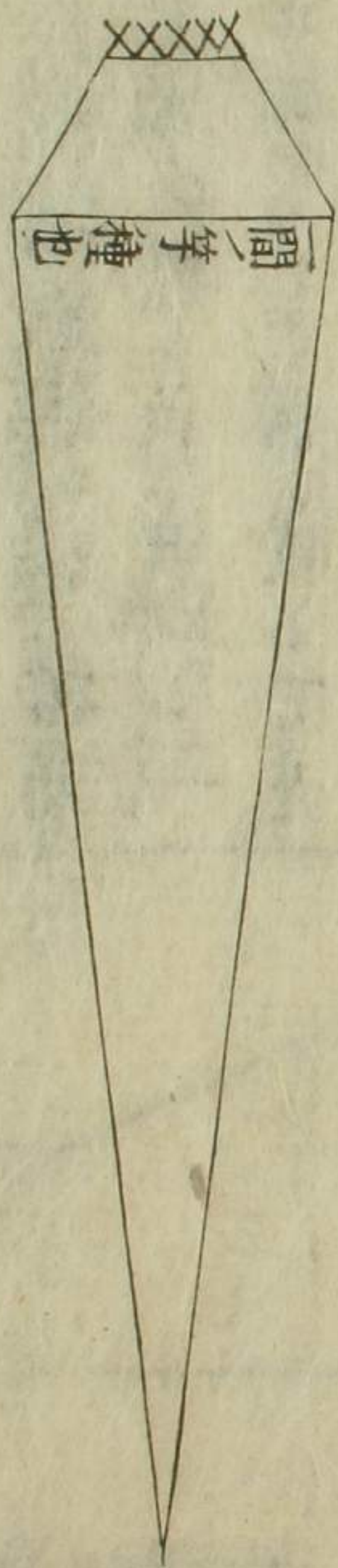


横望間町

此術ハ此所より彼地へ間数幾干と望むとの
あゝ時。是ハ應ずる法なり

術曰渾癸を開き間を。是を以て方尺の横手より望程

計て。其留小渾癸の鋒を以て見て見る也。今十二間先と望ハ
渾癸は開き。其口めて方尺を十二計す。扱其所よ至す。一間掉
と持せ先へ遣す。右渾癸の口ふ合し。所十二間と知る。尤違
し。くを見る時ハ。竿を立てて見也。若長間の時ハ。先の竿と二間
あり。二間ありす。ゆかり



知諸高下

此術ハ城楼堂塔の高。竹木家屋の高。山岳丘陵の高。と
總じて高下を求る法なり。尤豫め地幅を量り。知りしる

上の術なり。地幅とハ。此所より彼所へいづれでも。其量るべき物の地下までの遠程のこと也

術曰 今図する所を先地幅と四十三間と知

是ハありていふなり 知置たるなり 扱渾

三間と知 本の根と目通 地上より五尺上

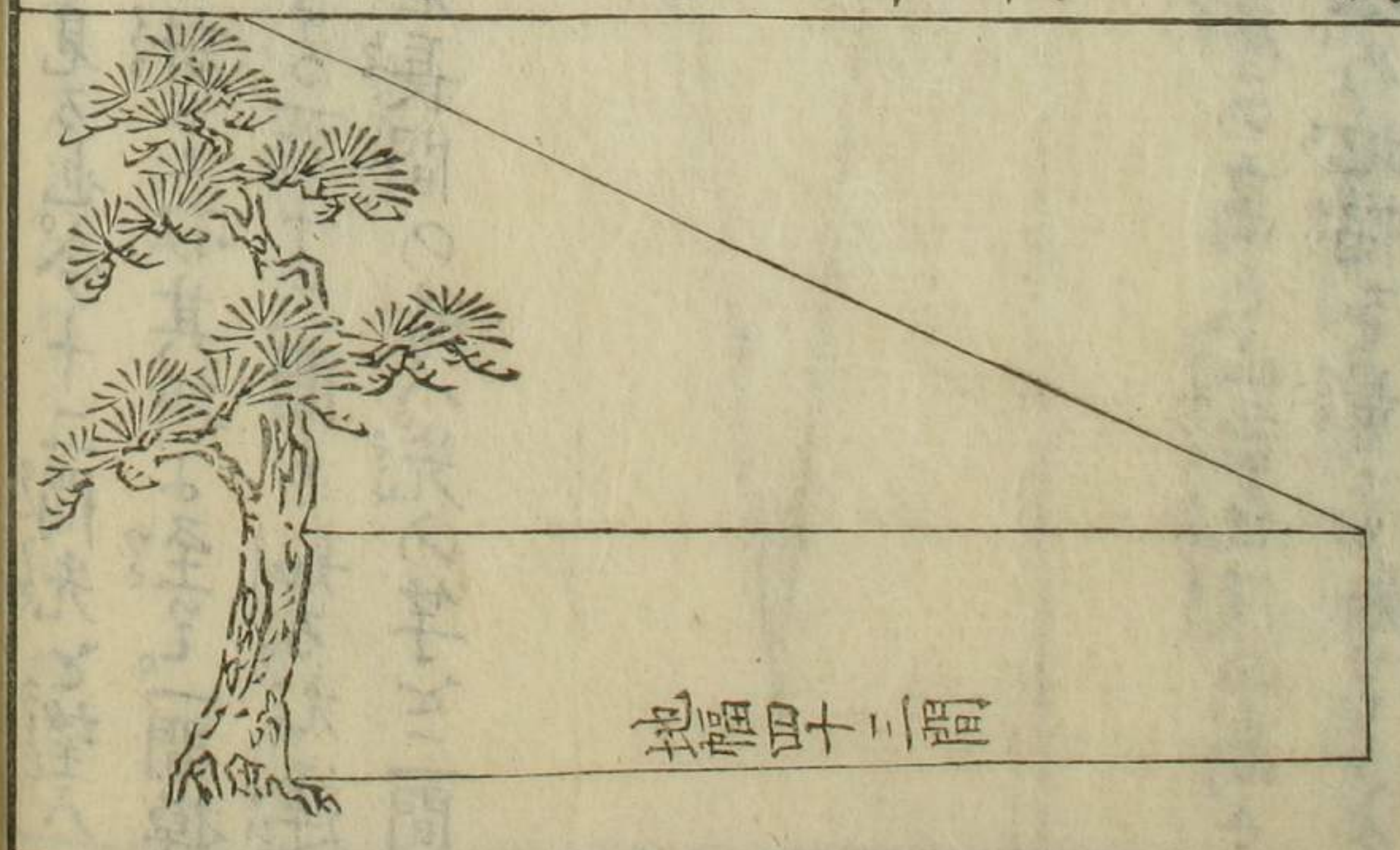
と小當と圖のどとく。渾発して是と夾。其口を紙上小突留て扱

方尺ハ地幅なるゆへ小新小方尺と

四十三間の地幅小計り合せ。その

今計合せたる渾発の口をりつて

右夾と突留たる大口を計る。其



小居する長を加へ木の總高と知るなり

若此術違ふるを試んと欲せば。右の方尺ハ地中四十三間小

准たる方尺なきは。則是を地中不用也。渾発の口ハ方尺二

尺を地中四十三間小計合せ。一間の口を用て向の木本へ

一間の竿を立てて。是を夾と見らふ。右渾発の口ハ竿の一間

必至り合すると。違ふと知る 尺を以て地幅を計りたる時ハ 尺を以て小立ふなり

極諸高下

此術ハ兼て量り置たる諸高下。綫重て又齟齬なきを試

見る法なり。其事右も粗記したるを贅言ふ似たりとい(共

旧法捨るふ忍す爰に贅す

今左小圖する。兼て地幅を三十八間と知。又高下の術に

て木の總高をも廿四間と知らるなり。此術若違ふと改

先見ふなり

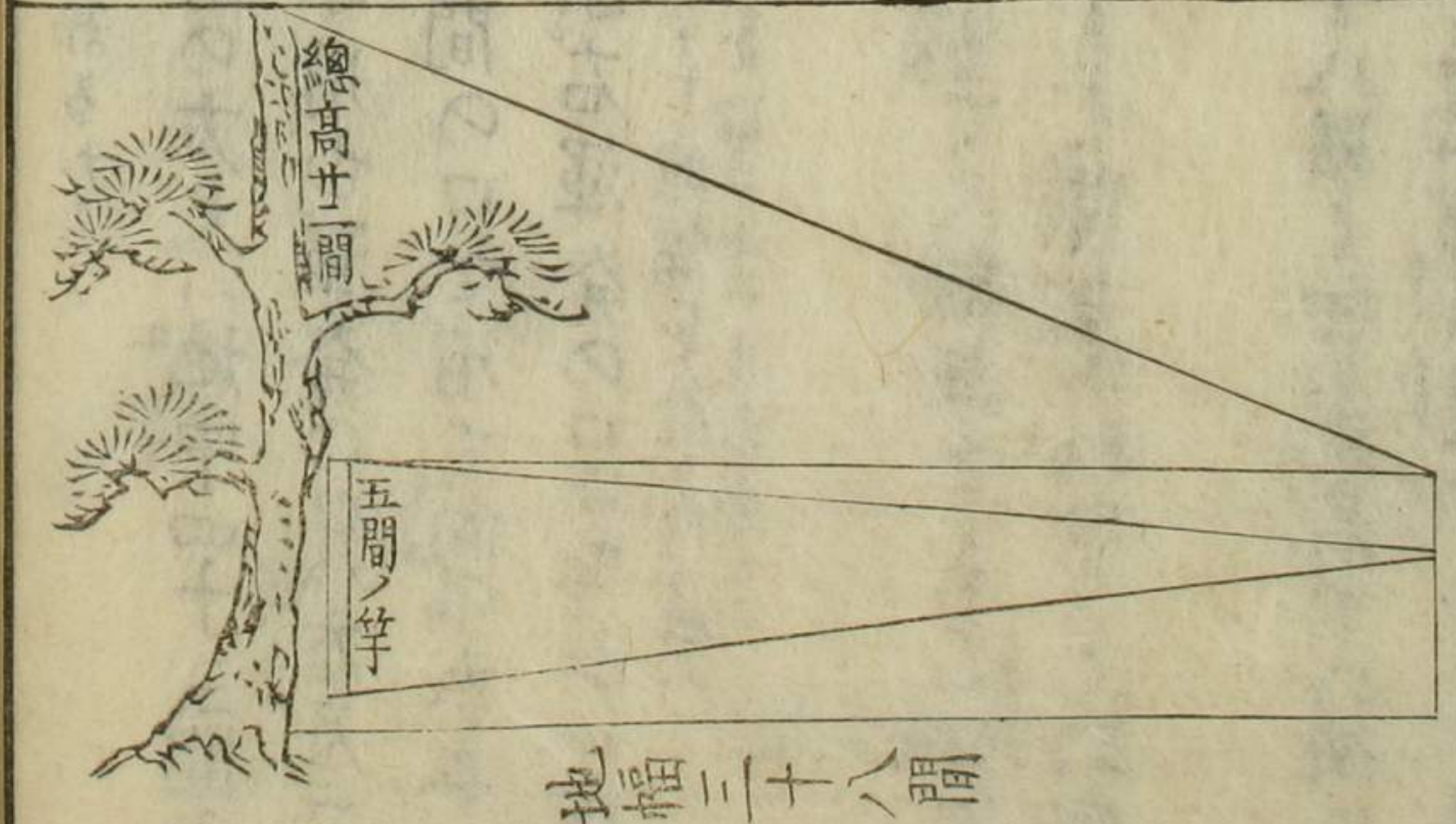
術曰先木の高を廿四間と知り。板右の三十八間の地幅小方尺を計合せ。此口ハ一間の縮口と五合と五ツ計合せ。其五の合する口を以て向い五間の竿立をせ。あつと夾む見るふ。其渾発の口向小立する。五間の竿小必至と合ふ。此ハ術小誤をなすと知るべし。猶前件を照見す。一傳よ云。此術ハ片極を堅よ用る理なり。或ハ天守矢倉の重々と糾し。又三分一五分一等を求る所小答なり。

故小指高何分ともふなり云云

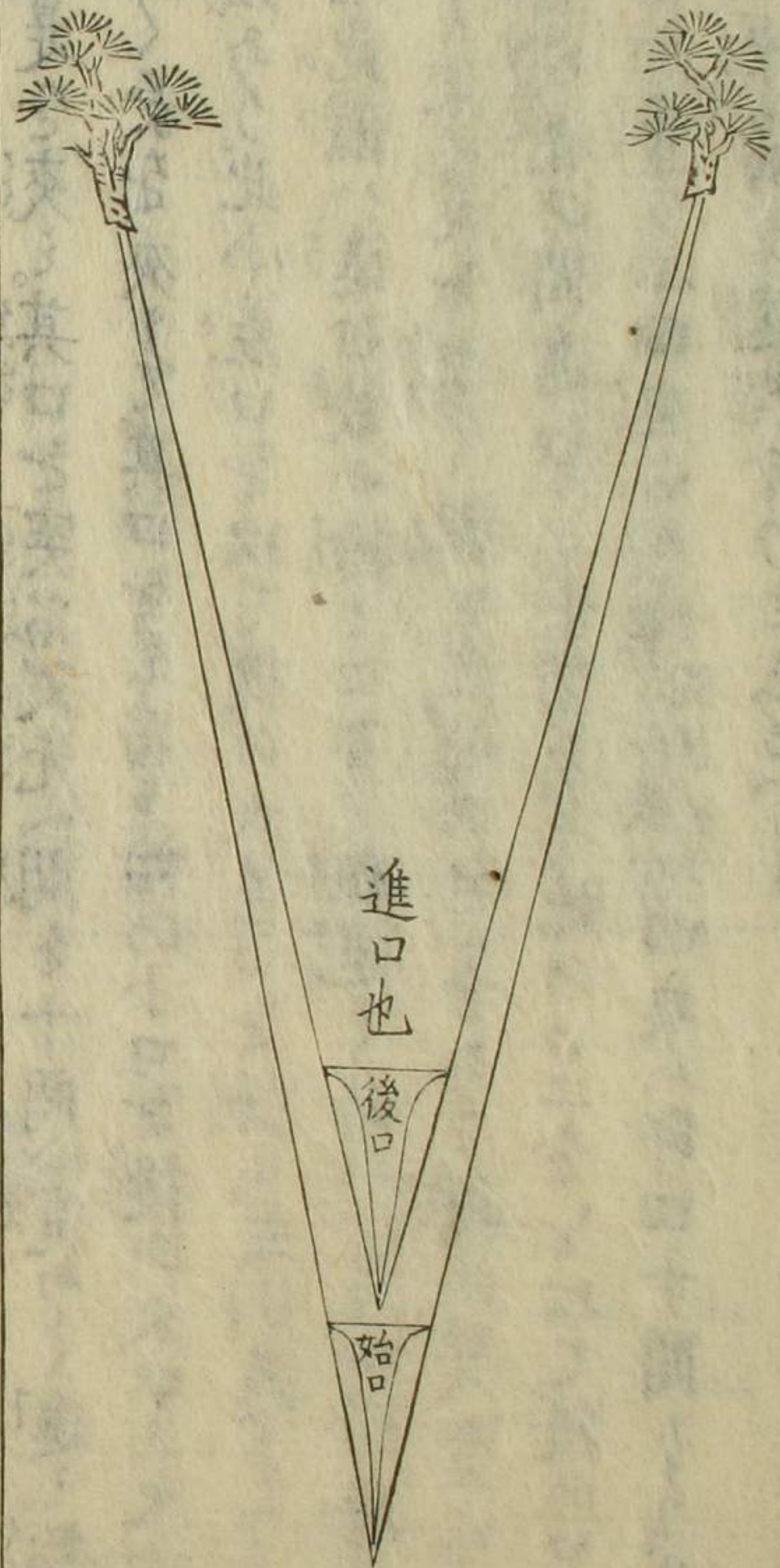
天口

進で量るを天口と名く。陽ハ進むの謂ありとど。

此術ハ進で遠近を知の法なり。今図する所を以て云。向正面左右ふ二株の松あり。渾発と開て。是を夾む。其口を突留。又先へ間を十間小究め。進む。始の如く。長を夾む。其口をも留る。始の小口を後の大口と大小の差あり。此小差口を以て。後の大差口を計る。是則遠さなり。尤此圖ハ進む故小捨る口なり。但退く時ハ小差口一ツ捨るなり。今是を委く解せば。始の口二分あり。後の口八分あり。其前後の間進むと十間なり。始の口二分を以て。後の口八分を量る。小四夾なり。但一夾ハ十間なり。四夾ハ即四十間なり。是即求る所の遠程なりとあるべし。



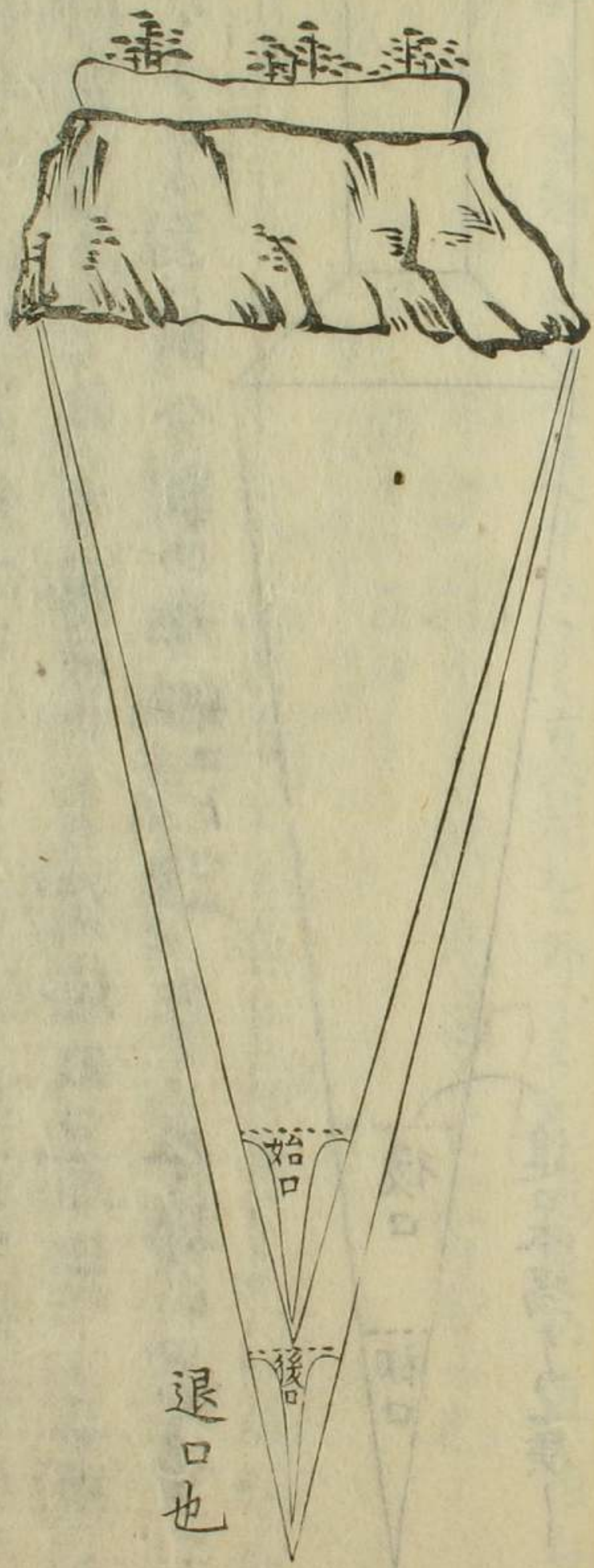
量地三十八間



地口

退て量るを地口と
名く陰ハ退くの謂り

此術ハ退て遠近を量る此法なり。前術の天口と其法同也
と意得べし。天口ハ進こ地口ハ退こ此違あるに因て差口を用ると
捨るとの別あるまじなり。天口地口互小考合すべし



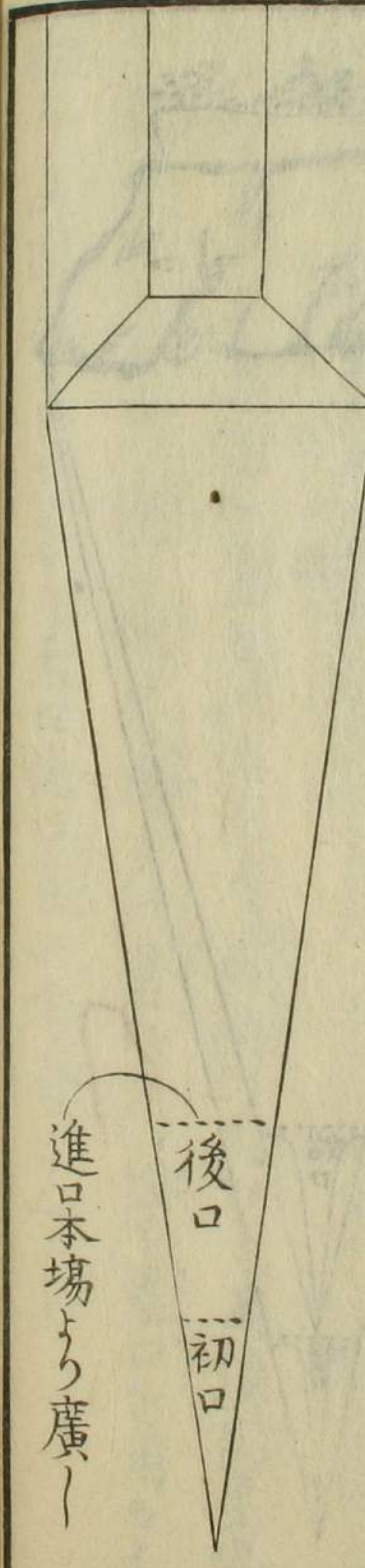
天口

或傳云渾発の差口を
量るを天口とす

傳曰本場より進退の分数間のハ見盤小倍して六十分一
と用の凡四十分の一なり時ハ差なり

術曰先目的まで空眼を以て何十何町と考へ叔録り渾
発指て目的の山あても峰あても木あても或ハ村里の境より

境までなりとも幅のあるもの、或は渾癸の口小合せて見込せ。假令
 其口五分なりと。五分と紙小突留め四十分一の分数を進
 て。又見込と見込。假令五分三厘ある。取前突留る口より
 ぶ。其廣分三厘。即進所の分数。開の間の矩と知る。其
 三厘の差口を以て本場の口五分を量つて。町里とハ求む。三
 格渾癸の物。四の矩。方尺と。よなり。見盤の前後進退を
 同意也。退く。見込。本場の口より開場の口縮むべし。其狭く
 なり。差ハ。則分数の矩。開の間の矩。縮口を以て。本場の口を量て

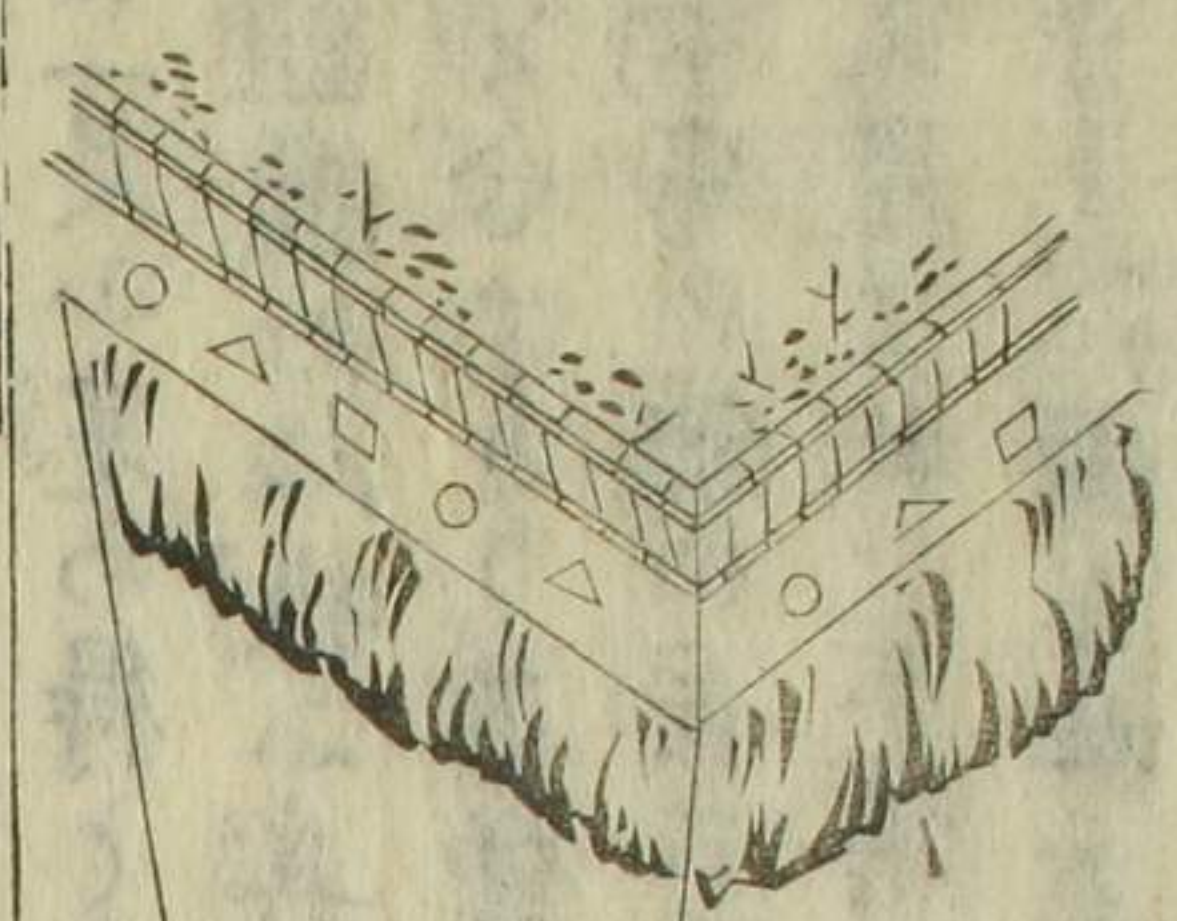


町里と知る。尤進退する。真矩を外さる也。進退の真矩を
 分数を極めて竿を打する。見通して心より知る也。

地口 或傳云頰尺の屈伸を以て量るを地口と云ふ

其術云先何めても目的の廣と渾癸を開きて見込時。鏢を
 二尺小定め得と見込。扱進む。其口。渾癸の口。少も
 齟齬せぬ様。小其俵。置て。鏢を縮めて目的の廣へ渾癸の口
 と合する。其鏢の縮る差ハ。即分数の矩。開の間の矩。縮を作す。と以て
 本場の鏢の長二尺。本場の鏢ハ二尺。開場の鏢ハ縮む。を量て町里の遠程と知る
 又退く。見込。本場まで鏢二尺。見込。渾癸の口より合
 する。鏢を伸す。其鏢の伸る分。即分数の矩也。此伸
 たる差の寸分。と以て。本の二尺を量て町里遠程を知る。是れ
 向の鏢の差を以て量る。故に地口と云。差の用や。天口と違

三四の矩の天ロハ三拾めて三ツ量故なり。三四五の理と以て
真矩小進退地ロハ四の差と考べ

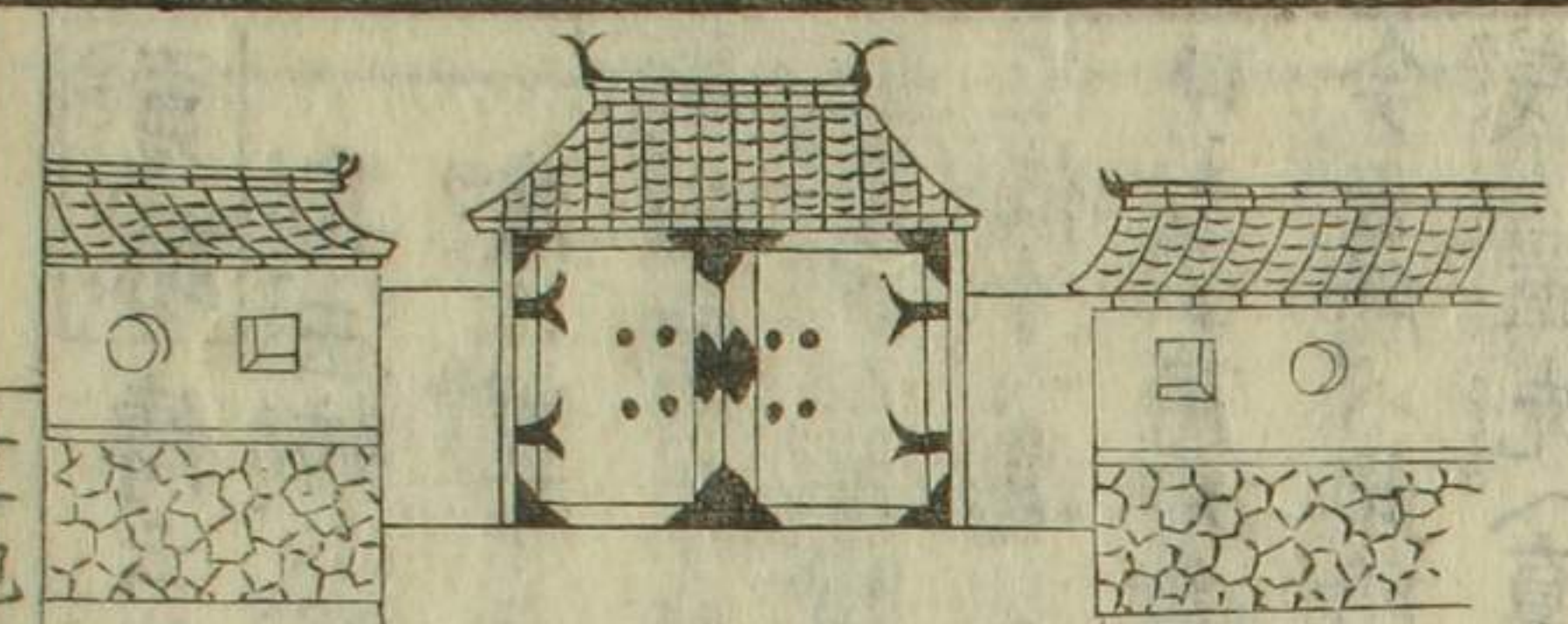


覓先

傳云此術を覓先先小覓るの謂也此より彼遠程
を計る小。此方間数の知る種なり故小。目的の方の目
と物と假の種小用い術を勤めて後彼所小至ると彼假の種

の間数と直計見て實の遠程を知也此術多くある節ハ

術云先此方向の假目的と夾とて其渾突の口と其終小置
叔向望の場小行て彼假の種と篤直小量とさる小。種幅三間あり
を其初渾突の口を三間と定て量るなり。故又
下小図する所ハ其三間の開の口とて二尺の鏢と量
る小。十二夾ハ則二十六間なり



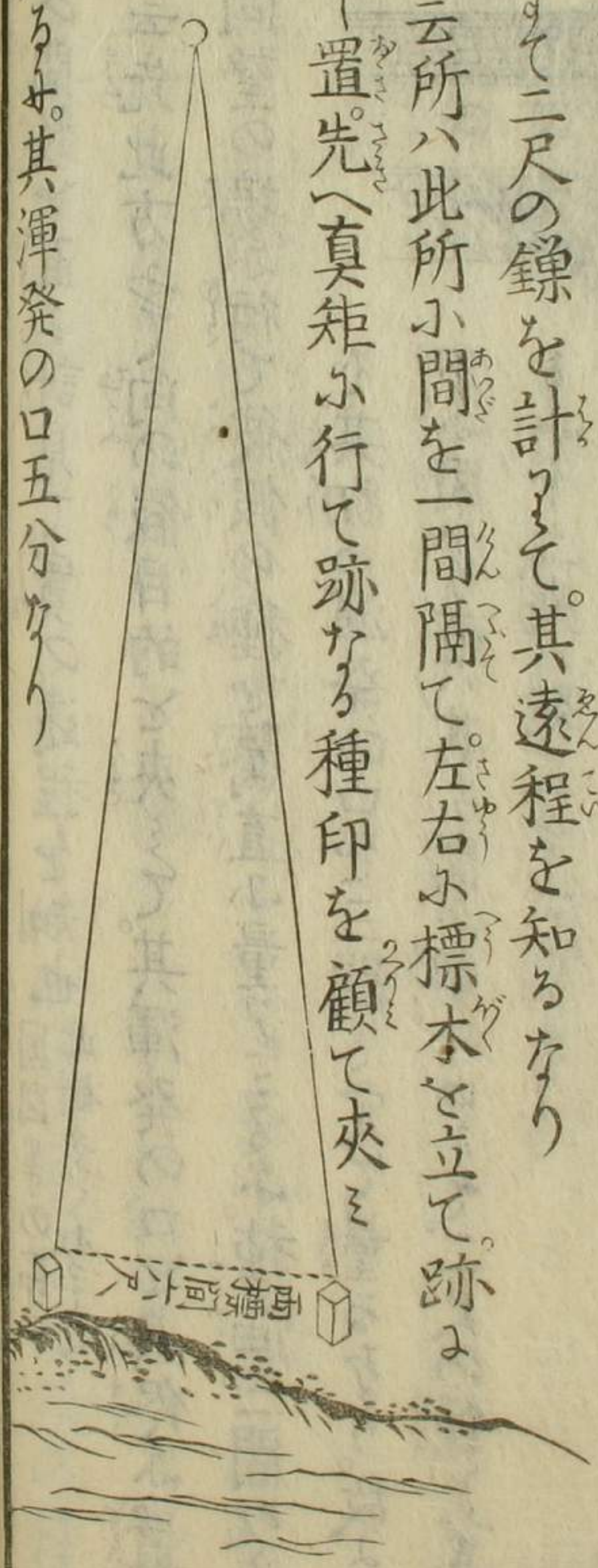
覓跡

傳云此術ハ覓先の裏と頭たる術あり跡ハ覓の謂也
其法跡ハ小間數の知るる種を残して先へ行先より一々
残し置る跡の種を夾み見て遠さを知る事なる也

術曰此方小竹木やても又ハ竿やても何やても左右の間數慥
知るる目的なる物と残し置て如何程なりとも心よ任せ
て彼方へ進み此目的を彼方より夾み見て而後其渾発の
口まで二尺の鏢を計りて其遠程を知るなり

今云所ハ此所小間を一間隔て左右ハ標本と立て跡ハ
残し置先へ真矩小行て跡なる種印を顧て夾み

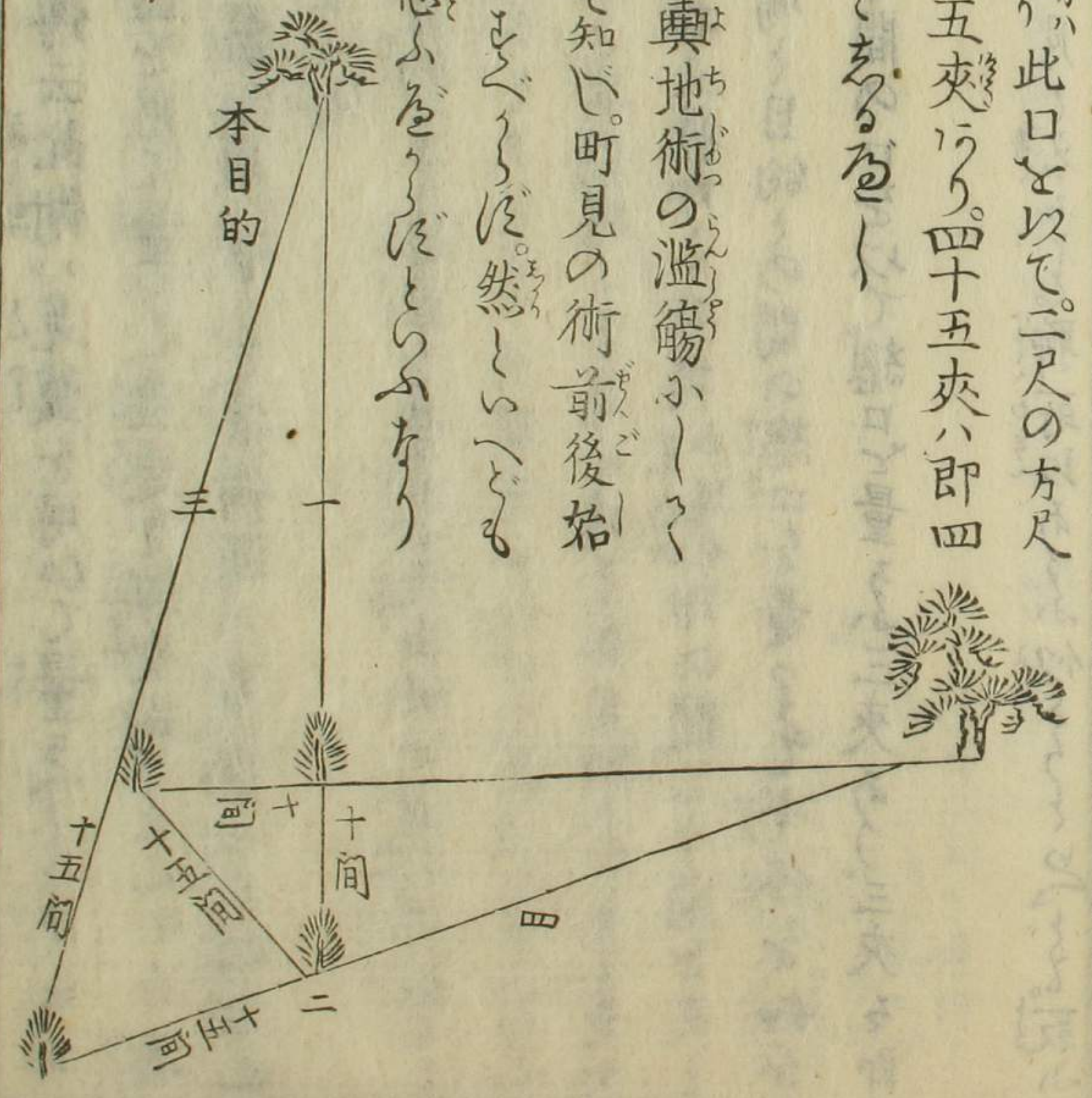
見る也其渾発の口五分あり



此渾発の口五分ハ此口を以て二尺の方尺
種一間の縮口なりと量る時ハ四十五夾り四十五夾ハ即四
十五間なりとあるなり

草

旧傳云此術ハ輿地術の濫觴なり
又能旧格の本と知じ町見の術前後始
終此理を外小とて然といへども
實測するを惑ふる事とあり



水月

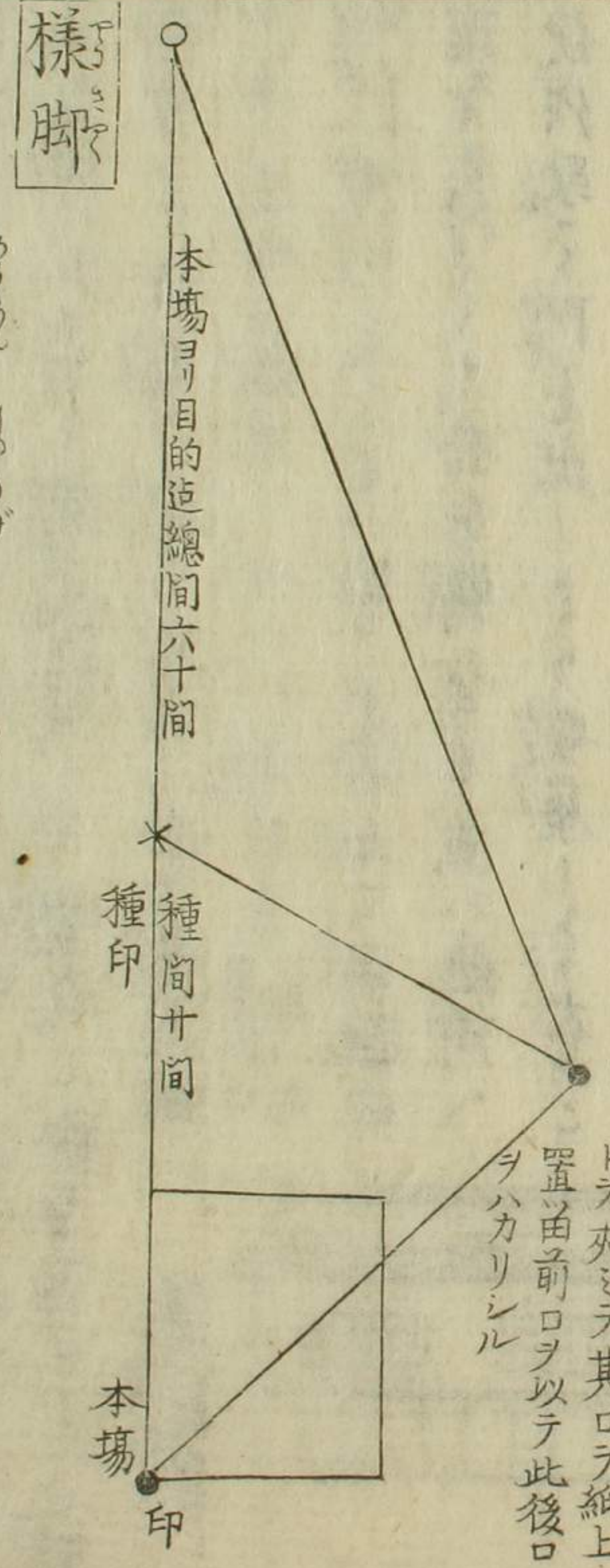
古傳云此術ハ見盤を用ひて量る〜云云
昌弘曰見盤を用て量らと豈是を渾發術と云んや今按
ずる全く見盤を用ひずと其術渾の事業よく明白也
くり〜左よ述

術曰今正面の目的まで遠程を量るふ先目的と通例のおく
見込板新小種印を見込より廿間先小設けて然後又右の方へ
横斜小進と開と其開場より見込場と即目的とを夾と是を
紙上小突田置板又種印と本場見込の印の間二十間を夾と
此口と以て本場と目的との間の總口を量ると全体を知ら
今此種の間廿間の口を以て總口と量るふ三夾あり三夾を即
六十間なりと

或曰此術を水月と名ること聊所以ありふ似〜と〜も取小

足とる説なり古傳ハ嗚呼の〜多〜笑ふなり

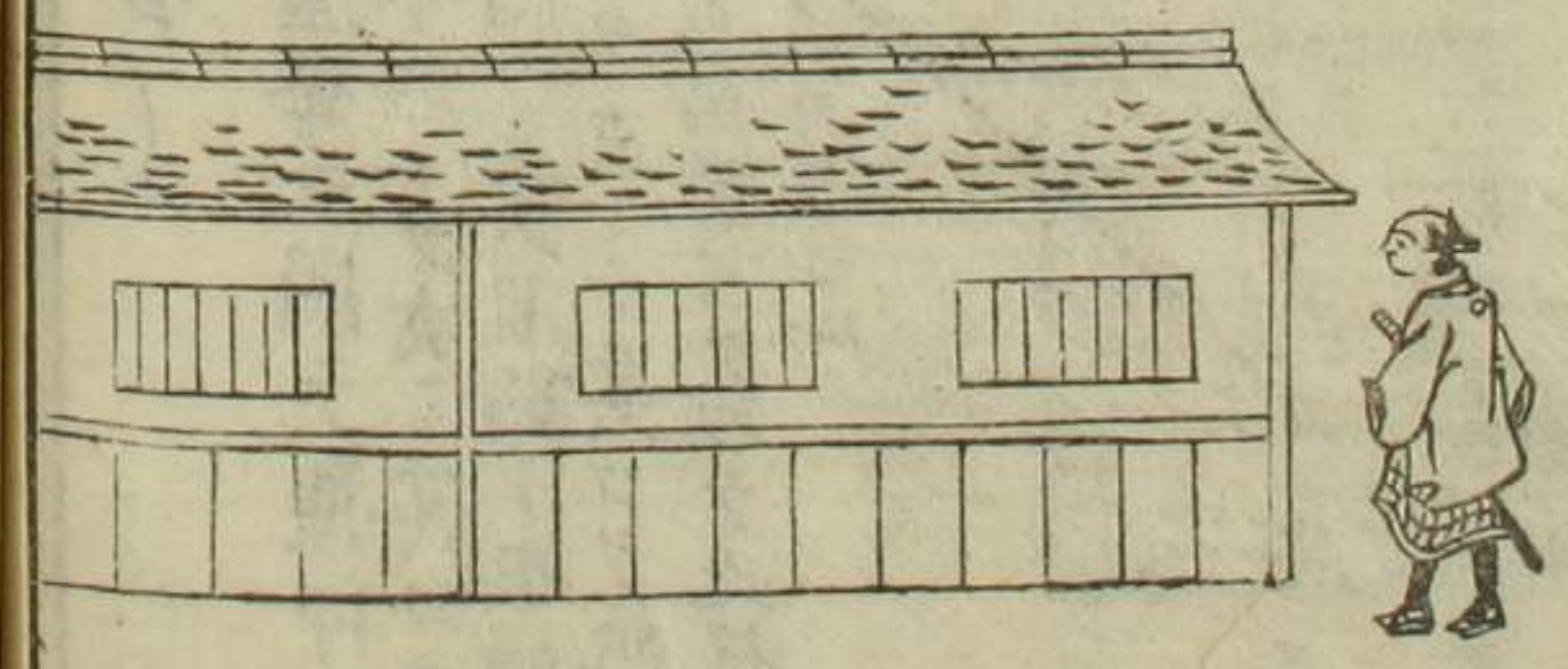
渾發ヲ開テ種印ト
本印トヲ夾ミ其口ヲ
留ラキ入目的ト本印
トヲ夾ミテ其口ヲ紙上
置田前口ヲ以テ此後口
ヲハカリシル



様脚

此術ハ向面の物陰を人の通行するを見て其歩数と試〜向
面の廣と幾子と知の術なり古傳よいふ処なり
術曰古傳よ云常は歩数を呼吸小合せし試と置て知るなり

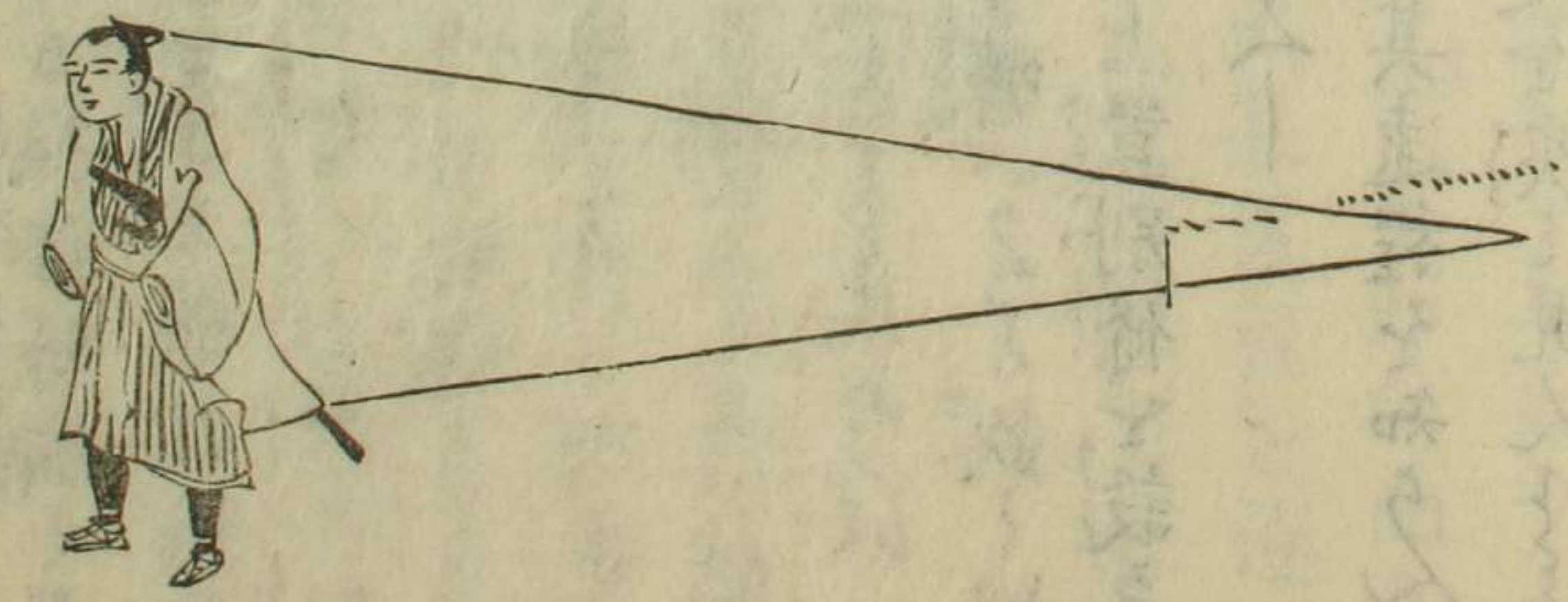
大体一呼吸の間小遅さハ二三歩速さハ三四歩也。其中と考へ量つて是を以て紮し試みて其廣程を知る也と云
 又古法式傳云。森林の陰土手の陰。長屋の陰凡物陰を通る人を陰へ入さざる前小遠所より望見て陰を通りする間安座して其廣さ遠さ以て考へ知る也。其術一息一足呼み踏出し吸み引考をり昌弘日一息一足の考へ呼吸を知らふ似し又三足一間と定め凡て用捨の理をりし。大格を積なり。或ハ他所へ使伐馳る門を出しより安座し右のこゝ積して大略飯來の刻限を知る也。是古傳のつゝろろ。今のおろろと云ふ



様休

此術ハ彼方小立る人を種とし

此方より其所までの遠さと知る術あり
 術曰渾癸を開き向小立る人を夾み見て。譬ぐ其渾癸の口二分あはば八十三間二尺三分なり。五十五間三尺四分なり。四十一間四尺也。餘ハ是より効知べし。右何をも録二尺を人長五尺へ乗し。即渾癸の顯る口を以て除き。扱又一間の法。六尺を以て除け。遠程何程と知家なり。凡人長を五尺とす。大畧なり。殊り急なる場あての業ゆへ小用捨の格を用ゆつと云ふ



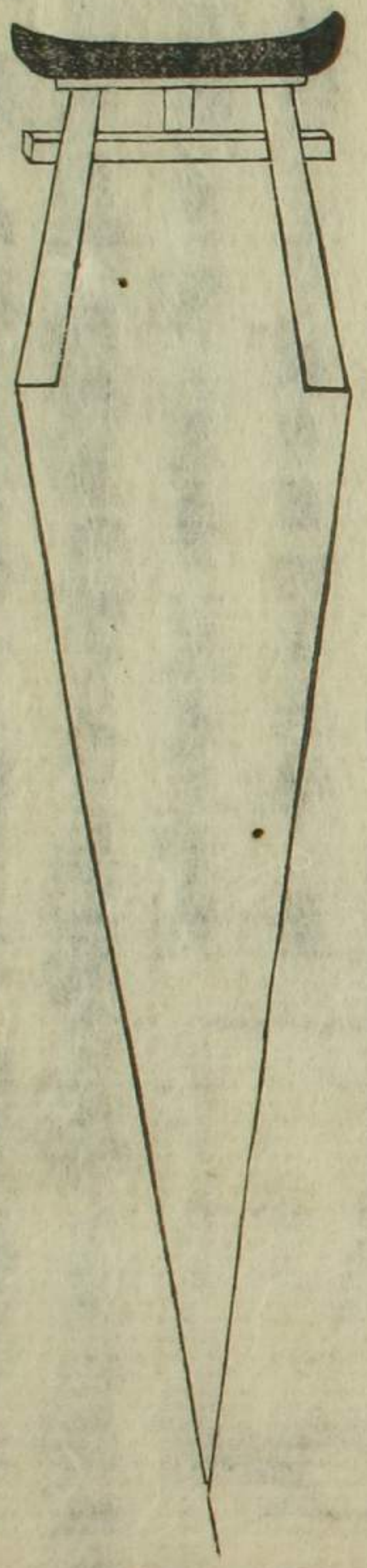
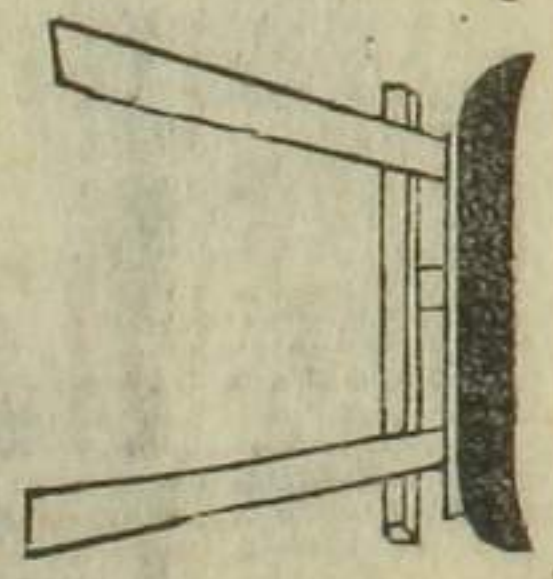
又旧傳小様程といふ名目あり。其術を考る様体様脚と其
丈一般なり。根其名目を立たりと見ゆ。既ふ又様体様脚
別術ふ非ず。是も一術となして然らん。今暫く古傳ふ隨
て此み是を述ぶ。昌弘曰。様体様脚といふハ目的種なり。この
地と。又ハ山陰土手陰叢中との諸の術障り多き所ありハ
人の歩行の跬の数を以て種と。一本ハ丈業少く其町間と
量り知る事をもつて。好で試ふ用也。といふハあり。

白浪

白浪術といふハ旧傳ふなげなる所。ハくさる故といふ
ふと知らぬ。昌弘考るふ。覓先術と同じ。豈別條と設るふ
及へんや。是又好事の説なりと察す。

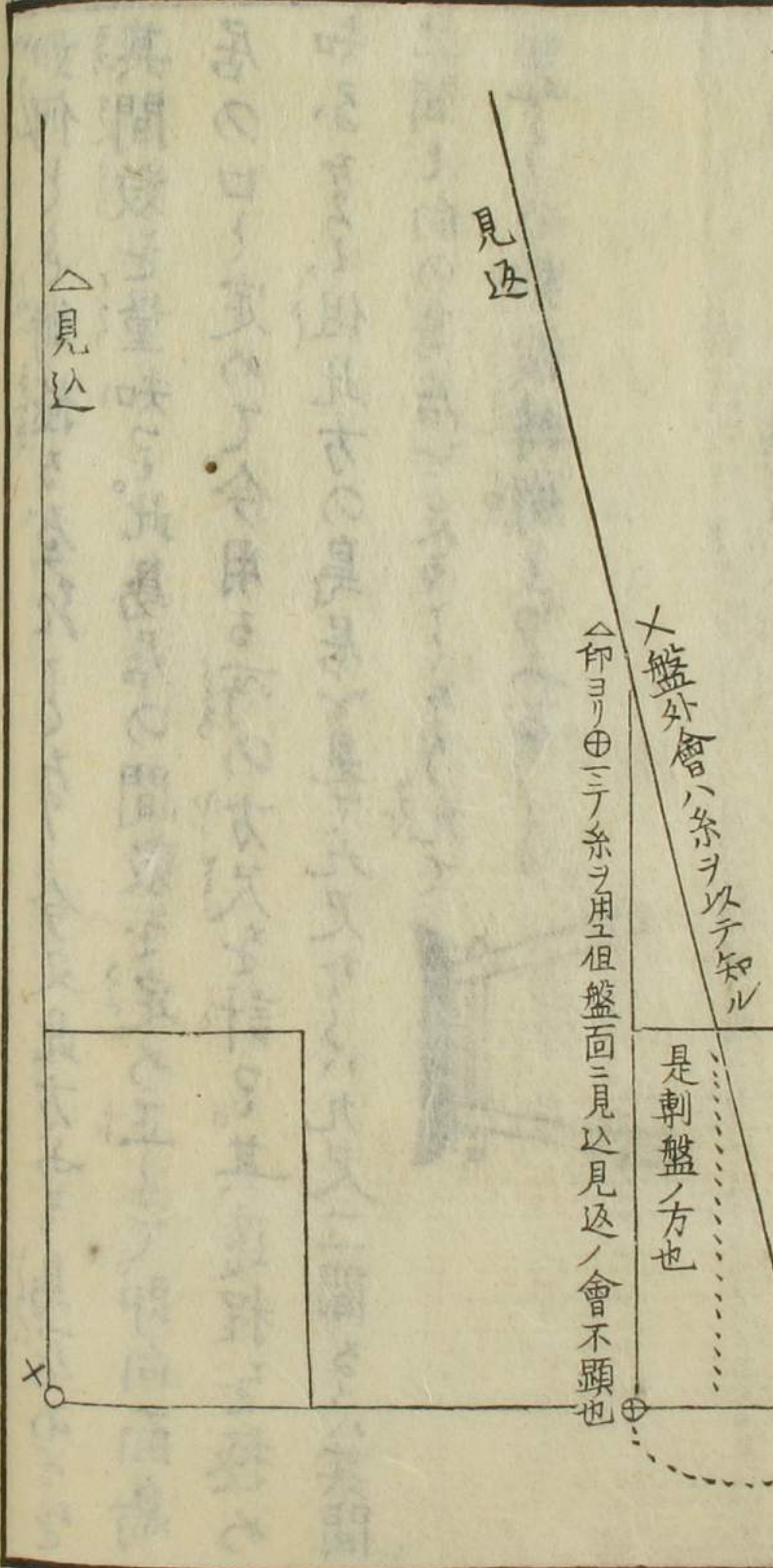
術曰今圖するところの彼方の鳥居まで。其遠程を知らんと
欲する。向の鳥居其間数を知む。故ハ是を夾と見んと。

如何とも術極るる事なり。今又此方あり鳥居あるを
其間数を量知る。此鳥居の間数を定め正して。即向面鳥
居の口と定めて。今用る所の方尺を計る。其遠程を極め
知ふなり。但此方の鳥居を見て九尺なりハ九尺二間なり。其間
二間と向の鳥居と定る。とあり。凡て
かやうの類機轉術といふなり。



猥獲

此術も又旧傳小見盤を用て遠里と量ると云
術曰先見盤術作法の如くみて正面の目的を見込開地を
設て右の方へ開く見通二見是又見盤
術法のとして叔本目的を見返し盤



面よ墨線の會出來ざる小因て糸を引て盤外小會を制し
是を量るとつふ委く小因を見るべし

昌弘曰此術渾発術なり見盤術刺盤の法なり。例乃
嗚呼。詳ふ小因を按ずる

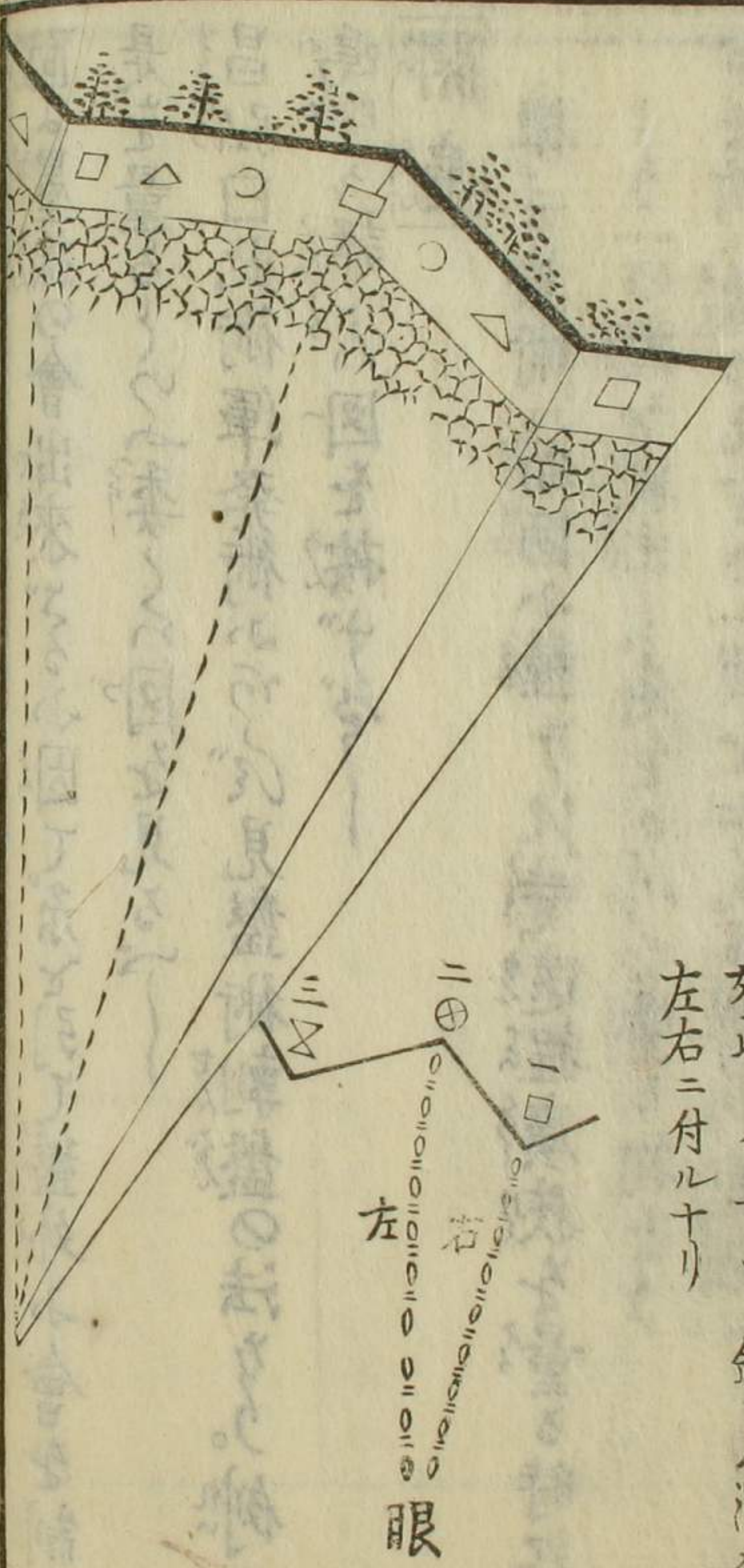
開扇

傳云此術ハ向面小種を此時遠程廣狹を量る時に外
より一の種を取出し是をりめて量る術なり

今云所ハ豫め此方の一間を知り。叔當術之渾発をりめて此
一間を夾と遠と測量し知り。遠程八間をり。叔又二つ
より分間として一の場の左の鏢を遠と八間計り。鏢を右
に付け。二の場を斜に見る。充分間の口を残し置此分間の
口みて。今見る二の場の左の鏢を計り。幾間幾尺と知り

扱あつかよよ三の場ばたへへららのの場ばた。又三の目的めくを見るも。二の場の術じゆつと同意どういたり。場所ばしよ何程なんぢやうありとも。是こゝよりよてて術じゆつハハ録ろくとと渾こん突とつのの左さ右うにに付つるるなり

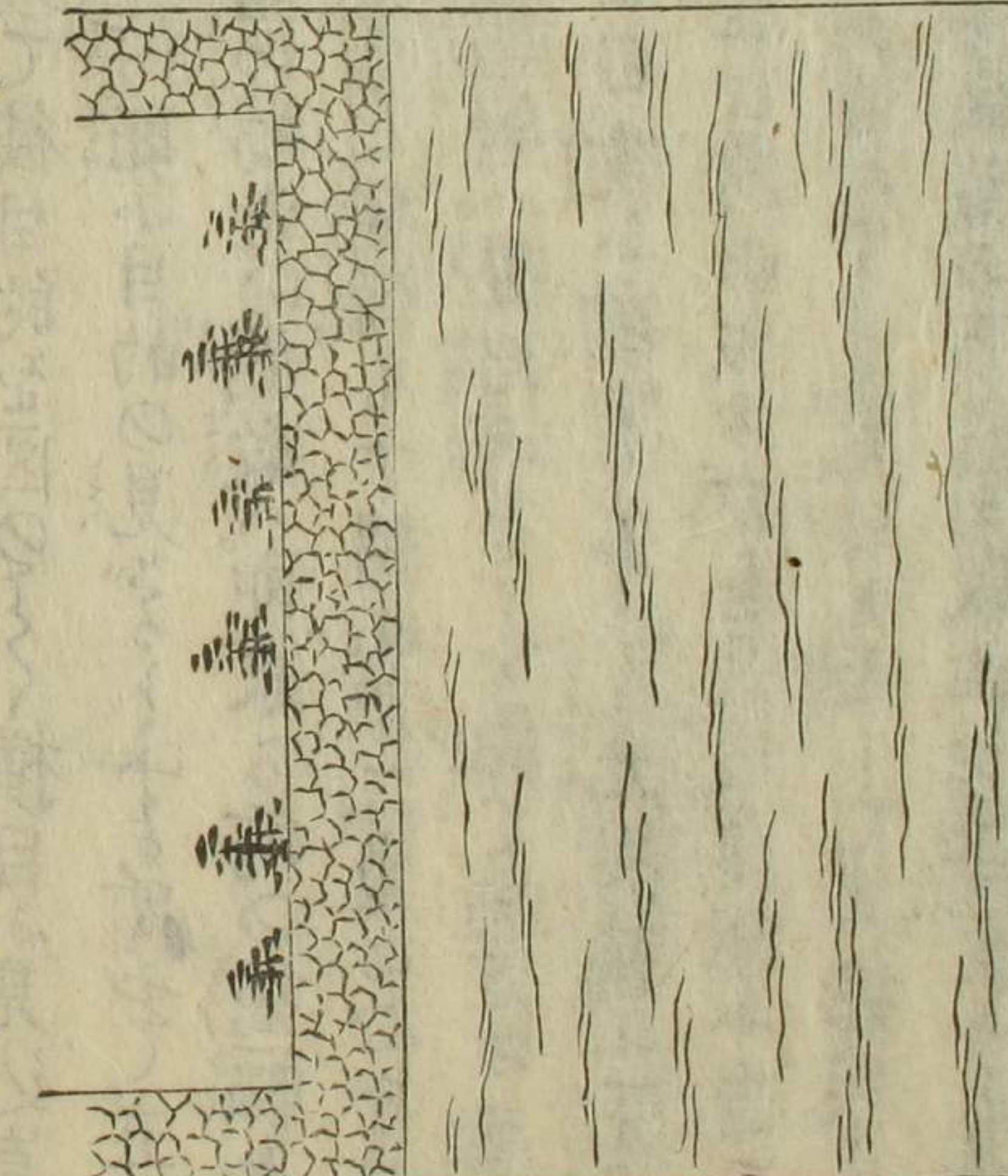
如此ニ見ル意ナリ鎌ヲハ渾突ノ左右ニ付ルナリ



方鏡

古傳云是ハ堀幅川幅等淺知るの術なり

術曰先掘端ハ臨のぞみ。向の屏へいせても石垣いしゐきせても目めちち所しよと撰せんんで目的めくなり。左眼さがんを以て彼目的かめくを図ずのの横目よこめ見込みこ真矩まこ進すすみ。尻目しりめハ掛かけて行ゆき。既すでハ目的めくの見みるる所しよとて立留たちどる初はつの見込みこの場ばたより立留たちどる場ばた迄の間数まかずハ即求する所しよの堀幅ほりあなり。假令かじやうハ進すすむ間ま十間じゆあり。堀幅ほりあも十間じゆ也。即二角にかくの心こゝろなり。一説いちせつヨヨ此方鏡このかたがたの術じゆつハ堀沼河ほりぬまがを隔へて向方むかひの廣狹ひろせを量はかる術じゆつなり。其法そのはふヨヨ後小図のちのこずするするる先掘端はつほり正當しやうたう立たて。左眼さがんを以て望のぞむ所しよの左ひだりの方かたを見込みこ。真矩まこ進すすむ。左方さかたの望のぞむ所しよとて。又右みぎの方かたの望のぞむ所しよとて。見込みこせ。而しかも其掘端ほり正當しやうたう立たて。歩数あひかずの間ま即掘向望ほりむかむの所しよの間数まかず也と云。何なんれんも其理そのりををににわわるる。然しかども兩様りやうさまともハ實側じつがた正當しやうたうの術じゆつハ云いふふべべかり



量地指南後篇卷之五終

跋

享保の季年。量地指南前編三卷と選集一
 て。世上に擴む。繼て後編を述作らんとす。諸身
 子乃需止まなく。既に許諾の志ありとす。も
 公勞餘力なく。心の外に黙止す。其後不圖病
 疴ふ。罹る苦惱程久し。卒に痼疾となりて。藥劑
 無驗。起臥不遂。因て不得止致仕閑居す。茲に
 十有餘年たり。予成童の昔より。武學兵術に癖し

主用繁務の中とすも。此道の一日も不棄し。其
 後病ふ沈とて。講習を廢せんと。既ふ右よ云るに。況や
 其他の事藝。量地の小技をや。誠ふ其術志は。4
 似たり。然るふ此頃。奥州乃山岸定則。予の閑隱の扉
 と叩く。量地前編の余意を索ると。頻たり。予再之
 病を以て辭すも。不肯強て請ふ不止。其深切
 他は超へ。其勉強人々勝たり。其為人。此道ふ俊
 發するも。世より又類少し。依て不顧前後點首

とす。直子愚息昌言ふ命とて。予の弱冠ふ閱見
 するも。彼の。彼是の書五六部は。内前編ふ洩
 たる物と拔萃か。山岸氏は授て暫く
 其責を塞く。元來此書予の全くは編述は。と
 諸本の訓詁補す。拔萃か。む。者か。と
 然と。的當は深理あり。幸に人の賞を
 るも。予の譽ふ。又猥雜の齟齬は。と
 終り。世ふ謗ら。予の耻辱を。と

覽者此以是を以て之

寶曆四甲戌夏六月

村井蘓道子昌弘書



南勢蘇道村井昌弘先生述作

橘枝堂版行目錄

量地指南

前篇三冊
町間見様之書後篇五冊

出來

單騎要略

三十六卷之内

武林字藪

五冊

近日出來

被甲辨

五冊

出來

八陣合攷

三冊

未刻

家業辨

七冊

近日出來

武門圖會

五冊

未刻

輕卒辨

四冊

未刻

武學先入

三冊

未刻

兵格辨

二冊

未刻

神武迪精

十冊

未刻

製作辨

五冊

未刻

伊勢治亂記

十二冊

未刻

成功辨

十三冊

未刻

神武迪精標題

一冊

出來

京都野田彌兵衛

寬政六甲寅年仲春

同野田藤八郎全刻

江戸野田七兵衛

